佐久市埋蔵文化財調査報告書　第74集

鳴沢遺跡群

GO RI TA

五里田遺跡

長野県佐久市根々井鳴沢遺跡群五里田遺跡発掘調査報告書

1999.3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第74集

鳴沢遺跡群

GO RI TA

五里田遺跡

長野県佐久市根々井鳴沢遺跡群五里田遺跡発掘調査報告書

1999.3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

五里田遺跡付近航空写真

五里田遺跡付近航空写真（東方より）

五里田遺跡付近航空写真（西方より）

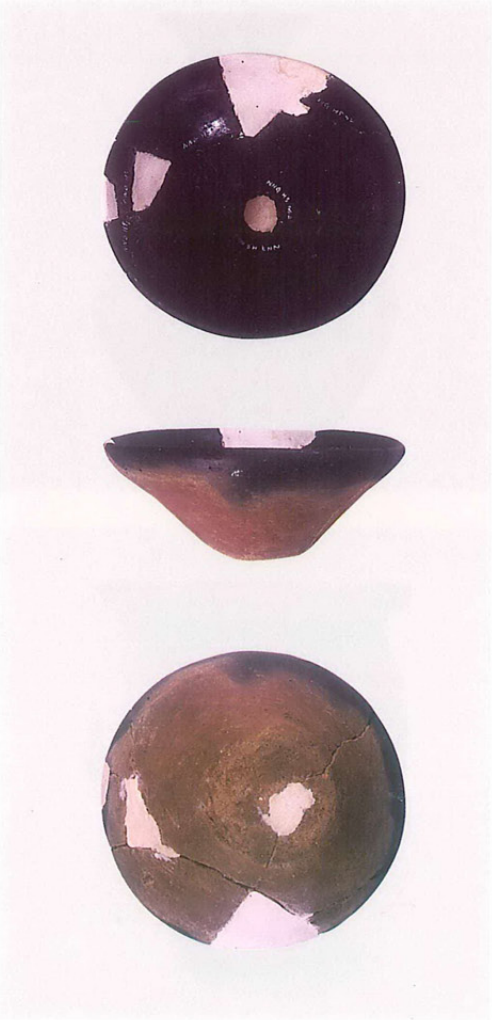
五里田遺跡航空写真

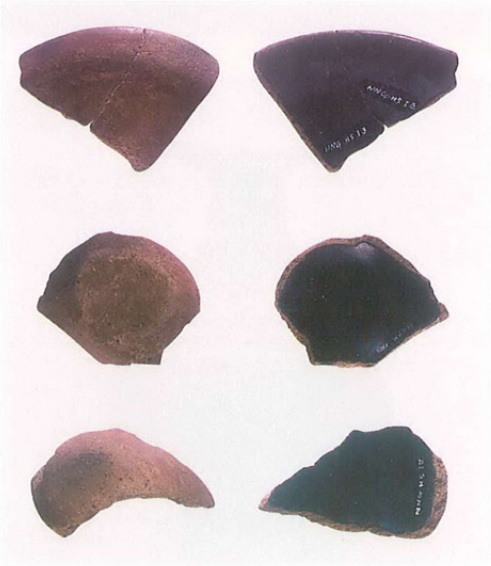
巻頭図版　四

五里田遺跡出土土器

巻頭図版　五

五里田遺跡出土土器

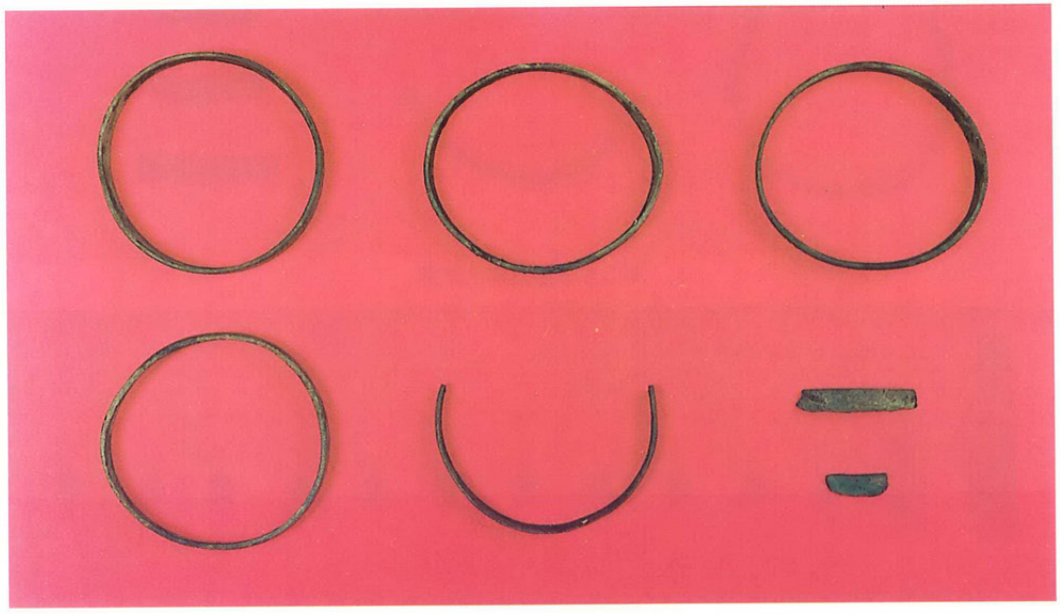




第５号住居址出土土器

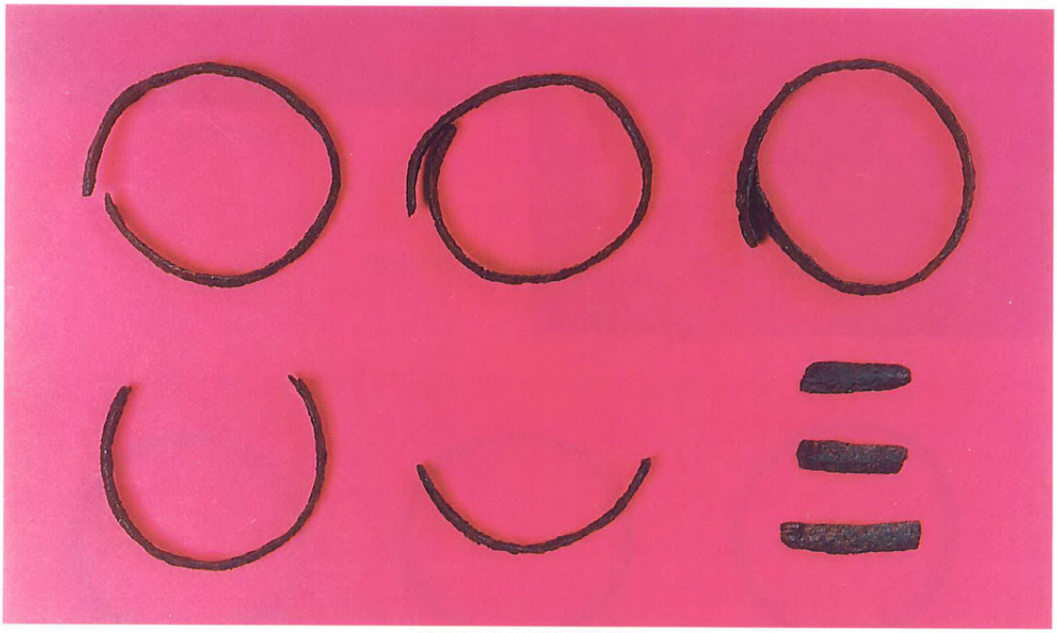
第２号円形周溝墓

銅釧出土状況

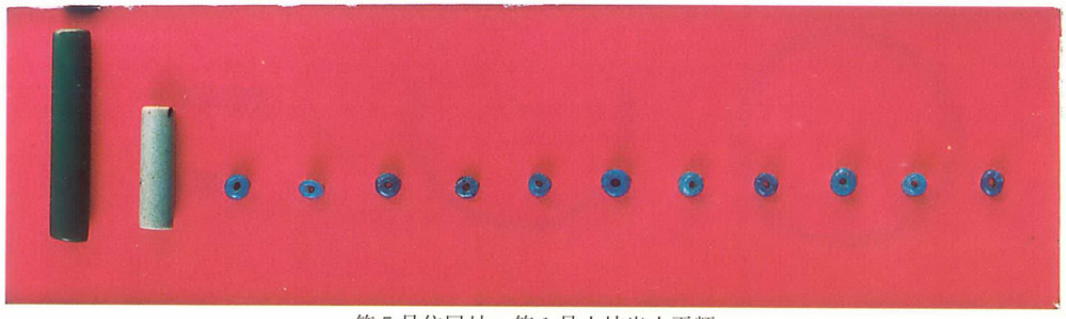


第２号円形周溝墓出土銅釧

第１・２号住居址出土鉄剣（左）、第１号住居址出土鉄剣布痕跡（右）



第５号住居址出土鉄釧



第５号住居址・第１号土坑出土玉類

例　　言

1　本書は、長野県土地開発公社が行う長野県警察本部佐久地区職員待機宿舎建設事業に伴い、平成９年度に行った鳴沢遺跡群五里田遺跡の発掘調査報告書である。整理作業・報告書刊行は平成９年度・10年度に行った。

2　調査委託者　　長野県土地開発公社

3　調査受託者　　佐久市教育委員会

4　遺跡名および所在地

鳴沢遺跡群　五里田遺跡（ＮＮＧ）

佐久市大字根々井字五里田　888－２、890、914－１、915－１、916、945－１

5　調査期間および面積

試掘調査　平成８年12月６・17日

発掘調査　平成９年４月１日～６月５日

整理調査　平成９年６月６日～平成10年３月31日

平成10年６月26日～平成11年３月31日

面　　積　3,300㎡（発掘調査1,400㎡、試掘調査1,900㎡）

6　本遺跡出土遺物の鑑定・分析・保存処理は以下に依頼した。

人骨鑑定　　聖マリアンナ医科大学　平田　和明教授

獣骨鑑定　　日本ほ乳類学会　　宮崎　重雄氏

金属製品分析・保存処理　財団法人　元興寺文化財研究所

7　本書の編集・執筆は三石が行った。

8　本書および五里田遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査にあたり、長野県土地開発公社及び地元の方々には数々のご協力・ご援助を頂き、また、報告書作成にあたっても多くの方々よりご指導・ご助言を頂きました。
記して感謝の意を表します。

凡　　例

1　遺構の略号は以下のとおりである。

竪穴住居址－Ｈ　　円形周溝墓－ＥＭ　　方形周溝墓－ＨＭ　　周湟－ＯＴ

掘立柱建物址－Ｆ　　土　坑－Ｄ　　溝状遺構－Ｍ　　ピット－Ｐ

2　挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。

竪穴住居址・周溝墓・掘立柱建物址－１/80　炉址－１/40

周湟－１/120　土坑－１/60

土器－１/４　石器－２/３・１/２・１/３　土製品－１/３

鉄製品・銅製品－１/２　玉類－１/１

上記以外のものについては挿図中に明記した。

3　遺構の海抜標高は各遺構毎に統一し、水糸標高を「標高」として記した。

4　土層の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいて示した。

5　写真図版中の遺物番号は、挿図番号と対応する。

6　住居址の面積は床面積（住居址下端範囲）を測定し、ピット等の付属施設を差し引かず、掘り込み床面積を表示した。

7　挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを表す。

遺構

地山断面　　炉　　址　　焼　　土

掘　り　方

遺物

赤色塗彩　　淡い赤色塗彩　　黒色処理

須恵器断面

目　　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯
第１節　調査の経緯と経過……1
第２節　調査体制……2
第３節　調査日誌……2

第Ⅱ章　遺跡の環境
第１節　自然環境……3
第２節　歴史的環境……4

第Ⅲ章　基本層序と概要
第１節　基本層序……8
第２節　検出遺構・遺物の概要……8

第Ⅳ章　遺構と遺物
第１節　竪穴住居址……11
第２節　周溝墓……74
第３節　周　湟……81
第４節　掘立柱建物址……86
第５節　土　坑……87
第６節　溝状遺構・ピット……108
第７節　試掘調査・グリッド出土遺物……116

第Ⅴ章　調査のまとめ
第１節　遺　構……130
第２節　遺　物……133

引用参考文献 ……134
付　編
付編１　佐久市五里田遺跡出土人骨について ……135
付編２　佐久市五里田遺跡出土獣骨について ……136
付編３　鳴沢遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学的分析 ……138
図　版

挿　図　目　次

第１図　鳴沢遺跡群五里田遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図(1) …… 4
第３図　周辺遺跡分布図(2) …… 7
第４図　基本層序模式図 …… 8
第５図　五里田遺跡発掘区設定図 …… 9
第６図　五里田遺跡全体図 ……10
第７図　第１号住居址実測図 …… 11
第８図　第１号住居址炉址実測図 ……12
第９図　第１号住居址出土遺物実測図〈1〉……12
第10図　第１号住居址出土遺物実測図〈2〉……13
第11図　第１号住居址出土遺物実測図〈3〉……14
第12図　第１号住居址出土遺物実測図〈4〉……15
第13図　第１号住居址出土遺物実測図〈5〉……17
第14図　第２号住居址実測図 ……18
第15図　第２号住居址出土遺物実測図〈1〉……19
第16図　第２号住居址出土遺物実測図〈2〉……20
第17図　第２号住居址出土遺物実測図〈3〉……22
第18図　第３号住居址・出土遺物実測図 …… 23
第19図　第４号住居址実測図 ……24
第20図　第４号住居址炉址実測図 ……24
第21図　第４号住居址出土遺物実測図 ……25
第22図　第５号住居址実測図 ……26
第23図　第５号住居址炉址実測図 ……27
第24図　第５号住居址出土遺物実測図〈1〉……28
第25図　第５号住居址出土遺物実測図〈2〉……29
第26図　第６号住居址実測図 ……30
第27図　第６号住居址出土遺物実測図〈1〉……30
第28図　第６号住居址出土遺物実測図〈2〉……31
第29図　第６号住居址出土遺物実測図〈3〉……32
第30図　第７号住居址実測図 ……34
第31図　第７号住居址炉址実測図 ……35
第32図　第７号住居址出土遺物実測図〈1〉……35
第33図　第７号住居址出土遺物実測図〈2〉……36
第34図　第８号住居址・出土遺物実測図 ……37
第35図　第９号住居址実測図 ……38
第36図　第９号住居址炉址実測図 ……38
第37図　第９号住居址出土遺物実測図〈1〉……39
第38図　第９号住居址出土遺物実測図〈2〉……40
第39図　第10号住居址実測図 ……42
第40図　第10号住居址炉址実測図 ……43
第41図　第10号住居址出土遺物実測図 ……43
第42図　第11号住居址実測図 ……44
第43図　第11号住居址出土遺物実測図〈1〉……45
第44図　第11号住居址出土遺物実測図〈2〉……46
第45図　第12号住居址実測図 ……48
第46図　第12号住居址炉址実測図 ……48

第47図　第12号住居址出土遺物実測図〈1〉……49
第48図　第12号住居址出土遺物実測図〈2〉……50
第49図　第13号住居址実測図……52
第50図　第13号住居址炉址実測図……53
第51図　第13号住居址出土遺物実測図〈1〉……53
第52図　第13号住居址出土遺物実測図〈2〉……54
第53図　第14号住居址実測図……56
第54図　第14号住居址炉址実測図……56
第55図　第14号住居址出土遺物実測図……57
第56図　第15号住居址実測図……58
第57図　第16号住居址・出土遺物実測図……59
第58図　第17号住居址実測図……60
第59図　第17号住居址出土遺物実測図……61
第60図　第18号住居址炉址実測図……62
第61図　第18号住居址実測図……63
第62図　第18号住居址出土遺物実測図……64
第63図　第19号住居址実測図……66
第64図　第19号住居址出土遺物実測図……67
第65図　第20号住居址実測図……68
第66図　第20号住居址出土遺物実測図〈1〉……69
第67図　第20号住居址出土遺物実測図〈2〉……70
第68図　第21号住居址実測図……72
第69図　第21号住居址出土遺物実測図……73
第70図　第1号円形周溝墓実測図……74
第71図　第1号円形周溝墓出土遺物実測図……75
第72図　第2号円形周溝墓実測図……75
第73図　第2号円形周溝墓出土遺物実測図……76
第74図　第3・4号円形周溝墓実測図……78
第75図　第3・4号円形周溝墓
出土遺物実測図……79
第76図　第1号方形周溝墓実測図……79
第77図　第1号方形周溝墓出土遺物実測図……80
第78図　第1号周湟実測図……81
第79図　第1号周湟出土遺物実測図……82
第80図　第2号周湟実測図……84
第81図　第2号周湟出土遺物実測図……85
第82図　第1号掘立柱建物址実測図……86
第83図　第2号掘立柱建物址実測図……86
第84図　第1号土坑実測図……87
第85図　第1号土坑出土遺物実測図……88
第86図　第2号土坑実測図……89
第87図　第2号土坑出土遺物実測図……90
第88図　第14号土坑・出土遺物実測図……90
第89図　第15号土坑・出土遺物実測図……91
第90図　第18号土坑・出土遺物実測図……92
第91図　第25号土坑実測図……93
第92図　第25号土坑遺物分布図……94
第93図　第25号土坑出土遺物実測図〈1〉……95
第94図　第25号土坑出土遺物実測図〈2〉……96
第95図　第25号土坑出土遺物実測図〈3〉……97
第96図　第25号土坑出土遺物実測図〈4〉……98
第97図　第32号土坑実測図……100
第98図　第32号土坑出土遺物実測図……100
第99図　第3・4・5号土坑実測図……102
第100図　第6・8・9・10号土坑・
第6号土坑出土遺物実測図……103
第101図　第7・11～13・16・17号土坑実測図…104
第102図　第19～24・26～28号土坑実測図……105
第103図　第29～31・33～37号土坑実測図……106
第104図　土坑内出土遺物実測図……107
第105図　第1・2号溝状遺構実測図……109
第106図　第1号溝状遺構出土遺物実測図……109
第107図　第3号溝状遺構実測図……110
第108図　第3・5号溝状遺構出土遺物実測図…111

第109図　第４・５・６号溝状遺構・
第６号溝状遺構出土遺物実測図 …112
第110図　第７号溝状遺構・出土遺物実測図…113
第111図　ピット群配置図……114
第112図　ピット群実測図〈1〉……114
第113図　ピット群実測図〈2〉……115
第114図　Pit11出土遺物実測図……115
第115図　ピット群実測図〈3〉……115
第116図　試掘調査出土遺物実測図〈1〉……116
第117図　試掘調査出土遺物実測図〈2〉……117
第118図　試掘調査出土遺物実測図〈3〉……118
第119図　試掘調査出土遺物実測図〈4〉……119
第120図　グリッド出土遺物実測図〈1〉……121
第121図　グリッド出土遺物実測図〈2〉……122

付　表　目　次

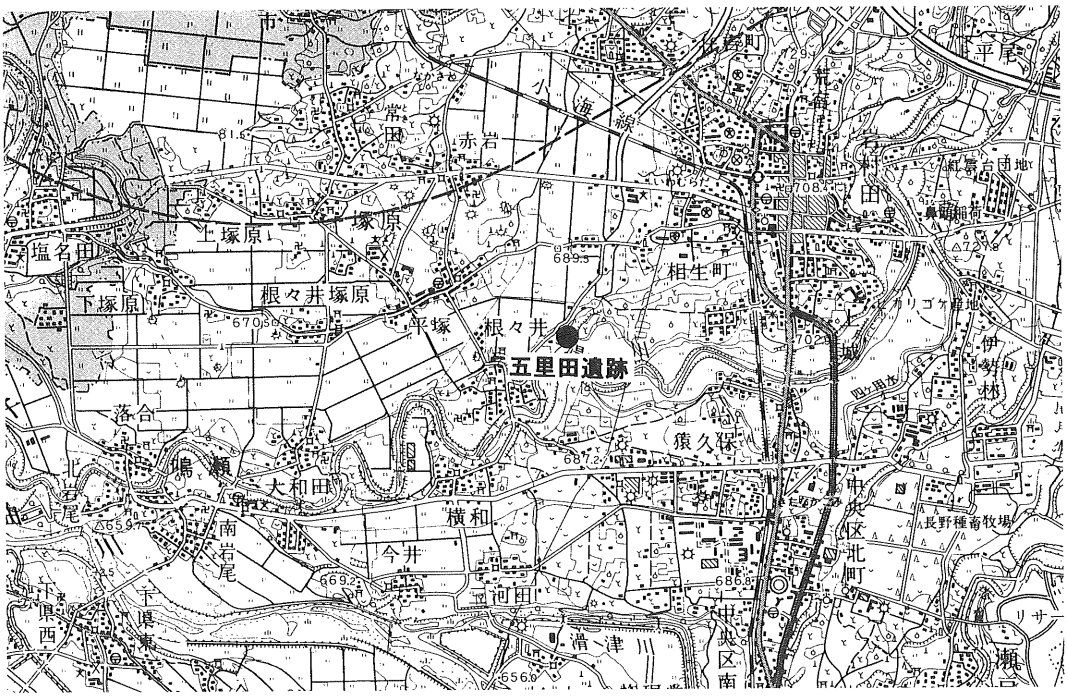
第１表　周辺遺跡一覧表(1) ……５
第２表　周辺遺跡一覧表(2) ……６
第３表　第１号住居址出土土器観察表……16
第４表　第２号住居址出土土器観察表……21
第５表　第４号住居址出土土器観察表……25
第６表　第５号住居址出土土器観察表……29
第７表　第６号住居址出土土器観察表……32
第８表　第７号住居址出土土器観察表……36
第９表　第９号住居址出土土器観察表……41
第10表　第10号住居址出土土器観察表……43
第11表　第11号住居址出土土器観察表……47
第12表　第12号住居址出土土器観察表……51
第13表　第13号住居址出土土器観察表……55
第14表　第14号住居址出土土器観察表……58
第15表　第17号住居址出土土器観察表……62
第16表　第18号住居址出土土器観察表……65
第17表　第19号住居址出土土器観察表……67
第18表　第20号住居址出土土器観察表……71
第19表　第21号住居址出土土器観察表……73
第20表　第２号円形周溝墓出土土器
観察表……76
第21表　第３・４号円形周溝墓
出土土器観察表……79
第22表　第１号方形周溝墓出土土器観察表……80
第23表　第１号周湟出土土器観察表……83
第24表　第２号周湟出土土器観察表……85
第25表　第１号土坑出土遺物観察表……88
第26表　第２号土坑出土土器観察表……90
第27表　第14号土坑出土土器観察表……91
第28表　第15号土坑出土土器観察表……92
第29表　第18号土坑出土土器観察表……93
第30表　第25号土坑出土土器観察表……99
第31表　第32号土坑出土土器観察表 ……101
第32表　土坑内出土土器観察表 ……108
第33表　第1号溝状遺構出土土器観察表……110
第34表　第３・５号溝状遺構出土土器観察表…111
第35表　第６号溝状遺構出土土器観察表 ……113
第36表　試掘調査住居址出土土器観察表 ……120
第37表　グリッド出土土器観察表 ……122
第38表　土坑一覧表 ……123
第39表　ピット一覧表 ……124
第40表　五里田遺跡住居址一覧表 ……131

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯と経過

五里田遺跡が存在する鳴沢遺跡群は佐久市大字根々井地籍に所在し、湯川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は681～685mを測り、南方に向かって緩やかに傾斜している。本遺跡群内では平成３年度に今回の調査地の北側に隣接する上鳴沢遺跡１、平成６年度に鳴沢遺跡群２の試掘調査が行われ、弥生時代中期から後期を中心とする竪穴住居址・円形周溝墓・土坑等多数の遺構が検出されている。また、遺跡群の東方には上鳴沢古墳群、西方には姫宮塚古墳、南方には根々井東原館跡が存在する。本遺跡群の東方には北西ノ久保遺跡・中西の久保遺跡群が展開している。

今回、長野県土地開発公社により長野県警察本部佐久地区職員待機宿舎建設事業が計画されたため、長野県土地開発公社と佐久市教育委員会において協議を行い、建物部分について試掘調査を行った。調査の結果、弥生時代を中心とする遺構の存在が確認されたため再度協議を行い、建物部分については発掘調査を実施し、駐車場部分については試掘調査を行い遺構の分布状況を確認した後現状保存されることとなった。調査は長野県土地開発公社から委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。



第１図　鳴沢遺跡群五里田遺跡位置図（1：50,000）

第2節　調査体制

◎調査受託者

教　　育　　長　依田　英夫

◎事務局

教育次長　市川　　源（平成9年度）
　　北沢　　馨（平成10年度）

課　　長　須江　仁胤

管理係長　棚沢　慶子（平成9年度）

埋蔵文化財係長　大塚　達夫（平成9年度）
　　荻原　一馬（平成10年度）

埋蔵文化財係　林　　幸彦、三石　宗一、須藤　隆司、小林　眞寿、羽毛田卓也、
　　冨沢　一明、上原　　学

調査主任　佐々木宗昭、森泉かよ子

調査副主任　堺　　益子

調　　査　　員　井上　行雄、井出　愛子、上原　幸子、小田川　栄、小幡　弘子、
　　小金沢たけみ、小林　幸子、小林　立江、佐藤　愛子、篠原　昭子、
　　角田すづ子、角田トミエ、東城　友子、東城　幸子、徳田　代助、
　　並木ことみ、林　美智子、水間　雅義、宮川百合子、星野　良子、
　　柳沢千賀子、山崎　　直

第3節　調査日誌

（平成8年度）

12月6日・17日

建物用地部分について試掘調査。

（平成9年度）

4月1日～8日

駐車場用地部分について試掘調査。

4月7日～6月5日

調査区西側より遺構の掘り下げ・実測・写真撮影を行う。航空測量、機材撤収を行い、現場での調査を終了する。

6月6日～9月19日

室内にて整理作業。

出土遺物の水洗い、注記、図面・写真の整理を行う。

（平成10年度）

6月26日～平成11年3月31日

出土遺物の復元・実測、遺構・遺物の挿図作成、遺物写真撮影、原稿執筆を行い、報告書を刊行する。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

佐久平は千曲川の上流沿岸平地で標高700m付近を中心として、北は小諸市、南は南佐久郡佐久町を長軸として南北約18km、東西は佐久市中心部で幅約10kmの長菱形をしている。この長菱形の長い対角線上を千曲川が北に向かって流れており、短い対角線は佐久市地域にあり、幅としては最も広い部分にあたっている。

佐久平と総称しているが、地質学的成因については南北二区分に別れている。境界線は志賀川が滑津川下流と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として滑津川河床で標高650m、北岸段丘上で680m、比高30mの断崖が続いている。これは旧南北佐久郡境でもあり、南部の野沢平、北部の岩村田台地と明らかな相違を見せている。

南部野沢平は主として千曲川の氾濫原沖積地と内山川の谷口扇状地で、全体的には河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、用水も古くから拓かれて安定し土地肥沃なために水稲多収穫地帯である。

北部は中込原から岩村田中佐都地区で、浅間火山の山麓末端の台地状平地で基盤には浅間火山第一次外輪山黒斑山の大噴火による塚原泥流が中佐都付近で流山を百余形成しており、その上部へは第二次外輪山前掛山の長期の活動に基づく追分第一軽石流（Ｐ１）が厚く被っている。この層は新期火山噴出堆積層のために雨水による浸蝕が激しく、流水による浸蝕谷“田切り地形”が発達し、御代田町から岩村田地区まで、西は小諸市懐古園付近まで深い垂直の谷を形成している。このＰ１層の地表面には凹凸もあり、湯川を堰き止めた湿地にその後の火山灰砂・流入軽石礫が堆積したものが所謂新期の“湯川層”として上面を被っている。これらの地層が佐久平北半の堆積層序となっており、特に中込原付近では地下水層は極端に低く生活用水が得られなかったため、古くは人家もなく桑畑、野菜畑のみであった。

鳴沢遺跡群は、浅間山に源を発する湯川右岸の河岸段丘上に立地する遺跡で、発掘調査によりローム層下に湯川層湿地堆積層が確認されている。

第２節　歴史的環境

今回発掘調査を行った五里田遺跡の存在する鳴沢遺跡群は、湯川右岸の河岸段丘上に立地しており、この湯川を挟んだ両側の段丘上には第２図に示したように多くの遺跡群が展開している。

湯川右岸の段丘上には北西ノ久保遺跡、中西の久保遺跡群、一本柳遺跡群、中鳴沢遺跡群、上の城遺跡群などの佐久市内でも有数な弥生時代から平安時代の大遺跡群が展開している。これらの遺跡群の発掘調査を概観すると、昭和43年度に発掘調査が実施され、古墳時代後期の竪穴住居址５棟が検出された一本柳遺跡群東一本柳遺跡をはじめとして東一本柳古墳・北一本柳遺跡・西一本柳遺跡Ⅰ～Ⅶ、中西ノ久保遺跡群中西ノ久保遺跡Ⅰ～Ⅳ、上の城遺跡群上の城遺跡・西八日

第２図　周辺遺跡分布図（1）（1：25,000）

町遺跡・観音堂遺跡、北西ノ久保遺跡などの発掘調査が行われ、弥生時代中期から平安時代の集落・墳墓さらに中世・近世の墓址等が数多く調査されている。

北西ノ久保遺跡の調査では、台地上から弥生時代中期・後期、古墳時代中期、平安時代の集落、弥生時代の方形周溝墓・木棺墓群、古墳時代中期の古墳群、多量の埴輪が出土した円墳を含む後

第１表　周辺遺跡一覧表（1）

No.	遺　跡　名	所　在　地	立地	縄	弥	古	奈	平	中	備　考
1	鳴沢遺跡群	根々井字鳴沢・五里田・東原他	１段丘	○	○	○	○	○		本調査
2	根々井東原館跡	根々井字東原・鳴沢・東坂上	〃						○	
3	岩村田遺跡群	岩村田字六供後・菅田・古城他	台　地		○	○	○	○	○	昭和55年度　六供後　他
4	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂・下穴虫他	〃		○	○	○	○		昭和60年度　上直路　他
5	円正坊遺跡群	岩村田字円正坊・清水田他	〃	○	○	○	○	○		昭和53年度　清水田　他
6	松の木遺跡	岩村田字松の木	微高地		○	○	○	○	○	平成８～10年度　松の木Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
7	上砂田遺跡	岩村田字砂田他	〃		○	○	○	○		
8	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	〃		○	○	○	○		昭和58年度　宮の西
9	宮の後遺跡	岩村田字宮の後	〃		○	○	○	○		
10	上の城遺跡群	岩村田字上の城・丹過他	２段丘	○	○	○	○	○		昭和48年度　上の城　他
11	一本柳遺跡群	岩村田字東一本柳・西一本柳他	〃		○	○	○	○	○	平成３～10年度　西一本柳Ⅰ～Ⅶ　他
12	中鳴沢遺跡群	岩村田字中鳴沢	１段丘		○	○	○	○		
13	中西の久保遺跡群	岩村田字中西の久保他	〃		○	○	○	○		平成４～10年度　中西ノ久保Ⅰ～Ⅳ
14	北西ノ久保遺跡	岩村田字北西ノ久保	２段丘		○	○	○	○	○	昭和57・60年度　台地上全面調査
15	常田居屋敷遺跡群	常田字家地頭、塚原字長塚他	微高地		○	○	○	○		
16	前田遺跡群	塚原字野岸・前田・姫子石他	〃		○	○	○	○		平成８年度　姫子石
17	堰添遺跡	常田字堰添	〃	○						
18	宮の前遺跡	塚原字宮の前	〃					○		
19	道添遺跡	塚原字道添・立石・伊勢塚	〃					○		
20	塚原屋敷添遺跡	塚原字屋敷添・屋敷	〃					○		
21	西一里塚遺跡群	岩村田字西一里塚	〃		○					昭和48年度　西一里塚・餅田
22	日向屋敷遺跡	根々井字日向屋敷	２段丘		○	○	○	○		
23	伊勢田遺跡	根々井字伊勢田	１段丘		○					
24	根々井居屋敷遺跡	根々井字居屋敷	〃		○	○	○	○		
25	大和田屋敷遺跡群	鳴瀬字屋敷・ついじ	２段丘		○	○				
26	大和田遺跡群	鳴瀬字大和田・川原端他	１段丘	○	○	○				平成８年度　川原端
27	猿久保屋敷添遺跡	猿久保字屋敷添	２段丘		○	○	○	○		
28	寺畑遺跡群	根々井字寺畑・山下・塚原他	〃		○	○	○	○		平成６・７年度　寺畑Ⅰ・Ⅱ
29	番屋前遺跡群	猿久保字番屋前・坂上他	〃		○			○		平成８年度　番屋前Ⅰ・Ⅱ
30	西妻神遺跡	中込字西妻神	〃		○			○		
31	大塚遺跡群	中込字大塚・西大塚他	〃		○			○		
32	中原遺跡群	中込字梨の木・中原他	〃	○	○	○	○	○	○	昭和62･63、平成９年度　梨の木Ⅰ～Ⅳ
33	宮の上遺跡群	横和字宮の上・一本松他	〃	○	○		○	○		昭和62・63年度　宮の上Ⅰ・Ⅱ 平成４年度　根々井芝宮
34	諏訪分遺跡群	根々井字諏訪分・北諏訪分	１段丘		○	○	○	○		
35	赤石河原遺跡	根々井字赤石河原・赤石他	〃		○			○		
36	寄塚遺跡群	横和字寄塚・鶴巻	２段丘		○	○	○	○	○	
37	鍛冶田遺跡	横和字鍛冶田	１段丘		○	○	○	○	○	
38	白山遺跡群	鳴瀬字白山、三河田字下原	２段丘	○	○	○	○	○		
39	今井西原遺跡	今井字九反田他	〃			○	○	○		昭和49年度一部発掘調査
40	今井宮の前遺跡	今井字宮の前・面・居屋敷他	〃					○	○	
41	今井城跡	今井字城・前田	〃						○	

期古墳群、近世の墳墓群が調査され、台地から続く斜面からは中世の五輪塔等の石塔婆群が出土している。また、平成３年度から平成９年度に調査された西一本柳遺跡Ⅰ～Ⅶでは弥生時代中期から平安時代の竪穴住居址200棟以上が調査されている。

一方、湯川左岸地域では、滑津川に挟まれた台地上に白山遺跡群・今井西原遺跡・宮の上遺跡群・寺畑遺跡群・中原遺跡群などが存在している。宮の上遺跡群内では昭和62・63年度に宮の上遺跡Ⅰ・Ⅱの発掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居址７棟等が調査されているほか、平成４年度に調査が実施された根々井芝宮遺跡では弥生時代から平安時代の竪穴住居址79棟が確認され、弥生時代中期の竪穴住居址43棟、古墳時代後期の竪穴住居址３棟、平安時代の竪穴住居址11棟等が調査されている。寺畑遺跡群では縄文時代草創期の爪形文土器・石器が出土した寺畑遺跡、奈良時代の花卉双蝶八花鏡が出土した仲田遺跡などの調査が行われている。

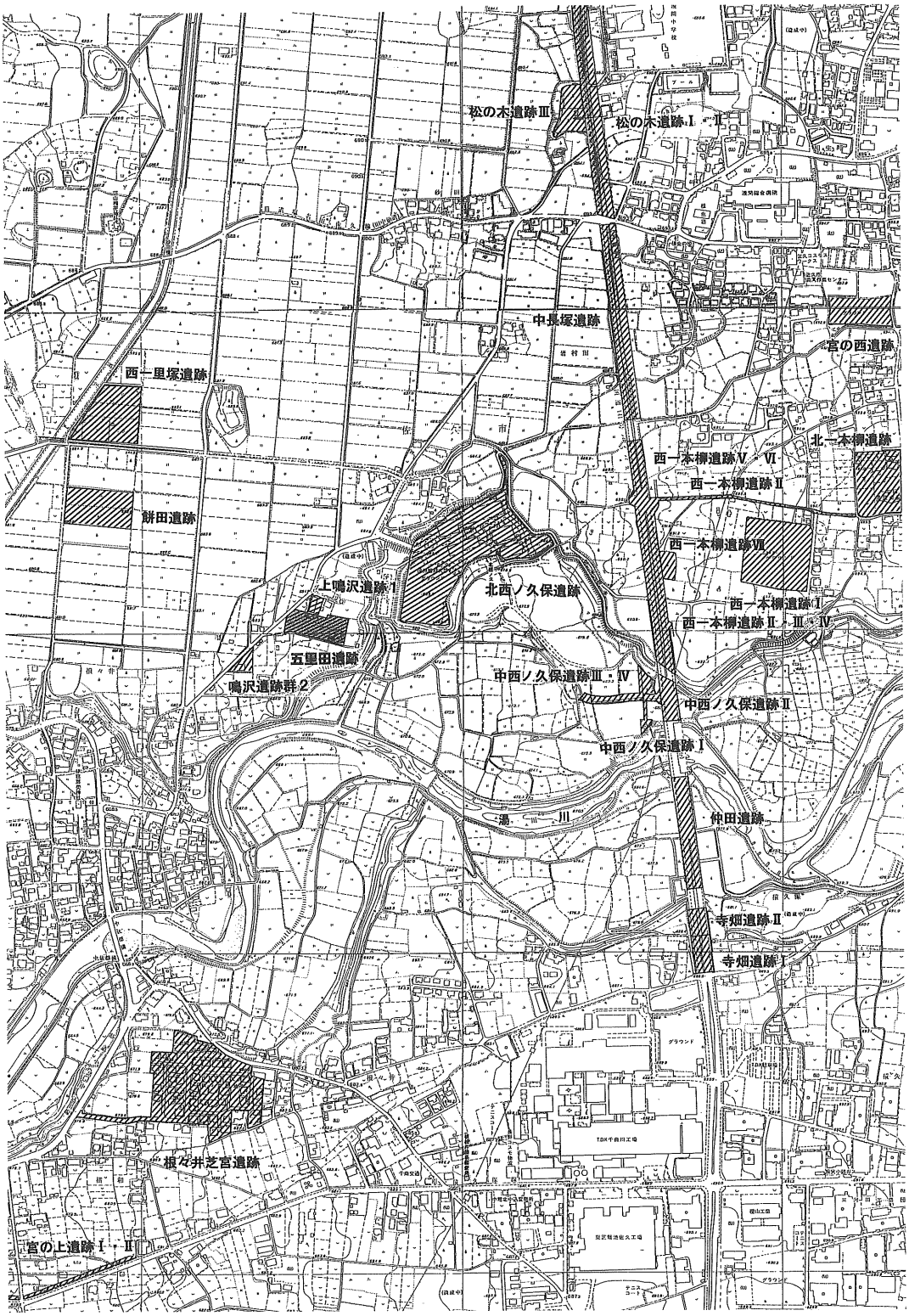
古墳は湯川右岸に上鳴沢古墳群・姫宮塚古墳、湯川左岸に寄塚古墳が存在する。昭和46年に調査された東一本柳古墳は金銅製の杏葉・辻金具、轡をはじめとする馬具、鉄鏃、刀装具、玉類などの豊富な副葬品で知られている。

本遺跡群内では、今回の調査区の北側に隣接する上鳴沢遺跡１の試掘調査が平成３年度に行われ、竪穴住居址１棟、円形周溝墓１基が検出され、平成６年度には鳴沢遺跡群２の試掘調査により弥生時代中期から後期を中心とする竪穴住居址18棟、土坑10基等多数の遺構が検出されている。

以上が鳴沢遺跡群とそれを取り巻く遺跡群の概況である。この付近は国道141号バイパス関係の発掘調査をはじめとして宅地造成等に伴う調査が相次いで行われている地域であり、今後の調査に多大な期待が寄せられるところである。

第２表　周辺遺跡一覧表（2）

遺　跡　名	所　在　地	調査年度	検出遺構・出土遺物等
五里田遺跡	根々井字五里田	平成９年度	本調査
上鳴沢遺跡１	根々井字上鳴沢	平成３年度	試掘調査、住居址１、円形周溝墓１
鳴沢遺跡群２	根々井字才ノ神	平成６年度	試掘調査、住居址18、土坑10
北西ノ久保遺跡	岩村田字北西ノ久保	昭和57・60年度	住居址158（弥生中期～平安）、周湟17、周溝墓、木棺墓他
宮の西遺跡	岩村田字宮の西	昭和58年度	検出遺構なし
北一本柳遺跡	岩村田字北一本柳	昭和47年度	住居址16（弥生後期・平安）、土坑51
西一本柳遺跡Ⅰ～Ⅶ	岩村田字西一本柳	平成３～10年度	住居址（弥生中期～平安）、掘立柱建物址、土坑、溝
中西ノ久保遺跡Ⅰ～Ⅳ	岩村田字中西ノ久保	平成４～10年度	住居址82（弥生後期～平安）、掘立柱建物址、土坑、溝
西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	昭和48年度	住居址11（弥生後期）、環濠、土坑７、竪穴遺構１、溝６
餅田遺跡	岩村田字堰向	昭和48年度	溝３、水路１（近代）
仲田遺跡	猿久保字仲田	平成７年度	住居址30（古墳～平安）、掘立柱建物址９、花卉双蝶八花鏡
寺畑遺跡Ⅰ・Ⅱ	猿久保字下原他	平成６・７年度	住居址２（弥生・平安）、ピット群、爪形文土器
根々井芝宮遺跡	根々井字芝宮 横和字湯の上	平成４年度	住居址79（弥生中期～平安）、掘立柱建物址、土坑、溝
宮の上遺跡Ⅰ・Ⅱ	横和字	昭和62・63年度	住居址７（奈良・平安）、土坑４、溝６
中長塚遺跡	岩村田字中長塚	平成８年度	堰跡（弥生後期）、水田址、木製鋤
松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	岩村田字松の木	平成８～10年度	住居址17（弥生末～古墳初頭）、墳墓、溝、土坑

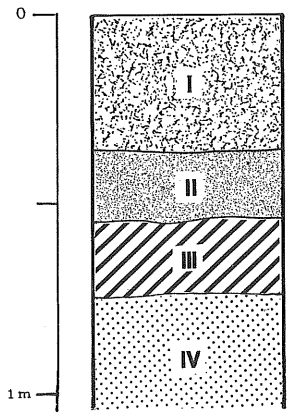


第3図　周辺遺跡分布図（2）（1：10,000）

第Ⅲ章　基本層序と概要

第１節　基本層序

鳴沢遺跡群は湯川右岸の段丘上に立地し、標高681～685ｍを測り、南方に向かって緩やかに傾斜している。今回発掘調査を行った五里田遺跡は鳴沢遺跡群の東端部に位置し、標高685ｍ内外を測る。耕作土（第Ⅰ層）は30～40㎝を測り、耕作土下に第Ⅱ層黒褐色土層が20㎝前後の厚さで堆積する。第Ⅱ層直下は湯川層最上層（第Ⅲ層）にあたり、本遺跡での遺構確認面である。第Ⅲ層の厚さは約20㎝を測り、湯川層砂層中に多量の黄褐色火山灰が混じる。第Ⅳ層は湯川層の砂層であり、第Ⅳ層まで達する遺構の壁体・底面は軟弱で崩壊し易い状態である。



第Ⅰ層　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）　耕作土
第Ⅱ層　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
第Ⅲ層　黄褐色土層（10ＹＲ５/６）　湯川層最上層
砂層中に黄褐色火山灰が
多量に混じる。
第Ⅳ層　褐灰色土層（10ＹＲ５/１）　湯川層、砂層

第４図　基本層序模式図

第２節　検出遺構・遺物の概要

検出遺構	竪穴住居址	43棟	弥生時代中期後半（発掘調査21棟・試掘調査22棟）
	円形周溝墓	４基	弥生時代後期
	方形周溝墓	１基	弥生時代後期
	周　　湟	２基	古墳時代中期
	掘立柱建物址	２棟	時期不明
	土　　坑	37基	縄文時代陥し穴　７基、弥生時代中期後半　５基
			弥生時代後期壺棺墓　２基、時期不明　23基
	溝状遺構	７条	時期不明
	ピット	285基	時期不明

出土遺物　縄文土器　深鉢

弥生土器　壺・甕・台付甕・甑・鉢・高坏・手捏

土師器　坏・高坏

須恵器　長頸壺・甕・坏・平瓶

銅製品　銅釧

鉄製品　鉄釧・鉄剣

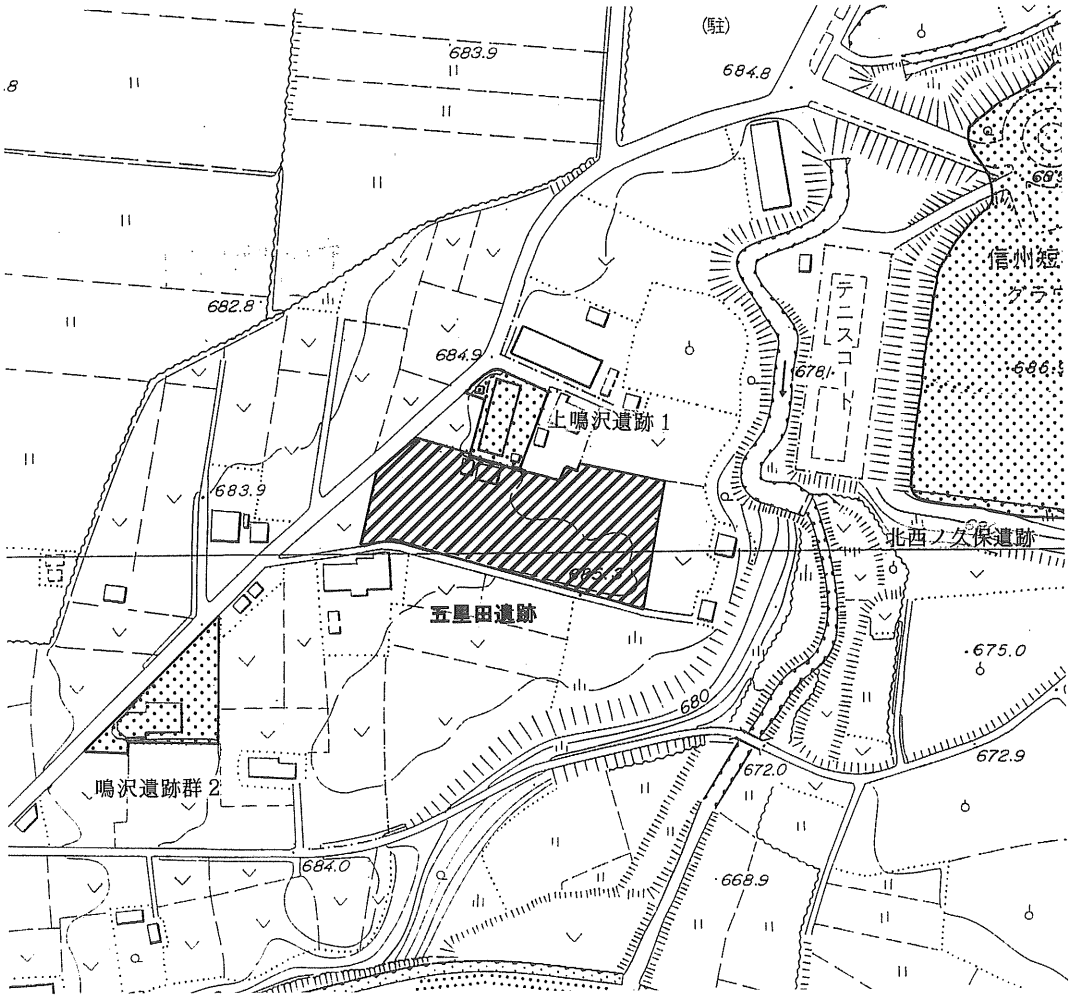
石製品　石鏃・石斧・砥石・擦り石

土製品　土製円板

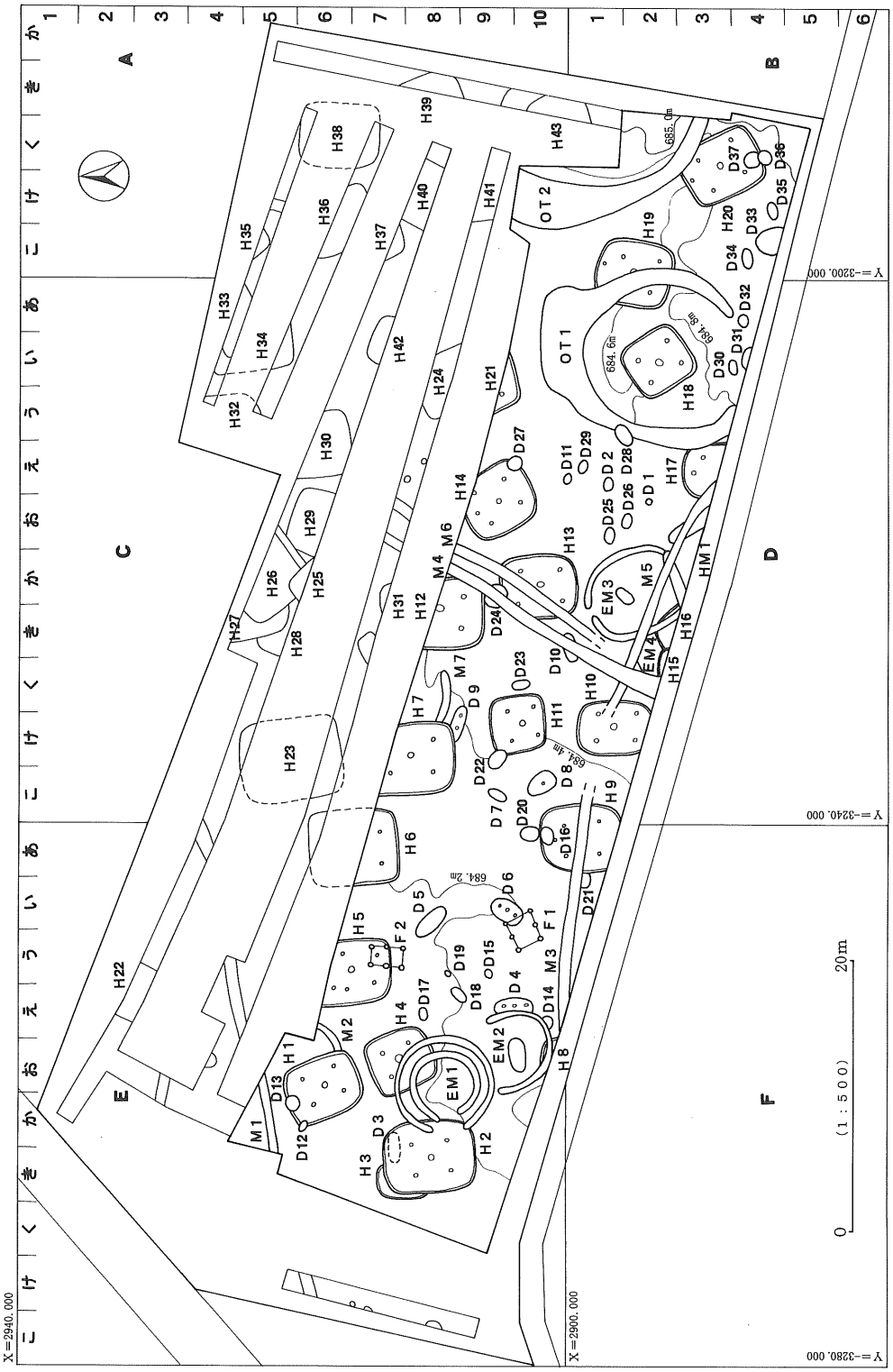
玉類　管玉・ガラス小玉

人骨

獣骨



第5図　五里田遺跡発掘区設定図（1：2,500）



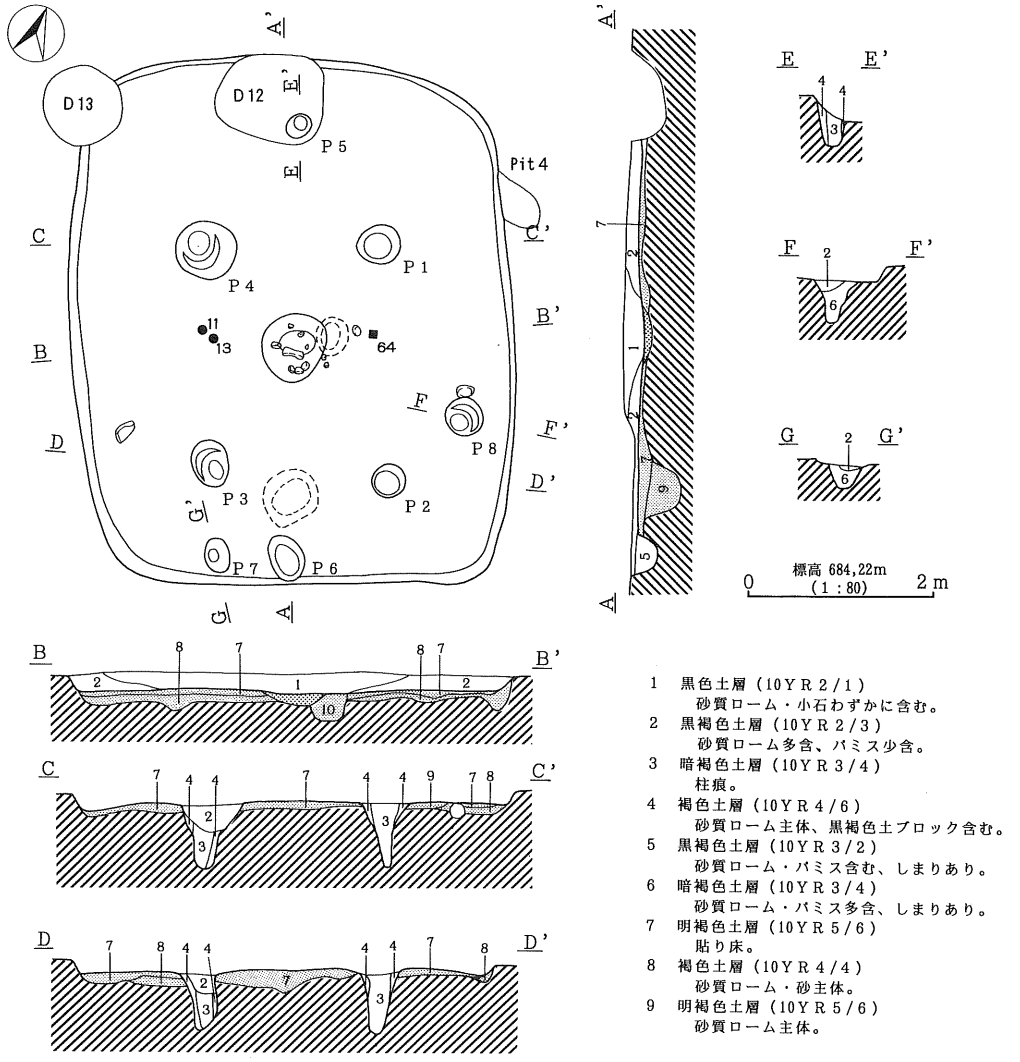
第6図　五里田遺跡全体図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

１）第１号住居址（第７～13図、図版三・四・三十四・四十八）

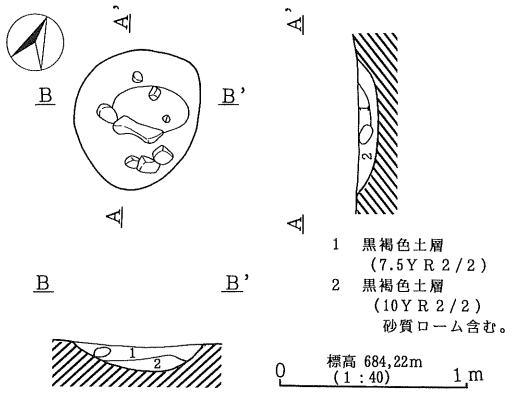
本住居址は調査区北西部、Ｅ－お・か－５～７グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第12・13号土坑、Pit４、第２号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は古い方から本址→第12・13号土坑、Pit４となるが、第２号溝状遺構との新旧関係は不明である。



第７図　第１号住居址実測図

規模は南北5.68m、東西4.70mの隅丸長方形を呈し、床面積は22.4㎡を測る。確認面からの壁高は６～20cmを測り、長軸方位はＮ－22°－Ｗを示す。壁溝は検出されなかった。

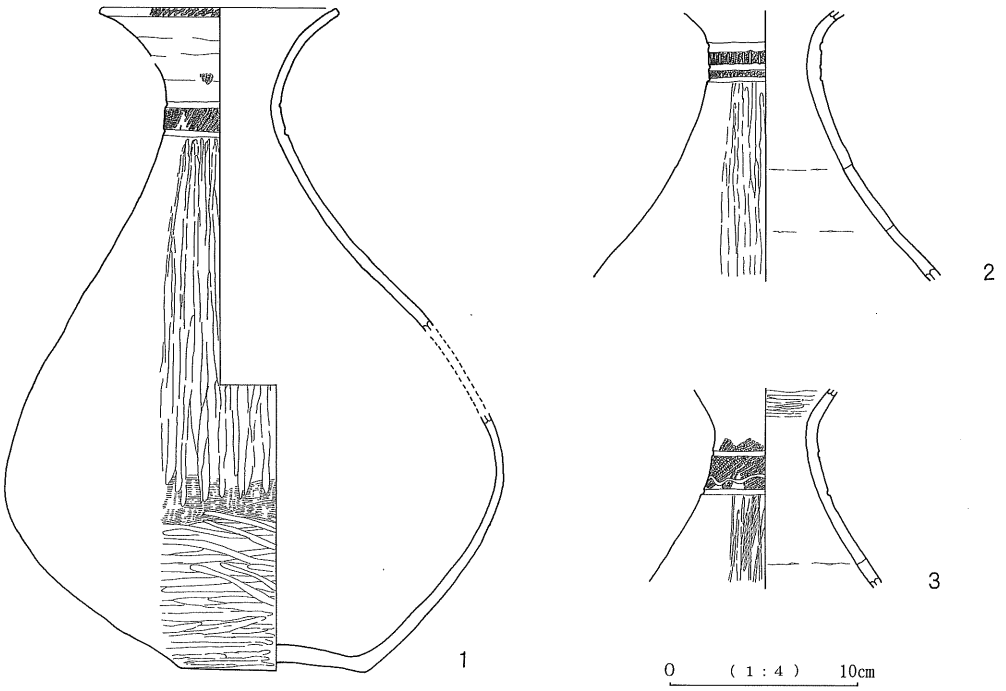
覆土は２層からなり、床面は７・８層を平坦に埋め戻して構築され堅固な状態である。ピットは床面上から８個検出された。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であり、65～67cmの深さを有する。北壁下中央に位置するＰ５は棟持柱と考えられ、第12号土坑に上面を切られるが残存部で深さ47cmを測る。Ｐ６・Ｐ７は南壁下西寄りから検出され入口施設に関するものと思われる。



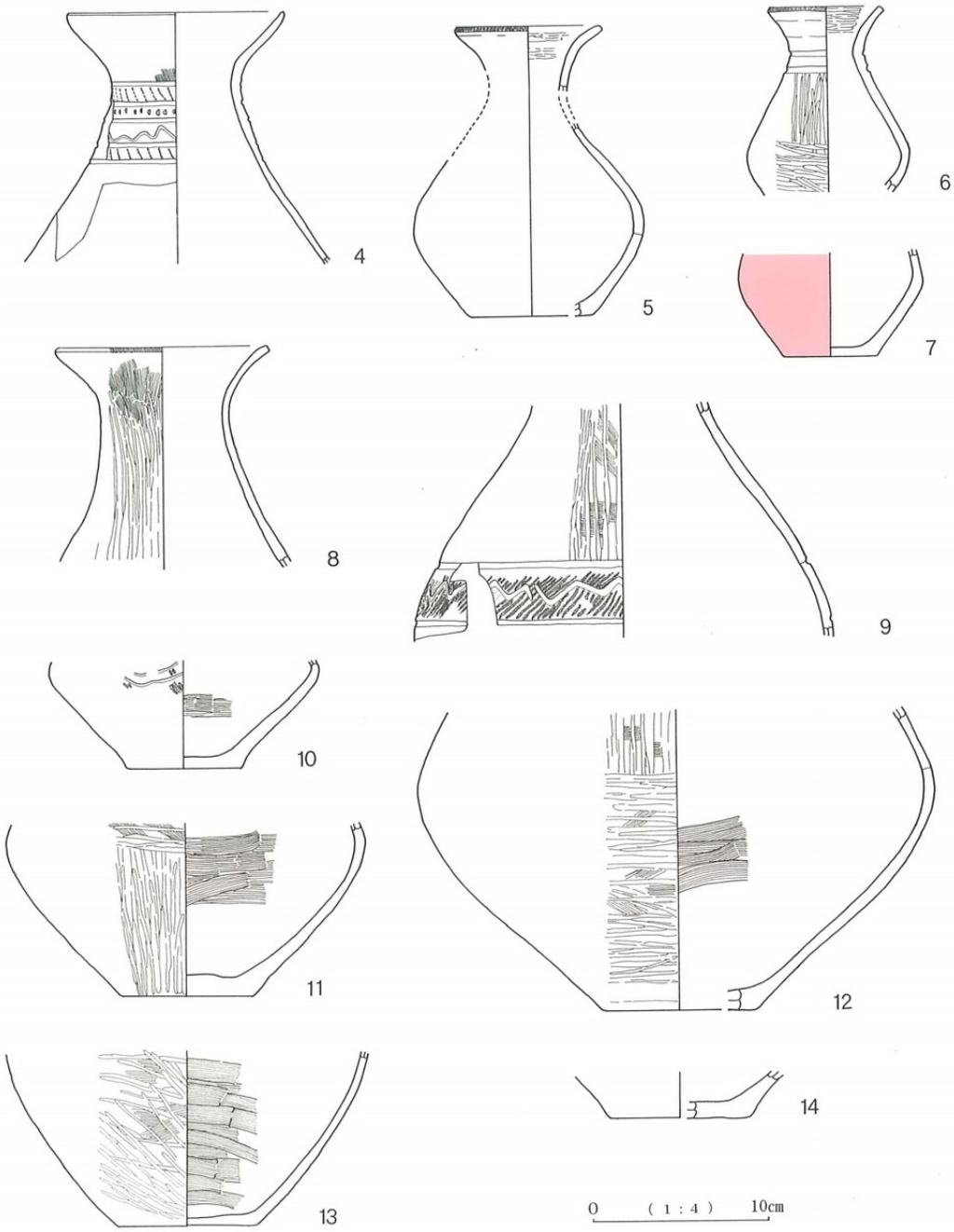
第８図　第１号住居址炉址実測図

炉址は住居址中央やや南寄りに位置し、南側の一辺に礫を設置し炉縁石としている。

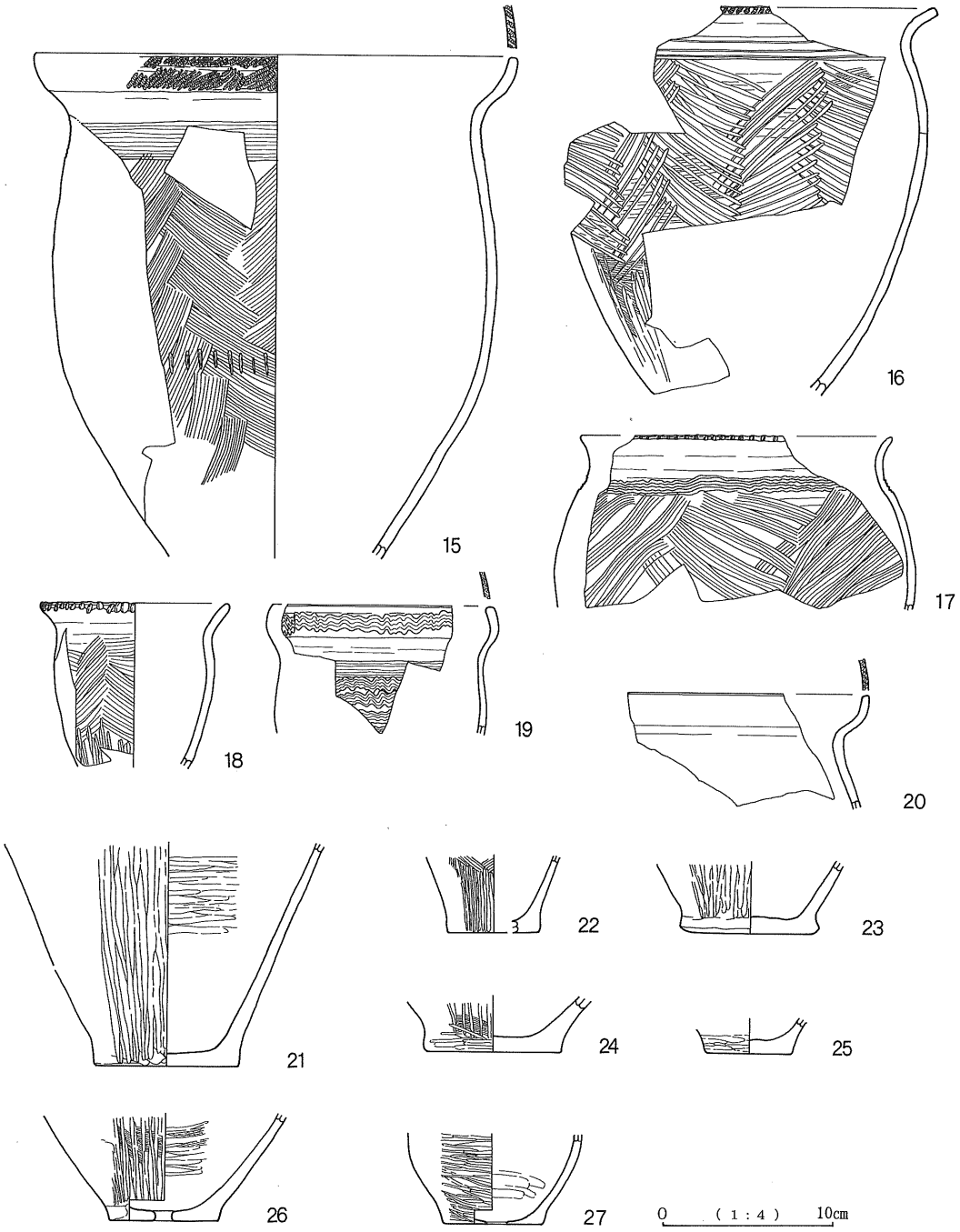
遺物の出土量は多く、壺（１～14・33～48）・甕（15～25・49～61）・甑（26・27）・高坏（28～30）・鉢（31）・手捏（32）の他、石器２点（62・63）・鉄製品１点（64）を図示した。



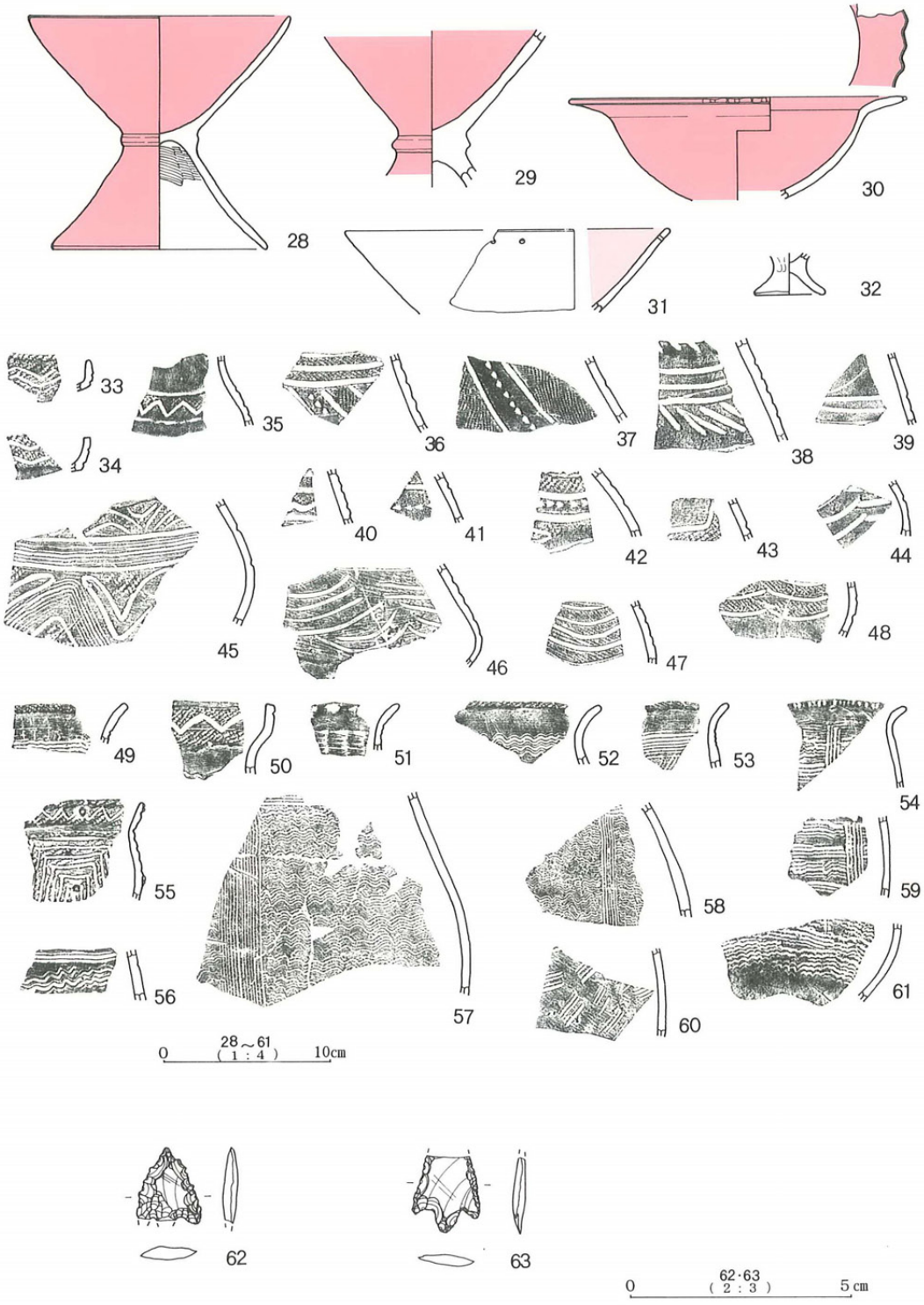
第９図　第１号住居址出土遺物実測図〈1〉



第10図　第1号住居址出土遺物実測図〈2〉



第11図　第1号住居址出土遺物実測図〈3〉



第12図　第1号住居址出土遺物実測図〈4〉

第３表　第１号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
9－1	壺	(12.4)	35.2	9.8	口唇部 縄文、頸部　縄文地文→篦描横線文２ 胴上半　縦ヘラミガキ、胴下半　横ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ハケメ
9－2	壺	－	〈14.5〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文３→区画内上段篦描刺突文 胴部　縦ヘラミガキ	ナデ
9－3	壺	－	〈10.6〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文2・篦描山形文1 胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
10－4	壺	(12.0)	〈14.3〉	－	頸部　篦描横線文5・篦描山形文1・刺突文 胴部　縦ヘラミガキ	ナデ
10－5	壺	8.2	〈16.5〉	7.0	口唇部　縄文 胴部　ヘラミガキ、摩滅	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
10－6	壺	(6.0)	〈10.6〉	－	口唇部　縄文、頸部　篦描横線文2 胴上半　縦ヘラミガキ、胴下半　横ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ハケメ、ナデ
10－7	壺	－	〈6.0〉	5.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ、ヘラミガキ、赤色顔料付着
10－8	壺	11.9	〈12.6〉	－	口唇部　縄文 頸部～胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
10－9	壺	－	〈13.4〉	－	胴中位　縄文地文→篦描横線文2・篦描山形文1 胴上半　縦ヘラミガキ	ナデ
10－10	壺	－	〈6.1〉	6.6	胴中位　縄文地文→篦描連弧文？ 胴下半　ヘラミガキ、摩滅	ハケメ
10－11	壺	－	〈9.8〉	7.6	胴中位　横ヘラミガキ 胴下半　縦ヘラミガキ	ハケメ
10－12	壺	－	〈17.1〉	(8.8)	胴上半　縦ヘラミガキ 胴下半　横ヘラミガキ	ハケメ、摩滅
10－13	壺	－	〈9.9〉	(7.8)	ハケメ→粗い斜ヘラミガキ	ハケメ
10－14	壺	－	〈2.6〉	(8.0)	ヘラミガキ、摩滅	摩滅不明
11－15	甕	(28.0)	〈29.3〉	－	口唇部・口縁部　縄文、胴部　櫛描縦羽状文（上→下・右回り）→頸部　櫛描横線文、胴部　刺突文	横・斜ヘラミガキ
11－16	甕	－	〈22.6〉	－	口唇部　縄文、胴上半　櫛描縦羽状文（右回り）→ 頸部　櫛描横線文、胴下半　縦ヘラミガキ	ハケメ→横ヘラミガキ
11－17	甕	(18.2)	〈10.0〉	－	口唇部　刻目、 頸部　櫛描波状文→胴部　櫛描縦羽状文(上→下・右回り)	ハケメ→横ヘラミガキ
11－18	甕	(10.8)	〈9.6〉	－	口唇部　刻目、胴上半　櫛描縦羽状文（上→下・右回り） 胴下半　縦ヘラミガキ	横・斜ヘラミガキ
11－19	甕	(12.6)	〈7.5〉	－	口唇部　縄文、口縁部　櫛描波状文 頸部　櫛描横線文→胴部　櫛描波状文（上→下）	ハケメ→横ヘラミガキ
11－20	甕	－	〈6.5〉	－	口唇部　縄文 口縁部～胴部　ナデ	横ヘラミガキ
11－21	甕	－	〈13.1〉	8.2	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
11－22	甕	－	〈4.4〉	(5.4)	胴上半　櫛描羽状文 胴下半　縦ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ
11－23	甕	－	〈4.3〉	(8.2)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
11－24	甕	－	〈3.3〉	7.9	ハケメ→縦・横ヘラミガキ	ヘラミガキ、摩滅
11－25	甕	－	〈2.1〉	5.2	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ

11−26	甑	−	〈6.3〉	6.2	底部　穿孔１ ハケメ→縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
11−27	甑	−	〈5.2〉	5.7	底部　穿孔１ 横ヘラミガキ	ナデ
12−28	高坏	(15.6)	14.1	(12.8)	接合部突帯 ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ハケメ・ナデ
12−29	高坏	−	9.4	−	接合部突帯 ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ナデ
12−30	高坏	(20.4)	〈6.2〉	−	口唇部　山形突起 ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
12−31	鉢	(19.6)	〈5.0〉	−	口縁部　穿孔２ 横ヘラミガキ	ヘラミガキ、淡い赤色塗彩
12−32	手捏	−	〈2.5〉	(4.2)	小型品 ナデ	ナデ

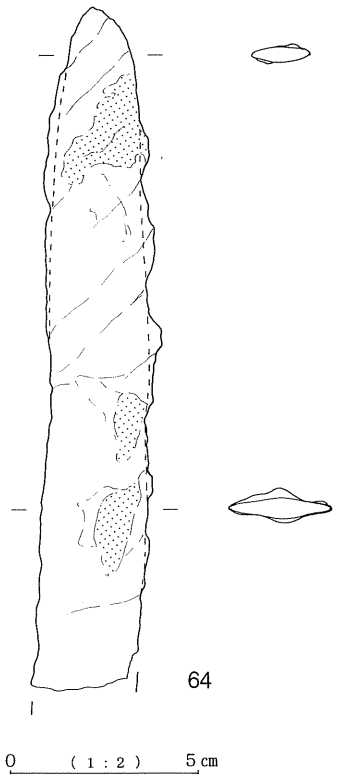
壺には大小の器種があり、口縁部が外反し体部下半に最大径を有する器形となる。文様構成は口唇部に縄文、頸部は縄文＋篦描文、または篦描文のみ、胴部は中位に縄文＋篦描文の９・10があるが胴部に施文されるものは少ない。５・８は口唇部に縄文がみられる他は無文である。

甕にも大小の器種があり、口縁部は短く外反するものと受口状になるものとがある。文様構成は口唇部に縄文または刻目文、口縁部は縄文＋篦描文、櫛描文、頸部には櫛描波状文・横線文が巡り、胴部には櫛描羽状文、波状文＋垂下文が施される。また、15は胴部に篦描の刺突文がみられる。この他55は胴部に「コ」の字重ね文・円形浮文の台付甕である。

高坏には坏部が椀状のもの（28）と口縁部が鍔状に屈曲するもの（30）とがある。

石器には黒曜石製の石鏃（62・63）があり、63は辺部剥離段階で折損した未製品である。

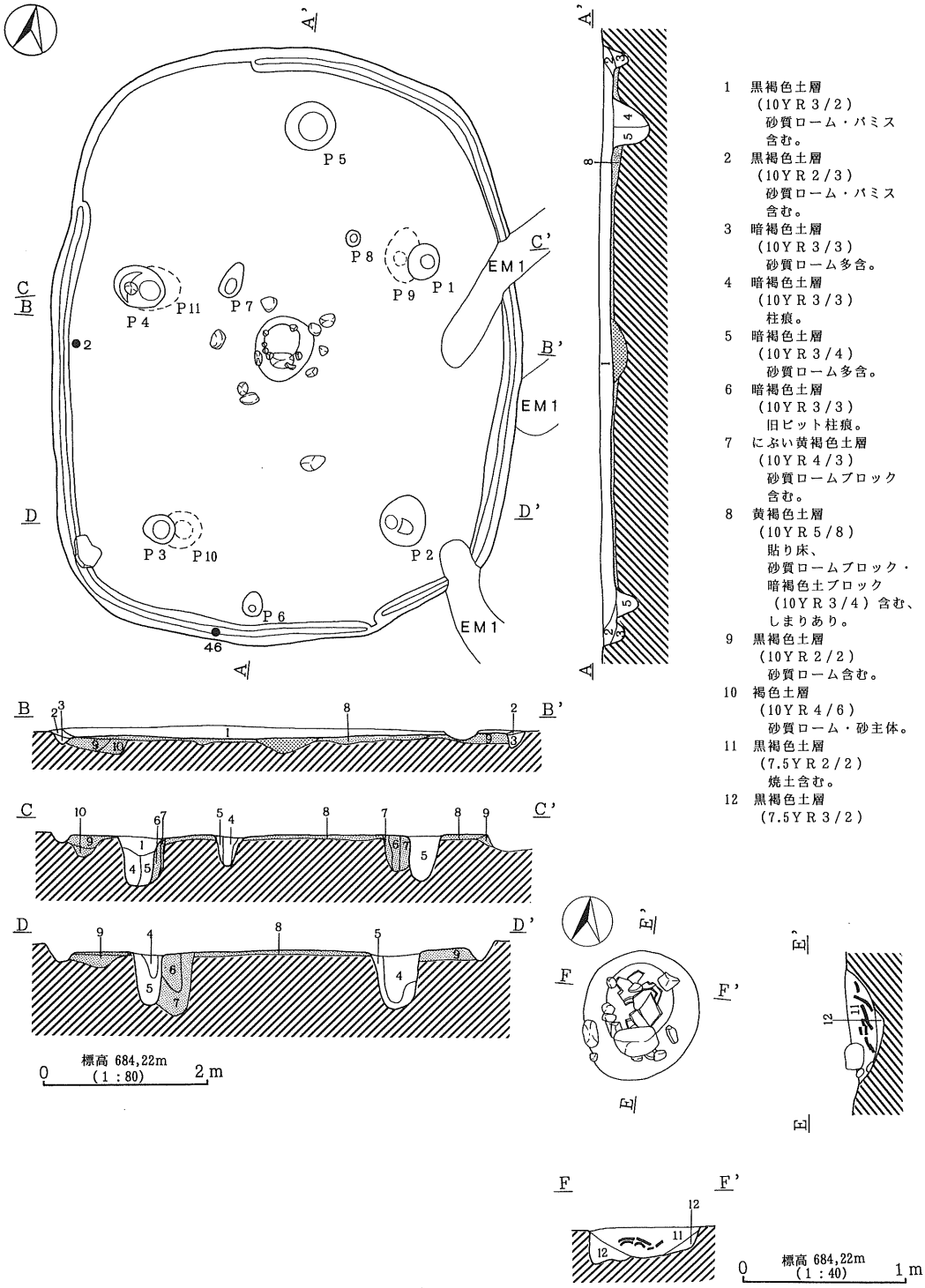
鉄製品には64の鉄剣があり、炉址東側の床面上２～３cmから出土した。分析の結果、切先部のみで残存長18.2cm・刃幅2.8cmを測り、布状の繊維で螺旋状に巻き付けられていることが判明した（付編３参照）。



第13図　第１号住居址
出土遺物実測図〈5〉

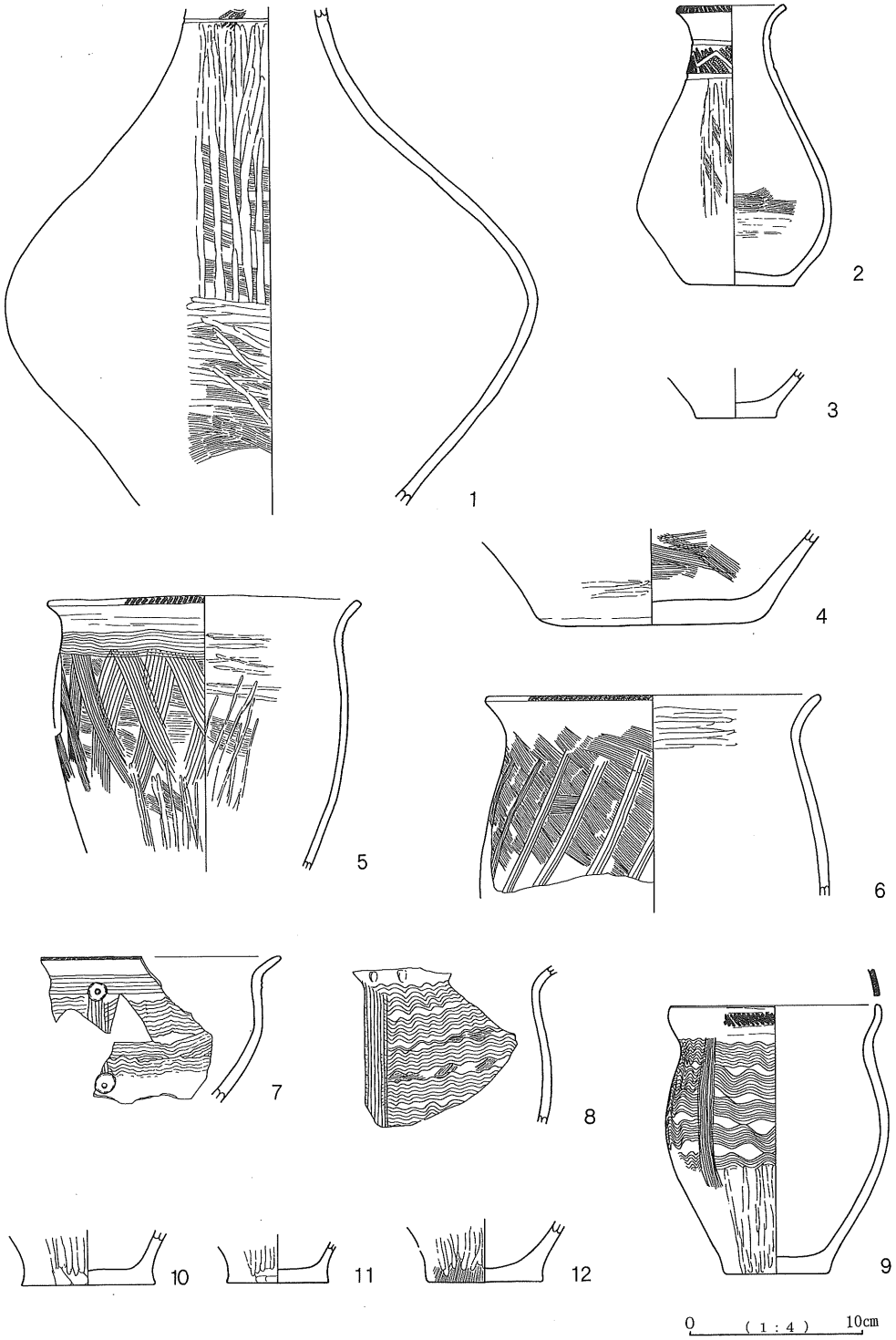
２）第２号住居址（第14～17図、図版三・四・三十五・四十八・四十九）

本住居址は調査区西側、Ｅ－か・き－７～９グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第３号住居址、第１号円形周溝墓、第３号土坑と重複関係にあり、新旧関係は古い方から第３号土坑、第３号住居址→本址→第１号円形周溝墓となる。

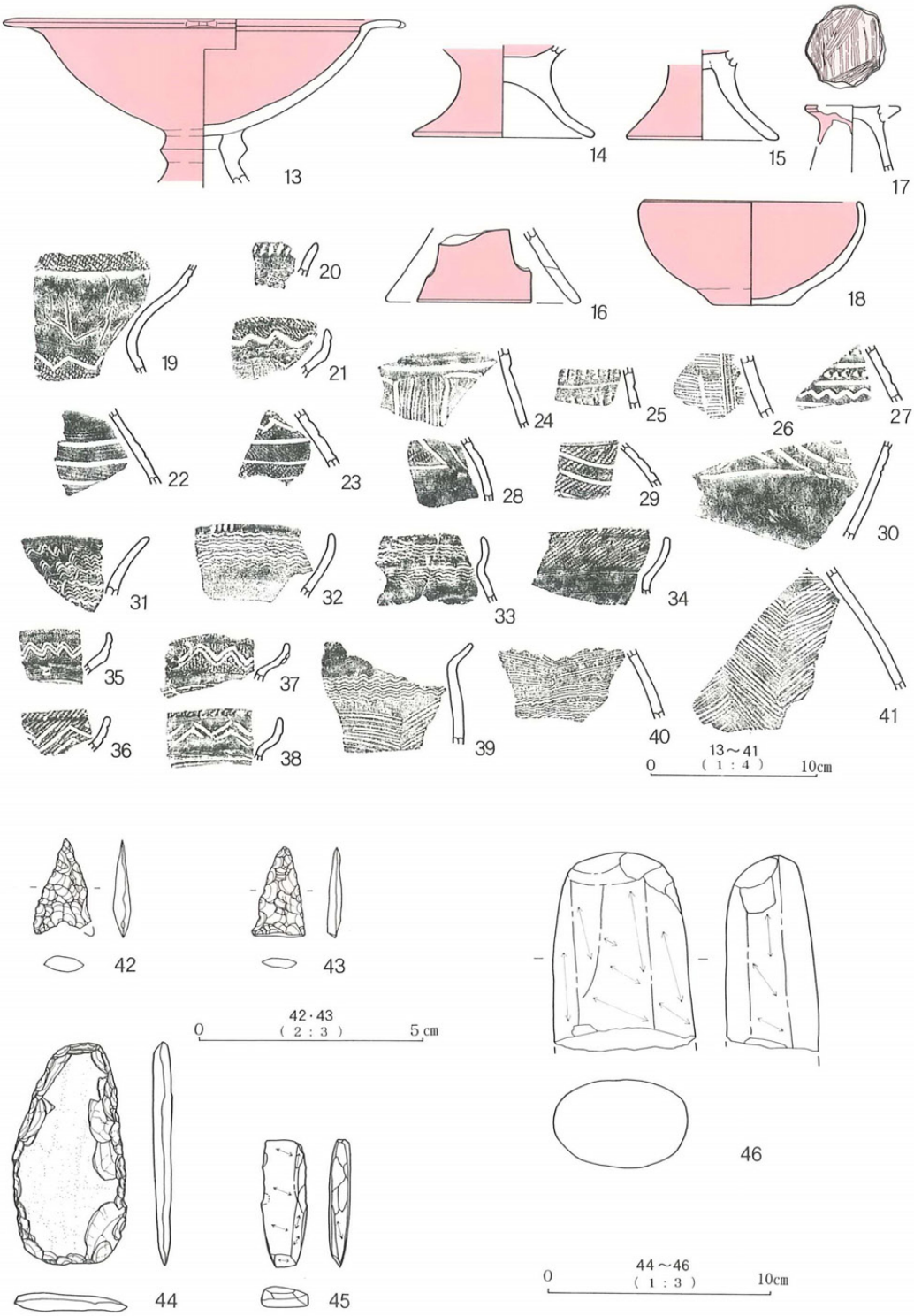


1　黒褐色土層
　(10YR3/2)
　砂質ローム・パミス
　含む。
2　黒褐色土層
　(10YR2/3)
　砂質ローム・パミス
　含む。
3　暗褐色土層
　(10YR3/3)
　砂質ローム多含。
4　暗褐色土層
　(10YR3/3)
　柱痕。
5　暗褐色土層
　(10YR3/4)
　砂質ローム多含。
6　暗褐色土層
　(10YR3/3)
　旧ピット柱痕。
7　にぶい黄褐色土層
　(10YR4/3)
　砂質ロームブロック
　含む。
8　黄褐色土層
　(10YR5/8)
　貼り床、
　砂質ロームブロック・
　暗褐色土ブロック
　(10YR3/4) 含む、
　しまりあり。
9　黒褐色土層
　(10YR2/2)
　砂質ローム含む。
10　褐色土層
　(10YR4/6)
　砂質ローム・砂主体。
11　黒褐色土層
　(7.5YR2/2)
　焼土含む。
12　黒褐色土層
　(7.5YR3/2)

第14図　第2号住居址実測図



第15図　第2号住居址出土遺物実測図〈1〉



第16図　第2号住居址出土遺物実測図〈2〉

第４表　第２号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
15－1	壺	－	〈28.9〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文･篦描山形文 胴上半　ハケメ→縦ヘラミガキ、胴下半　ハケメ→横ヘラミガキ	ハケメ、ナデ
15－2	壺	6.2	16.3	6.4	口唇部 縄文、頸部 縄文地文→篦描横線文2･篦描山形文1 胴部　ハケメ→縦ヘラミガキ	ハケメ　ナデ 赤色顔料付着
15－3	壺	－	〈2.8〉	4.8	摩滅不明	摩滅不明
15－4	壺	－	〈5.3〉	(13.4)	横ヘラミガキ、摩滅	ハケメ
15－5	甕	18.0	〈15.9〉	－	口唇部 縄文、胴上半 櫛描斜格子目文→頸部 櫛描横線文 胴下半 縦ヘラミガキ	ハケメ→胴上半　横ヘラミガキ、 胴下半　縦ヘラミガキ
15－6	甕	(19.4)	〈11.7〉	－	口唇部　縄文、 胴部　ハケメ→櫛描斜走文	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ハケメ、摩滅
15－7	甕	－	〈8.5〉	－	口唇部　縄文、頸部　櫛描横線文 胴部　櫛描波状文（上→下）→櫛描垂下文→円形浮文	横ヘラミガキ
15－8	甕	－	〈9.1〉	－	胴部　櫛描波状文→櫛描垂下文	横ヘラミガキ
15－9	甕	12.2	15.6	6.2	口唇部･口縁部　縄文、胴上半　櫛描垂下文5→櫛描波状文5 (上→下)、胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
15－10	甕	－	〈3.5〉	6.8	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
15－11	甕	－	〈2.4〉	(6.0)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
15－12	甕	－	〈3.2〉	(7.8)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
16－13	高坏	(23.8)	〈9.8〉	－	口唇部　山形突起　接合部突帯 ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ハケメ
16－14	高坏	－	〈5.5〉	10.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ナデ
16－15	高坏	－	〈5.3〉	9.0	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ナデ
16－16	高坏	－	〈4.4〉	(11.8)	脚部　透かし孔 ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色顔料付着
16－17	器台	(5.8)	〈3.9〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩 器受部　粗いヘラミガキ→淡い赤色塗彩	ナデ、赤色顔料付着
16－18	鉢	(13.2)	6.2	4.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

規模は南北7.20m、東西5.70mの隅丸長方形を呈し、床面積は29.5㎡を測る。確認面からの壁高は２～20cmを測り、長軸方位はN－6°－Wを示す。壁溝は北西隅で断絶する他はほぼ全周する。

覆土は３層からなるが１層が主体を占める。床面は９・10層を埋め戻して平坦にした後、８層を貼り床としており全体に堅固な状態である。

ピットは床面上から８個検出され、Ｐ１～Ｐ４が主柱穴である。47～79cmの深さを有し、方形に配置されるが全体に南に寄る。Ｐ５は北壁下中央から検出され、深さ40cmを測り棟持柱と思われる。また、Ｐ１～Ｐ３の内側に重複して古い柱穴が床下から検出されており、柱の建て替えが行われたものと考えられる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置し、南側に大型の礫を設置して炉縁石としている。

遺物は壺（1～4・19～30）・甕（5～12・31～41）・高坏（13～16）・器台（17）・鉢（18）の他、石器5点（42～46）・鉄製品1点（47）を図示した。

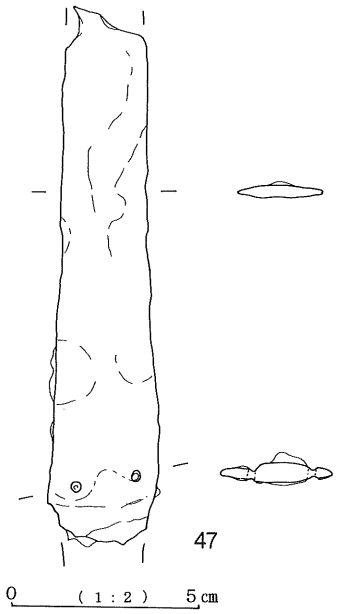
壺には大小の器種があり、口縁部が外反し胴部下半に最大径を有する。文様は口唇部に縄文、頸部に縄文＋篦描文を施す。胴部は縄文・篦描文がみられるものもあるが、無文のものが主体的であり、外面の調整はハケメ調整の後ヘラミガキが行われる。

甕には口縁部が短く外反するものと受口状となるものとがあり、受口状のものは口縁部に縄文・篦描文・櫛描文が施される。文様は口唇部に縄文・刻目文、頸部に櫛描横線文・波状文、胴部に櫛描斜格子目文（5）、斜走文（6）、波状文＋垂下文（7～9）が施される他、櫛描羽状文もみられる（39・41）。7～9は胴部に櫛描波状文と垂下文が施文されるが、7・8が波状文→垂下文であるのに対し、9は垂下文→波状文であり施文順序が異なる。また7は垂下文の上・下端に円形浮文が貼り付けされる。

高坏は4点を図示したが全体の器形を復元できたものはない。13の坏部は口縁部が鍔状に屈曲し端部に突起が付される。16は透かし孔を有するが形状は不明である。17は内面にヘラミガキが行われていないことから器台とした。器受部は赤色塗彩され、端部に三角形の突起を有するが形状は不明である。鉢（16）は椀状を呈し、内外面ともに赤色塗彩が行われる。

石鏃には黒曜石製の42・43があり、43は茎部造り出し中の未製品である。この他石器には硬質砂岩製の篦状石器（44）、閃緑岩製の鑿先形石器（45）・磨製石斧（46）があり、46には赤色顔料の付着がみられる。

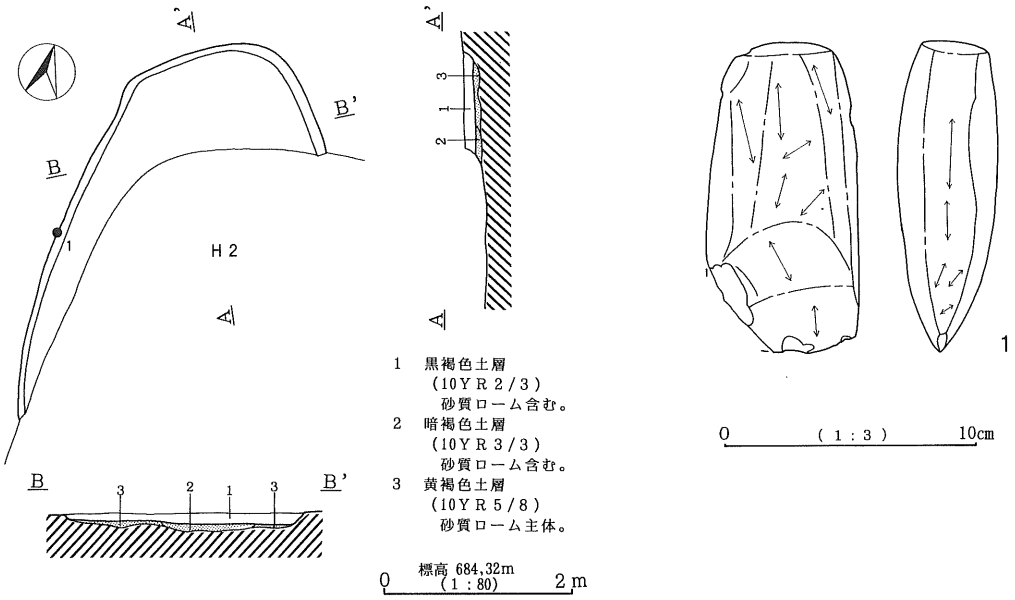
47は切先部と茎部を欠損する鉄剣で、分析の結果、残存長14.3cm・刃幅2.9cmを測り、剣身下端に左右二カ所、径約3㎜の目釘穴が確認された（付編3参照）。



第17図　第2号住居址
出土遺物実測図〈3〉

3）第3号住居址（第18図、図版四・四十九）

本住居址は調査区西側、E－き－7・8グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第2号住居址と重複関係にあり、南側大半を破壊される。検出部分で南北4.5mを計測し得るのみで、規模・形態ともに不明である。確認面からの壁高は6～10cmを測る。床面は2・3層を埋め戻して平坦に構築されるが堅固ではない。床面上からはピット・炉址等は認められなかった。以上、床面が構築されていることを除けば本址を住居址とする根拠はない。



第18図　第３号住居址・出土遺物実測図

本址からの遺物の出土量は極めて少なく、図示できた土器はない。土器はいずれも小片で、器種には無文の壺胴部、赤色塗彩された高坏または鉢の口縁部、高坏の脚部がある。

１は閃緑岩製の磨製石斧である。刃部の欠損後に再加工が行われ使用による剥離痕がみられる。

４）第４号住居址（第19～21図、図版五・六・三十六・四十七）

本住居址は調査区西側、Ｅ－え～か－７・８グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第１号円形周溝墓と重複関係にあり、西壁・南壁の一部を切られる。

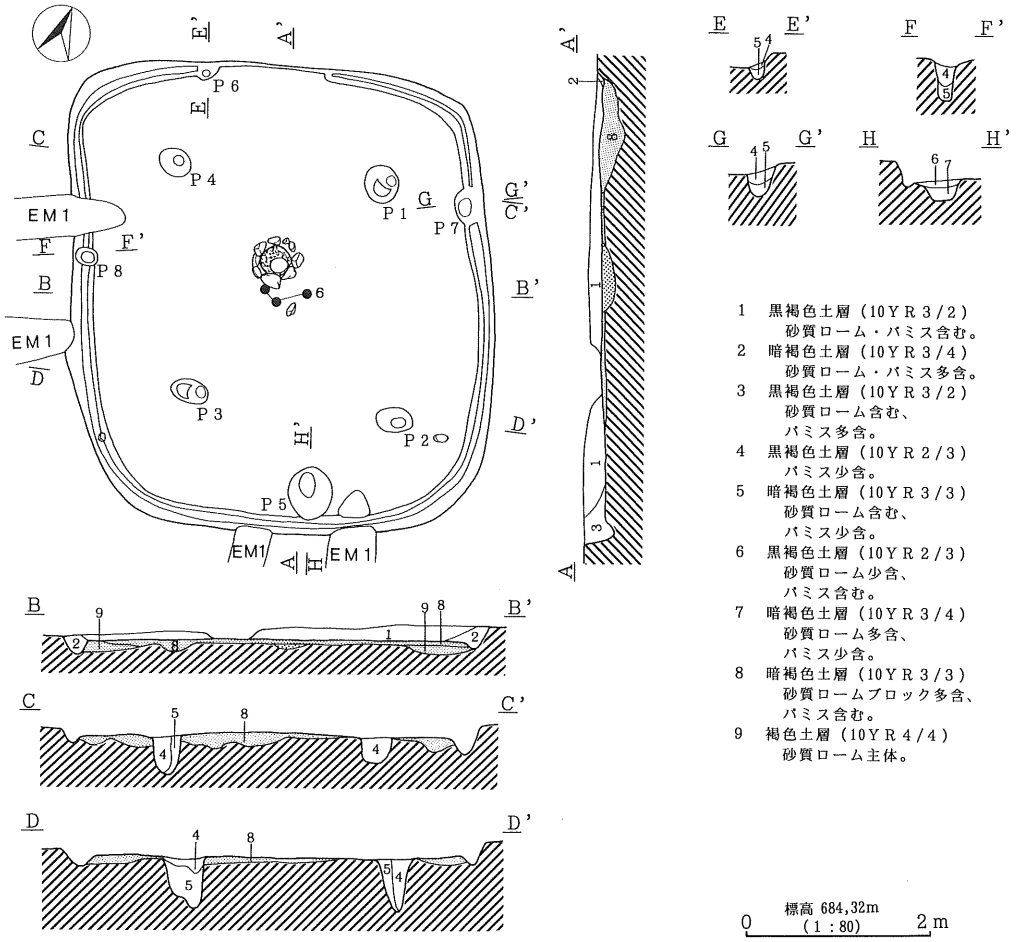
規模は南北4.98m、東西4.50mのわずかに南北に長い隅丸長方形を呈し、床面積は17.4m²を測る。確認面からの壁高は６～19cmを測り、長軸方位はＮ－21°－Ｗを示す。壁溝は北壁中央で一部断絶する他はほぼ全周する。

覆土は３層からなるが１層が主体を占める。床面は８・９層を平坦に埋め戻して構築され全体に堅固な状態である。

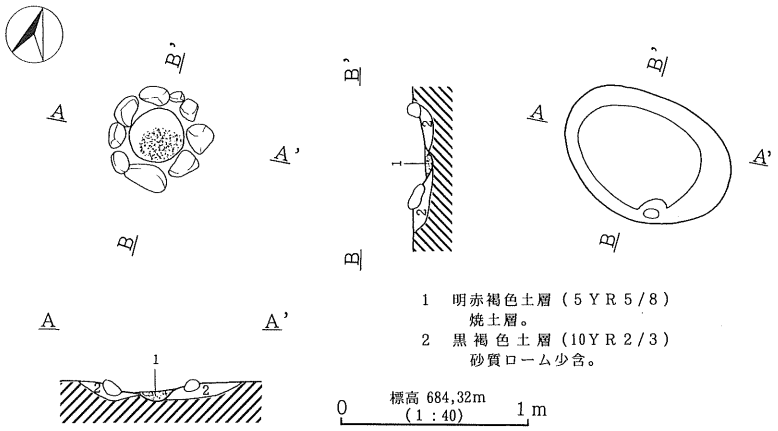
ピットは床面上から８個検出され、Ｐ１～Ｐ４が主柱穴である。47～55cmの深さを有し、方形に整然と配される。Ｐ５は南壁下中央東寄りから検出され、深さ24cmを測り入口施設に関するものと思われる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置する。南北66cm、東西92cmの楕円形の掘り方に２層黒褐色土を埋め戻した後、９個の礫を56×54cmの円形に設置して設けられる「石囲炉」である。

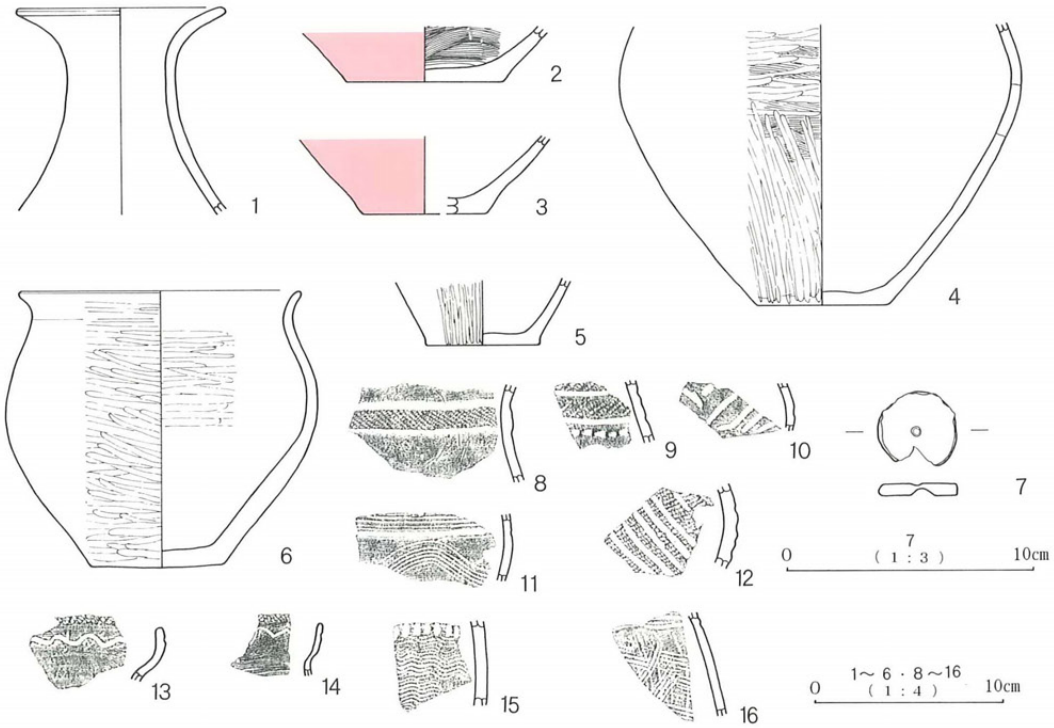
遺物は壺（１～４・８～12）・甕（５・13～16）・鉢（６）・土製品（７）を図示した。



第19図　第4号住居址実測図



第20図　第4号住居址炉址実測図



第21図　第4号住居址出土遺物実測図

第5表　第4号住居址出土土器観察表

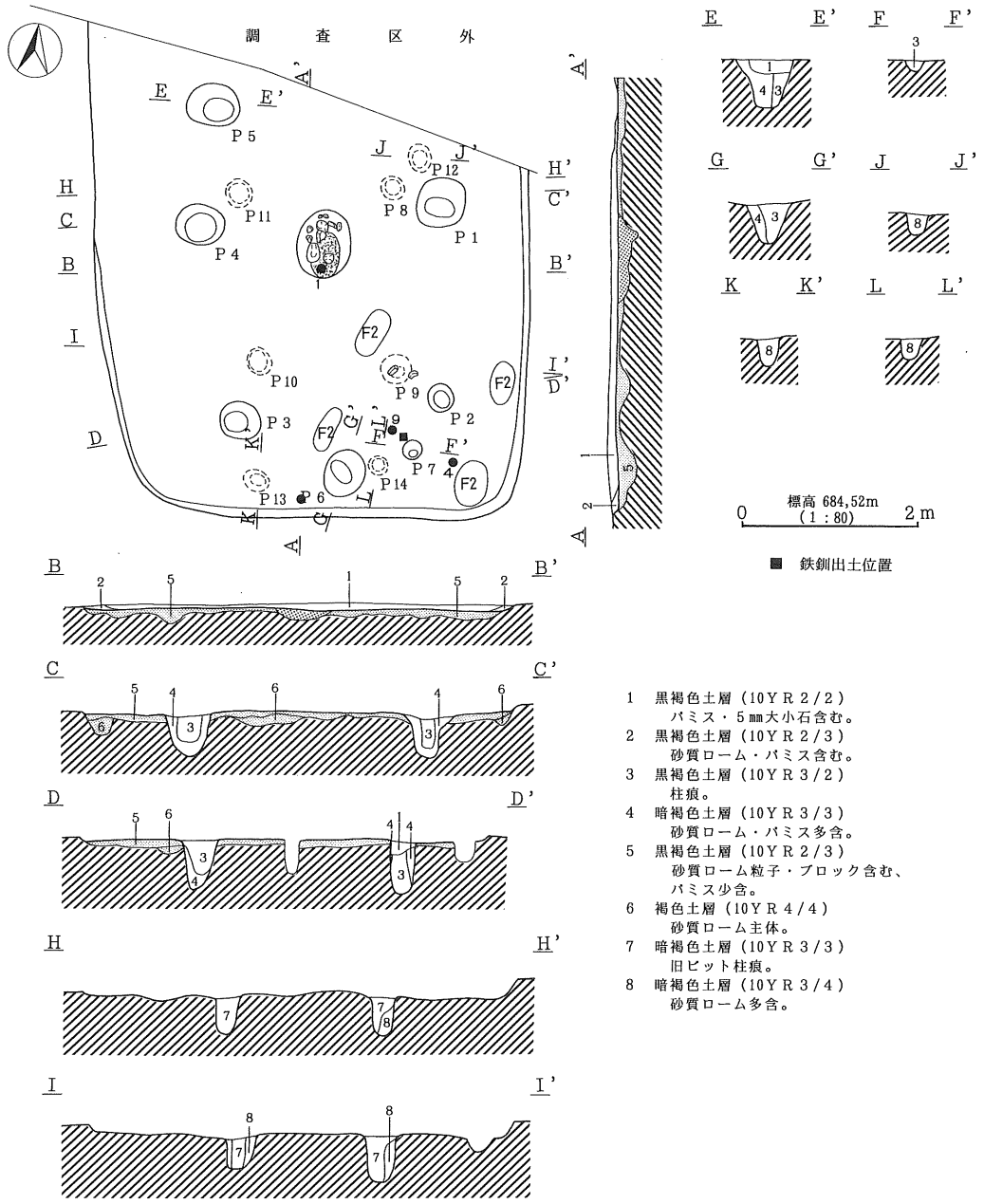
挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
21－1	壺	(10.6)	〈11.0〉	－	縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ
21－2	壺	－	〈2.9〉	(8.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケメ
21－3	壺	－	〈4.1〉	(6.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケメ
21－4	壺	－	〈14.9〉	(7.0)	胴中位　ハケメ→横ヘラミガキ 胴下位　ハケメ→横ヘラミガキ	ハケメ、剥離
21－5	甕	－	〈3.4〉	(6.2)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
21－6	鉢	14.8	14.6	7.0	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ

壺は頸部に縄文・箆描横線文・刺突文、胴部に縄文・箆描文・櫛描文があるが、1は無文であり、2・3には赤色塗彩が行われる。甕は口唇部に縄文、口縁部に縄文＋箆描文、胴部に櫛描波状文・羽状文が施文され、15には刺突文がみられる。鉢（6）は炉址南側の床面上からの出土であり、口縁部は短く外反し、調整は内外面とも横位のヘラミガキが行われる。7は甕の胴部片を利用した土製円板で、両側からの穿孔途中である。

5）第５号住居址（第22～25図、図版五・六・三十六）

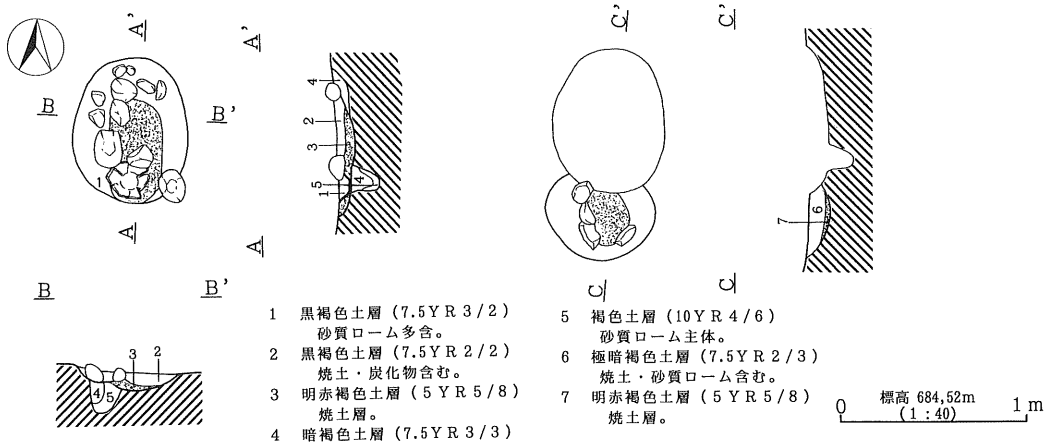
本住居址は調査区北西部、Ｅ－う・え－６・７グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第２号掘立柱建物址に南東部分の床面を切られ、北側は調査区外である。

規模は東西4.86ｍを計測し、南北６ｍ前後の隅丸長方形を呈するものと思われる。確認面からの壁高は０～10cmを測る。壁溝は検出されなかった。



1　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
　　バミス・５mm大小石含む。
2　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　　砂質ローム・バミス含む。
3　黒褐色土層（10ＹＲ３/２）
　　柱痕。
4　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　砂質ローム・バミス多含。
5　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　　砂質ローム粒子・ブロック含む、
　　バミス少含。
6　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　　砂質ローム主体。
7　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　旧ピット柱痕。
8　暗褐色土層（10ＹＲ３/４）
　　砂質ローム多含。

第22図　第５号住居址実測図



第23図　第5号住居址炉址実測図

覆土は2層からなり、床面は5・6層を埋め戻して構築され平坦で堅固な状態である。ピットは床面上から7個検出された。主柱穴はP1～P5の5個であるがP1の北側にも存在するものと思われ、住居址の規模・炉址の位置からも6本柱穴が想定される。深さは48cm（P1）～62cm（P5）を測る。P6は南壁下中央から検出され深さ47cmを測る。またP1～P4に隣接して古い柱穴（P8～P11）が床下から検出されており柱の建て替えが行われたものと考えられる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置すると思われ南北78cm、東西60cmの楕円形を呈する。火床部の周囲には10～20cmの礫が置かれ、南側から壺の底部（1）が出土した。またこの炉址と重複して南側床面下から古い炉址が検出された。東西60cmの楕円形を呈し、火床部の西側に3個・東側に1個の礫が設置された状態で出土した。

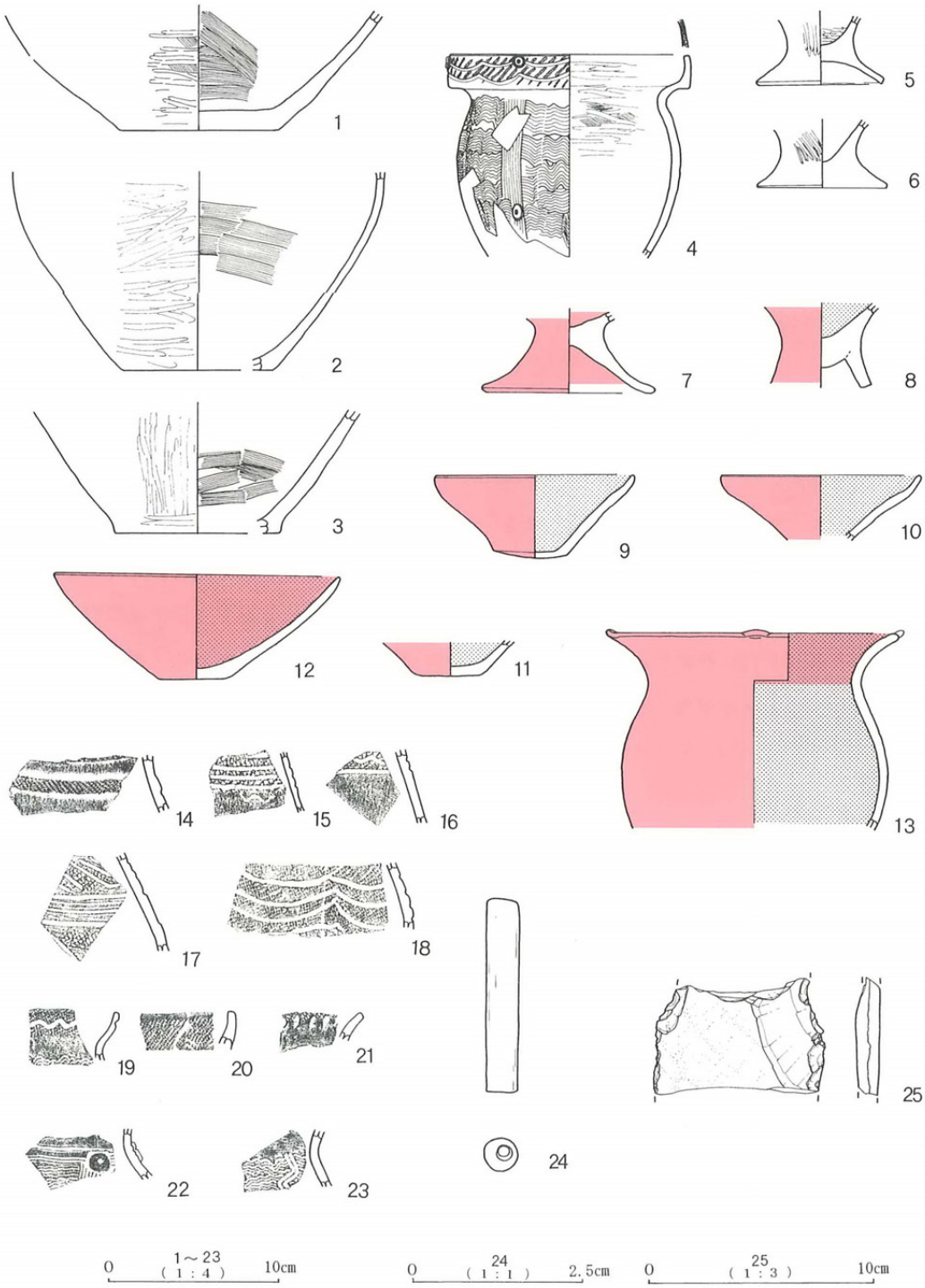
遺物は壺（1～3・14～18）・甕（4～6・19～23）・高坏（7・8）・鉢（9～13）の他、管玉1点（24）、石器1点（25）、鉄釧8点（26～33）を図示した。

壺は口唇部に縄文、頸部・胴部に縄文・篦描文が施文されるが、いずれも小片で器形の知れるものはない。甕（4）は台付甕であろう。受口口縁で口唇部に縄文、口縁部に縄文・篦描連弧文・円形浮文が施され、胴部には櫛描波状文の後4条の櫛描垂下文で区画しさらに円形浮文が貼り付けされる。5・6は台付甕の台部であるが、6はベタ底状を呈する。

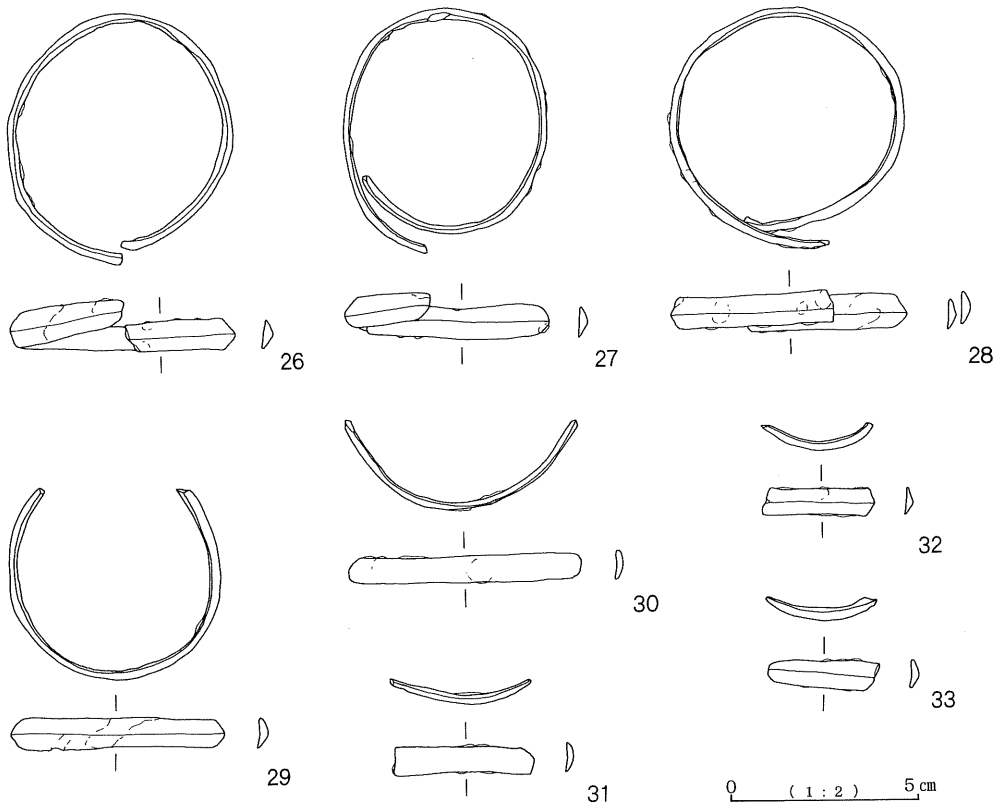
高坏（7・8）・鉢（9～13）は外面に赤色塗彩されるが、8～13の内面は黒色処理されたものとみられる。12・13の内面から赤色塗彩の後に黒色処理が行われたことが伺え、9～11の内面をみる限り偶然による結果とは考えにくい。また7は脚部内面にも赤色塗彩が行われる。

石器には輝石安山岩製の打製石斧（25）がある。24は碧玉製の管玉で長さ2.9cmを測る。

鉄釧（26～33）はP7北側の床面上からバラバラに破砕した状態で出土した。分析・接合の結果、5点存在したものと推定される（付編3参照）。



第24図　第5号住居址出土遺物実測図〈1〉

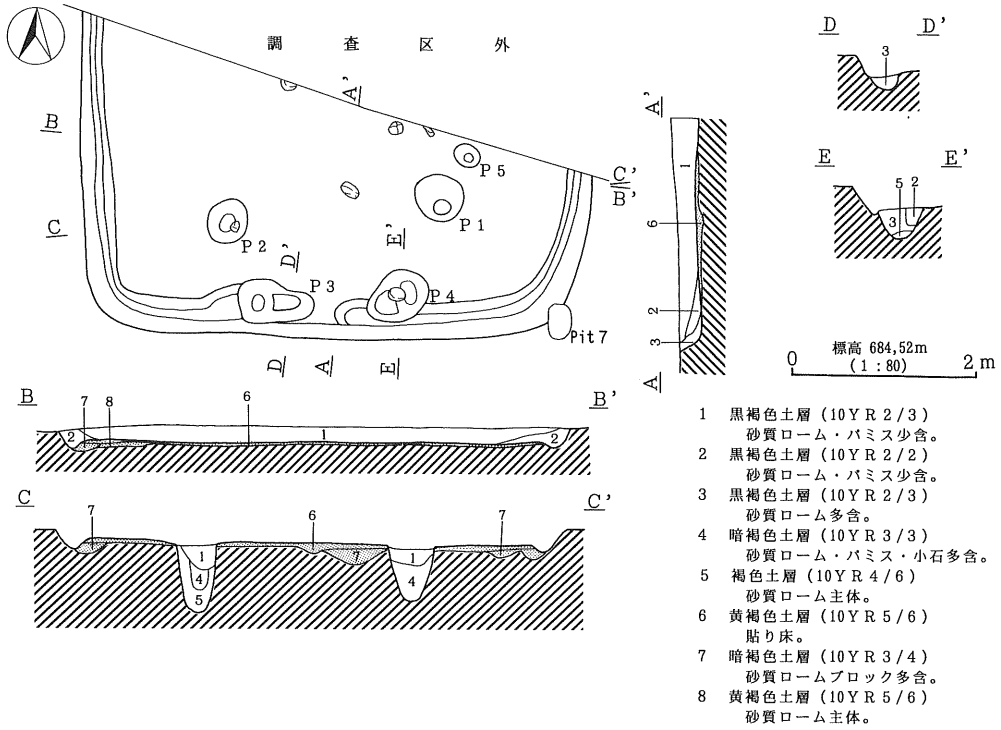


第25図　第5号住居址出土遺物実測図〈2〉

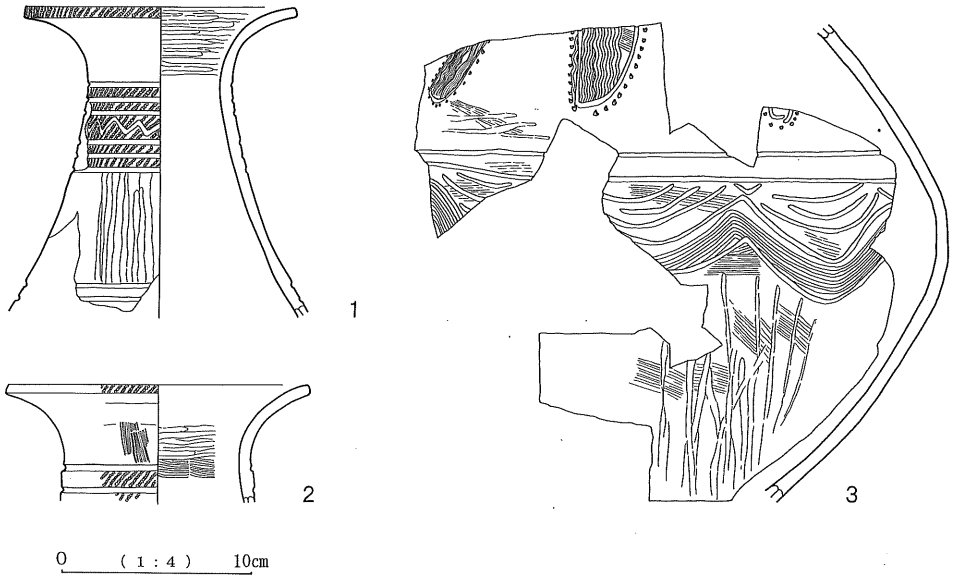
第6表　第5号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
24－1	壺	－	〈7.1〉	9.5	横ヘラミガキ	ハケメ
24－2	壺	－	〈11.8〉	(9.0)	横ヘラミガキ	ハケメ
24－3	壺	－	〈7.3〉	(9.8)	縦ヘラミガキ	ハケメ
24－4	甕	14.2	〈12.0〉	－	口唇部　縄文、口縁部　縄文地文→箆描連弧文2→円形浮文 胴部　櫛描波状文→櫛描垂下文4→円形浮文	横ヘラミガキ
24－5	台付甕	－	〈4.1〉	(7.4)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
24－6	台付甕	－	〈4.1〉	(7.6)	ヘラミガキ	横ヘラミガキ
24－7	高坏	－	〈4.8〉	9.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩、剥離
24－8	高坏	－	〈5.0〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　赤色塗彩→黒色処理
24－9	鉢	11.8	4.9	4.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	黒色処理
24－10	鉢	(11.8)	〈3.9〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	黒色処理
24－11	鉢	－	〈2.1〉	3.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	黒色処理
24－12	鉢	16.8	6.4	3.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	赤色塗彩→黒色処理
24－13	鉢	(17.2)	〈11.8〉	－	口唇部　山形突起4(残存2)、ヘラミガキ、赤色塗彩	赤色塗彩→黒色処理

6）第6号住居址（第26～29図、図版七・三十六・四十七～四十九）

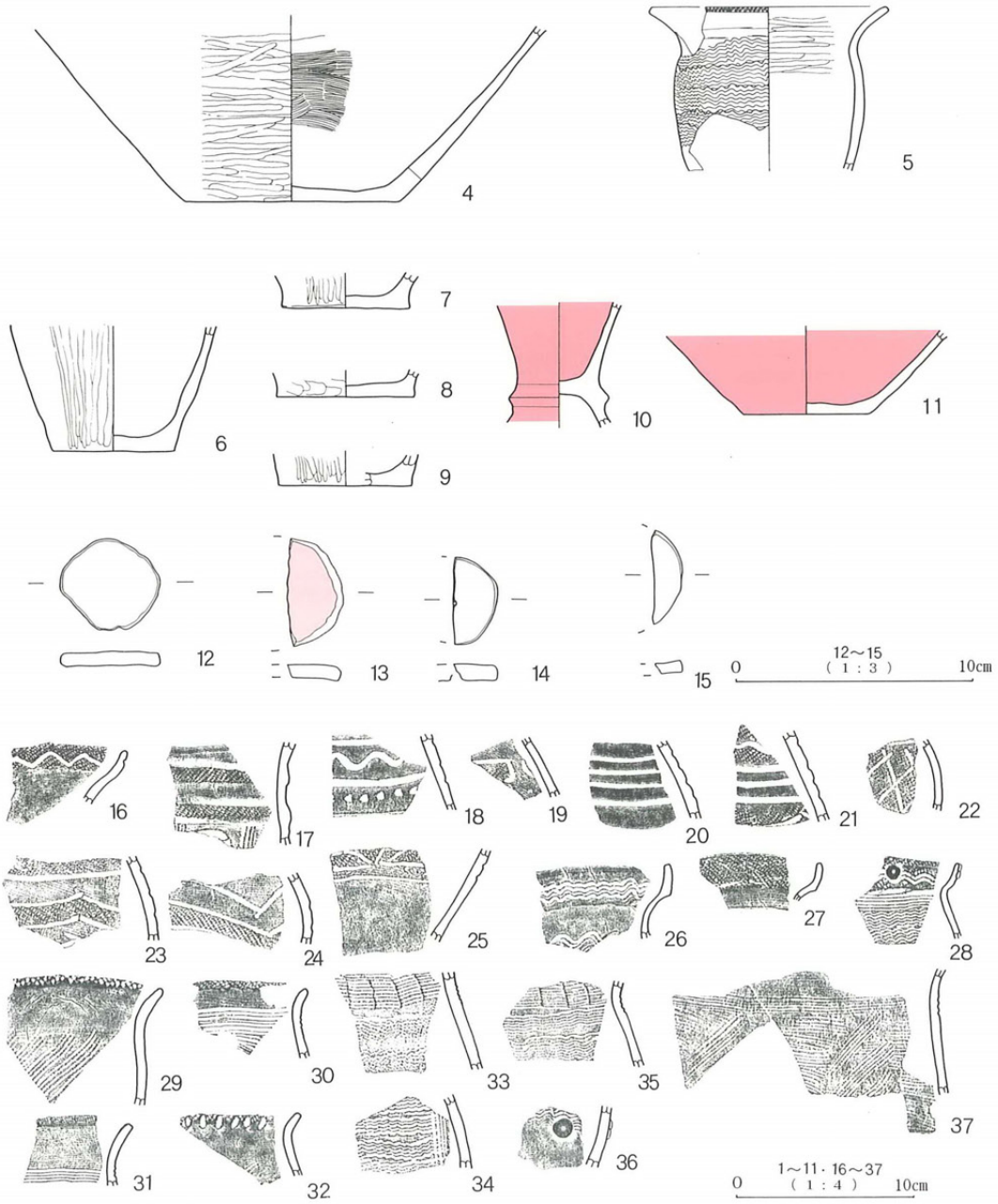


第26図　第6号住居址実測図

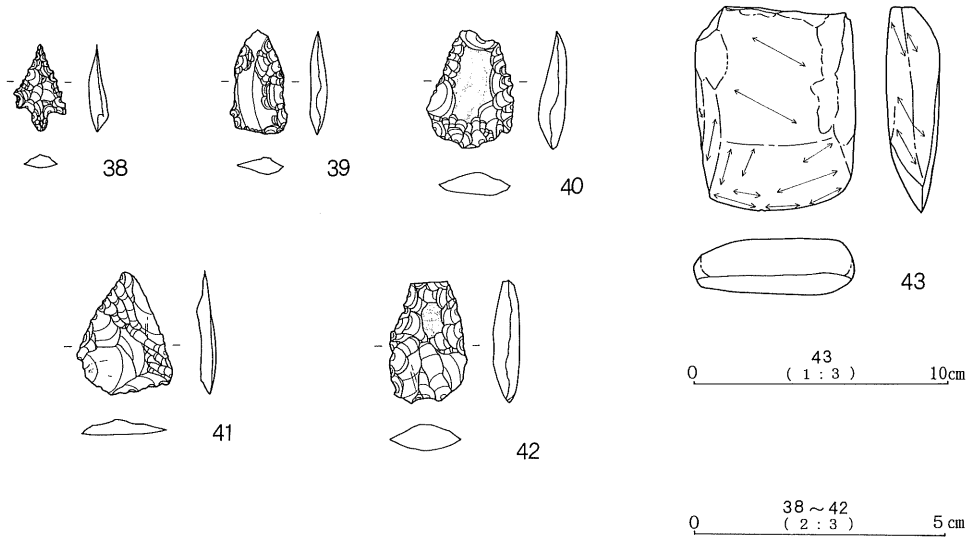


第27図　第6号住居址出土遺物実測図〈1〉

本住居址は調査区北西部、C－こ－7、E－あ・い－7グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。Pit 7に南東隅を切られる他は重複関係はない。また、北側は調査区外であり未調査である。



第28図　第6号住居址出土遺物実測図〈2〉



第29図　第6号住居址出土遺物実測図〈3〉

第7表　第6号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
27－1	壺	(14.2)	〈16.5〉	－	口唇部　縄文、頸部　縄文地文→篦描横線文6・篦描山形文1 胴部　篦描横線文、縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
27－2	壺	(15.8)	〈6.3〉	－	口唇部　縄文 頸部　縄文地文→篦描横線文	口縁部　横ヘラミガキ 頸部　ハケメ
27－3	壺	－	〈25.4〉	－	胴上位　櫛描波状文垂下→篦描沈線区画→篦描刺突文 胴中位　篦描横線文2・櫛描波状文1→櫛描連弧文	ハケメ、剥離
28－4	壺	－	〈9.9〉	12.0	横ヘラミガキ	ハケメ
28－5	甕	(13.4)	〈9.2〉	－	口唇部　縄文、胴上半　櫛描波状文5(上→下) 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
28－6	甕	－	〈7.1〉	6.8	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
28－7	甕	－	〈2.0〉	(7.2)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
28－8	甕	－	〈1.5〉	(7.8)	ナデ	横ヘラミガキ
28－9	甕	－	〈1.8〉	(7.6)	縦ヘラミガキ	摩滅不明
28－10	高坏	－	〈7.0〉	－	接合部突帯 ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩、剥離 脚部　ナデ
28－11	鉢	－	〈4.7〉	(7.2)	ヘラミガキ、赤色塗彩 底部　ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

規模は東西5.42mを計測し、試掘調査から南北6.5m前後の隅丸長方形を呈するものと思われる。確認面からの壁高は11～25cmを測る。壁溝は南壁下中央でわずかに断絶するもののほぼ全周する

ものと思われる。

覆土は３層からなるが１層が主体を占める。床面は７・８層を埋め戻して平坦にした後、６層を貼り床としており堅固な状態である。

ピットは床面上から５個検出された。Ｐ１・Ｐ２が南側に配される主柱穴であり、深さは67cm・62cmを測る。北側の主柱穴は調査区外のため未調査である。Ｐ３・Ｐ４は南壁下中央から検出され、深さ30cm・42cmを測り入口施設に関するものと思われる。

炉址は調査区外にあり今回の調査では確認されなかった。

遺物は壺（１～４・16～25）・甕（５～９・26～37）・高坏（10）・鉢（11）・土製品（12～15）の他、石器６点（38～43）を図示した。

壺の文様構成は口唇部に縄文、頸部に縄文と箆描横線文を基調とする。胴部は上半部に櫛描文・箆描文、胴中位に箆描横線文・連弧文を施文する３の他に縄文地に箆描連弧文を施文するものもある。甕は口縁部が外反するものと受口口縁のものがあり、口唇部は縄文・刻目文、頸部には櫛描横線文・簾状文が巡らされる。胴部の文様は櫛描羽状文・波状文・垂下文があり、円形浮文が貼り付けされる36もある。

土製品には12～15の土製円板があり、13は赤色塗彩の破片を用いている。14は両面からの穿孔途中であるが、12には穿孔の痕跡はみられない。

38～42は黒曜石製の石鏃であるが、38が完成品である他は39～41が成形段階、42が辺部剥離段階で廃棄された未製品である。43は閃緑岩製の扁平片刃石斧で、刃部に使用による剥離痕がみられる。

７）第７号住居址（第30～33図、図版七・九・三十六・四十九）

本住居址は調査区中央北側、Ｃ－け・こ－７・８グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第９号土坑・Pit８・第７号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は古い方から第９号土坑→本址→Pit８であり、第７号溝状遺構との新旧関係は不明である。また、北側は調査区外であり未調査である。

規模は東西5.85mを計測し、南北6.5m前後の隅丸長方形を呈するものと思われる。確認面からの壁高は１～16cmを測る。壁溝は東壁・西壁で断絶し、北壁については不明である。

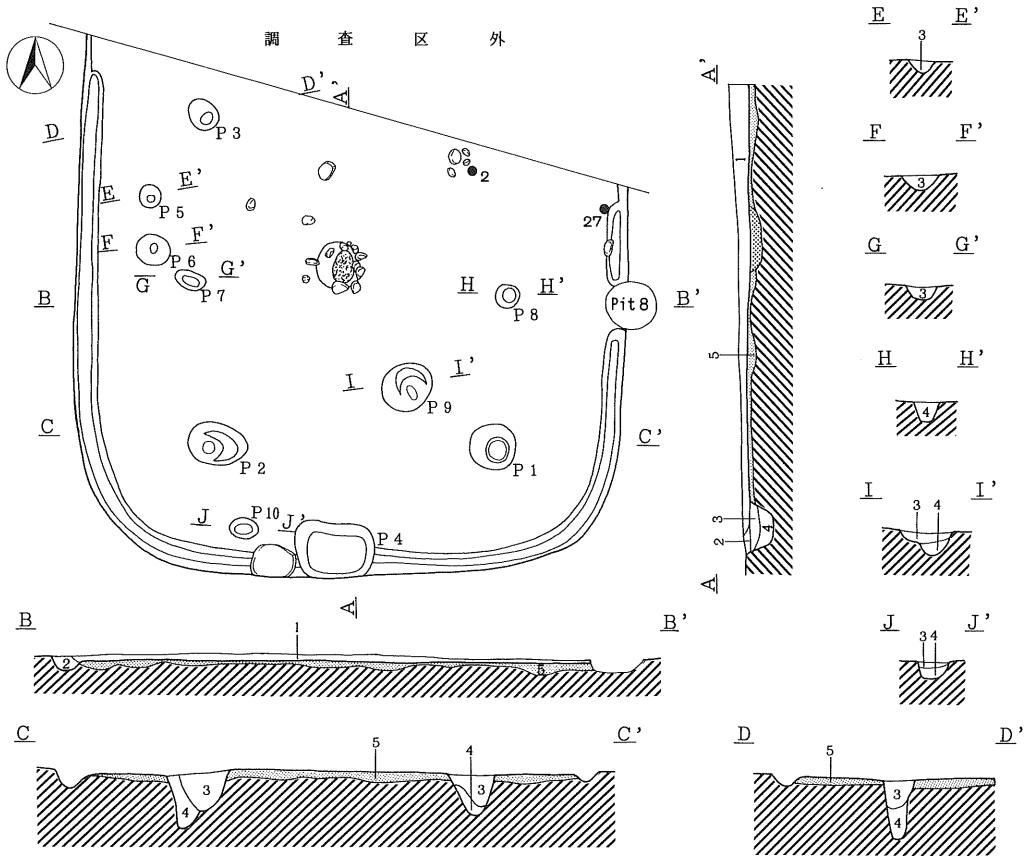
覆土は２層からなるが１層が主体を占め、２層は壁溝内にわずかにみられるのみである。床面は５層を埋め戻して構築され全体に平坦で堅固である。

ピットは床面上から10個検出された。Ｐ１～Ｐ３が主柱穴であり、北東に配される柱穴は調査区外のため不明である。深さはＰ１が47cm、Ｐ２・Ｐ３が63cmを測る。Ｐ４は南壁下中央に位置し82×56cm、深さ30cmを測る。

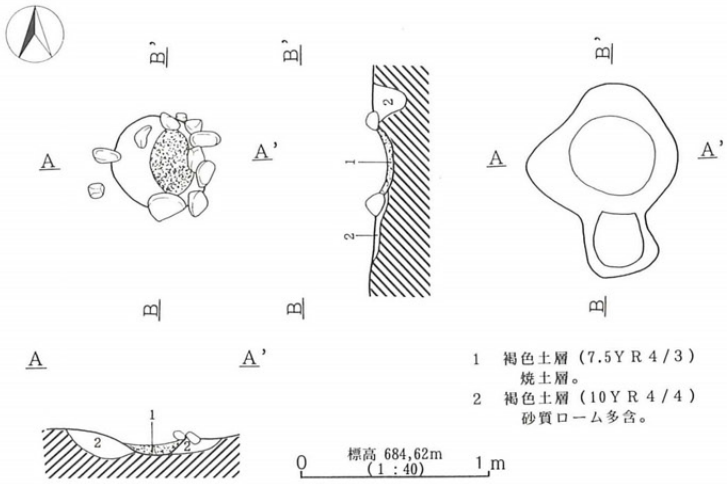
炉址は住居址のほぼ中央に位置すると思われる。南北103cm、東西82cmの不整形の掘り方に2層褐色土を埋め戻して構築される。火床部西側の礫は残存しないものの、旧状は礫を径50～60cmの円形に設置した「石囲炉」であったと考えられる。

遺物は壺（1～4・7～15）・甕（16～26）・鉢（5・6）の他、石器2点（27・28）を図示した。

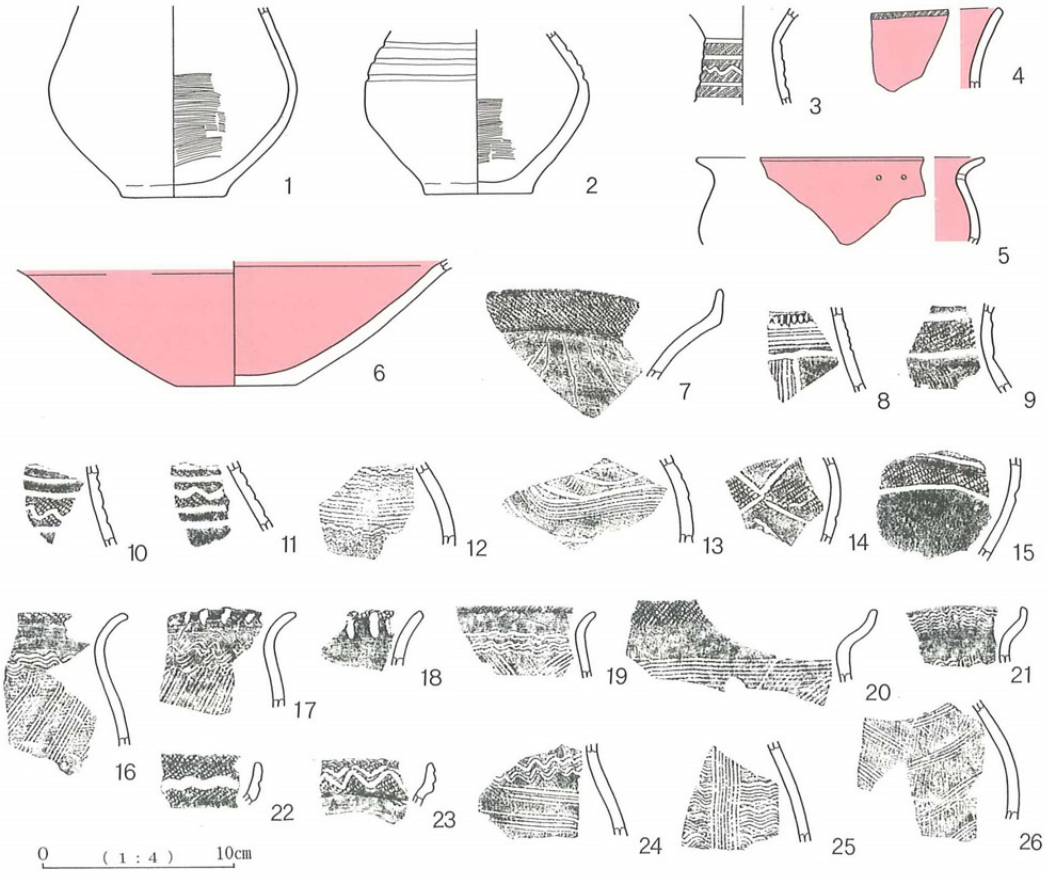
壺の頸部には縄文地に箆描横線文・山形文を施文するものが多い。胴部は無文の1、箆描横線文の2の他、縄文地に箆描文が施文される14・15がある。7は受口口縁の壺で口縁部に縄文が施される。甕は口縁部が短く外反するものと受口口縁のものがあり、口唇部は縄文・刻目文、頸部に櫛描横線文・波状文が巡る。胴部の文様には櫛描斜走文・波状文・垂下文がある。受口口縁の



第30図　第7号住居址実測図



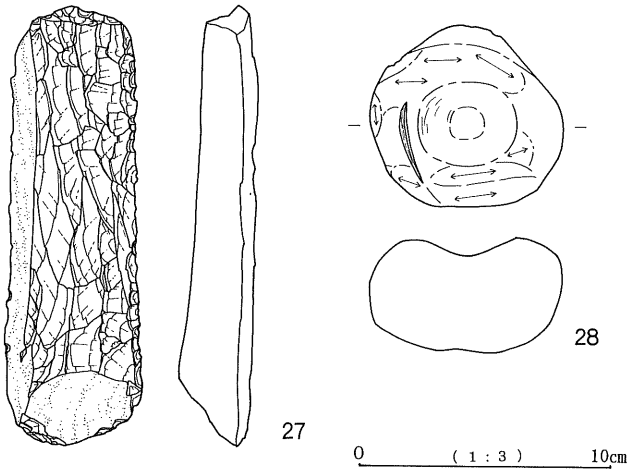
第31図　第7号住居址炉址実測図



第32図　第7号住居址出土遺物実測図〈1〉

口縁部には櫛描波状文、縄文地に箆描波状文・山形文の他縄文のみの20がある。鉢には口縁部が短く外反する５と椀状の体部から口縁部が屈曲して鍔状となる６とがある。いずれも内外面ともに赤色塗彩されるが、５は頸部に２孔一対と考えられる穿孔を有する。

石器には石斧の未製品（27）と軽石製の凹み石（28）がある。



第33図　第７号住居址出土遺物実測図〈2〉

第８表　第７号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
32－１	壺	－	〈10.1〉	(5.4)	摩滅不明	胴上半　ナデ 胴下半　ハケメ
32－２	壺	－	〈8.6〉	(5.7)	胴中位　箆描横線文 摩滅不明	ハケメ
32－３	壺	－	〈5.0〉	－	頸部　縄文地文→箆描横線文４・箆描山形文１	横ヘラミガキ
32－４	壺	－	〈4.2〉	－	口唇部　縄文 ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
32－５	鉢	(15.2)	〈4.6〉	－	頸部　穿孔２ ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
32－６	鉢	－	〈6.6〉	6.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

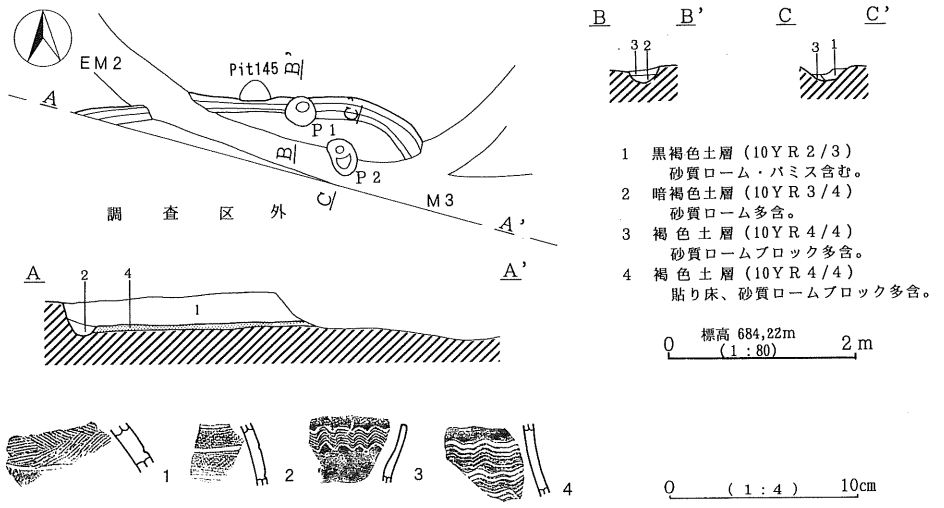
８）第８号住居址（第34図、図版八）

本住居址は調査区南西部、Ｅ－え・お－10グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第２号円形周溝墓、第３号溝状遺構、Pit145と重複関係にあり本址が最も古い。また、大半が調査区外のため北壁の一部がわずかに確認されたのみであり、規模・形態は不明である。確認面からの壁高は２～18cmを測る。壁溝は検出された北壁直下で認められた。

覆土は２層からなるが１層が主体を占め、２層は壁溝内にみられるのみである。床面は４層を埋め戻して貼り床としているが、調査範囲が壁際のみであるためか堅固な状態とは言い難い。

ピットは床面上から２個検出されたが、主柱穴はいずれも調査区外のため未調査である。深さはＰ１が30cm、Ｐ２が21cmを測る。

炉址は調査区外にあり今回の調査では確認されなかった。



第34図　第8号住居址・出土遺物実測図

本址は前述したように、北壁の一部がわずかに確認されたのみであるため遺物の出土量は少なく、拓影図4点が図示できたのみである。

壺には頸部に櫛描羽状文を箆描横線文で区画する1と胴部に縄文を地文として箆描文を施文する2がある。甕には口唇部に縄文、口縁部に櫛描波状文が施文される受口口縁の3と胴部に櫛描波状文がみられる4がある。

9）第9号住居址（第35～38図、図版八・九・三十六・三十七・四十七～四十九）

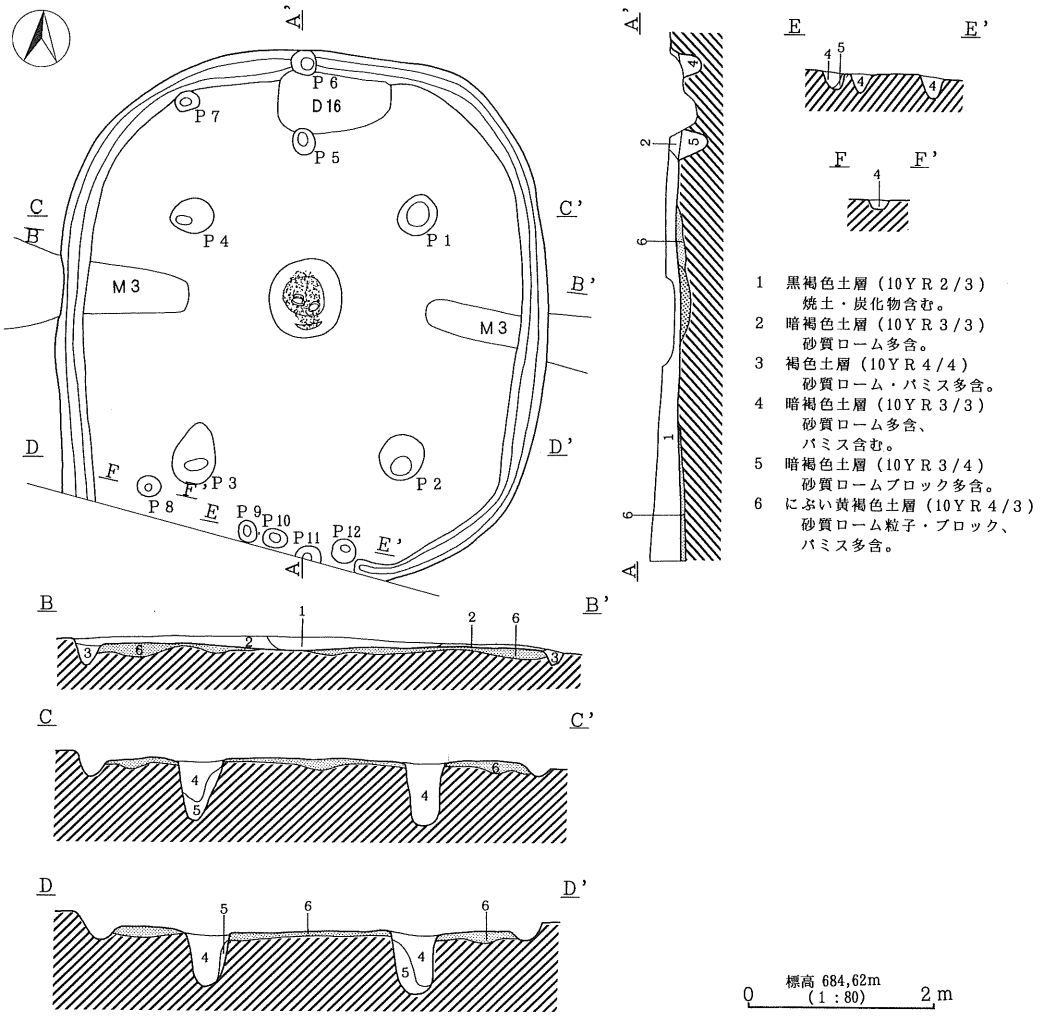
本住居址は調査区南西部、C－こ－10、D－こ－1、E－あ－10、F－あ－1グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。住居址中央を東西に第3号溝状遺構に切られる他、北壁下中央床面を第16号土坑に切られる。また、南壁部分は調査区外のため未調査である。

規模は東西5.20mを計測し、南北5.8m前後の南北にやや長い隅丸長方形を呈するものと思われる。確認面からの壁高は0～21cmを測る。壁溝は南壁部分について不明であるが、ほぼ全周するものと思われる。

覆土は3層からなるが1・2層が主体を占め、3層は壁溝内にみられるのみである。床面は6層を平坦に埋め戻して構築され、平坦で堅固な状態である。

ピットは床面上から12個検出された。P1～P4が主柱穴であり、50～66cmの深さを有する。P5は北壁下中央から検出され、深さ39cmを測り棟持柱と思われる。P6は北壁直下中央、P7は北西隅、P8～P12は住居址南側から検出された。

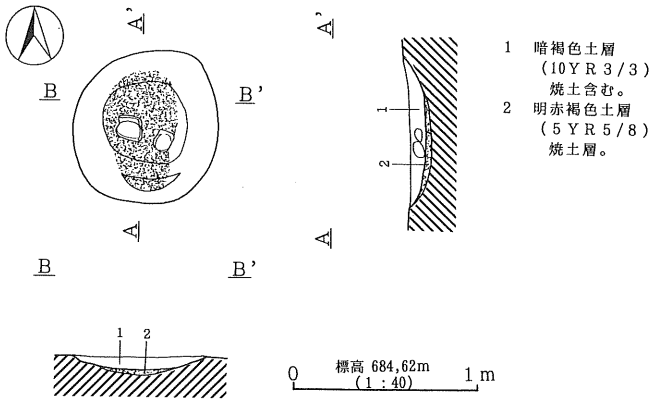
炉址は住居址の中央に位置し、南北82cm、東西77cmの円形を呈する。火床部中央から礫が3個出土しているが、地床炉と考えられる。



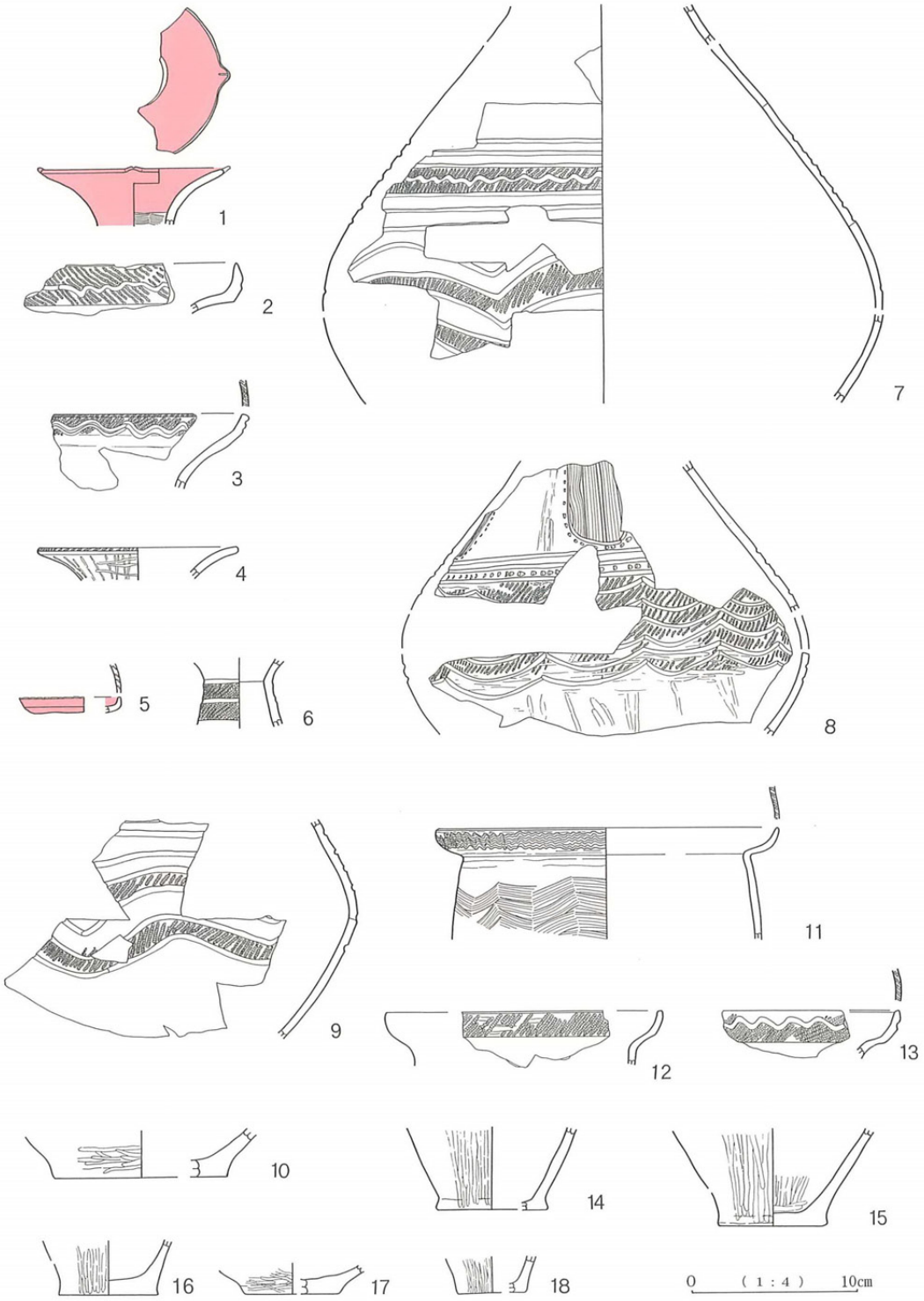
第35図　第9号住居址実測図

遺物は壺（1～10・24～40）・甕(11～18・41～48)・甑(19)・高坏（20）・鉢（21）・注口土器（22）の他、石器3点（49～51）を図示した。

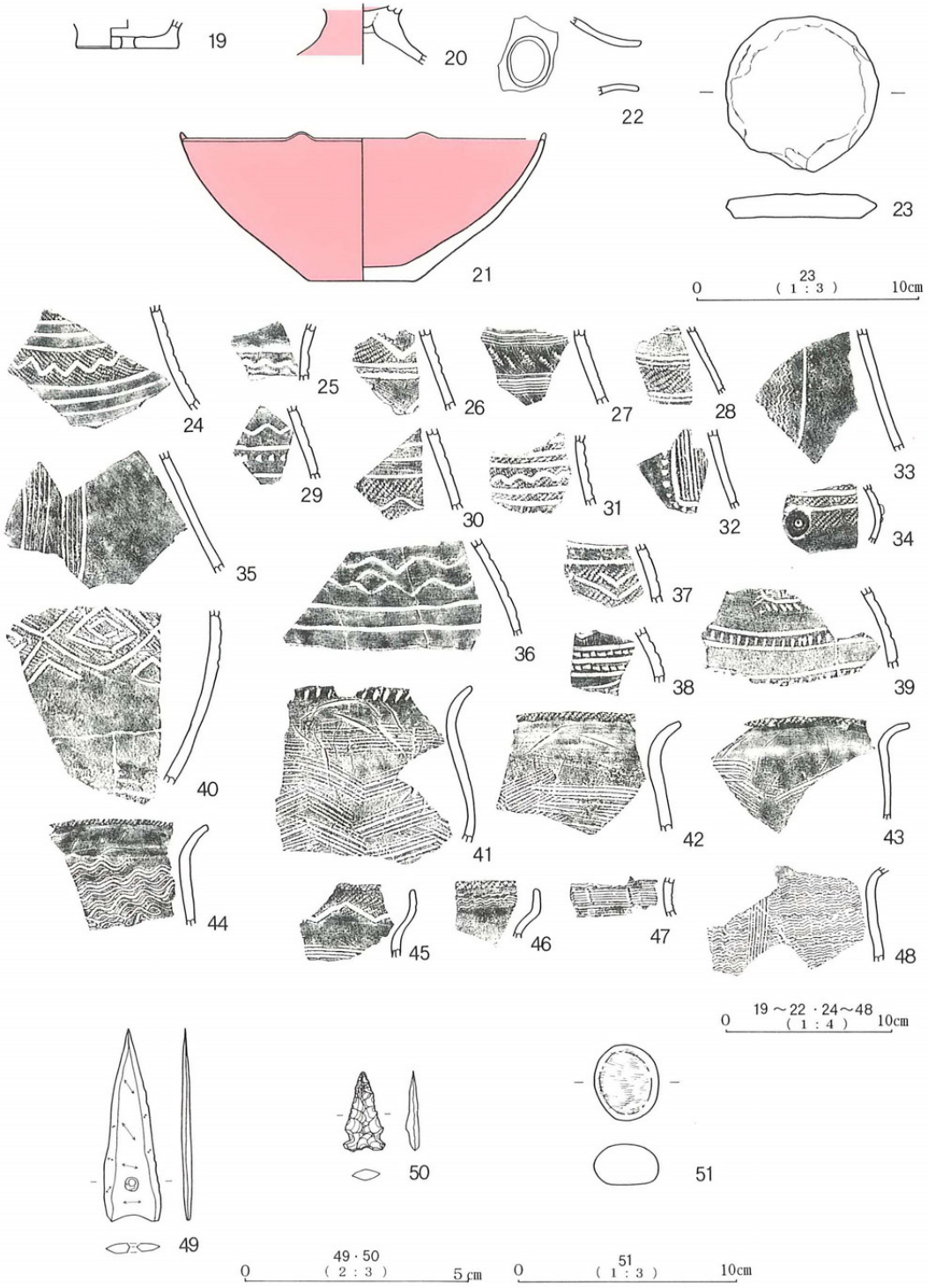
壺の文様は頸部に縄文を地文として箆描横線文・山形文を基調とする。胴部は上位に櫛描文を垂下させた後、箆描沈線で区画され、8・32はさらに刺突文



第36図　第9号住居址炉址実測図



第37図　第9号住居址出土遺物実測図〈1〉



第38図　第9号住居址出土遺物実測図〈2〉

第９表　第９号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
37－１	壺	(10.6)	〈3.5〉	－	口唇部　山形突起→突起内面刻目 ヘラミガキ、赤色塗彩	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩 頸部　ハケメ
37－２	壺	－	〈3.0〉	－	口縁部　縄文地文→篦描山形文１	横ヘラミガキ
37－３	壺	－	〈4.5〉	－	口唇部　縄文 口縁部　縄文地文→篦描波状文２	横ヘラミガキ
37－４	壺	(11.8)	〈2.0〉	－	口唇部　縄文 口縁部　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
37－５	壺	－	〈0.9〉	－	口唇部　刻目 ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
37－６	壺	－	〈4.0〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文	ナデ
37－７	壺	－	〈23.9〉	－	胴中位　篦描横線文６→区画内中央縄文→篦描波状文１ 篦描連弧文５→区画内縄文	ハケメ
37－８	壺	－	〈16.5〉	－	胴上位　櫛描垂下文→篦描沈線区画→篦描刺突文 胴中位　篦描横線文3→篦描刺突文、縄文地文→篦描連弧文6	ハケメ、剥離
37－９	壺	－	〈13.2〉	－	胴中位　篦描横線文、篦描連弧文５→区画内縄文	ハケメ
37－10	壺	－	〈2.8〉	(10.4)	横ヘラミガキ	ハケメ
37－11	甕	(20.4)	〈6.7〉	－	口唇部　縄文、口縁部　櫛描波状文 胴部　櫛描縦羽状文（上→下・右回り）	横ヘラミガキ
37－12	甕	(16.6)	〈3.3〉	－	口縁部 縄文	横ヘラミガキ
37－13	甕	－	〈2.8〉	－	口唇部　縄文 口縁部　縄文地文→篦描山形文１	横ヘラミガキ
37－14	甕	－	〈5.0〉	(6.6)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
37－15	甕	－	〈5.9〉	6.7	縦ヘラミガキ	縦・横ヘラミガキ
37－16	甕	－	〈3.3〉	5.8	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
37－17	甕	－	〈1.7〉	(5.6)	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ
37－18	甕	－	〈2.2〉	(4.2)	縦ヘラミガキ	ナデ
38－19	甑	－	〈1.7〉	(6.2)	底部　穿孔１ 縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
38－20	高坏	－	〈3.6〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部 ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部 ナデ、横ヘラミガキ、赤色顔料付着
38－21	鉢	(21.8)	9.0	6.4	口唇部　山形突起６（残存２） ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
38－22	注口土器	－	〈4.6〉	－	ナデ	ナデ

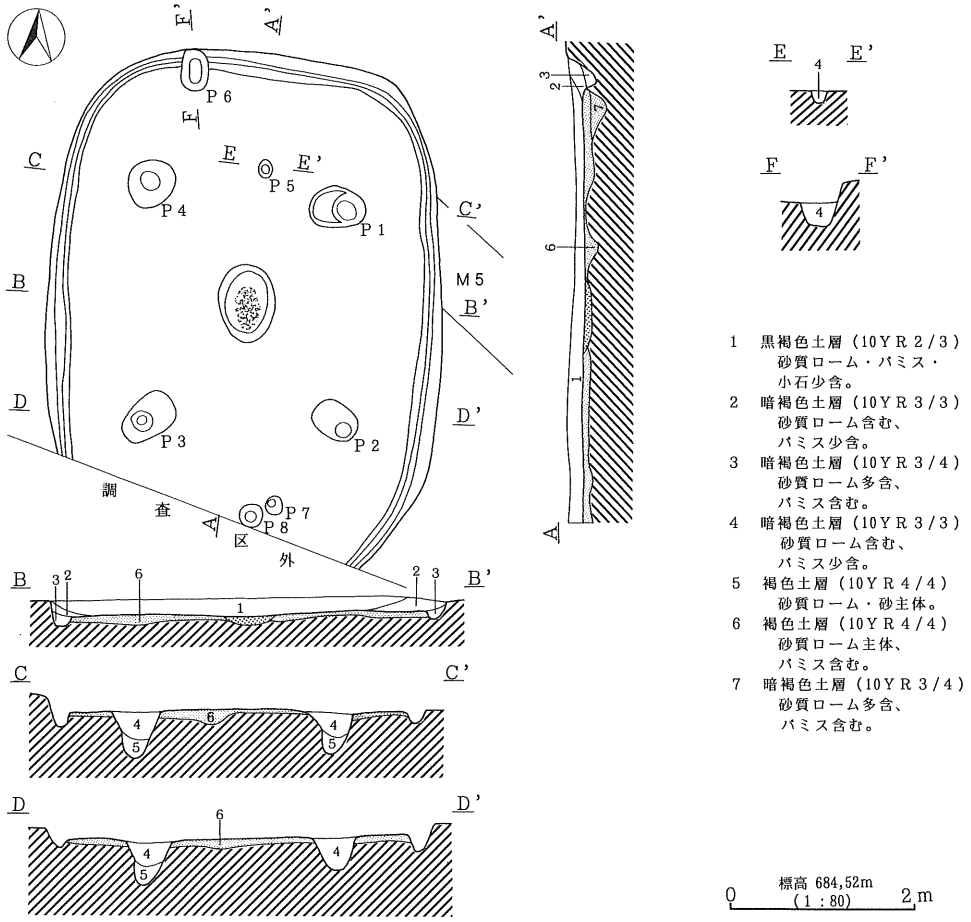
が周囲に巡る。中位は縄文地に篦描横線文・波状文・連弧文・刺突文が施文される。受口口縁の２・３は縄文地に篦描文が加えられるが、２は受口部に明瞭な外稜を有するのに対し、３は外稜が消失し丸味を帯びる。１は赤色塗彩され、突起内面に刻目が施される。

甕は口縁部が短く外反するもの（41～44）と受口口縁のもの（11～13・45・46）があり、口唇部に縄文・刻目文、口縁部に縄文・箆描山形文・櫛描波状文、胴部に櫛描羽状文・波状文・垂下文が施文される。鉢（21）は内外面に赤色塗彩され、口唇部に６カ所突起が貼り付けされる。23は壺の底部片を利用した土製円板である。

石器には緑色のチャート製の磨製石鏃（49）、黒曜石製の打製石鏃（50）、硬質砂岩製の擦り石（51）がある。

10）第10号住居址（第39～41図、図版九・四十八）

本住居址は調査区中央南側、Ｄ－く・け－１・２グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第５号溝状遺構と重複関係にあり、東壁の一部を切られる。また、南壁部分は調査区外のため未調査である。

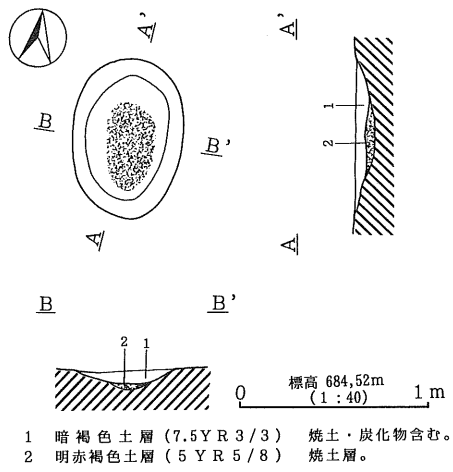


第39図　第10号住居址実測図

規模は東西4.18mを計測し、南北5.6m前後の隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は１～23cmを測る。壁溝は南壁部分は未調査であるが全周するものと思われる。

覆土は３層からなるが１層が主体を占める。床面は６・７層を平坦に埋め戻して構築され、平坦で堅固な状態である。

ピットは床面上から８個検出された。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であり、44～51cmの深さを有する。Ｐ５はＰ１・Ｐ２間の北側から検出され、深さ14cmを測り棟持柱と思われる。



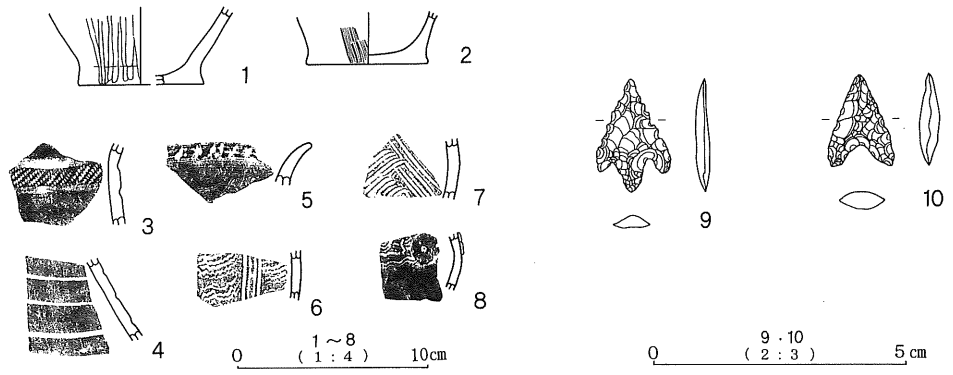
第40図　第10号住居址炉址実測図

炉址は住居址中央に位置し、南北82cm、東西58cmの楕円形を呈する地床炉である。

本址からの遺物の出土量は少なく、壺（３・４）・甕（１・２・５～８）の他、石器２点（９・10）を図示できたのみである。

壺の頸部には縄文地に箆描横線文の３、箆描横線文のみの４がある。甕の文様には櫛描波状文＋垂下文（６）・羽状文（７）があり、８には円形浮文が貼り付けされる。

石器には黒曜石製の石鏃（９・10）がある。

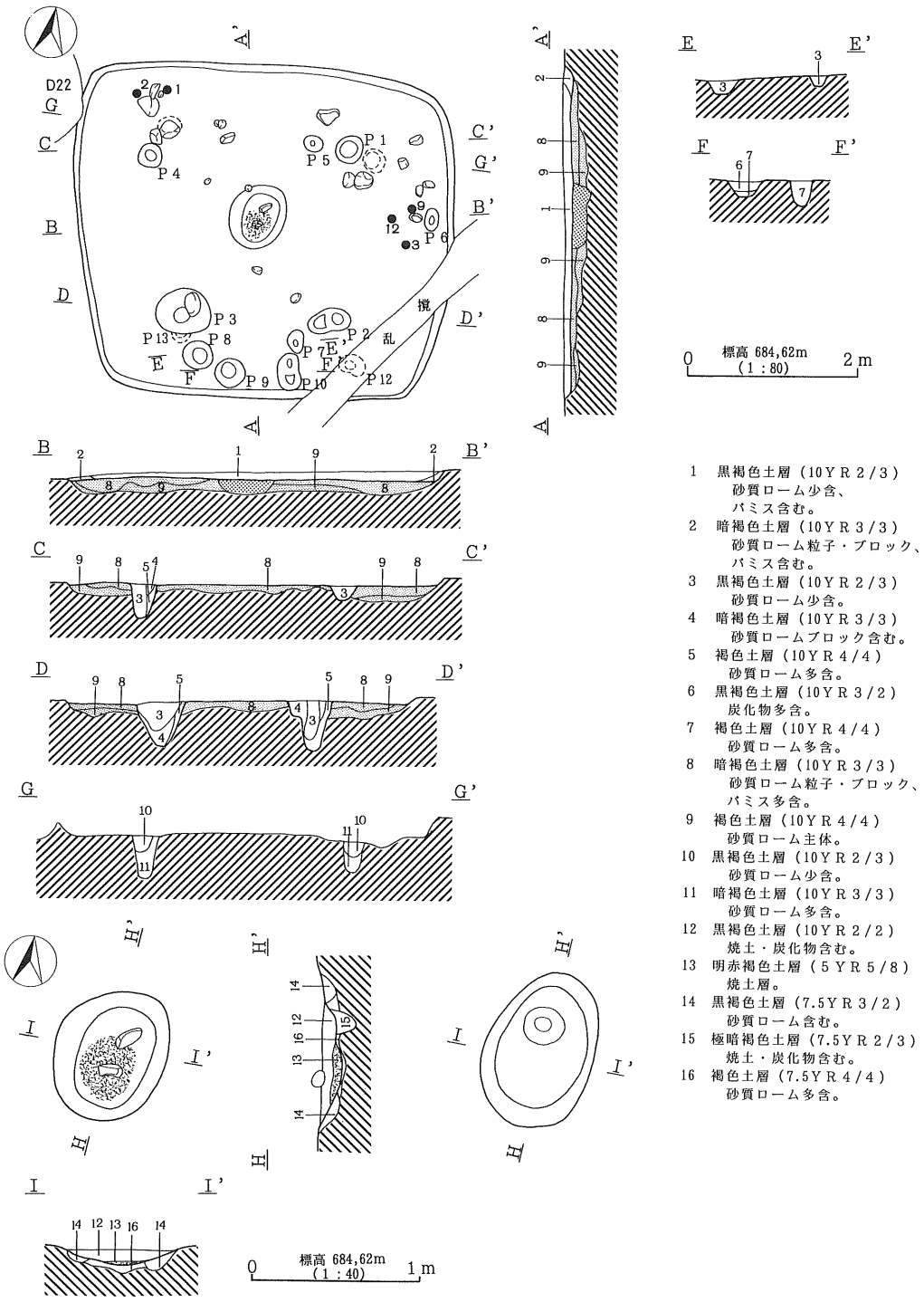


第41図　第10号住居址出土遺物実測図

第10表　第10号住居址出土土器観察表

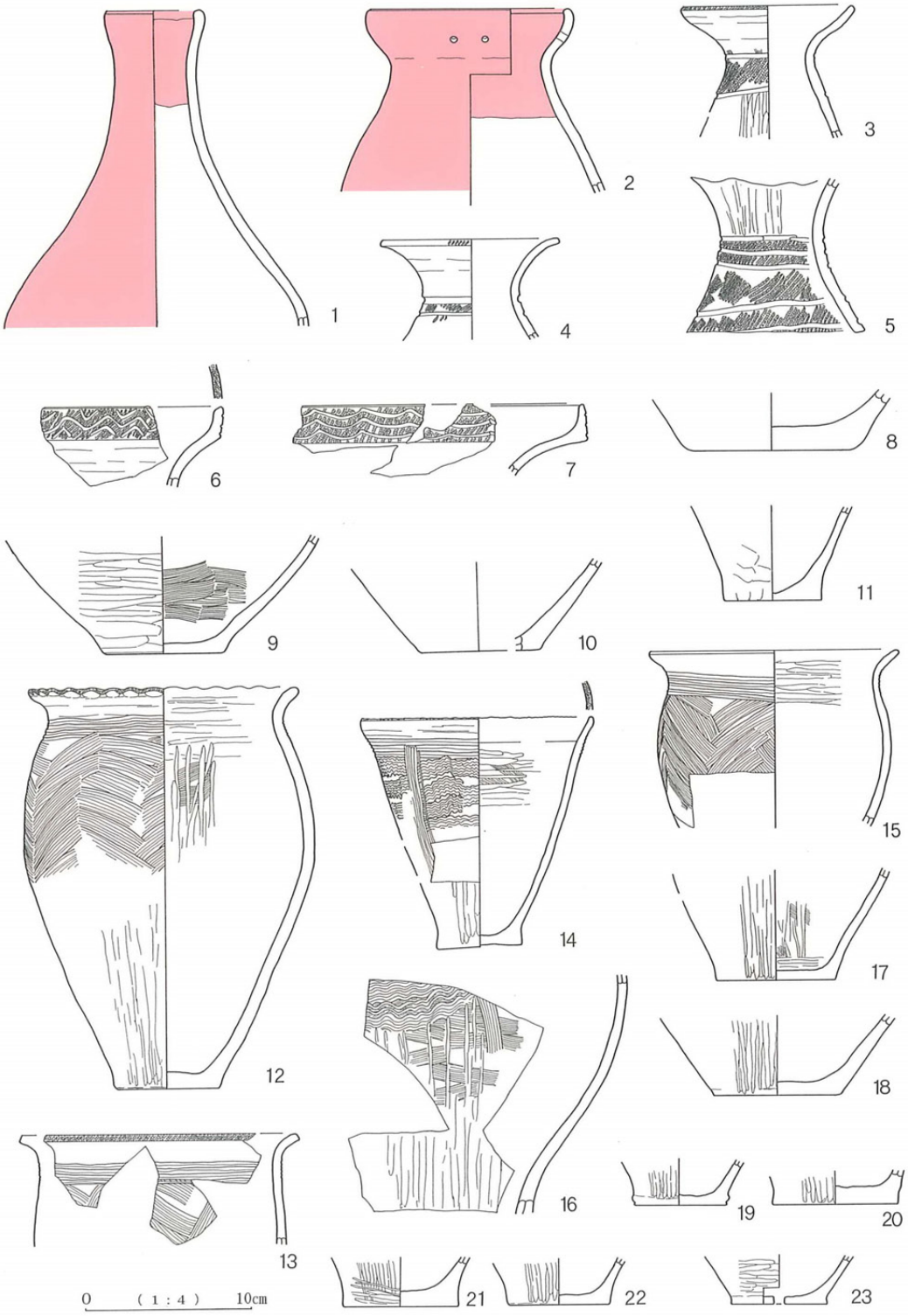
挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
41－1	甕	－	〈4.1〉	(6.6)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
41－2	甕	－	〈2.7〉	(6.4)	ハケメ、縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ

11）第11号住居址（第42～44図、図版十・十一・三十七）



1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　　砂質ローム少含、
　　パミス含む。
2　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　砂質ローム粒子・ブロック、
　　パミス含む。
3　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　　砂質ローム少含。
4　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　砂質ロームブロック含む。
5　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　　砂質ローム多含。
6　黒褐色土層（10ＹＲ３/２）
　　炭化物多含。
7　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　　砂質ローム多含。
8　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　砂質ローム粒子・ブロック、
　　パミス多含。
9　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　　砂質ローム主体。
10　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　　砂質ローム少含。
11　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　砂質ローム多含。
12　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
　　焼土・炭化物含む。
13　明赤褐色土層（５ＹＲ５/８）
　　焼土層。
14　黒褐色土層（7.5ＹＲ３/２）
　　砂質ローム含む。
15　極暗褐色土層（7.5ＹＲ２/３）
　　焼土・炭化物含む。
16　褐色土層（7.5ＹＲ４/４）
　　砂質ローム多含。

第42図　第11号住居址実測図



第43図　第11号住居址出土遺物実測図〈1〉

本住居址は調査区中央付近、Ｃ－く・け－９・10グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第22号土坑と重複関係にあり西壁北側を切られる。また、撹乱により南東部分を破壊される。

規模は南北3.92ｍ、東西4.50ｍの東西にやや長い隅丸長方形を呈し、床面積は14.7㎡を測る小型の住居址である。確認面からの壁高は１～19cmを測り、長軸方位はＮ－80°－Ｅを示す。壁溝は検出されなかった。

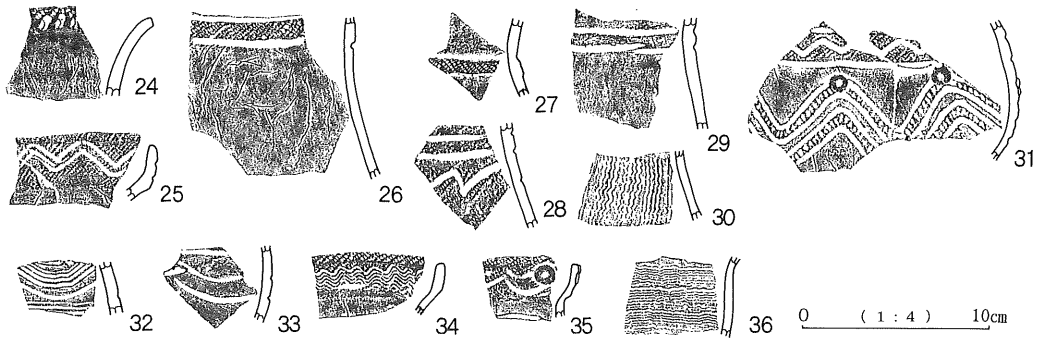
覆土は２層からなるが１層が主体を占める。床面は８・９層を埋め戻して構築され平坦で堅固な状態である。

ピットは床面上から10個検出された。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であるが、整然とした配置とは言い難い。深さはＰ１が20cmと浅いものの、Ｐ２～Ｐ４は40～56cmの深さを有する。Ｐ５はＰ１西側、Ｐ６は東壁下中央、Ｐ７～Ｐ10は南壁下中央から検出された。また、Ｐ１～Ｐ４に隣接して古い柱穴（Ｐ11～Ｐ14）が床下から検出され、柱の建て替えが行われたものと考えられる。深さは南側のＰ12・Ｐ13が９cm・13cmと浅いものの、北側のＰ11・Ｐ14は35cm・51cmの深さを有する。

炉址は住居址の中央やや北寄りに位置する。南北94cm、東西67cmの楕円形の掘り方に３・４・５層を埋め戻して設けられた地床炉である。規模は南北80cm、東西67cmを測る。

遺物は壺（１～11・24～33）・甕（12～22・34～36）・甑（23）を図示した。

壺の文様は頸部に縄文地に箆描横線文を基調とする。胴部は上位に櫛描波状文を垂下させる30があり、中位には縄文・箆描文が施文され、31には円形浮文が貼り付けされる。１・２は赤色塗彩され、２は口縁部に２孔一対の穿孔がみられる。受口口縁の６・７は縄文地に箆描の重山形文・連弧文が施文される。甕には口縁部が短く外反する12・13・15と深鉢状の14がある。口唇部は縄文のみの13・14の他、縄文に指頭圧痕が加えられる12がある。文様構成は頸部に櫛描横線文が巡り、胴部には櫛描羽状文の12・13・15、櫛描波状文＋垂下文の14がある。また12・14は頸部櫛描横線文→胴部羽状文、波状文・垂下文であるのに対し、13・15は胴部羽状文→頸部櫛描横線文であり施文順序が異なる。



第44図　第11号住居址出土遺物実測図〈2〉

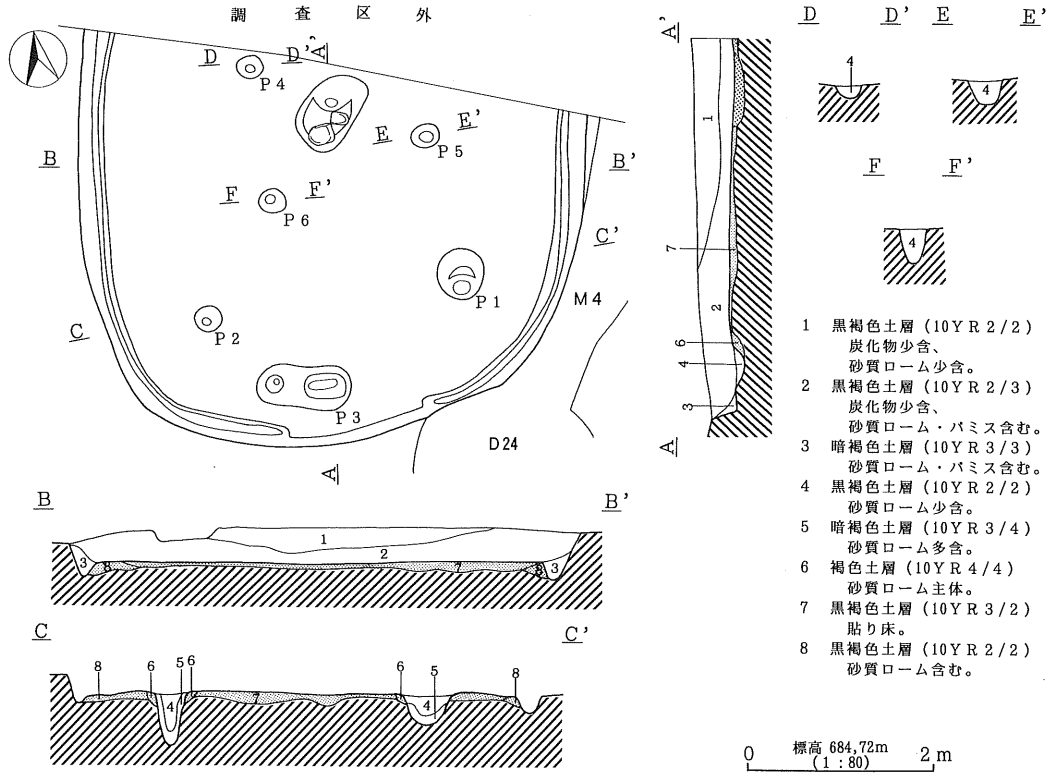
受口口縁の甕には34・35があり、口縁部は34が櫛描波状文、35が縄文＋箆描連弧文で、35には円形浮文が貼り付けされる。

第11表　第11号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
43－1	壺	5.6	〈19.2〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部　ナデ
43－2	壺	12.0	〈11.2〉	－	口縁部　2孔一対の穿孔 ヘラミガキ、赤色塗彩	口縁部～頸部 ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部 横ヘラミガキ、赤色顔料付着、剥離
43－3	壺	10.2	〈8.1〉	－	口唇部 縄文 頸部　縄文地文→箆描横線文2	口縁部　横ヘラミガキ
43－4	壺	(10.6)	〈6.1〉	－	口唇部　縄文 頸部 縄文地文→箆描横線文2	口縁部　横ヘラミガキ
43－5	壺	－	〈9.5〉	－	縄文地文→箆描横線文	横ヘラミガキ、ナデ
43－6	壺	－	〈4.8〉	－	口唇部 縄文 口縁部　縄文地文→箆描重山形文	横ヘラミガキ
43－7	壺	－	〈4.3〉	－	口縁部 縄文地文→箆描連弧文3	横ヘラミガキ
43－8	壺	－	〈3.7〉	(10.6)	ヘラミガキ、摩滅	ハケメ、摩滅
43－9	壺	－	〈7.0〉	7.4	横ヘラミガキ、	ハケメ
43－10	壺	－	〈5.3〉	(7.5)	摩滅不明	ハケメ、摩滅
43－11	壺	－	〈5.7〉	6.0	ナデ	ナデ
43－12	甕	16.0	24.3	6.4	口唇部　縄文・指頭圧痕 頸部　櫛描横線文→胴上半　櫛描縦羽状文(上→下・右回り)	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ハケメ→縦ヘラミガキ
43－13	甕	(16.6)	〈6.7〉	－	口唇部　縄文 胴部　櫛描縦羽状文→頸部　櫛描横線文	横ヘラミガキ
43－14	甕	14.0	14.1	5.1	口唇部 縄文 頸部 櫛描横線文→胴上半 櫛描波状文→櫛描垂下文4、剥離	横ヘラミガキ
43－15	甕	(15.0)	〈10.7〉	－	胴上半　櫛描縦羽状文（上→下・右回り）→ 頸部　櫛描横線文	横ヘラミガキ
43－16	甕	－	〈14.4〉	－	胴上半　櫛描波状状文・櫛描垂下文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ、摩滅
43－17	甕	－	〈6.7〉	7.2	縦ヘラミガキ	縦・横ヘラミガキ
43－18	甕	－	〈4.9〉	(7.7)	縦ヘラミガキ	摩滅不明
43－19	甕	－	〈2.8〉	5.7	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
43－20	甕	－	〈2.0〉	7.6	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
43－21	甕	－	〈3.0〉	(7.0)	縦・横ヘラミガキ	横ヘラミガキ
43－22	甕	－	〈2.8〉	6.2	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
43－23	甑	－	〈3.0〉	(5.8)	底部 穿孔1　横ヘラミガキ	横ヘラミガキ

12）第12号住居址（第45～48図、図版十・十一・三十七・四十七～四十九）

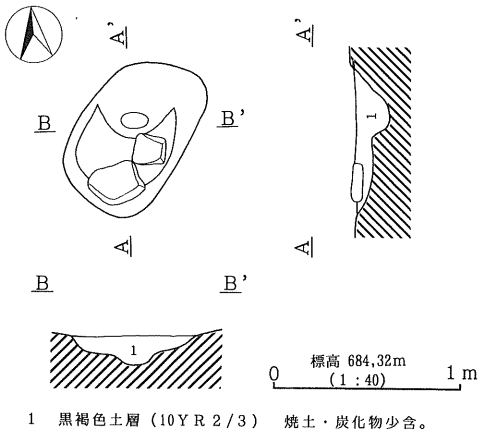
本住居址は調査区中央北側、C－か・き－8・9グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第24号土坑・第4号溝状遺構と重複関係にあり本址が最も古い。また、北半部は調査区外のため未調査である。



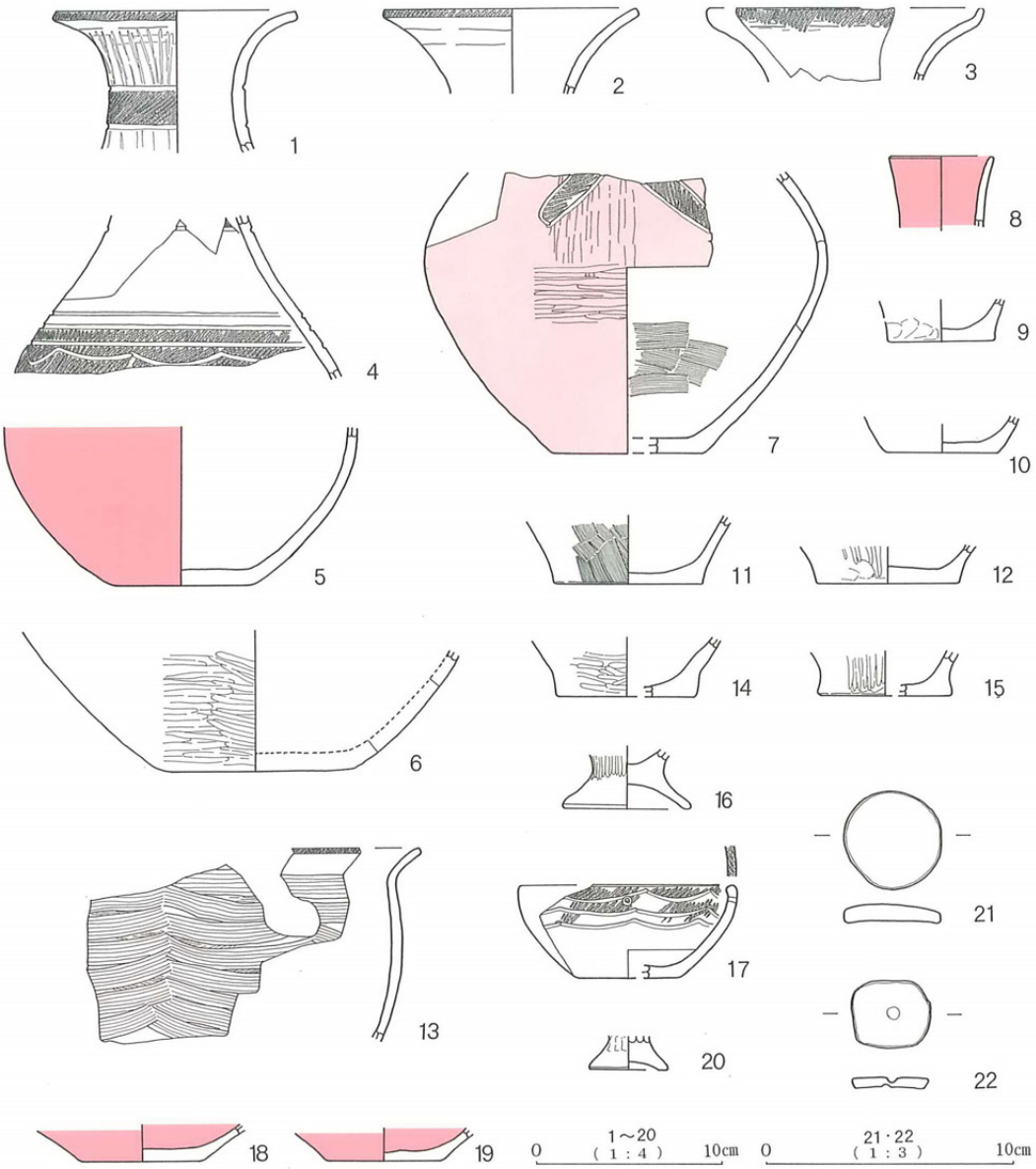
第45図　第12号住居址実測図

規模は東西5.38mを計測し、南北7m前後の隅丸長方形を呈するものと思われる。確認面からの壁高は9～34cmを測る。壁溝は南壁中央で一旦断絶するもののほぼ全周するものと思われる。

覆土は3層からなるが3層は壁溝内にみられるのみである。床面は壁際に8層を埋め戻した後、7層を敷設して貼り床としており平坦で堅固な状態である。



第46図　第12号住居址炉址実測図

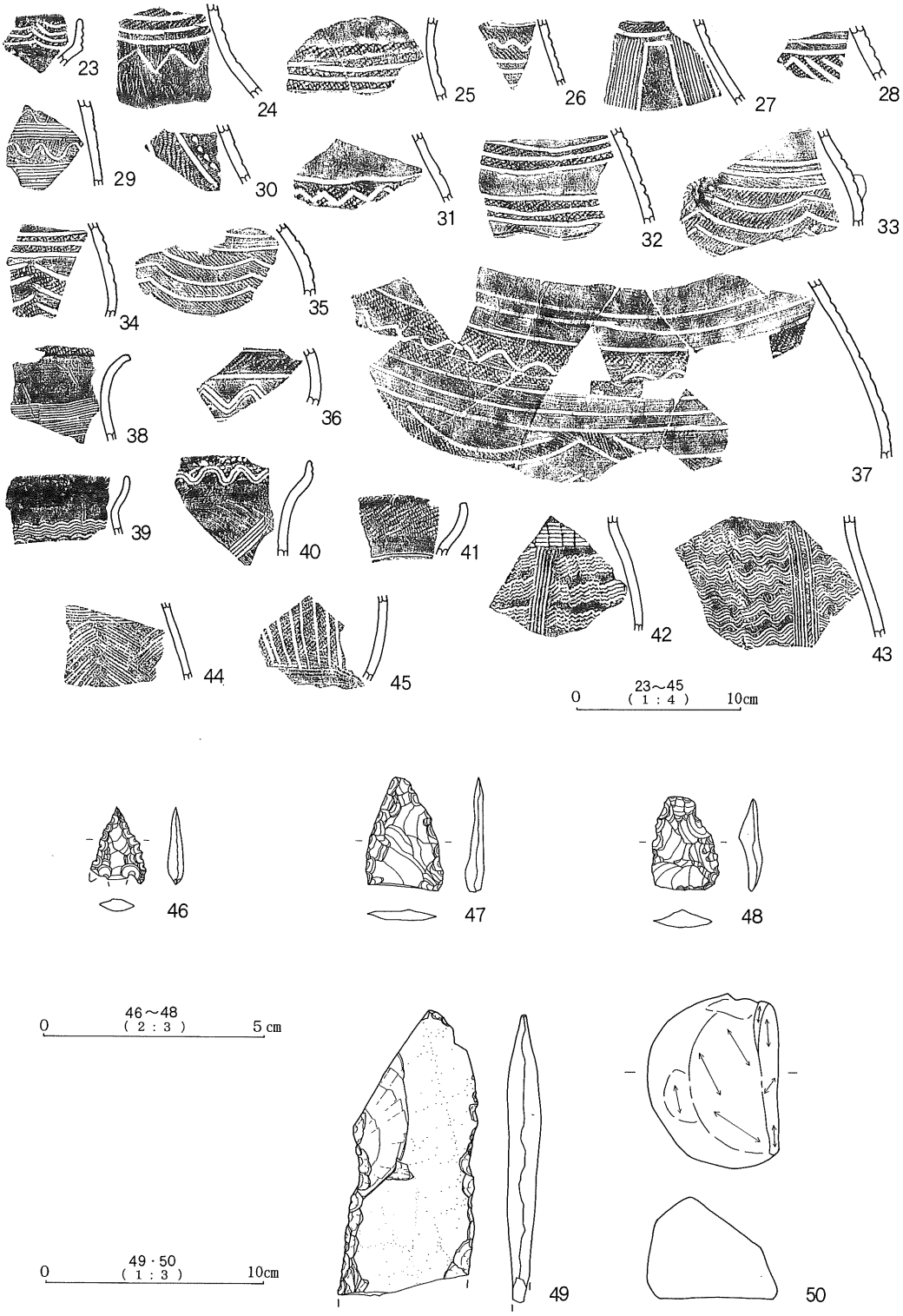


第47図　第12号住居址出土遺物実測図〈1〉

ピットは床面上から6個検出された。P1・P2が南側に配される主柱穴であり、深さは61cm・42cmを測る。北側の主柱穴は調査区外のため未調査である。P3は南壁下中央から検出され、入口施設に関するものと思われる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置すると思われ、88×58cmの楕円形を呈する地床炉である。

遺物は壺（1～12・23～37）・甕（13～16・38～45）・鉢（17～19）・手捏（20）の他、土製品2点（21・22）、石器5点（46～50）を図示した。



第48図　第12号住居址出土遺物実測図〈2〉

第12表　第12号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
47－1	壺	(12.8)	〈7.6〉	－	口唇部　縄文 頸部　篦描横線文2→区画内縄文	横ヘラミガキ
47－2	壺	(13.6)	〈4.5〉	－	口唇部　縄文	横ヘラミガキ、摩滅
47－3	壺	(15.0)	〈3.9〉	－	口縁部　縄文	横ヘラミガキ
47－4	壺	－	〈8.8〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文 胴部　縄文地文→篦描横線文3・篦描連弧文	ナデ
47－5	壺	－	〈8.5〉	(8.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケメ、摩滅
47－6	壺	－	〈7.6〉	10.6	横ヘラミガキ	剥離不明
47－7	壺	－	〈15.1〉	(8.4)	胴上半　縄文地文→篦描沈線区画 縦・横ヘラミガキ、淡い赤色塗彩	ハケメ
47－8	壺	(5.4)	〈3.8〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
47－9	壺	－	〈2.2〉	5.8	ナデ	ナデ
47－10	壺	－	〈2.0〉	(6.0)	横ヘラミガキ	ナデ
47－11	壺	－	〈3.7〉	(8.0)	ハケメ	ナデ
47－12	壺	－	〈2.1〉	(7.6)	縦ヘラミガキ	ナデ
47－13	甕	－	〈10.4〉	－	口唇部　縄文 頸部　櫛描横線文→櫛描縦羽状文（上→下・右回り）	横ヘラミガキ
47－14	甕	－	〈3.2〉	(7.4)	横ヘラミガキ、赤色顔料付着	横ヘラミガキ
47－15	甕	－	〈2.4〉	(7.3)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
47－16	台付甕	－	〈3.2〉	6.8	縦ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ、ナデ
47－17	鉢	(11.6)	5.0	(5.9)	口唇部　縄文 体部　穿孔1、縄文地文→篦描連弧文3	横ヘラミガキ
47－18	鉢	－	〈2.0〉	(6.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
47－19	鉢	－	〈1.8〉	(6.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
47－20	手捏	－	〈1.8〉	(4.2)	小型品 ナデ	ナデ

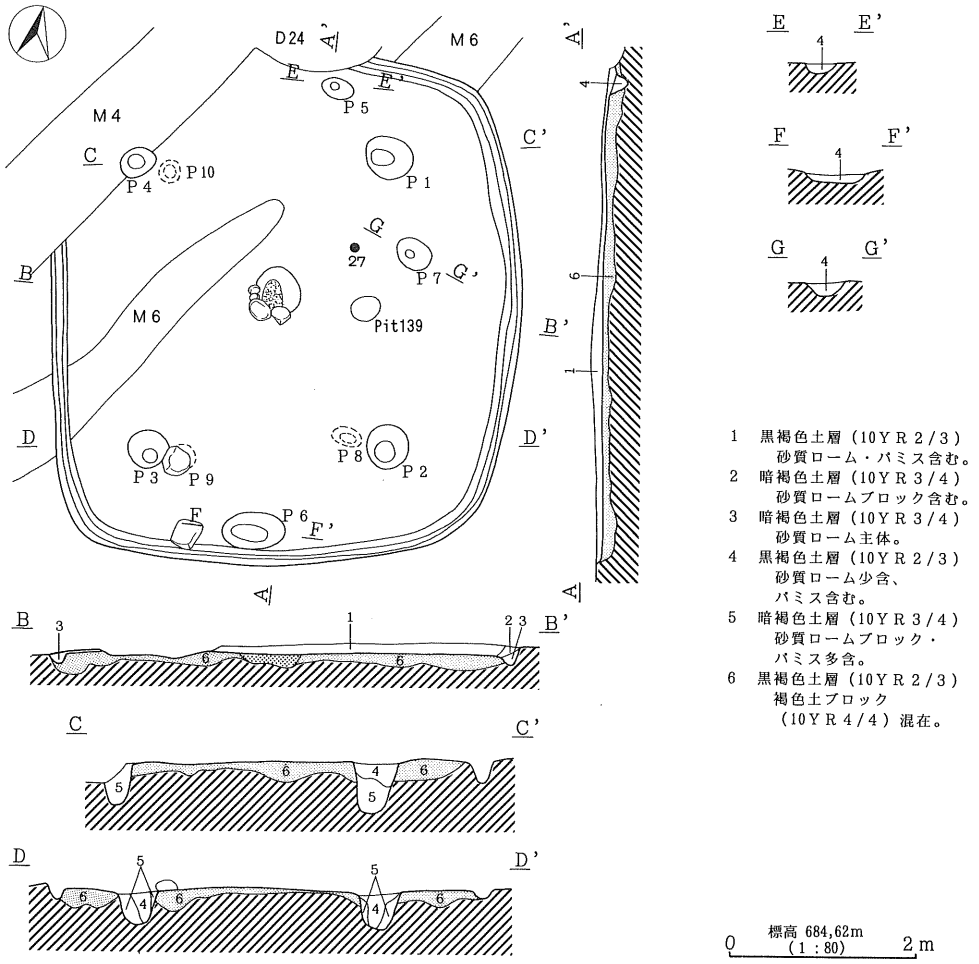
壺は口唇部に縄文、頸部には縄文と篦描文が施文されるが、1は2条の篦描沈線間に縄文が充填される。胴部は縄文地に篦描横線文・連弧文の4、縄文を篦描沈線で区画する7がある。甕は頸部に櫛描横線文、胴部に櫛描羽状文の13の他に、櫛描波状文＋垂下文の42・43がある。また、45は縄文地にコの字重ね文の台付甕であろう。鉢には赤色塗彩される18・19と口唇部に縄文、体部には縄文地に篦描連弧文が施文される17がある。21・22は甕の胴部片を利用した土製円板で、22は両側からの穿孔途中である。

46～48は石鏃で46は黒曜石製、47・48は灰色のチャート製で成形段階での未製品である。49は輝石安山岩製の打製石斧で、50は軽石製で加工痕がみられるが用途は不明である。

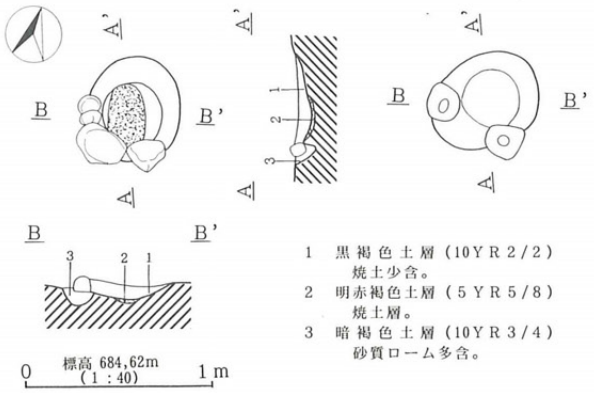
13）第13号住居址（第49～52図、図版十一・四十七～四十九）

本住居址は調査区中央付近、C－か・き－9・10、D－か・き－1グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第24号土坑・第4号溝状遺構・第6号溝状遺構・Pit139と重複関係にあり本址が最も古い。

規模は東西4.98mを計測し、南北5.4m前後の隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は1～18cmを測る。壁溝は全周するものと思われる。



第49図　第13号住居址実測図



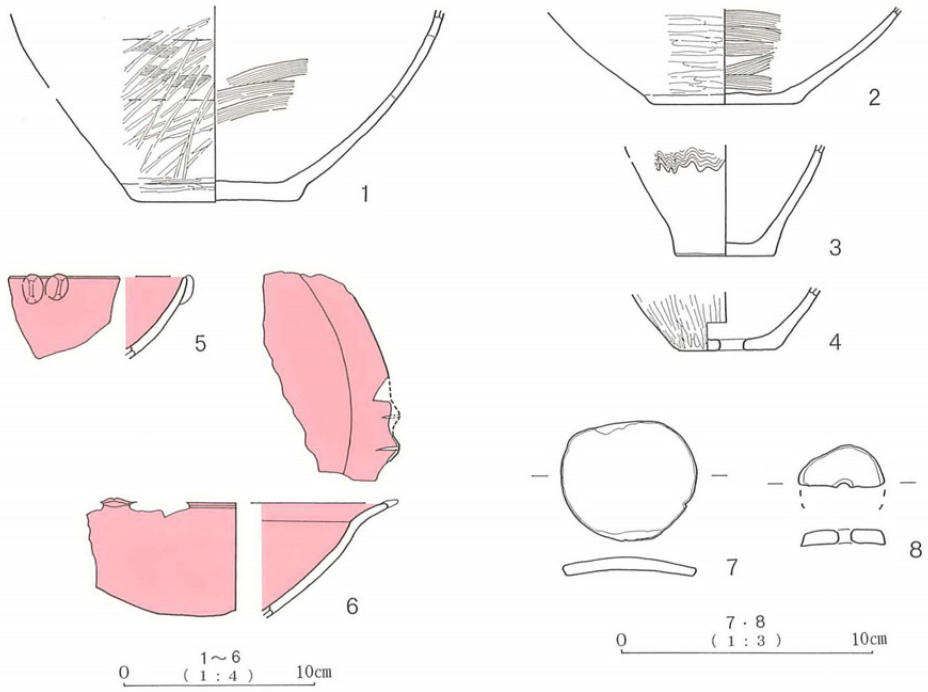
第50図　第13号住居址炉址実測図

覆土は3層からなるが3層は壁溝内にみられるのみである。床面は6層を平坦に埋め戻して構築され堅固な状態である。

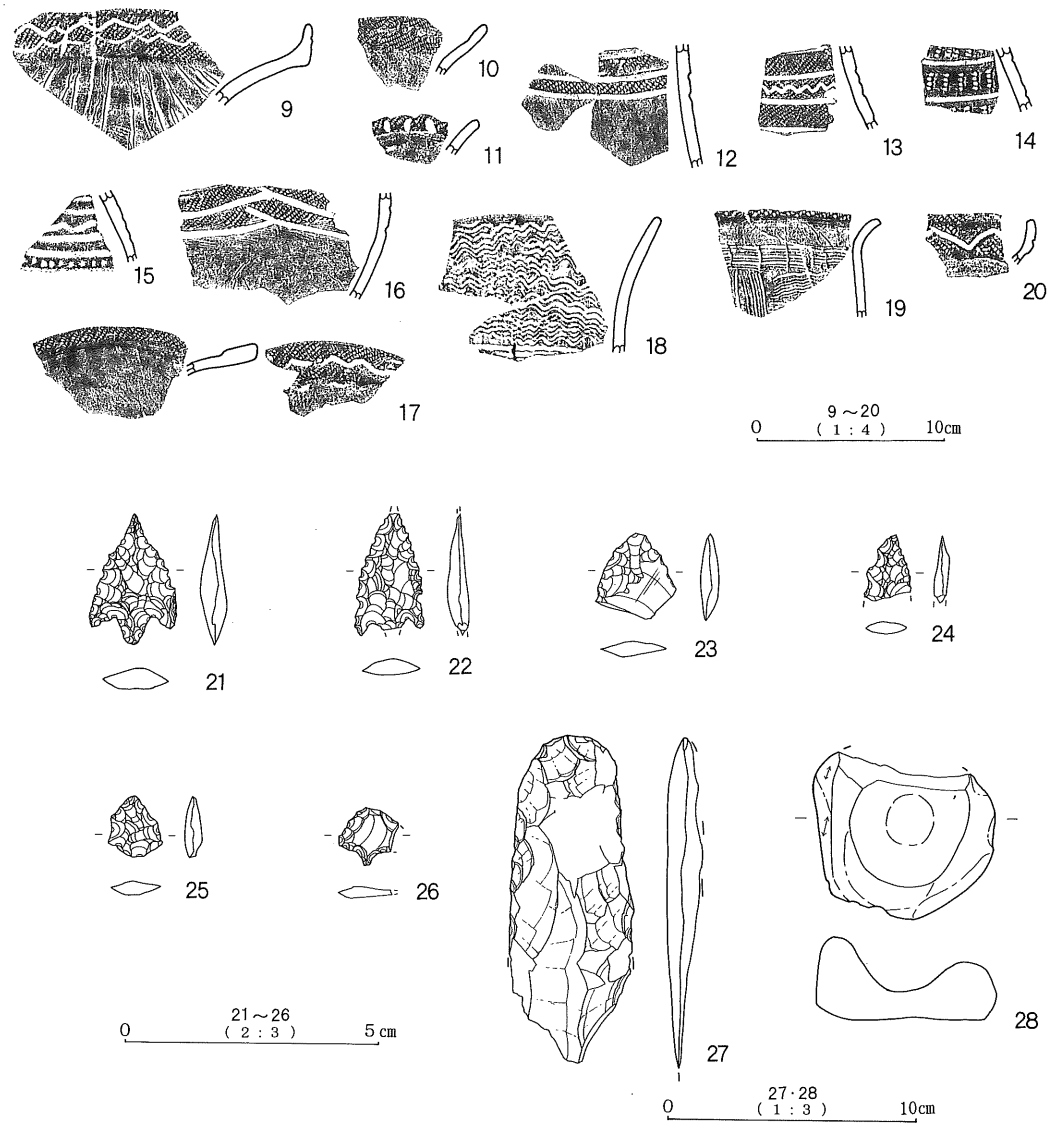
ピットは床面上から7個検出された。P1～P4が主柱穴であり整然と配される。深さは41～51cmを測る。P5は北壁下、P6は南壁下中央西寄り、P7はP1・P2間北寄りから検出された。また、P2～P4の内側に隣接して古い柱穴（P8～P10）が床下から検出され、柱の建て替えが行われたものと考えられる。

炉址は住居址の中央に位置し、南北56cm、東西48cmの楕円形を呈する。火床部の南側・西側に2個の礫を設置して炉縁石としている。

遺物は壺（1・2・9～17）・甕（3・18～20）・甑（4）・鉢（5）・高坏（6）の他、土製品2点（7・8）、石器8点（21～28）を図示した。



第51図　第13号住居址出土遺物実測図〈1〉



第52図　第13号住居址出土遺物実測図〈2〉

壺は口唇部に縄文が施され、11には刻目が加えられる。頸部は縄文地に箆描文の12・13と箆描沈線間に刺突文を施文する14がある。17は口唇部に縄文、口縁部内面には縄文地に箆描山形文が施文される。

甕は胴部に櫛描波状文が施文される３の他、頸部に簾状文、胴部に櫛描波状文と垂下文の19、受口口縁の20がある。５は口縁部に突起が貼り付けされ、内外面ともに赤色塗彩される。椀状の鉢であろう。６は高坏の坏部と思われ、口唇部の突起内面に刻目が施される。７は壺の胴部片、８は甕の胴部片を利用した土製円板であり、８は中央に穿孔される。

第13表　第13号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
51－1	壺	－	〈10.1〉	8.8	ハケメ→粗い斜ヘラミガキ	ハケメ
51－2	壺	－	〈5.1〉	(8.0)	横ヘラミガキ	ハケメ、剥離
51－3	甕	－	〈5.9〉	5.4	胴上半　櫛描波状文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
51－4	甑	－	〈3.2〉	5.2	底部　穿孔1 縦ヘラミガキ	斜ヘラミガキ
51－5	鉢	－	〈4.3〉	－	口縁部　突起2 ヘラミガキ、赤色塗彩、剥離	ヘラミガキ、赤色塗彩、剥離
51－6	高坏	－	〈6.3〉	－	口唇部　山形突起→突起内面刻目 ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

石鏃は6点を図示した。いずれも黒曜石製で23～26は未製品である。27は輝石安山岩製の打製石斧、28は軽石製の凹み石である。

14）第14号住居址（第53～55図、図版十二・三十八・四十七～四十九）

本住居址は調査区中央付近北側、C－え・お－9・10グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第27号土坑と重複関係にあり、南東隅を切られる。また、北東隅が調査区外であり未調査である。

規模は南北5.28m、東西4.98mの南北にやや長い隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は4～25cmを測る。壁溝は全周するものと思われる。

覆土は2層からなるが1層が主体を占め、2層は壁溝内にみられるのみである。床面は5層を平坦に埋め戻して構築され堅固な状態である。

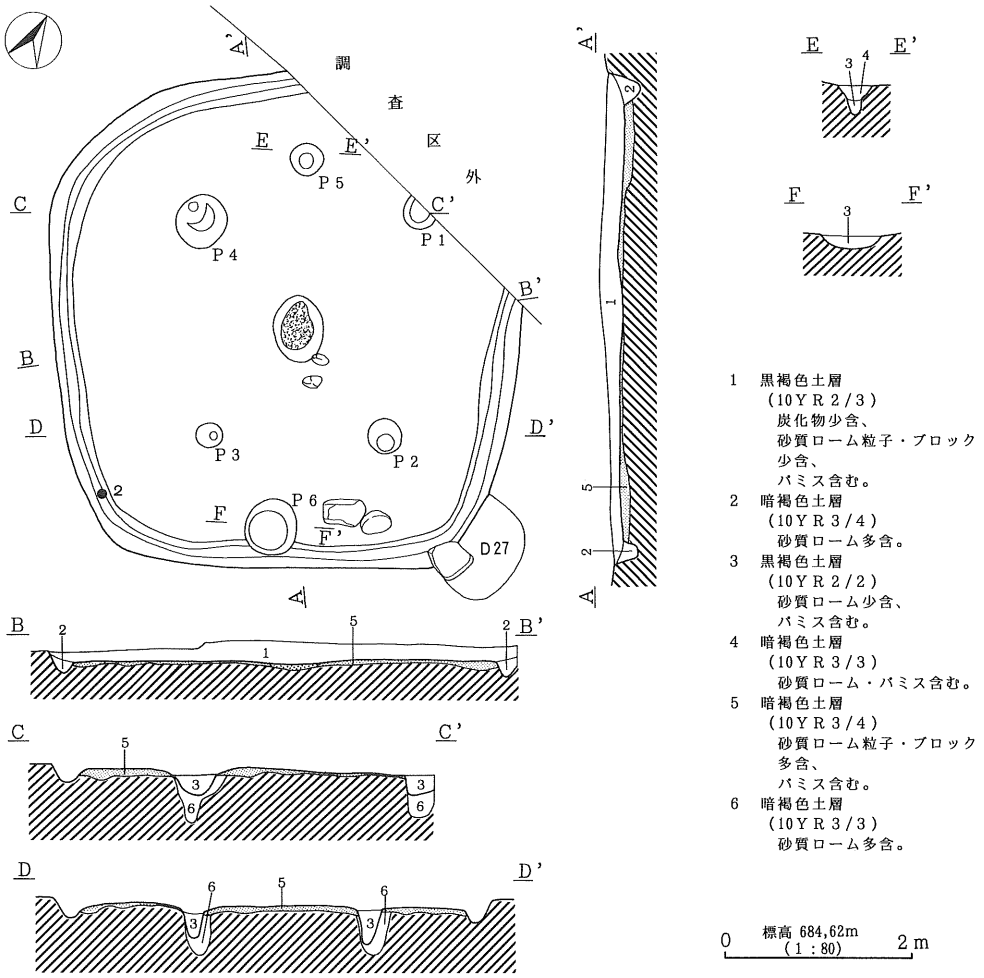
ピットは床面上から6個検出された。整然と配されるP1～P4が主柱穴であり、49～58cmの深さを有する。P5は棟持柱と思われ、深さ41cmを測る。P6は南壁下中央から検出された。

炉址は住居址のほぼ中央に位置し、南北71cm、東西52cmの楕円形を呈する地床炉である。

遺物は壺（1～5・13～21）・甕（6～8・22～29）・高坏（9・10）・手捏（11・12）の他、石器5点（30～34）を図示した。

壺の口唇部は1に面取りされる他は縄文が施される。受口口縁の13・14は口縁部に縄文を地文として箆描山形文が施文される。頸部は縄文地に箆描横線文・山形文（2・15・16）、胴上位には箆描文が垂下される（18・19）。3は赤色塗彩され、口縁部に4カ所突起が貼り付けされる。20・21は縄文地に箆描文が加えられ、耳状突起・円形浮文が貼り付けされる。

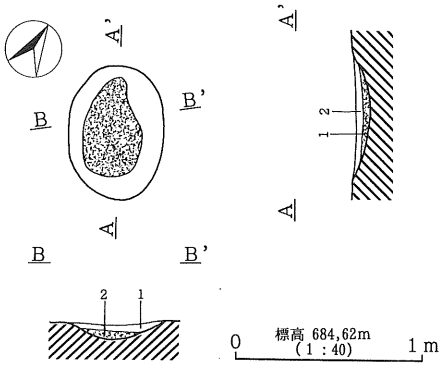
甕には口唇部に縄文（22・23・26～28）・刻目文（24・25）、頸部に櫛描横線文（25）・簾状文（29）、胴部には縄文（26）・櫛描羽状文（28）・斜状文（29）・波状文＋垂下文（25）がある。



第53図　第14号住居址実測図

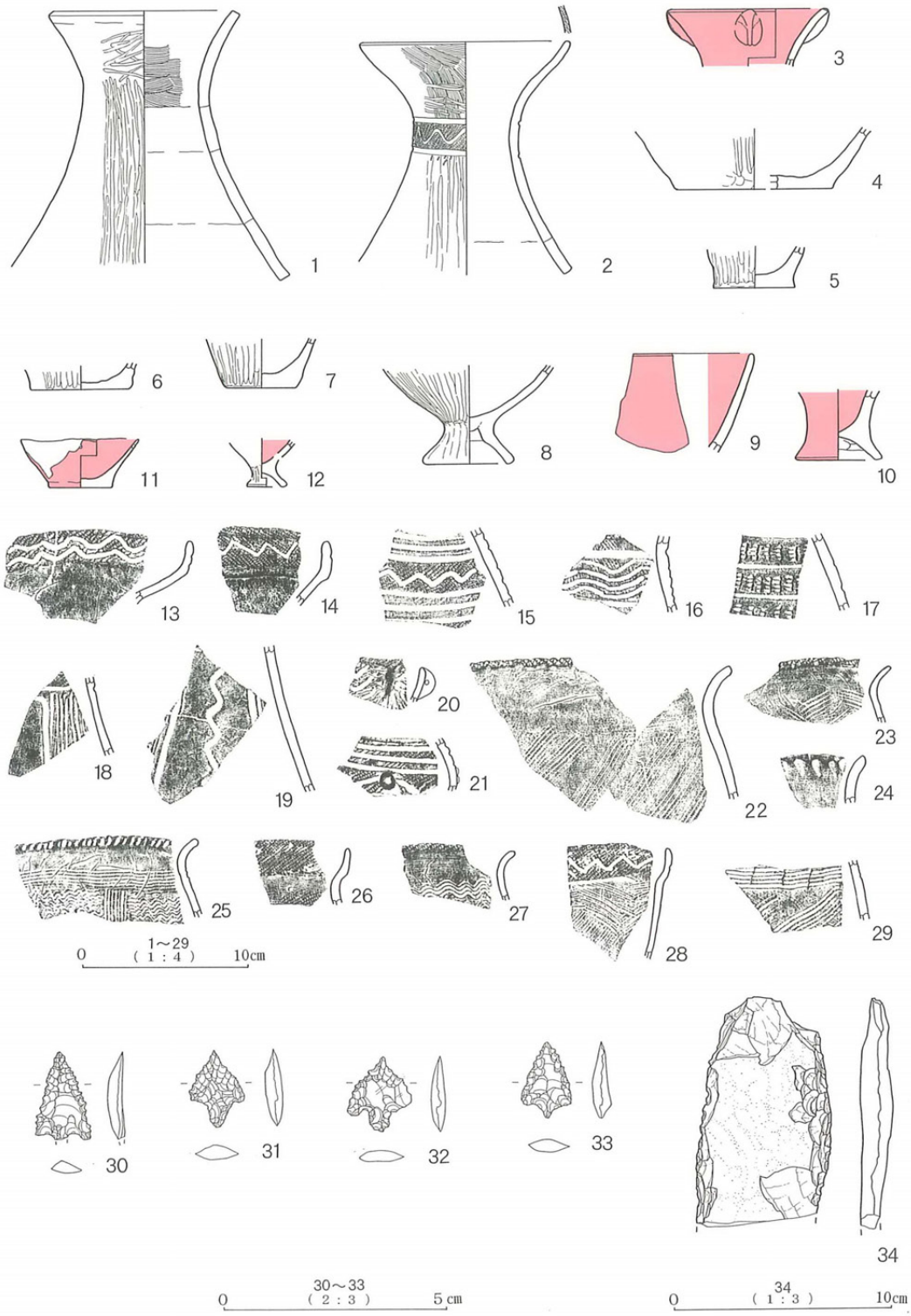
8は台付甕の台部でヘラミガキが行われ、内外面ともに赤色顔料の付着がみられる。11・12は手捏成形による小型品で、11は内外面に赤色塗彩され口縁部に穿孔を有する。12は高坏型で坏部内面のみに赤色塗彩が行われる。

石器には黒曜石製の石鏃4点、(30～33)、輝石安山岩製の打製石斧1点（34）がある。



1　黒褐色土層（10YR2/3）　炭化物少含。
2　赤褐色土層（5YR4/8）　焼土層。

第54図　第14号住居址炉址実測図



第 55 図　第 14 号住居址出土遺物実測図

第14表　第14号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
55－1	壺	11.0	〈16.4〉	－	口唇部　面取り、口縁部　横ヘラミガキ 頸部～胴部　縦ヘラミガキ	頸部　ハケメ 胴部　ナデ
55－2	壺	12.6	〈14.2〉	－	口唇部　縄文、口縁部　ハケメ→粗い横ヘラミガキ 頸部　縄文地文→箆描横線文2・箆描山形文1	口縁部～頸部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
55－3	壺	(9.4)	〈3.5〉	－	口縁部　突起4(残存2) ヘラミガキ、赤色塗彩、剥離	ヘラミガキ、赤色塗彩、剥離
55－4	壺	－	〈3.7〉	(9.6)	縦ヘラミガキ	摩滅不明
55－5	壺	－	〈3.0〉	(4.2)	縦ヘラミガキ	ナデ
55－6	甕	－	〈1.5〉	6.0	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ、赤色顔料付着
55－7	甕	－	〈2.5〉	5.0	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
55－8	台付甕	－	〈5.9〉	(5.2)	胴部　ハケメ→縦ヘラミガキ、赤色顔料付着 台部　ナデ	胴部　横ヘラミガキ、赤色顔料付着 台部　ナデ
55－9	高坏	－	〈6.0〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
55－10	高坏	－	〈4.2〉	5.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ナデ、赤色顔料付着
55－11	手捏	7.1	3.0	3.8	小型品、口縁部　穿孔 ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
55－12	手捏	－	〈2.9〉	－	小型品 坏部　ヘラミガキ、脚部　ナデ	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ナデ、ヘラミガキ、赤色顔料付着

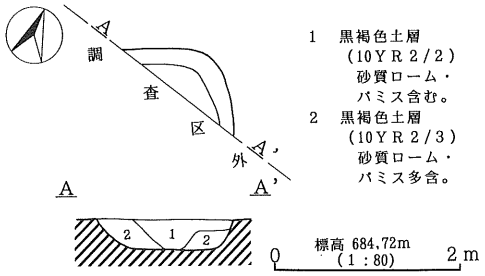
15）第15号住居址（第56図、図版十二）

本住居址は調査区中央南側、D－き・く－3グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第16号住居址と重複関係にあり新旧関係は本址の方が新しい。また大半が調査区外であり、北東隅がわずかに検出されたのみであるため、規模・形態ともに不明であり、住居址としたが別遺構の可能性もある。確認面からの壁高は13～21cmを測る。壁溝は検出されなかった。

覆土は2層からなる。

柱穴・炉址等は前述したように大半が調査区外であるため検出されなかった。

本址からの遺物の出土量は極めて少なく、図示できたものはない。甕の胴部片と思われる小片が3片出土したのみである。



第56図　第15号住居址実測図

16）第16号住居址（第57図、図版十二）

本住居址は調査区中央南側、Ｄ－き－２・３グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第15号住居址、第１号方形周溝墓、第４号円形周溝墓と重複関係にあり、新旧関係は本址が最も古い。また大半が調査区外であり北東隅が検出されたのみであるため、規模・形態ともに不明である。確認面からの壁高は６～19cmを測る。壁溝は北壁下で確認された。

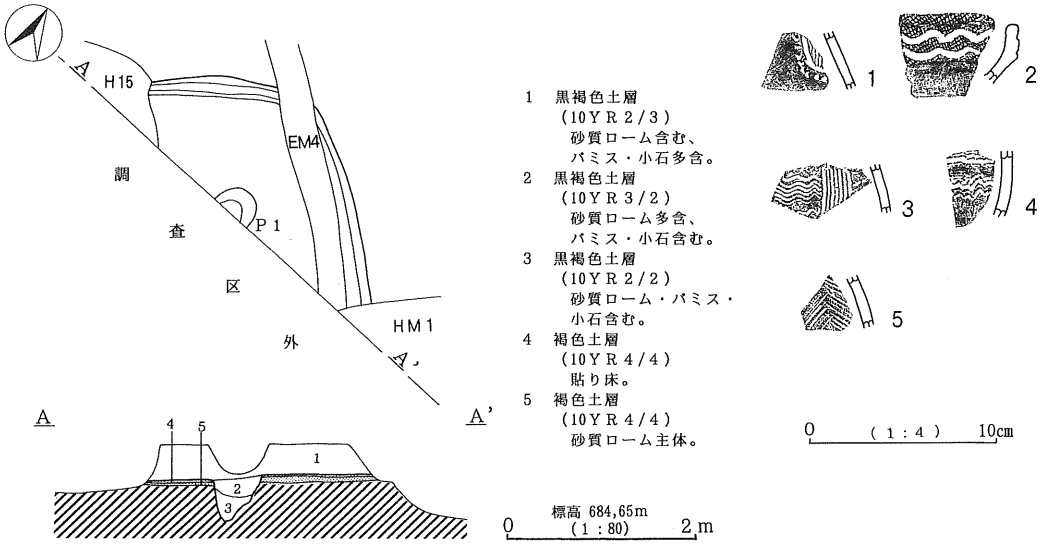
覆土は１層が確認されたのみである。床面は５層を埋め戻した後、４層を貼り床としているが、堅固な状態とは言い難い。

ピットは床面上から１個検出された。北東に配される主柱穴と考えられ、57cmの深さを有する。

炉址は前述したように大半が調査区外であるため検出されなかった。

本址から出土した土器はいずれも小片で、拓影図５点が図示できたのみである。

壺には１の他に箆描横線文の頸部片がある。甕には受口口縁の２があり、胴部の文様には櫛描波状文＋垂下文（３）・波状文（４）・羽状文（５）がある。

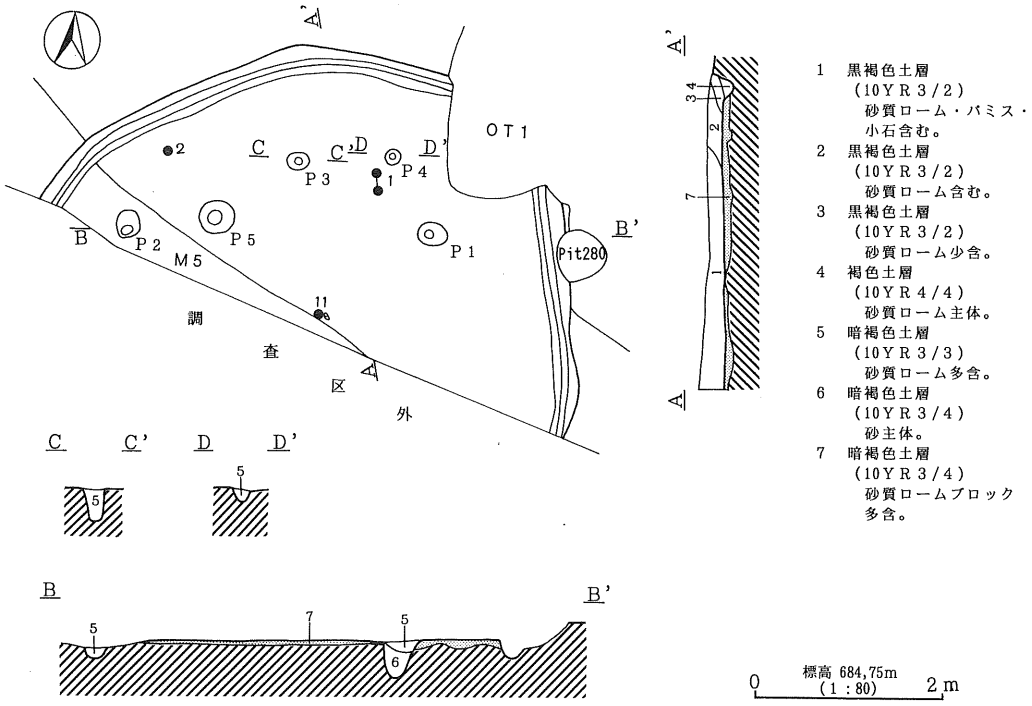


第57図　第16号住居址・出土遺物実測図

17）第17号住居址（第58・59図、図版十三・三十八・四十七・四十八）

本住居址は調査区南東部、Ｄ－う・え－３グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第１号周湟、第５号溝状遺構、Pit280と重複関係にあり、新旧関係は本址が最も古い。また南側大半が調査区外であり北壁と東壁の一部が検出されたのみであるため、規模・形態ともに不明である。確認面からの壁高は１～19cmを測る。壁溝は全周するものと思われる。

覆土は４層からなる。床面は７層を埋め戻して構築されるが堅固な状態とは言い難い。



第58図　第17号住居址実測図

ピットは5個検出された。P1・P2が北側に配される主柱穴と考えられ、P2は第5号溝状遺構に上面を切られる。深さはP1が39cm・P2が残存部で16cmを測る。P3はP1・P2間中央北側に位置し棟持柱と考えられ、径22cm・深さ32cmを測る。P4は径16cm・深さ13cm、P5は径40cm・深さ12cmを計測する。

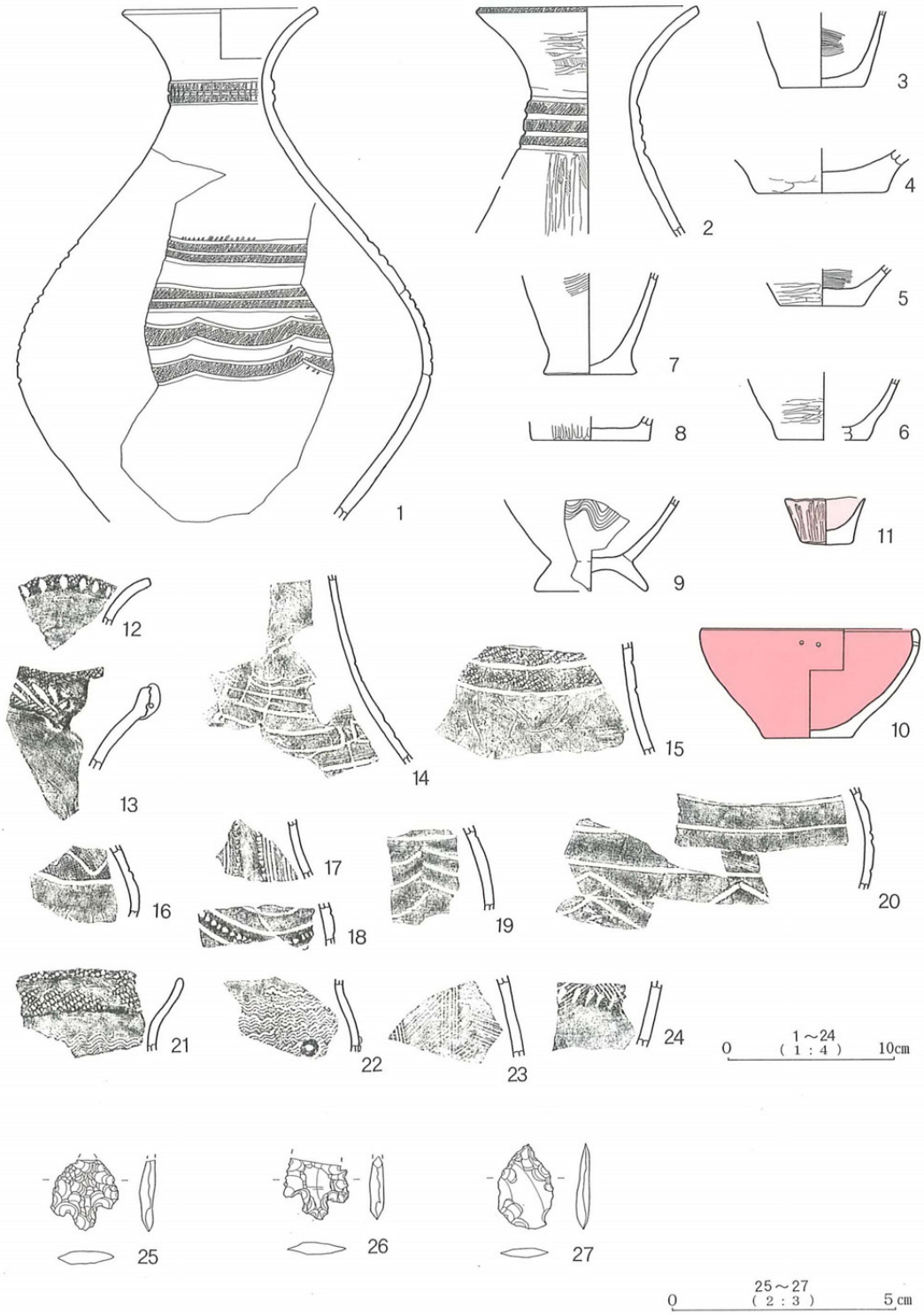
炉址は調査区外であるため検出されなかった。

遺物は壺（1～6・12～20)・甕（7～9・21～24)・鉢（10)・手捏（11）の他、石器3点（25～27）を図示した。

壺の頸部は縄文地に箆描横線文を基調とするが、1は箆による刺突文が加えられる。胴部には縄文地に箆描横線文・連弧文が施文される1の他、山形文（16・20)・刺突文（17・18）がある。13は受口口縁の壺で口唇部に縄文、口縁部に縄文＋箆描文が施文され、さらに耳状突起が貼り付けされる。

甕の文様には櫛描波状文（21・22)・羽状文（23・24）があり、22は円形浮文、24は刺突文が加えられる。7は摩滅が激しいが櫛描羽状文であろうか。9は胴部に櫛描波状文が施文される台付甕である。10は椀状の体部に赤色塗彩される鉢で、口縁部に2孔一対と思われる穿孔を有し、外面底部にも赤色塗彩が行われる。

25～27は黒曜石製の石鏃で、27は成形段階での未製品である。



第 59 図　第 17 号住居址出土遺物実測図

第15表　第17号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
59－1	壺	(12.4)	〈30.8〉	－	頸部　隆帯内縄文→篦描横線文1→篦描突刺文 胴中位　縄文地文→篦描横線文6・篦描連弧文4	口縁部　横ヘラミガキ、赤色顔料付着 胴部　剥離不明
59－2	壺	13.0	〈13.9〉	－	口唇部　縄文 頸部　縄文地文→篦描横線文4	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
59－3	壺	－	〈4.5〉	5.0	摩滅不明	ナデ
59－4	壺	－	〈2.5〉	7.8	ナデ	ナデ
59－5	壺	－	〈2.4〉	5.2	横ヘラミガキ	ハケメ
59－6	壺	－	〈3.7〉	(5.4)	横ヘラミガキ	ハケメ
59－7	甕	－	〈6.1〉	(5.6)	胴上半　櫛描羽状文？　摩滅	摩滅不明
59－8	甕	－	〈1.4〉	7.0	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
59－9	台付甕	－	〈5.6〉	6.6	胴部　櫛描波状文、縦ヘラミガキ 台部　ナデ	胴部　横ヘラミガキ 台部　ナデ
59－10	鉢	12.8	6.6	5.2	口縁部　穿孔2 ヘラミガキ、赤色塗彩、底部　赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
59－11	手捏	4.8	2.8	3.0	小型品 縦ヘラミガキ、淡い赤色塗彩	横ヘラミガキ、淡い赤色塗彩

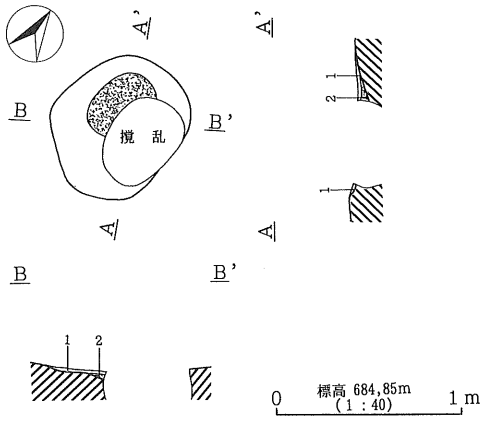
18）第18号住居址（第60～62図、図版十三・十四・三十八・四十八・四十九）

本址は調査区南東部、D－あ～う－1～3グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第1号周湟による円形の区画内中央にあたる。Pit266に東壁の一部を切られ、さらに床下を攪乱によって破壊される。

規模は南北4.94m、東西4.4mの隅丸長方形を呈し、床面積は17.2m²を測る。確認面からの壁高は13～23cmを測り、長軸方位はN－29°－Wを示す。壁溝は全周する。

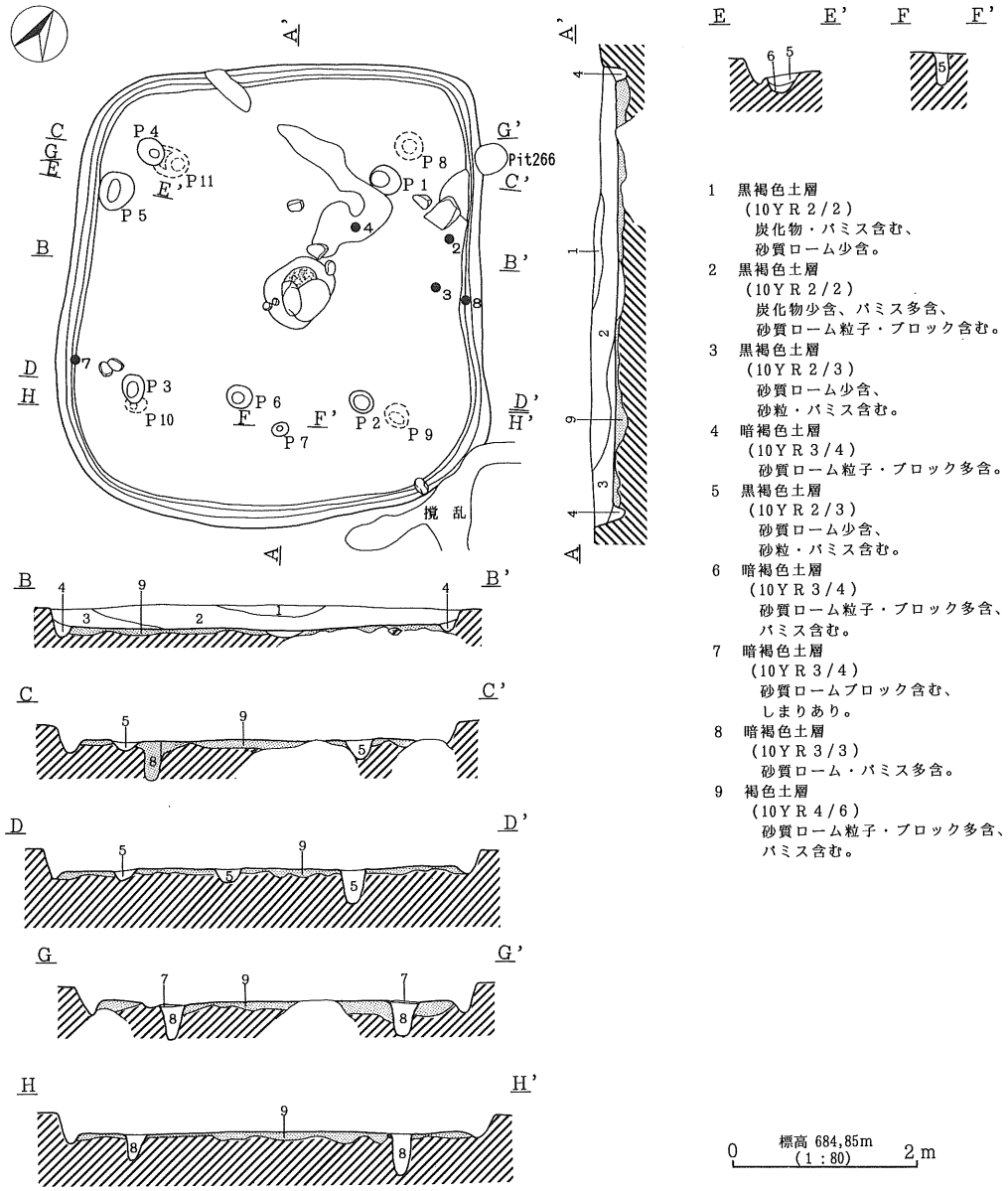
覆土は4層からなるが2層が主体を占める。床面は9層を埋め戻して構築され、平坦で堅固な状態である。

ピットは床面上から7個検出された。P1～P4が主柱穴であるが、西側のP3・P4はP1・P2に比べて浅い。また、隣接して古い柱穴（P8～P11）が床下から検出され、



1　黒褐色土層（7.5YR3/2）　焼土・炭化物少含。
2　明赤褐色土層（5YR5/8）　焼土層。

第60図　第18号住居址炉址実測図

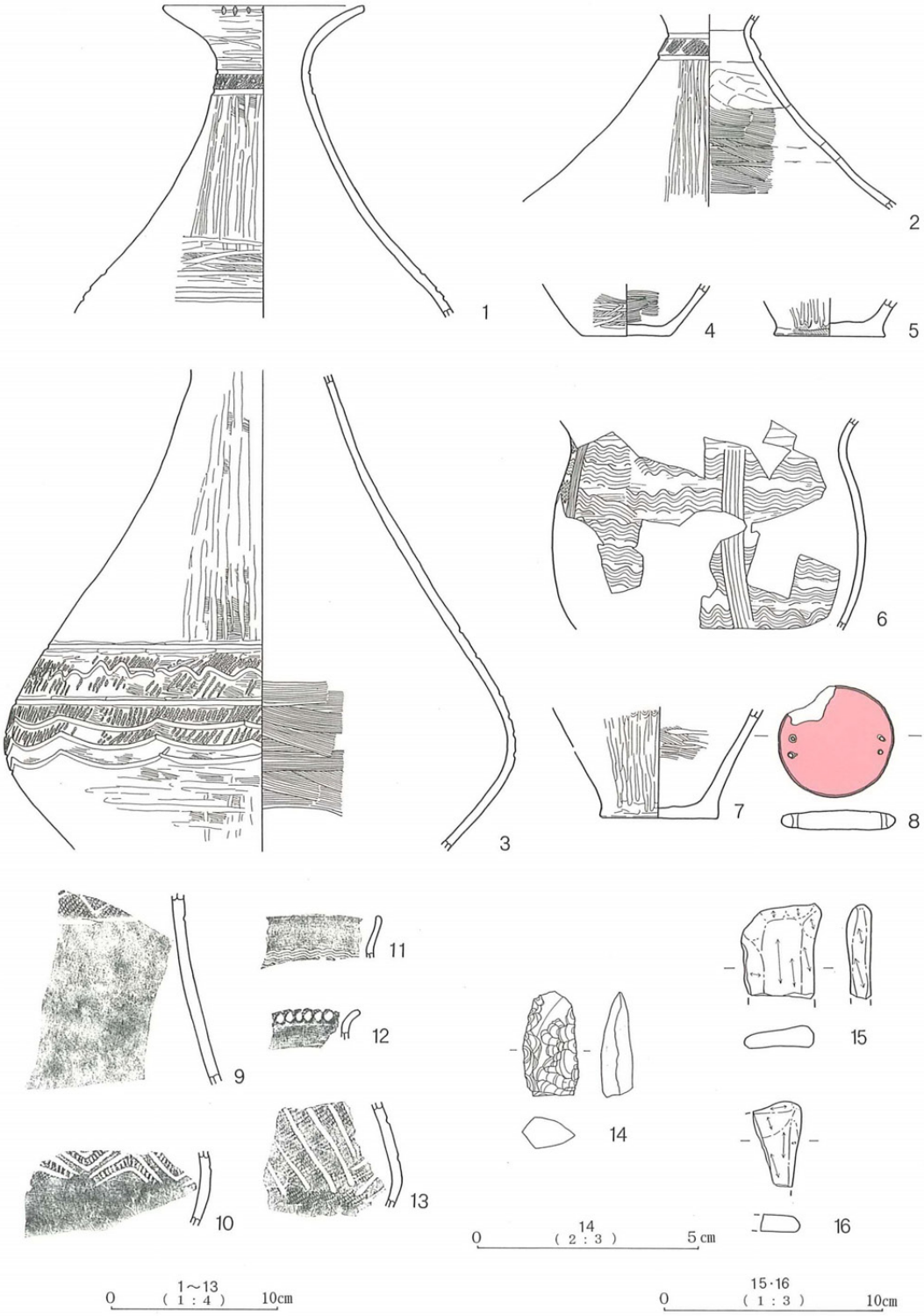


第61図　第18号住居址実測図

柱の立て替えが行われたものと考えられる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置するが、東側を撹乱によって破壊される。南北78cm、東西66cmを測る地床炉である。

遺物は壺（1～5・9・10)・甕（6・7・11～13)・蓋（8）の他、石器3点（14～16）を図示した。



第 62 図　第 18 号住居址出土遺物実測図

第16表　第18号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
62－1	壺	(12.0)	〈18.9〉	－	口唇部　刻目、頸部　縄文地文→篦描横線文2・篦描突刺文 胴中位　篦描横線文	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　剥離不明
62－2	壺	－	〈11.6〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文2 胴部　縦ヘラミガキ	ナデ・ハケメ
62－3	壺	－	〈29.0〉	－	胴中位　縄文地文→篦描横線文2・篦描波状文1・篦描連弧文3→縄文擦り消し、胴上半　縦ヘラミガキ、胴下半　横ヘラミガキ	ハケメ、剥離
62－4	壺	－	〈3.1〉	5.4	横ヘラミガキ	ハケメ
62－5	壺	－	〈2.3〉	(6.8)	縦ヘラミガキ	ハケメ
62－6	甕	－	〈12.8〉	－	櫛描波状文→櫛描垂下文	横ヘラミガキ
62－7	甕	－	〈6.6〉	7.0	胴上半　櫛描波状文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
62－8	蓋	6.9			2孔一対の穿孔　ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

壺の頸部は縄文地に篦描横線文を基調とするが、1は刺突文・9は山形文が加えられる。胴部の文様には篦描横線文の1、縄文を地文として篦描横線文・波状文・連弧文の3、篦描重山形文＋刺突文の10がある。胴上位への施文はみられずハケメ調整の後ヘラミガキが行われる。

甕には櫛描波状文の後、櫛描垂下文で区画する6がある。蓋とした8は赤色塗彩され、2孔一対の穿孔を有する。

14は黒曜石製の石鏃で成形段階の未製品である。15・16は砂岩製の砥石である。

19）第19号住居址（第63・64図、図版十四・四十九）

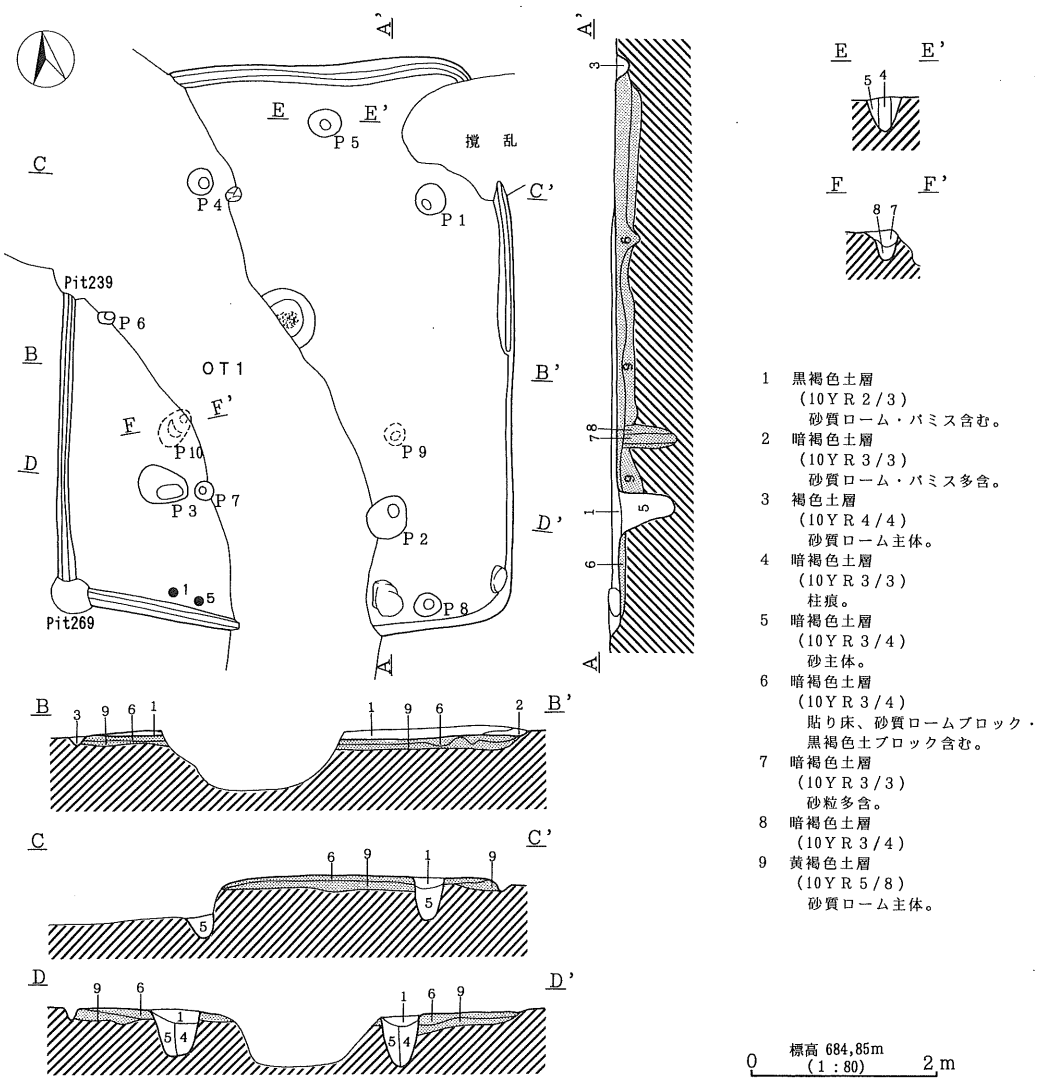
本住居址は調査区南東部、B－こ－1・2、D－あ－1・2グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第1号周湟、Pit239、Pit269と重複関係にあり、新旧関係は本址が最も古い。また、撹乱により東壁北側を破壊される。

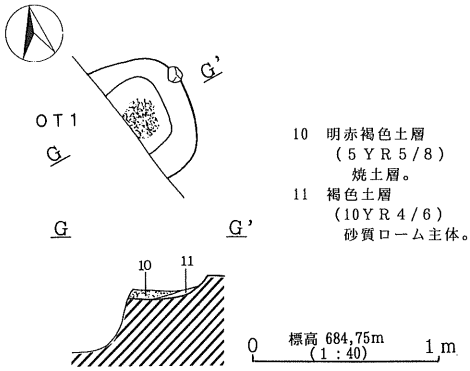
規模は南北6.08m、東西4.80mの隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は1～11cmを測る。壁溝は東壁南側・南壁東側を除いた壁下から検出された。

覆土は3層からなる。床面は6・9層を埋め戻して構築され堅固な状態である。

ピットは床面上から8個検出された。整然と配されるP1～P4が主柱穴であり、P4は第1号周湟によって上面を切られる。深さはP1～P3が47～61cm、P4が残存部で42cmの深さを有する。P5は棟持柱と思われ深さ40cmを測る。また、P2・P3の北側、床下からから古い柱穴（P9・P10）が検出され、住居址の拡張または柱の建て替えが行われたものと考えられる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置し、西半部を第1号周湟によって切られる。残存部で径68cmを測る地床炉である。



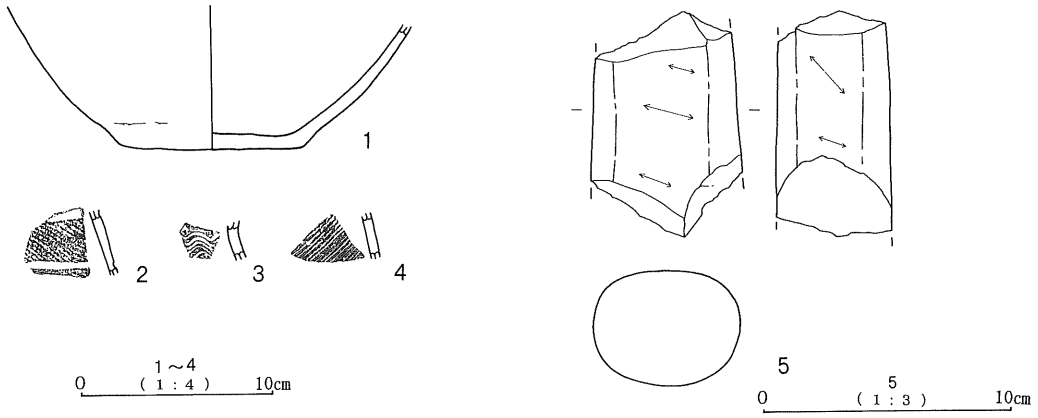


遺物は壺（1・2）・甕（3・4）の他、石器1点（5）を図示した。

壺には縄文地に箆描横線文が施文される頸部片（2）があり、甕には櫛描波状文の3、羽状文と思われる4がある。この他、赤色塗彩された高坏または鉢の口縁部片がある。

石器には閃緑岩製の磨製石斧（5）がある。

第63図　第19号住居址実測図



第64図　第19号住居址出土遺物実測図

第17表　第19号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
64－1	壺	－	〈7.6〉	9.6	ヘラミガキ、摩滅	ハケメ、摩滅

20）第20号住居址（第65～67図、図版十五・十六・三十九・四十九）

本住居址は調査区南東端、Ｂ－く・け－３・４グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第２号周湟、第36・37号土坑、Pit３と重複関係にあり、新旧関係は本址が最も古い。

規模は南北5.82m、東西4.76mの隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は２～28cmで、南壁部分が比較的良好に残る。壁溝は全周するものと思われる。

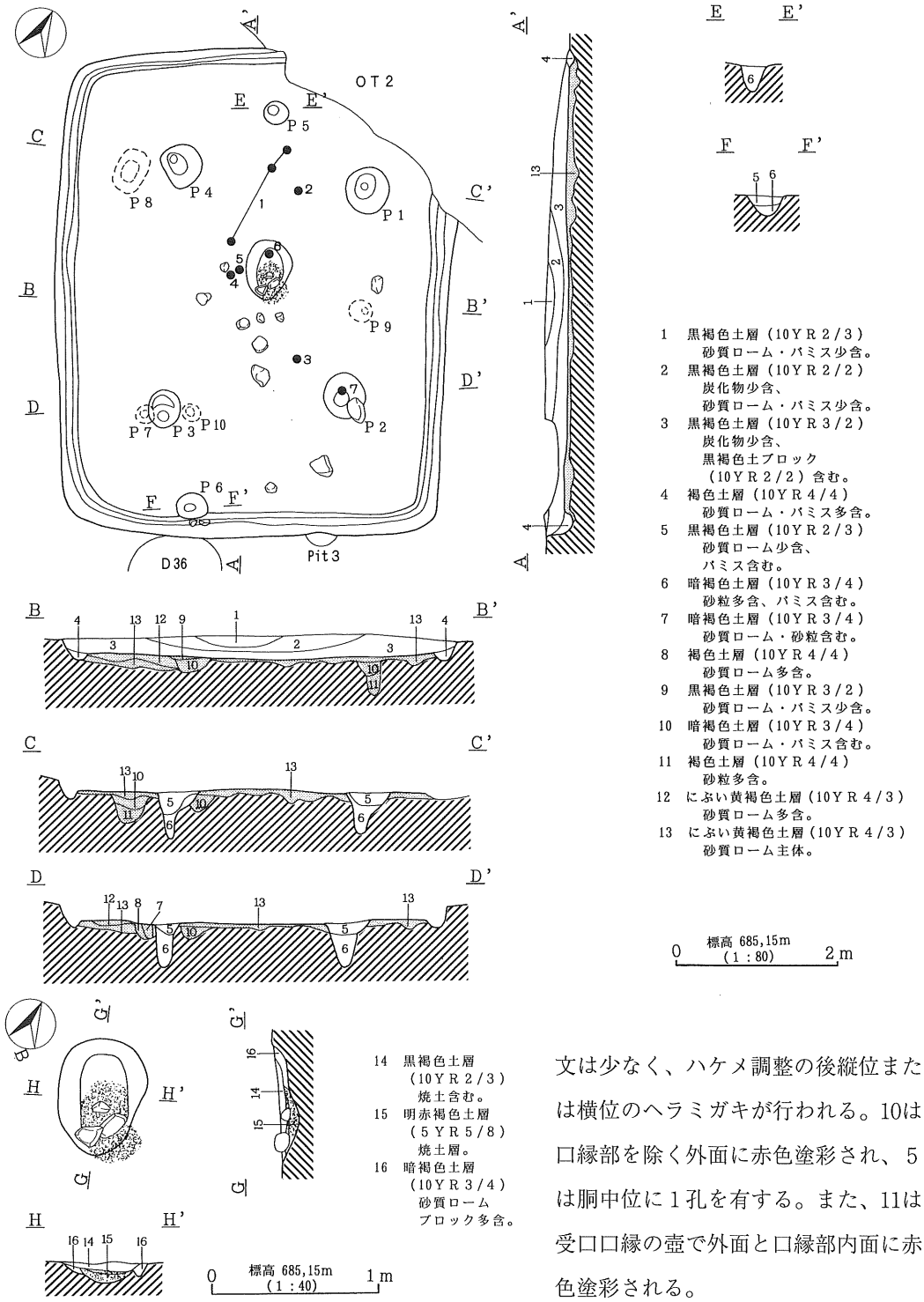
覆土は４層からなる自然堆積である。床面は12・13層を埋め戻して構築され堅固な状態である。

ピットは床面上から６個検出された。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であり整然と配される。深さは52～58cmを測る。Ｐ５は棟持柱と思われ、38cmの深さを有する。Ｐ６は南壁下西寄りから検出された。

炉址は住居址の中央に位置し、南北71cm、東西52cmの楕円形を呈する。火床部の南側に２個の礫を置いて炉縁石としている。

遺物は壺（１～11・21～25）・甕（12～15・26～37）・鉢（16～19）・手捏（20）の他、石器１点（38）を図示した。

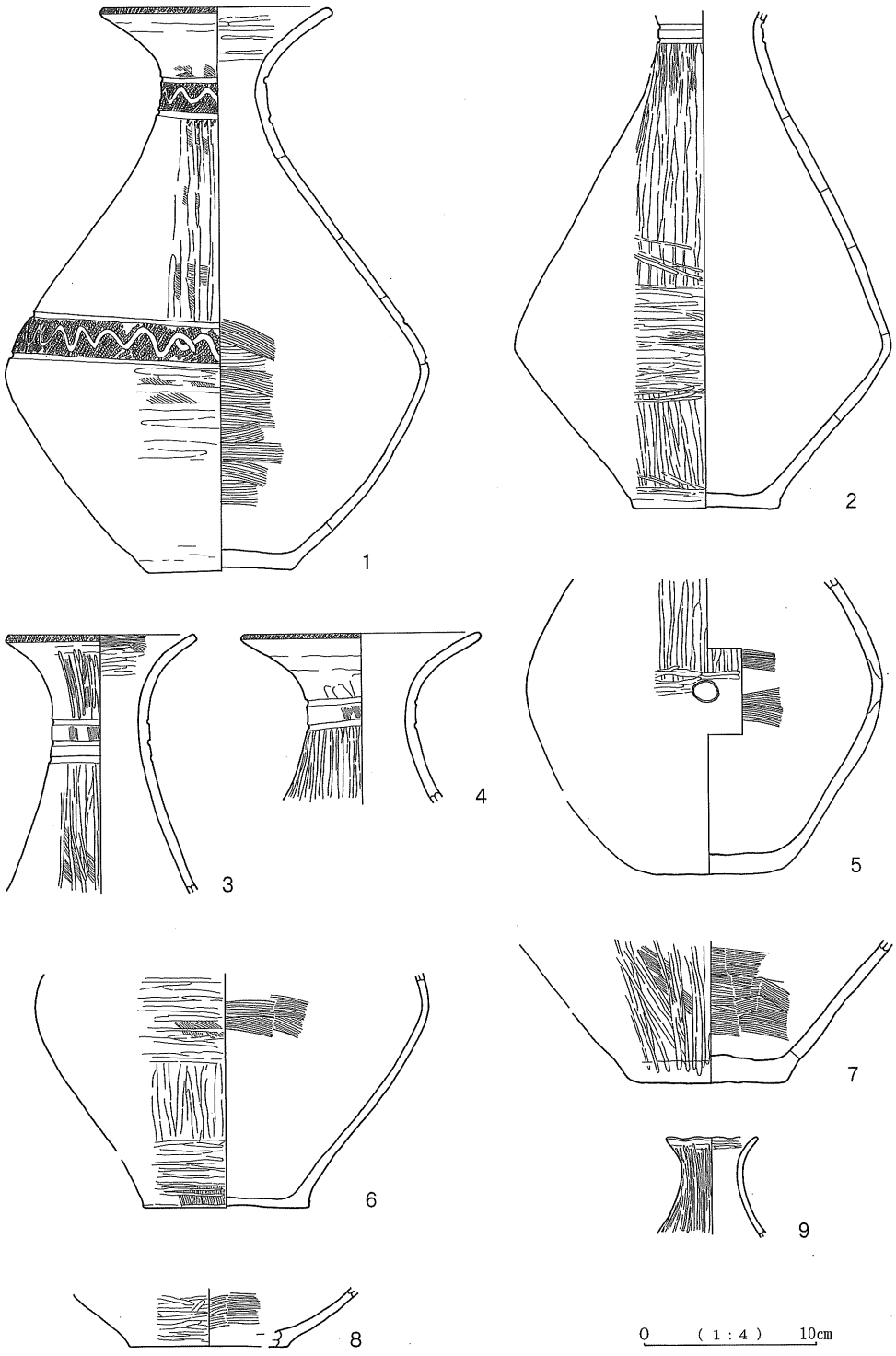
壺は口唇部に縄文が施されるものが多く、21は突起の先端に刻目がみられる。頸部の文様は箆描横線文のみの２・３・４と縄文地に箆描文が施文される１・10・22がある。胴部への施文は、中位に縄文を地文として箆描横線文＋波状文の文様帯がみられる１があるが、全体に胴部への施



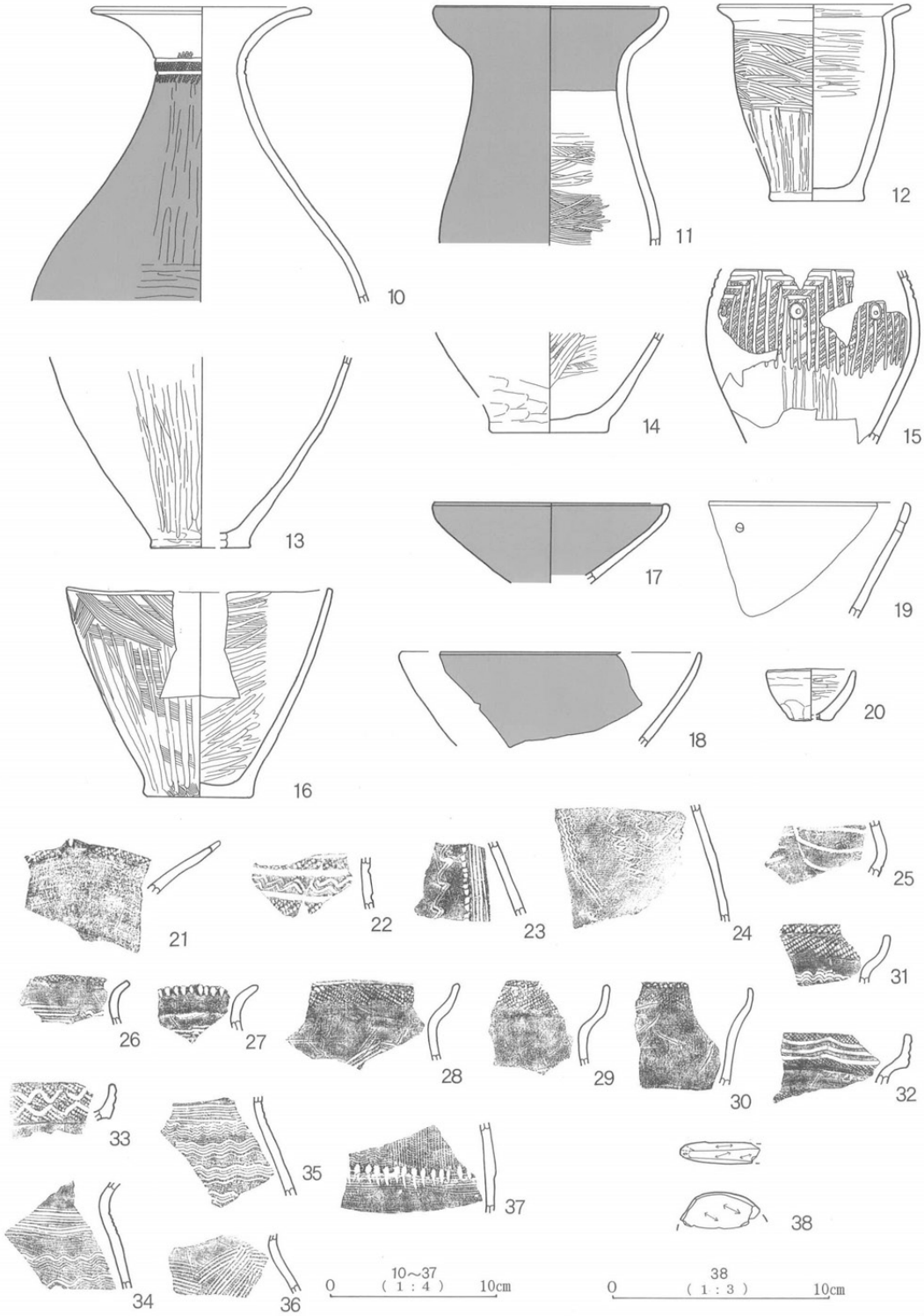
第65図　第20号住居址実測図

文は少なく、ハケメ調整の後縦位または横位のヘラミガキが行われる。10は口縁部を除く外面に赤色塗彩され、5は胴中位に1孔を有する。また、11は受口口縁の壺で外面と口縁部内面に赤色塗彩される。

甕は頸部に櫛描横線文・胴部に櫛描波状文の34・35と櫛描羽状文の36があ



第66図　第20号住居址出土遺物実測図〈1〉



第67図　第20号住居址出土遺物実測図〈2〉

第18表　第20号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
66－1	壺	13.0	32.7	8.2	口唇部　縄文、頸部　縄文地文→篦描横線文2・篦描波状文1 胴中位　縄文地文→篦描横線文2・篦描波状文1	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ハケメ、剥離
66－2	壺	－	〈28.7〉	8.5	頸部　篦描横線文 胴上位・下位　縦ヘラミガキ→胴中位　横ヘラミガキ	ナデ、ハケメ、剥離
66－3	壺	(10.8)	〈14.9〉	－	口唇部　縄文、頸部　篦描横線文3 胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
66－4	壺	(17.6)	〈9.8〉	－	口唇部　縄文、頸部　篦描横線文2 胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ
66－5	壺	－	〈17.0〉	9.0	胴中位　穿孔1 胴上位　縦ヘラミガキ→胴中位　横ヘラミガキ	ハケメ、剥離
66－6	壺	－	〈13.5〉	9.6	縦ヘラミガキ→横ヘラミガキ	ハケメ
66－7	壺	－	〈8.2〉	9.2	縦ヘラミガキ	ハケメ
66－8	壺	－	〈3.3〉	(9.2)	横ヘラミガキ	ハケメ
66－9	壺	(5.2)	〈5.8〉	－	小型品 縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
67－10	壺	(13.2)	〈17.8〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文2 胴部　ヘラミガキ、赤色塗彩、摩滅	摩滅不明
67－11	壺	(14.0)	〈14.4〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部　ハケメ、横ヘラミガキ
67－12	甕	11.6	11.9	(5.8)	胴上半　櫛描縦羽状文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
67－13	甕	－	〈11.6〉	(6.0)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
67－14	甕	－	〈6.0〉	7.0	ナデ、摩滅	斜ヘラミガキ
67－15	台付甕	－	〈10.5〉	－	胴上半　縄文地文→コの字重ね文→円形浮文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
67－16	鉢	(15.7)	12.7	6.6	甕転用、体部上半　櫛描縦羽状文 体部下半　縦ヘラミガキ	斜ヘラミガキ
67－17	鉢	(14.0)	〈4.8〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
67－18	鉢	(18.0)	〈5.7〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
67－19	鉢	－	〈6.9〉	－	口縁部　穿孔 ヘラミガキ、摩滅	ナデ
67－20	手捏	(5.0)	3.1	(2.6)	小型品 ナデ	ヘラミガキ

る。15は縄文地にコの字重ね文・円形浮文の台付甕である。鉢とした16～19のうち、16は体部上位に櫛描羽状文が施文されており甕の転用品である。17・18は内外面ともに赤色塗彩されるのに対し、19には赤色塗彩は行われず口縁部に穿孔される。また17・18は高坏の可能性もある。20は手捏成形による鉢形の小型品である。

石器には緑色チャート製の磨製石斧の基部（38）がある。

21）第21号住居址（第68・69図、図版十七・四十・四十七）

本住居址は調査区北東部、Ｃ－い・う－９・10グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの北側大半が調査区外であり、南壁と西壁の一部が検出されたのみである。したがって規模・形態ともに不明である。確認面からの壁高は５～15㎝を測る。壁溝は検出されなかった。

覆土は２層からなるが１層が主体を占め、２層は壁際にみられるのみである。床面は５層を平坦に埋め戻して構築され堅固な状態である。

ピットは床面上から４個検出された。Ｐ１が南西に配される主柱穴と考えられ、55㎝の深さを有する。Ｐ２・Ｐ３は南壁下から、Ｐ４は南西隅から検出された。

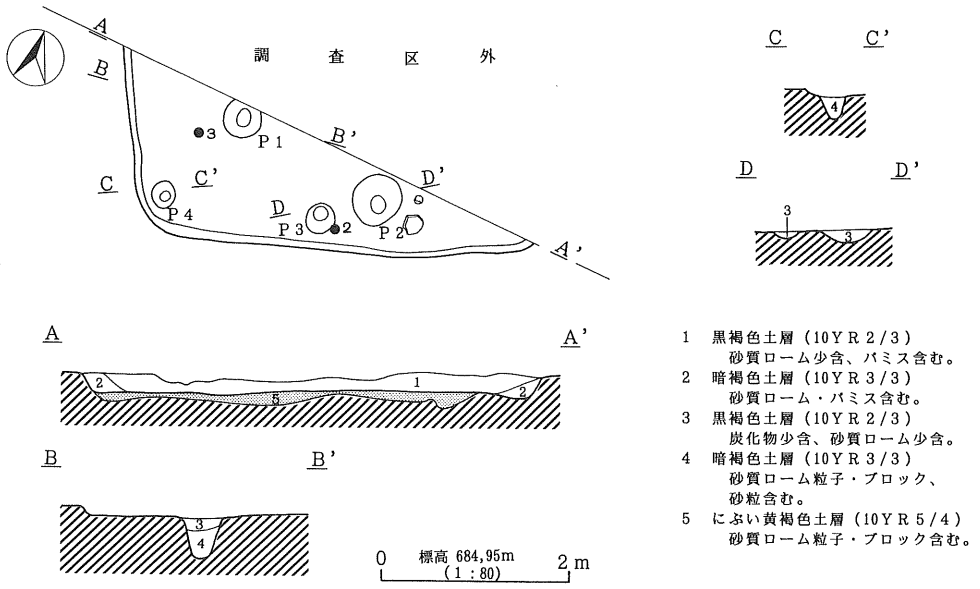
炉址は前述したように大半が調査区外であるため検出されなかった。

遺物は壺（１・６～９）・甕（10～18）・鉢（２～４）・手捏（５）を図示した。

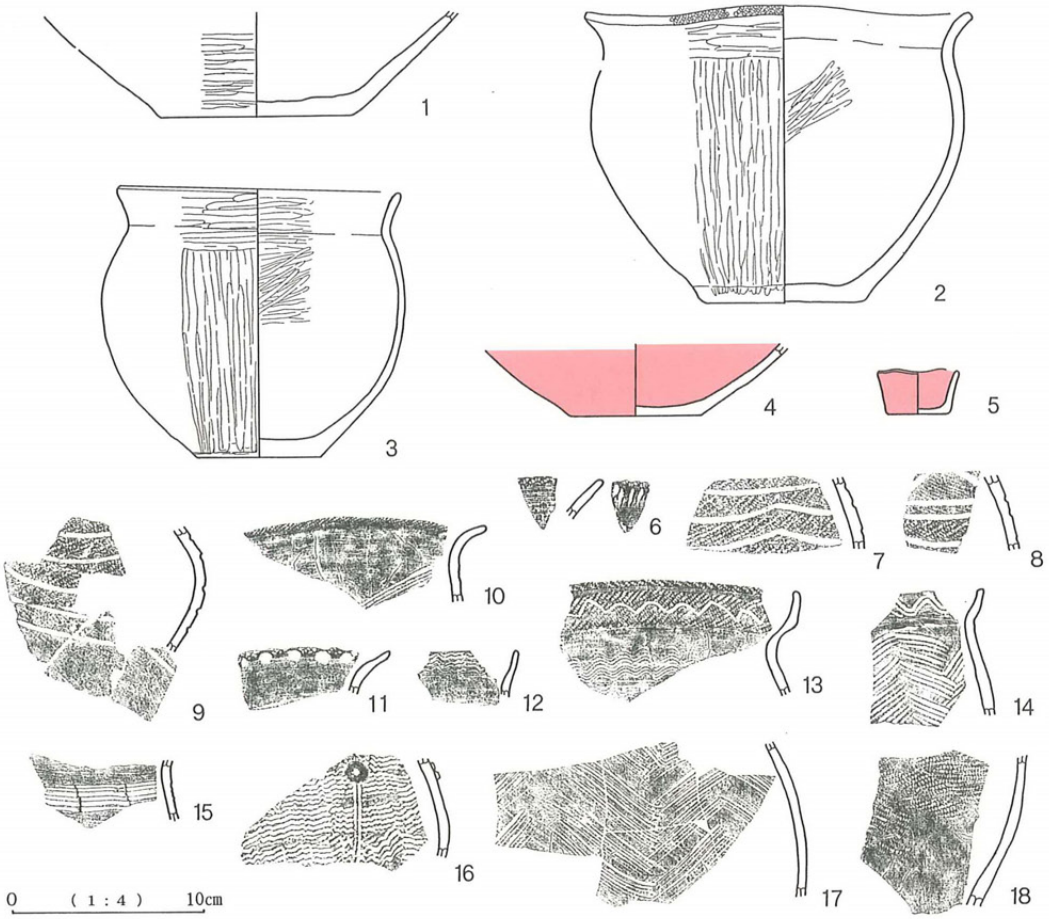
壺６は口唇部に縄文が施され、内面に刻目が施される。胴部の文様は縄文地に箆描横線文・連弧文が施文される（７・８・９）。

甕の口唇部は縄文の10・13と縄文に刻目が加えられる11がある。胴部の文様には櫛描羽状文の14・17、櫛描波状文・垂下文・円形浮文の16、縄文のみの18がある。

鉢には無彩で口縁部が短く外反する２・３と赤色塗彩される４がある。２には口唇部に縄文が施され、２・３ともに口縁部に横位、胴部に縦位のヘラミガキが行われる。５は手捏成形による鉢形の小型品で内外面ともに赤色塗彩される。



第68図　第21号住居址実測図



第69図　第21号住居址出土遺物実測図

第19表　第21号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
69－1	壺	－	〈5.5〉	10.0	横ヘラミガキ	剥離不明
69－2	鉢	(20.4)	15.8	8.8	口唇部　縄文 口縁部　横ヘラミガキ、胴部　縦ヘラミガキ	斜ヘラミガキ
69－3	鉢	14.8	14.5	6.5	口縁部　横ヘラミガキ、胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　斜ヘラミガキ
69－4	鉢	－	〈3.7〉	(6.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩 底部　赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
69－5	手捏	(4.2)	2.4	3.4	小型品、ヘラミガキ、赤色塗彩 底部　赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

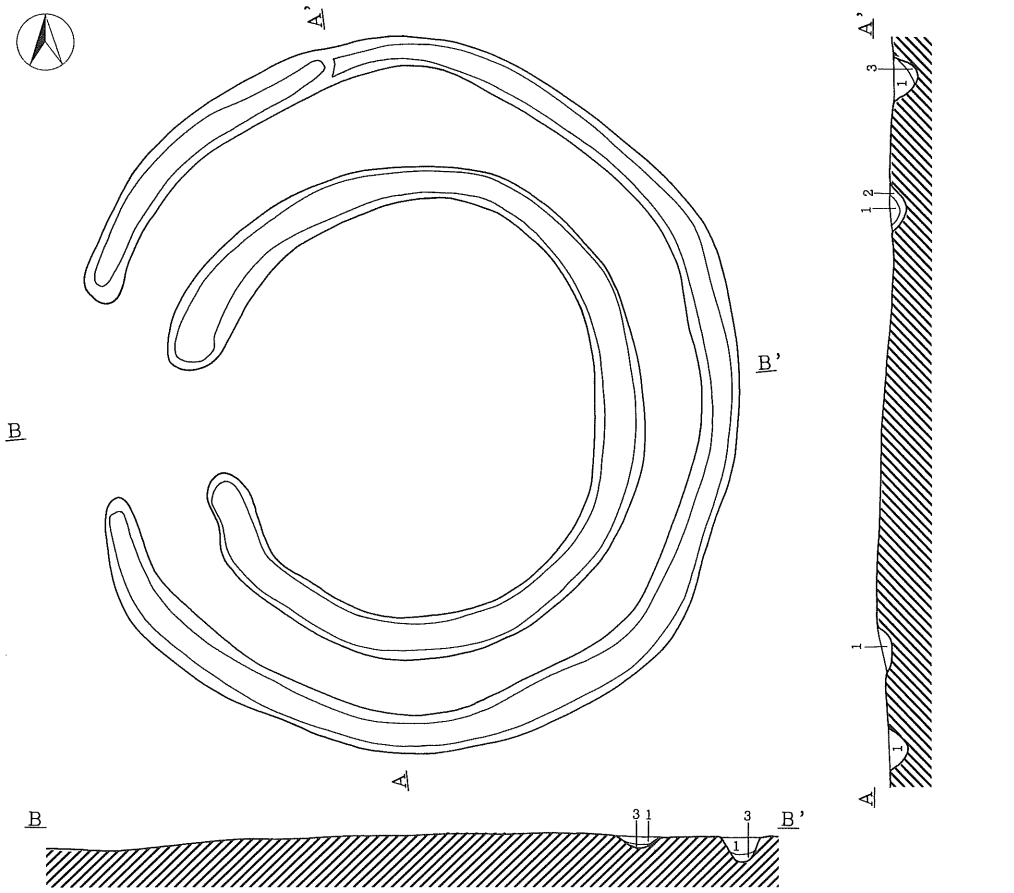
第２節　周溝墓

１）第１号円形周溝墓（第70・71図、図版十八）

本址は調査区西側、Ｅ－え～か－７～９グリッド内に位置する。第２・４号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。二重に溝を巡らせた円形周溝墓であり、西側を掘り残してブリッジとしている。規模は外側が南北7.6m、東西7.0m、内側が南北5.2m、東西5.1mの南北にやや長い円形を呈し、溝幅30～60cm、確認面からの深さは外側で20～25cm、内側で10～15cmを測り、内側に比べて外側が若干深い。

本址の埋葬施設は確認されなかった。耕作等により削平されたものと考えられる。

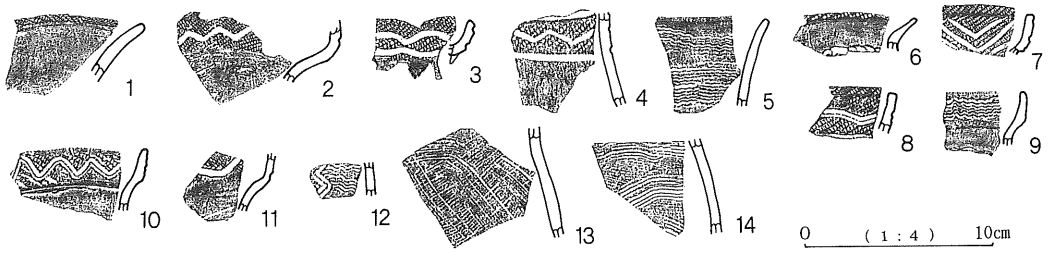
本址から出土した土器はいずれも小片で、拓影図14点が図示できたのみである。



1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）　砂質ローム・パミス含む。
2　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）　砂質ローム・パミス多含。
3　褐色土層（10ＹＲ４/６）　砂質ローム主体、暗褐色土ブロック含む。

0　標高 684,32m　2 m
（1：80）

第70図　第１号円形周溝墓実測図



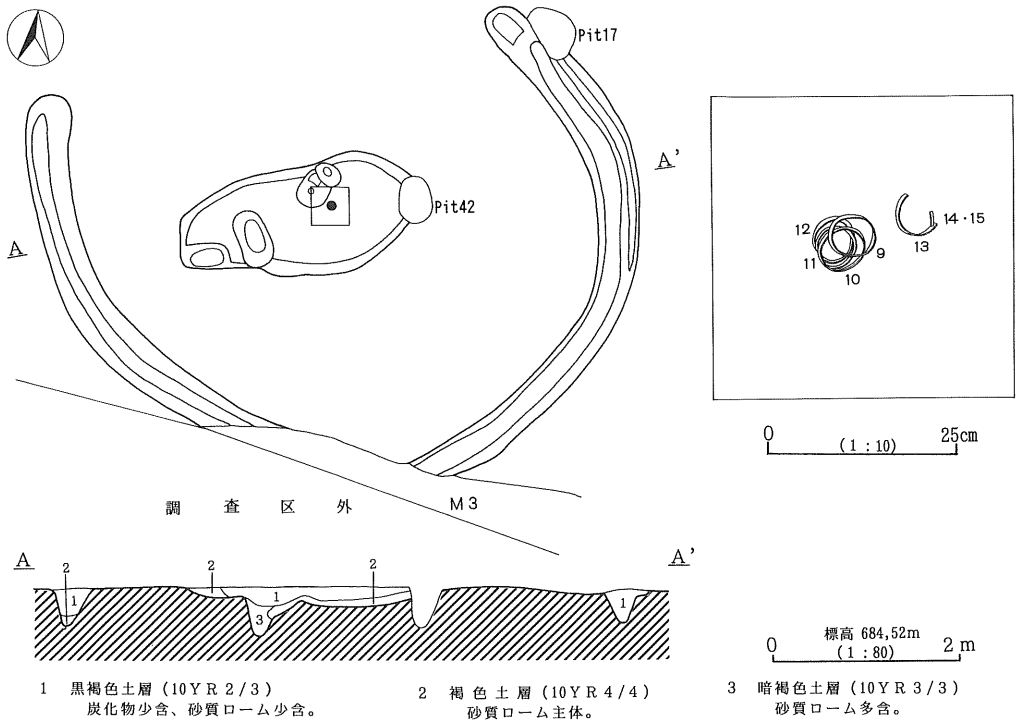
第71図　第1号円形周溝墓出土遺物実測図

壺は口唇部に縄文がみられる1の他、受口口縁の2・3、頸部に縄文地に箆描横線文・山形文が施文される4がある。3は受口部の下に突起が貼り付けされる。甕には口縁部が短く外反する6、受口口縁の7～11がある。胴部の文様には櫛描波状文の5・14、櫛描波状文＋垂下文の12、櫛描羽状文の13がある。この他赤色塗彩される壺・高坏・鉢がある。

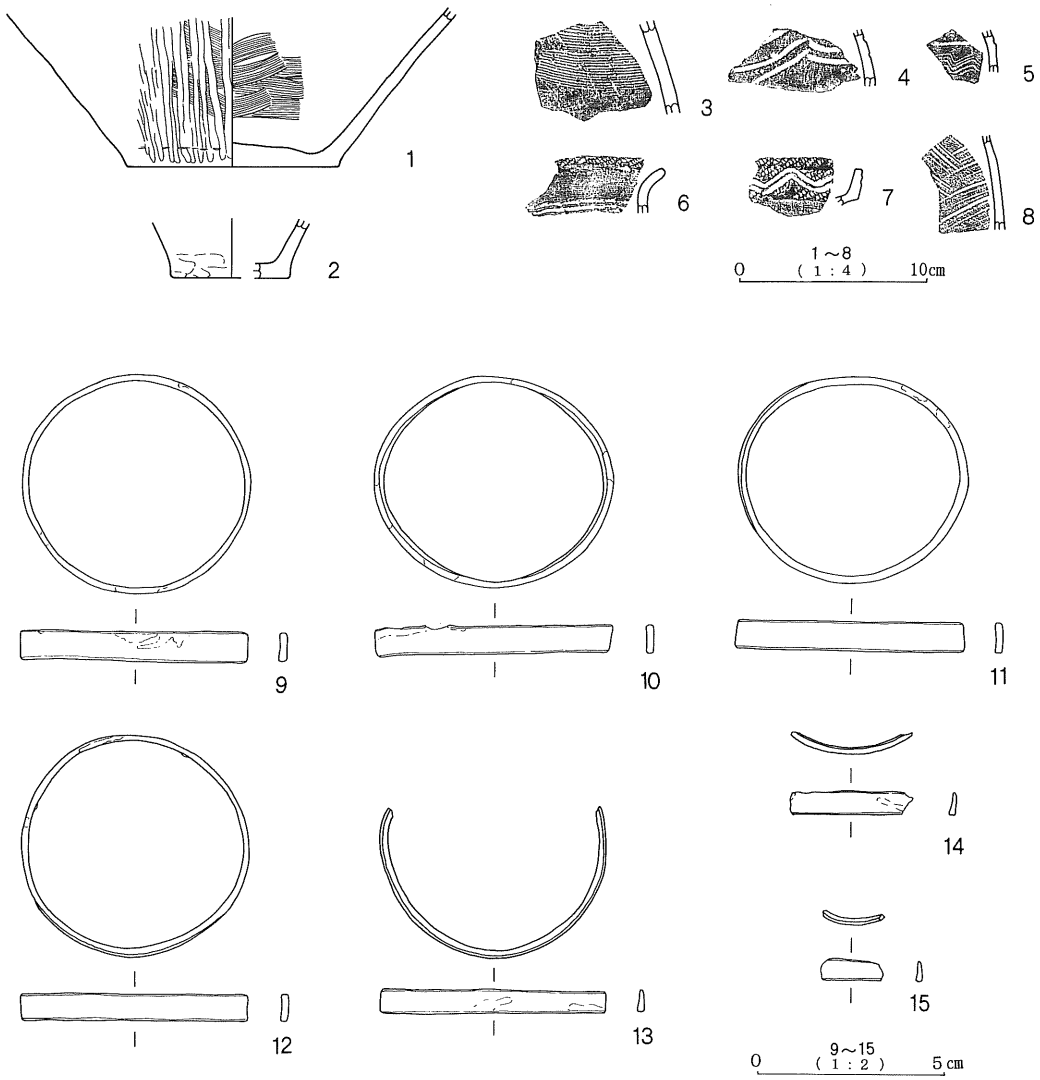
以上、これらの出土遺物は弥生時代中期後半の様相を示すものである。

2）第2号円形周溝墓（第72・73図、図版十八・十九）

本址は調査区西側、E－え・お－9・10グリッド内に位置する。第8号住居址、第4・14号土



第72図　第2号円形周溝墓実測図



第73図　第2号円形周溝墓出土遺物実測図

第20表　第2号円形周溝墓出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
73－1	壺	－	〈8.5〉	11.2	ハケメ→縦ヘラミガキ	ハケメ
73－2	甕	－	〈3.1〉	〈6.2〉	ナデ	ヘラミガキ、摩滅

坑、第3号溝状遺構、Pit17・42と重複関係にあり、新旧関係は古い方から第8号住居址、第4・14号土坑→本址→第3号溝状遺構、Pit17・42となる。規模は東西6.5mを測り、北側を大きく掘り残してブリッジとしている。溝幅40～50cm、確認面からの深さは10～40cmを計測する。

区画内中央部に位置する墓壙が本址の埋葬施設であると考えられる。東端部をPit42によって切られるが、東西2.6m、南北1.3mを測り、北側及び西側底面にピット状の掘り込みを有する。また、底面西側から検出された楕円形の掘り込みは木棺の小口を埋め込む「小口穴」の可能性も考えられる。規模は64cm×30cm、底面からの深さは30cmを測る。

遺物は壺（1・3～5）・甕（2・6～8）・銅釧7点（9～15）を図示した。このうち銅釧と5・6は墓壙内から出土したものであり、他は周溝内からの出土である。

土器はいずれも小片で全体の器形が復元できるものはない。いずれも弥生時代中期後半の様相を示すものであるが、赤色塗彩され、頸部に櫛描横線文が多段に施文される壺（3）に新しい要素がみられる。

銅釧は7点を図示したが13～15は同一個体と想定され、本遺構から出土した銅釧は5点である。墓壙内中央東寄りの底面からやや浮いた位置から9～12が重なった状態で出土し、釧内には人骨がわずかに存在した（付編1参照）。銅釧はいずれも鋳造品で径約6cm・幅6.5～8.3mm・厚さ2mm前後を測り、断面長方形の板状のタイプである（付編3参照）。

3）第3・4号円形周溝墓（第74・75図、図版二十・二十一）

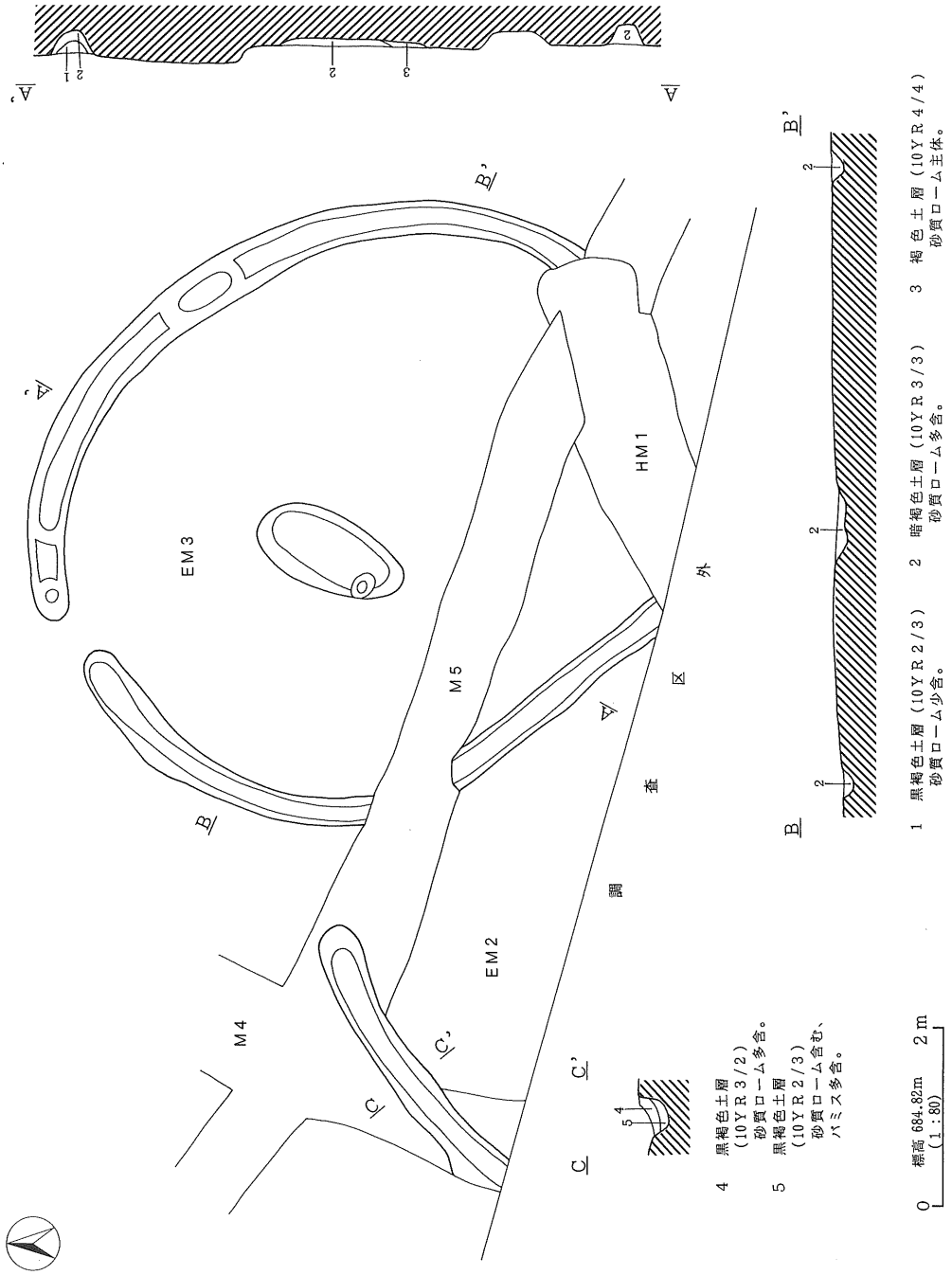
本址は調査区中央南側、D－こ～く－1～3グリッド内に位置する。第16号住居址、第1号方形周溝墓、第4・5号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は古い方から第16号住居址→本址→第1号方形周溝墓→第4・5号溝状遺構となる。第3号円形周溝墓と第4号円形周溝墓は溝の一部を共有している可能性も考えられるため一括して記載する。

第3号円形周溝墓は南側を第1号方形周溝墓に切られる。第4号円形周溝墓との共有が考えられる南西部分で直線的となるが、7.4×6.4mのほぼ楕円形を呈し、北側を掘り残してブリッジとしている。溝幅40～55cm、確認面からの深さ30～50cmを測る。区画内中央部に位置する墓壙が本址の埋葬施設であると考えられる。170×85cmの楕円形を呈し、南側にピット状の掘り込みを有する。

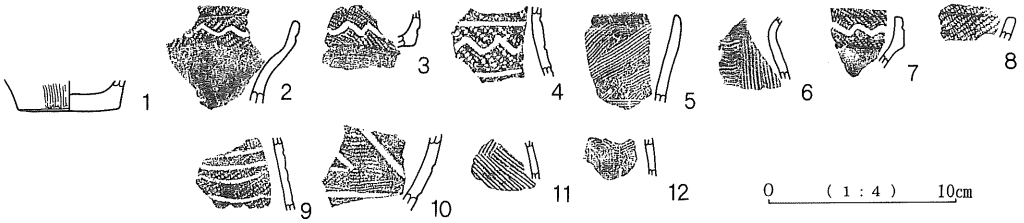
第4号円形周溝墓は東側溝を第3号円形周溝墓と溝を共有する円形周溝墓としたが、南側大半が調査区外であり遺構の全容は把握できなかったため別遺構の可能性もある。西側溝は上面の大半を第4・5号溝状遺構に切られており、検出長3.5m、深さ35～40cmを測る。

出土した土器はいずれも小片で実測図1点、拓影図11点が図示できたのみである。2～6が第3号円形周溝墓、1・7～12が第4号円形周溝墓からの出土である。

壺の文様構成は縄文地に箆描横線文・山形文を基調とし、甕の胴部には櫛描波状文＋垂下文（6）、羽状文（11）がある。いずれも弥生時代中期後半の様相を示すものであるが、口縁部がわずかに内弯し、口縁部に櫛描斜状文・頸部に櫛描簾状文が施文される甕（5）に新しい要素がみられる。この他、赤色塗彩される壺・高坏または鉢がある。



第74図　第3・4号円形周溝墓実測図



第75図　第3・4号円形周溝墓出土遺物実測図

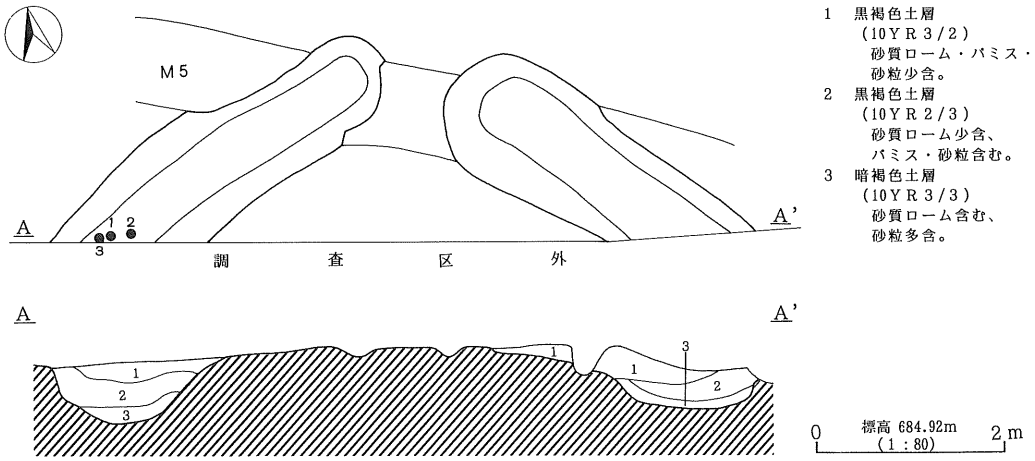
第21表　第3・4号円形周溝墓出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
75－1	壺	－	〈1.6〉	5.4	縦ヘラミガキ	ナデ

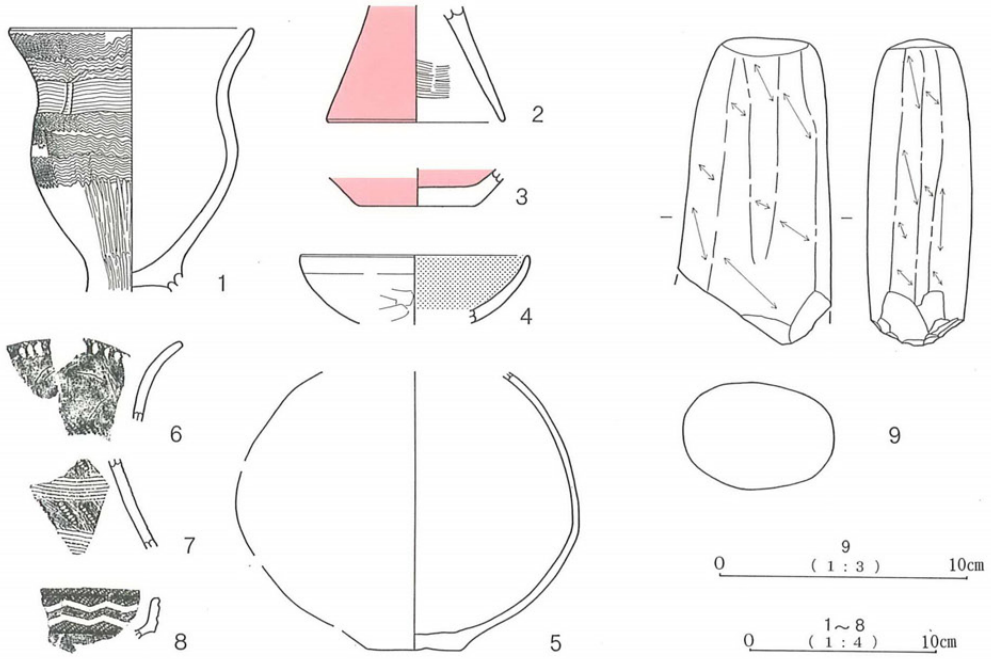
4）第1号方形周溝墓（第76・77図、図版二十一・四十・四十九）

本址は調査区中央付近南側、D－お・か－2・3グリッド内に位置する。第16号住居址、第3号円形周溝墓、第5号溝状遺構と重複関係にあり、新旧関係は古い方から第16号住居址→第3号円形周溝墓→本址→第5号溝状遺構となる。南側大半が調査区外であり、北側の溝の一部を調査したのみであるため遺構の全容は不明であり別遺構の可能性もある。検出長は西側溝で4.1m、東側溝で3.6mを測り、北側を掘り残してブリッジとしている。溝幅1.2～1.3m、確認面からの深さは50cm前後を計測する。

遺物は実測図5点、拓影図3点の他、石器1点を図示した。1・2は西側溝1層中からの出土であり、4・5は混入品と考えられる。



第76図　第1号方形周溝墓実測図



第77図　第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第22表　第1号方形周溝墓出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
77－1	台付甕	12.8	〈14.0〉	－	口縁部～胴上半　櫛描波状文（上→下）→ 頸部　櫛描簾状文（2連止め）、胴下半、縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
77－2	高坏	－	〈6.2〉	9.6	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケメ
77－3	鉢	－	〈2.0〉	6.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
77－4	土師器坏	(12.2)	〈3.6〉	－	口縁部　ヨコナデ、体部　ナデ	黒色処理
77－5	土師器甕	－	〈14.8〉	5.0	ヘラミガキ、剥離	ナデ

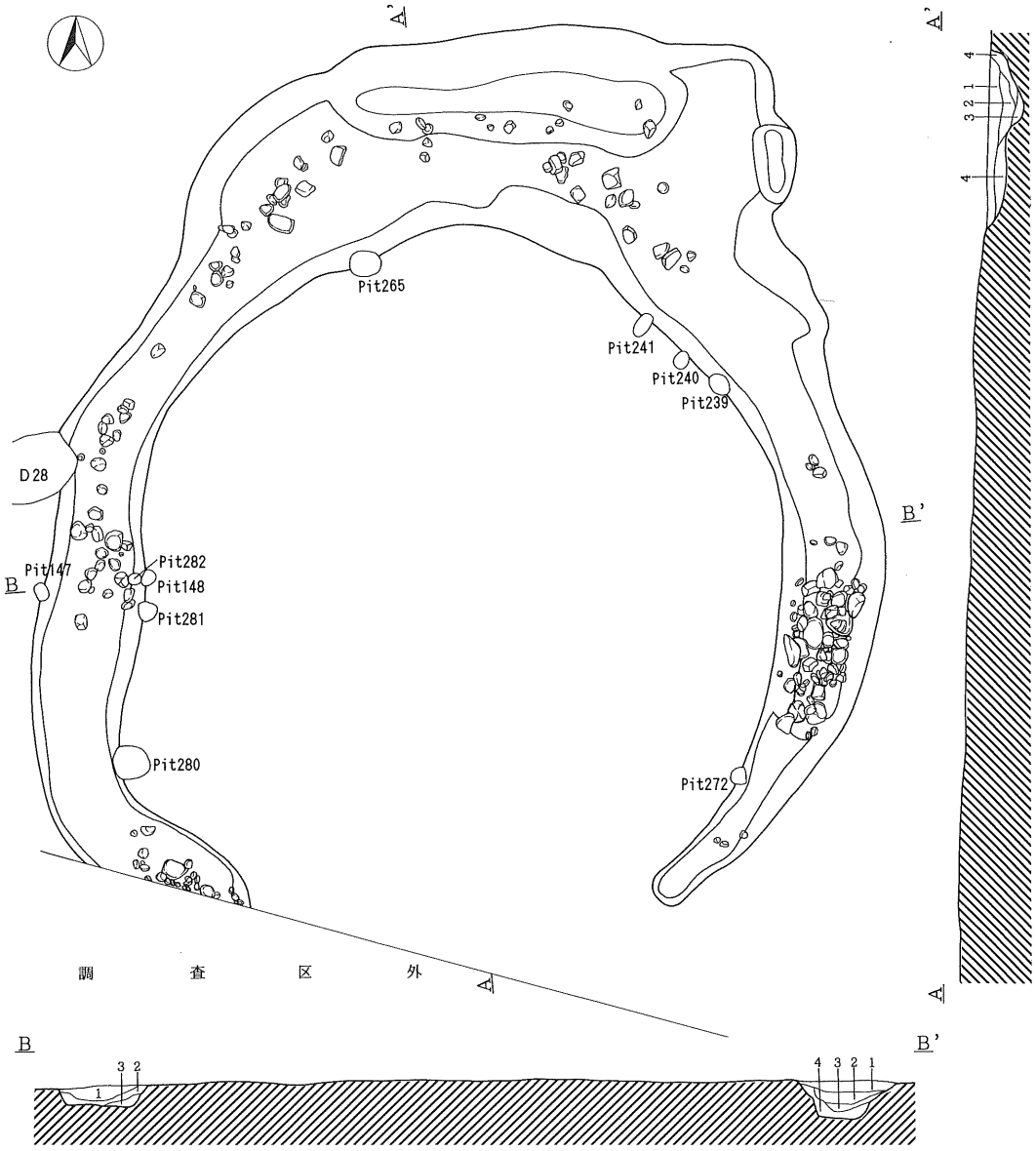
1は台部を欠損する台付甕である。口縁部から胴上半に櫛描波状文を施文し、頸部に簾状文が加えられる。2は高坏の脚部、3は鉢の底部であり、赤色塗彩される。

9は閃緑岩製で、破損した磨製石斧を再加工して擦り石などに利用したものであろう。

以上、第1～4号円形周溝墓は住居址との重複関係から弥生時代中期後半以降のものであり、第2号円形周溝墓から出土した銅釧の他、73－3・75－5・77－1などに新しい要素がみられることから弥生時代後期に位置づけられよう。また、第1号方形周溝墓は第3号円形周溝墓との重複関係から、第1～4号円形周溝墓に後出するものである。

第３節　周湟

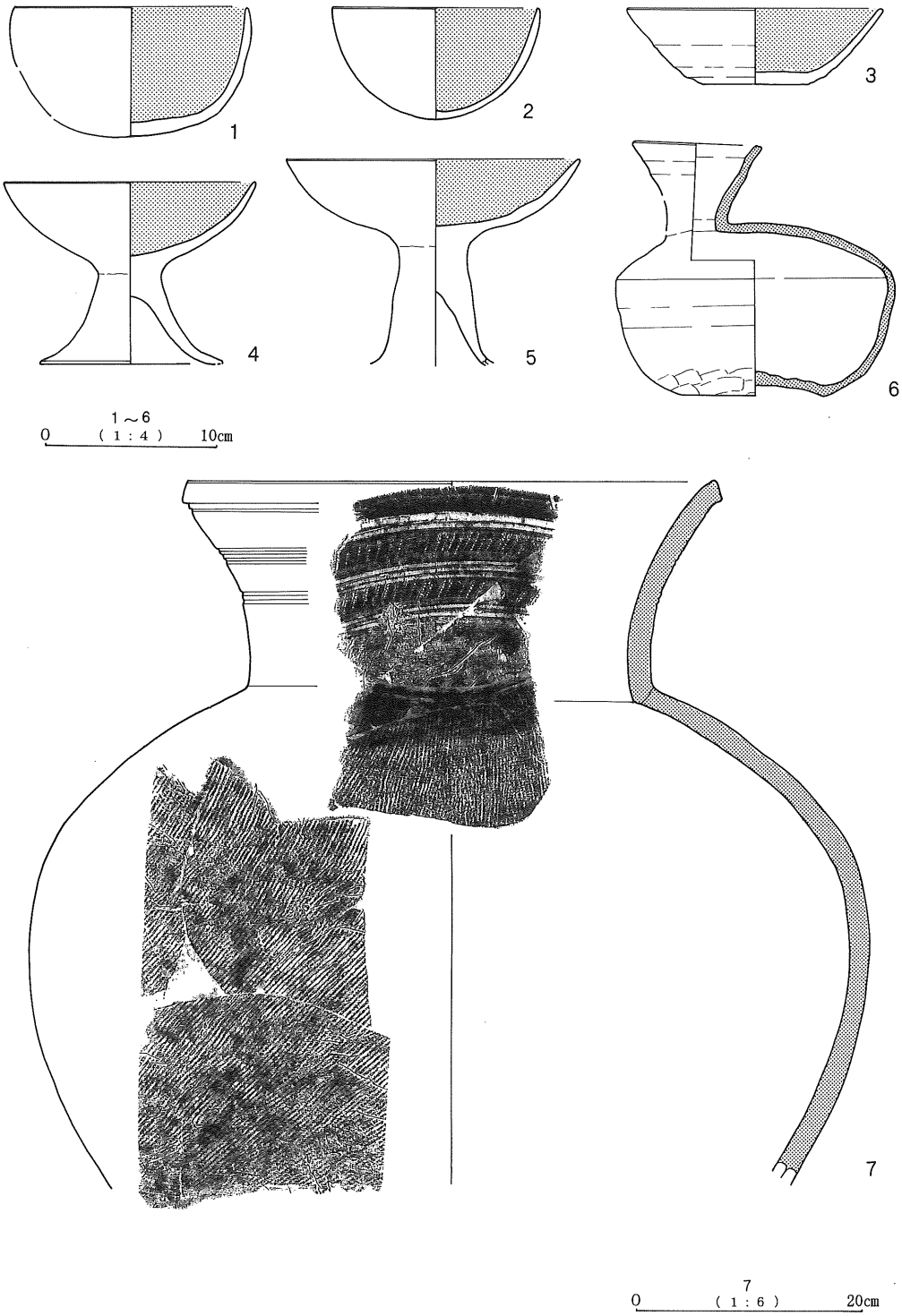
１）第１号周湟（第78・79図、図版二十二・二十三・四十）



1　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
　　礫多含、砂質ローム含む、パミス多含。
2　黒色土層（10ＹＲ２/１）
　　砂質ローム・パミス・砂粒少含。
3　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　　砂質ローム・砂粒多含。
4　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　　砂主体。

0　標高 685,15m　3m
（１：120）

第78図　第１号周湟実測図



第79図　第1号周湟出土遺物実測図

第23表　第1号周湟出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
79－1	土師器坏	13.6	7.7		ヘラミガキ	黒色処理
79－2	土師器坏	(12.2)	6.6		ヘラミガキ	黒色処理
79－3	土師器坏	(15.3)	4.5	6.2	ロクロ成形、底部回転糸切り	黒色処理
79－4	土師器高坏	(15.8)	10.8	(10.8)	ヘラミガキ、剥離・摩滅	坏部　黒色処理 脚部　ナデ
79－5	土師器高坏	(17.4)	〈12.3〉	－	ヘラミガキ、剥離	坏部　黒色処理 脚部　ナデ
79－6	須恵器平瓶	7.0	15.1	8.0	ロクロ成形、胴下部　ヘラケズリ	
79－7	須恵器甕	(47.1)	〈62.4〉	－	口縁部　篦描横線文・櫛描刺突文 胴部　叩き目	

本址は調査区東側、B－こ－1～3、C－あ～う－10、D－あ～え－1～4グリッド内に位置する。古墳の周湟と考えられるが墳丘・主体部は存在しない。第17・19号住居址、第28号土坑、Pitと重複関係にあり、新旧関係は第17・19号住居址→本址→第28号土坑、Pitとなる。また、周湟による円形の区画内中央に第18号住居址が存在する。

周湟幅を含む全体径は南北14.4m、東西14mを測る。北側に幅約10mの張り出しをもち、南側を掘り残してブリッジとしている。墳丘径は南北11.4m、東西10.5mの円形を呈することから円墳が想定される。

溝幅は張り出しをもつ北側が最も広く3～4m、中央部分で1.5～1.7mを測り、南側に向かって徐々に細くなる。確認面からの深さは南側ブリッジ付近が最も浅く20cmを測る他は40～60cmの深さを有する。底面は概ね平坦であるが、北側張り出し部の外周側は底面よりさらに30～40cm程深く掘り込まれている。また、北東部外周側には1.2×0.7mの楕円形の土坑が掘り込まれている。底面からの深さは30cmを測り、覆土は4層が主体となる。

周湟内覆土は4層からなり、周湟内にみられる多量の礫は1・2層中から出土している。これらは墳丘を構築する際の構材と考えられ、墳丘の崩壊に伴って周湟内に崩落したものと考えられる。

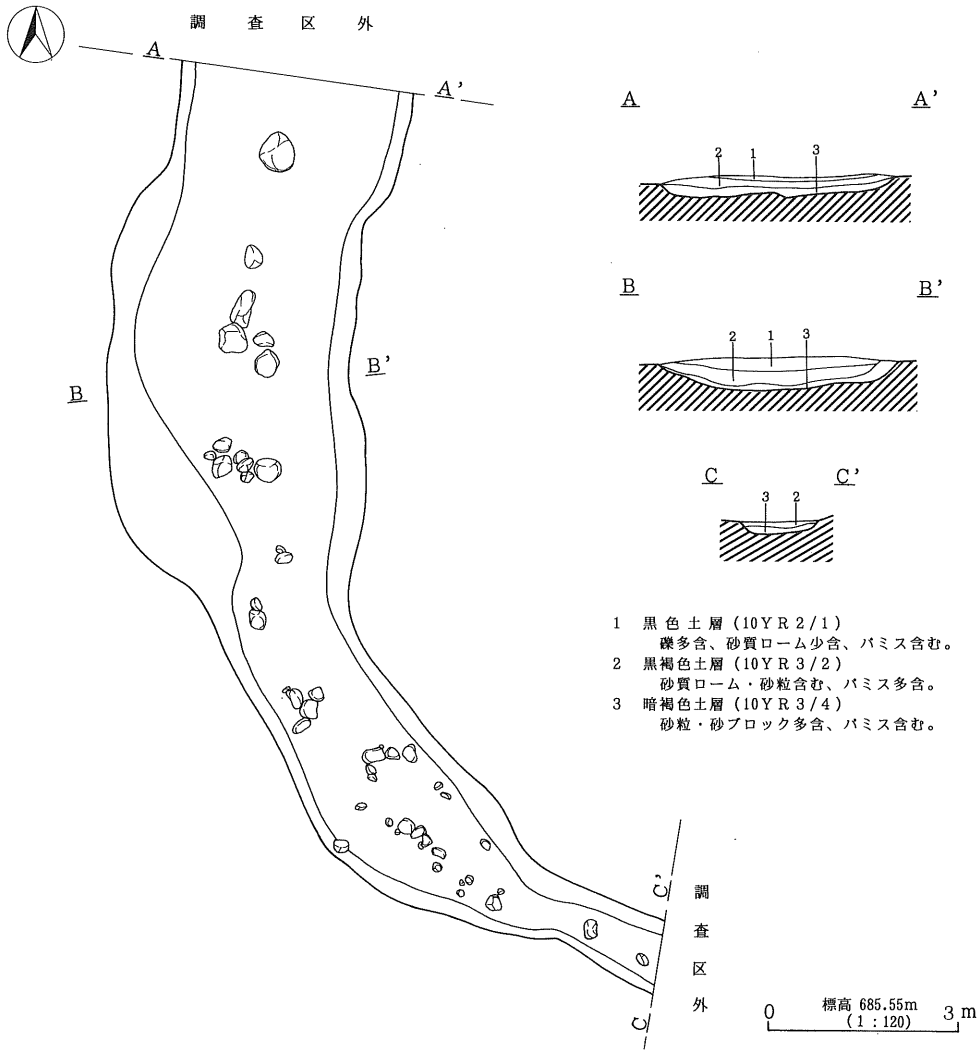
遺物は土師器5点・須恵器2点を図示した。

1・2は丸底の土師器坏で外面にヘラミガキ、内面に黒色処理が行われる。土師器高坏には坏部内面に黒色処理される4・5がある。坏部は外稜をもたず浅い椀型を呈し、5は見込み部に浅い段を有する。また4の脚部は「ハ」の字状に開くのに対し、5は柱状で裾部で大きく開く形態のものである。須恵器には平瓶（6）と大型の甕（7）がある。3は内面黒色処理、底部回転糸切り未調整の土師器坏で、奈良時代から平安時代初頭のものと思われる。

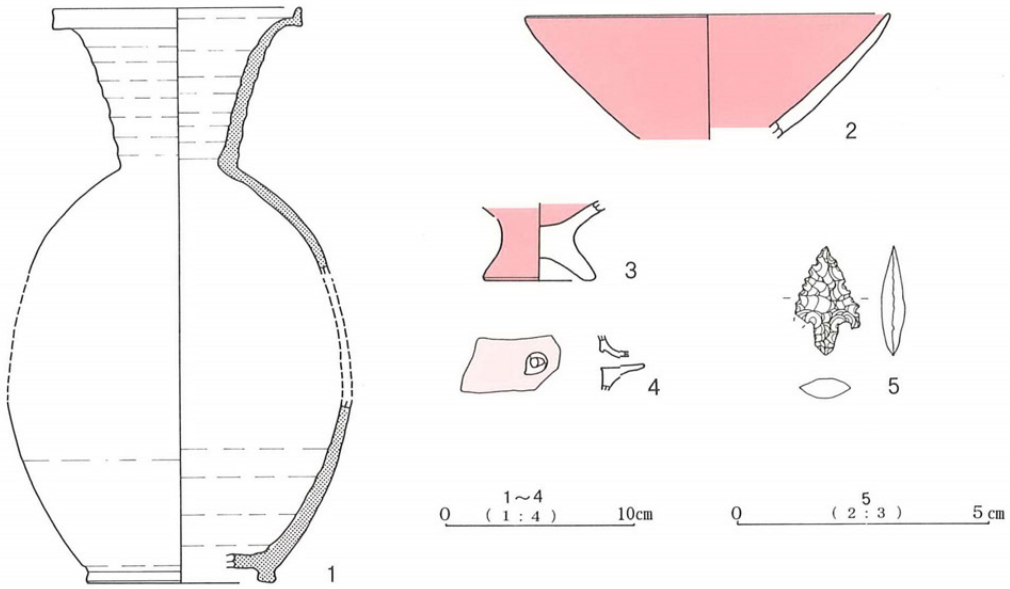
2）第２号周湟（第80・81図、図版二十四・四十・四十八）

本址は調査区東端部、Ａ－く～こ－９・10、Ｂ－き～こ－１～３グリッド内に位置する。第20号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。第１号周湟と同様に古墳の周湟と考えられるが、北側・東側の大半が調査区外であるため全体の規模・形態は不明である。

検出長14.7m、溝幅0.9～４m、確認面からの深さ20～47cmを測り、底面は概ね平坦な状態である。確認された周湟の状況は南方に行くに従って細く、浅くなる傾向がみられることから、南側にブリッジを有するものと考えられる。覆土は４層からなり、周湟内にみられる礫は１層中からの出土である。これらは第１号周湟内にみられる礫と同様に墳丘を構築する際の構材と考えられ、墳丘の崩壊に伴って周湟内に崩落したものと思われる。



第80図　第２号周湟実測図



第81図　第2号周湟出土遺物実測図

第24表　第2号周湟出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
81－1	須恵器長頸壺	(13.0)	〈30.5〉	(9.8)	ロクロ成形	
81－2	高坏	(19.5)	〈6.6〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
81－3	高坏	－	〈4.2〉	6.0	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　ナデ、赤色顔料付着
81－4	注口土器	－	〈3.0〉	－	ヘラミガキ、淡い赤色塗彩	ナデ

遺物は須恵器1点・弥生土器3点・石器1点を図示したが、このうち弥生土器・石器は混入品である。

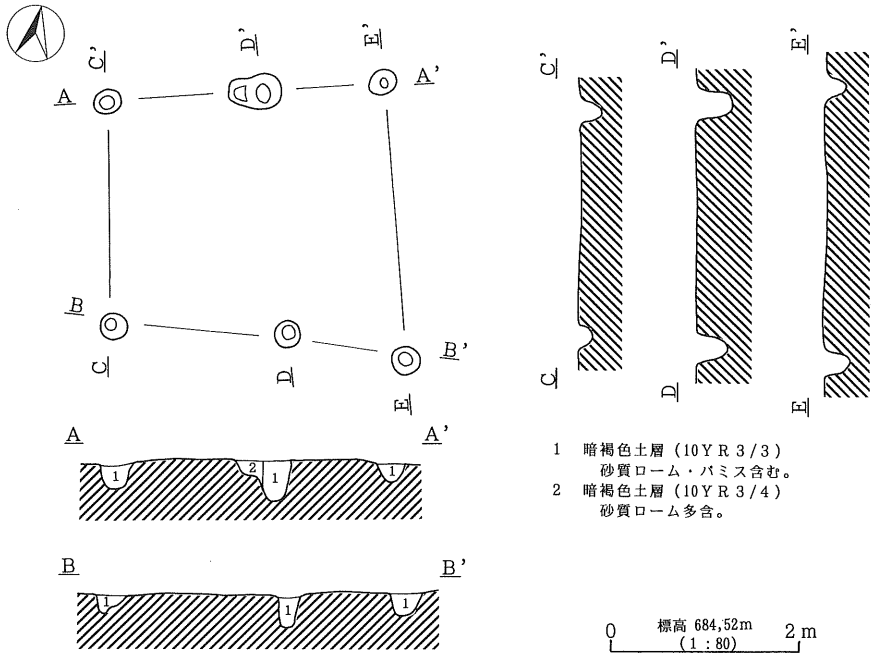
1はロクロ成形による長頸壺で、平安時代初頭のものと思われる。弥生土器には赤色塗彩される高坏（2・3）・注口土器（4）があるがいずれも小片で全体の器形の知れるものはない。石器には黒曜石製の石鏃（6）がある。

以上、第1・2号周湟は墳丘はすでに削平され主体部も残存しないが古墳の周湟と考えられ、第1号周湟から墳丘径11m前後の円墳が想定される。出土遺物は古墳時代中期後半の様相を示すものであるが、奈良時代から平安時代初頭の時間差のあるものがみられることから、北西ノ久保遺跡で調査された周湟と同様に、この2基の古墳も古墳時代中期後半に築造され、奈良時代～平安時代初頭まで何らかの祭祀が行われていた可能性が考えられる。

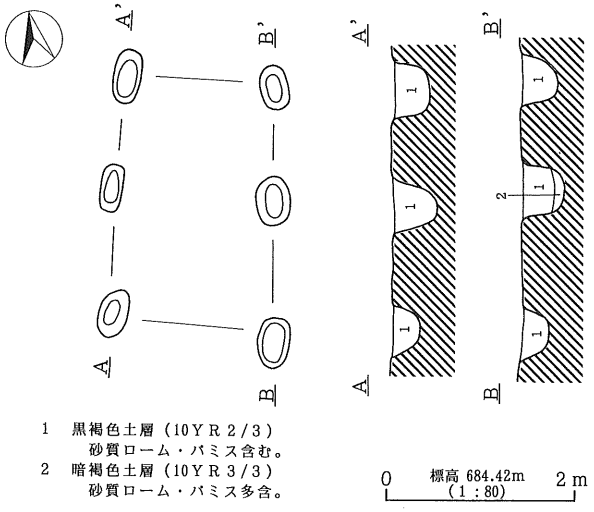
第４節　掘立柱建物址

１）第１号掘立柱建物址（第82図、図版二十四）

本址は調査区西側、Ｅ－い・う－９・10グリッド内に位置する。柱穴の配置が不揃いであるが掘立柱建物址とした。６個の柱穴からなる側柱式の建物址で、Ｐ１が第６号土坑と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。



第82図　第１号掘立柱建物址実測図



第83図　第２号掘立柱建物址実測図

平面形は東西方向の歪んだ長方形で、長軸方位はＮ－80°－Ｅを示す。規模は東西２間3.2m、南北１間2.9mで、東西柱穴間は128cm～196cmとばらつきがある。柱穴規模は30cm前後の円形を呈し、深さは20cm～48cmを計測する。覆土はＰ２が２層に分割される他は１層からなり、柱痕は確認されなかった。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

2）第２号掘立柱建物址（第83図）

本址は調査区西側、Ｅ－う－７・８グリッド内に位置する。６個の柱穴からなる側柱式の建物址で、第５号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。

平面形は南北方向の長方形で、長軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。規模は南北２間2.5m、東西１間1.6mで、南北柱穴間は120cm～150cmを測る。柱穴規模は50cm×30cm前後の楕円形を呈し、深さは28cm～41cmを計測する。

覆土はＰ６が２層に分割される他は１層からなり、柱痕は確認されなかった。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

第５節　土坑

本遺跡からは総数で37基の土坑が検出された。そのうち出土遺物・重複関係・形態の特徴から、時期を決定できるものには縄文時代の土坑７基、弥生時代中期の土坑５基、弥生時代後期の土坑２基があり、他の23基は時期不明である。

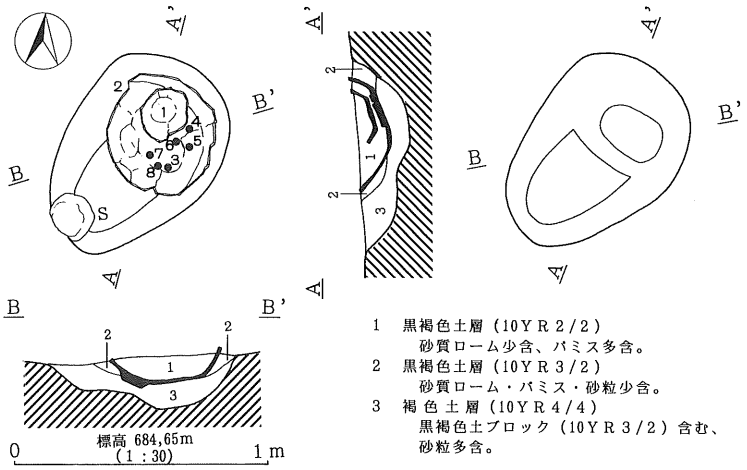
縄文時代の土坑は「陥し穴」とされている土坑であり、第３～６・８～10号土坑が相当する。形態は楕円形を呈し、底面に１～３個のピットがみられる。弥生時代中期の土坑には第14・15・18・25・32号土坑、弥生時代後期の土坑には第１・２号土坑があたる。

各土坑の形態・規模等については土坑一覧表に記した。

1）弥生時代の土坑

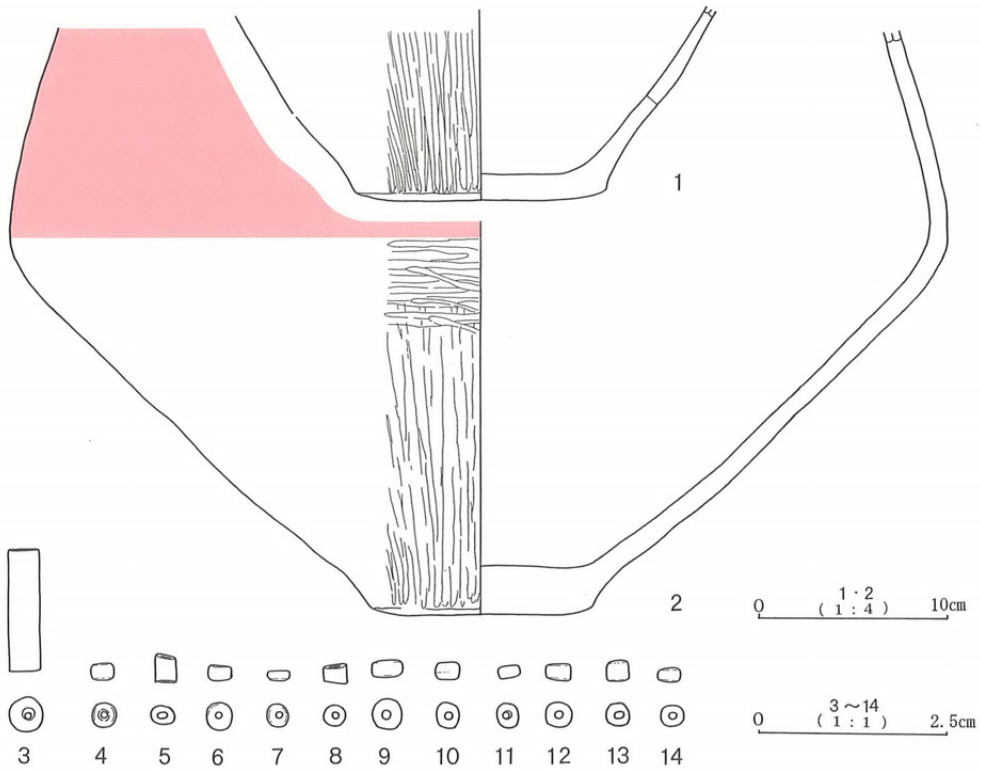
第１号土坑（第84・85図、図版二十五・四十一・四十七）

調査区東側、Ｄ－お－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。85×59cmの楕円形を呈し、南側にテラスを有する。確認面からの深さは25cmを測り、長軸方位はＮ－30°－Ｅを示す。



第84図　第１号土坑実測図

覆土は３層からなり、壺（２）内に１



第85図　第1号土坑出土遺物実測図

第25表　第1号土坑出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	成形・調整・文様 外面	内面
85－1	壺	－	〈10.2〉	13.4	縦ヘラミガキ	剥離不明
85－2	壺	－	〈31.1〉	11.8	胴上半　ヘラミガキ、赤色塗彩 胴下半　縦・横ヘラミガキ	剥離不明

		最大径(mm)	最大厚(mm)	材質	色調			最大径(mm)	最大厚(mm)	材質	色調
85－3	管玉	4.3	16.2	碧玉	緑灰色	85－9	ガラス小玉	3.9	2.3	ガラス	スカイブルー
85－4	ガラス小玉	3.3	2.4	ガラス	スカイブルー	85－10	ガラス小玉	3.3	2.5	ガラス	スカイブルー
85－5	ガラス小玉	2.8	3.0	ガラス	スカイブルー	85－11	ガラス小玉	3.2	1.8	ガラス	スカイブルー
85－6	ガラス小玉	3.3	2.0	ガラス	スカイブルー	85－12	ガラス小玉	3.4	2.5	ガラス	スカイブルー
85－7	ガラス小玉	3.1	1.4	ガラス	スカイブルー	85－13	ガラス小玉	3.1	2.6	ガラス	スカイブルー
85－8	ガラス小玉	3.1	2.5	ガラス	スカイブルー	85－14	ガラス小玉	3.5	1.7	ガラス	スカイブルー

層黒褐色土が充填され、下層は３層褐色土が主体となる。

壺２は底部を南西に向けて横にされた状態で出土し、上部は削平され残存しない。壺１と玉類は壺２内からの出土である。

遺物は壺（１・２）の他、管玉（３）・ガラス小玉（４～14）を図示した。

１は大型の壺で上半は赤色塗彩され、下半はヘラミガキが行われる。１・２ともに内面は荒れており剥離が著しい。３は碧玉製の管玉で長さ16.2㎜、径4.3㎜を測る。ガラス小玉は総数で11個が出土した。径３㎜前後で最小は５の2.8㎜、最大は９の3.9㎜で、厚さは７の1.4㎜が最小、５の3.0㎜が最大で2.5㎜前後のものが最も多い。

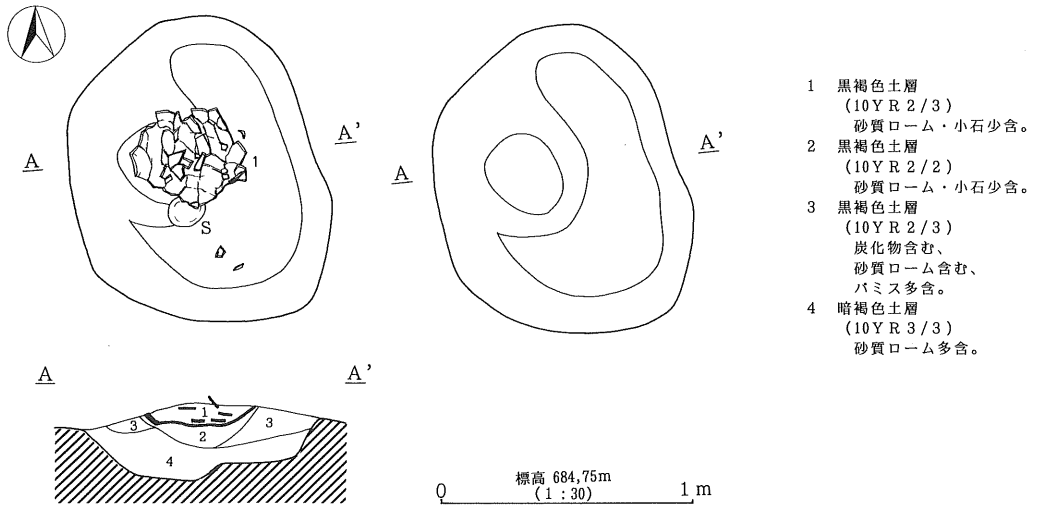
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期前半の壺棺墓であろう。

第２号土坑（第86・87図、図版二十五・四十一）

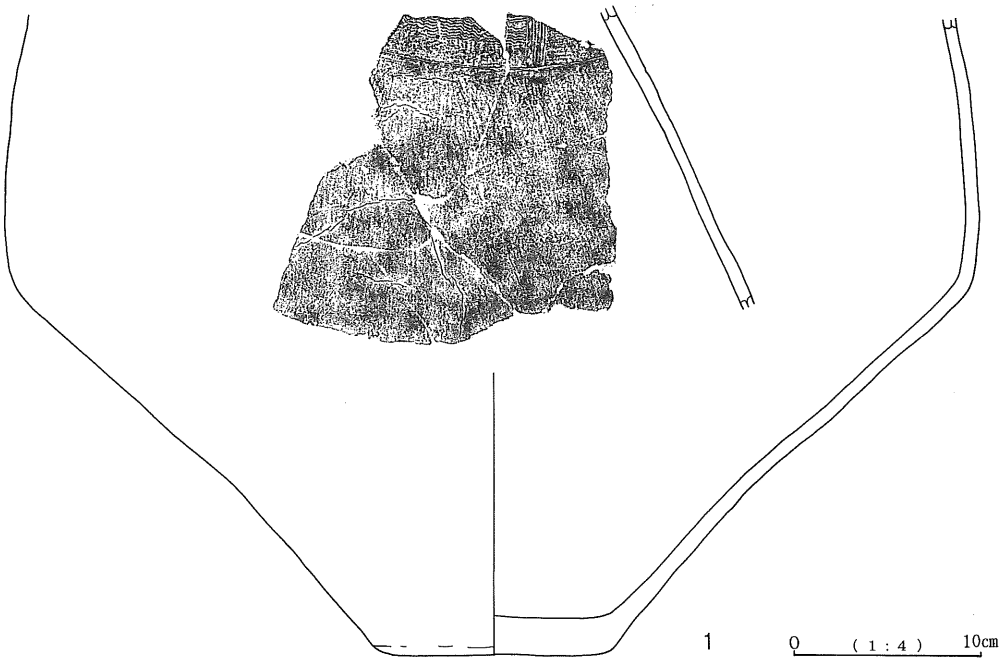
調査区東側、Ｄ－え－１グリッド、第１号土坑の北約３ｍの位置から検出された。他遺構との重複関係はない。125×96㎝の楕円形を呈し東側にテラスを有する。確認面からの深さは21㎝を測り、長軸方位はＮ－19°－Ｗを示す。覆土は４層からなり、壺（１）内に１層黒褐色土が充填される。壺（１）は底部を西に向けて横にされた状態で出土し、上部は削平され残存しない。

遺物は壺（１）が図示できたのみである。１は大型の壺で頸部に篦描横線文、櫛描波状文＋垂下文が施文され、胴下半は若干括れて底部に至る。外面に赤色塗彩はされずヘラミガキが行われる。内面は荒れており剥離が著しい。

以上玉類の出土はなかったものの、壺１の出土状況から本址は第１号土坑と同様に弥生時代後期前半の壺棺墓であろう。



第86図　第２号土坑実測図

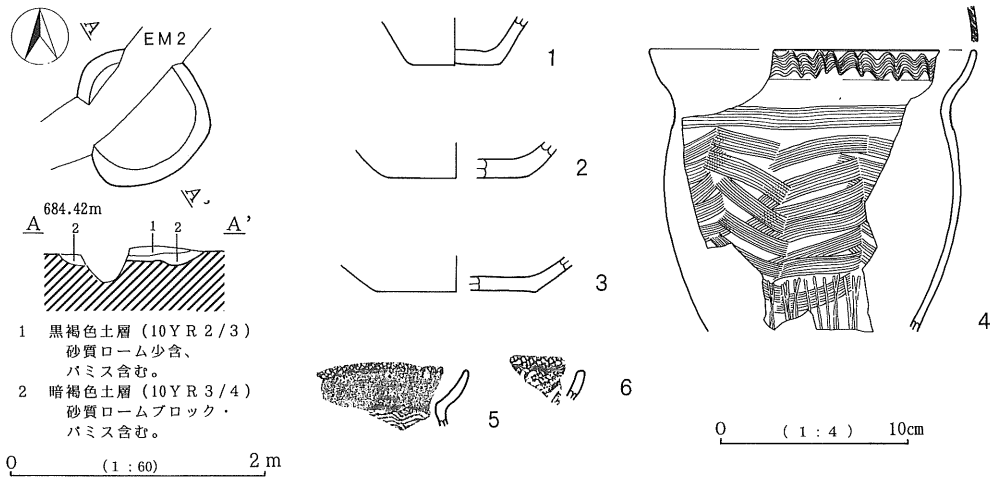


第87図　第2号土坑出土遺物実測図

第26表　第2号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
87－1	壺	－	〈16.1〉 〈34.0〉	13.0	頸部　篦描横線文・櫛描波状文→櫛描垂下文 胴部　縦ヘラミガキ	剥離不明

第14号土坑（第88図、図版二十五・四十二）



第88図　第14号土坑・出土遺物実測図

第27表　第14号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
88－1	壺	－	〈2.5〉	5.0	ナデ	ナデ
88－2	壺	－	〈1.9〉	(7.8)	摩滅不明	摩滅・剥離不明
88－3	壺	－	〈1.9〉	(8.4)	横ヘラミガキ	摩滅不明
88－4	甕	(17.2)	〈15.0〉	－	口唇部　縄文、口縁部　櫛描波状文 頸部　櫛描横線文、胴部　櫛描羽状文（上→下・右回り）	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　斜ヘラミガキ

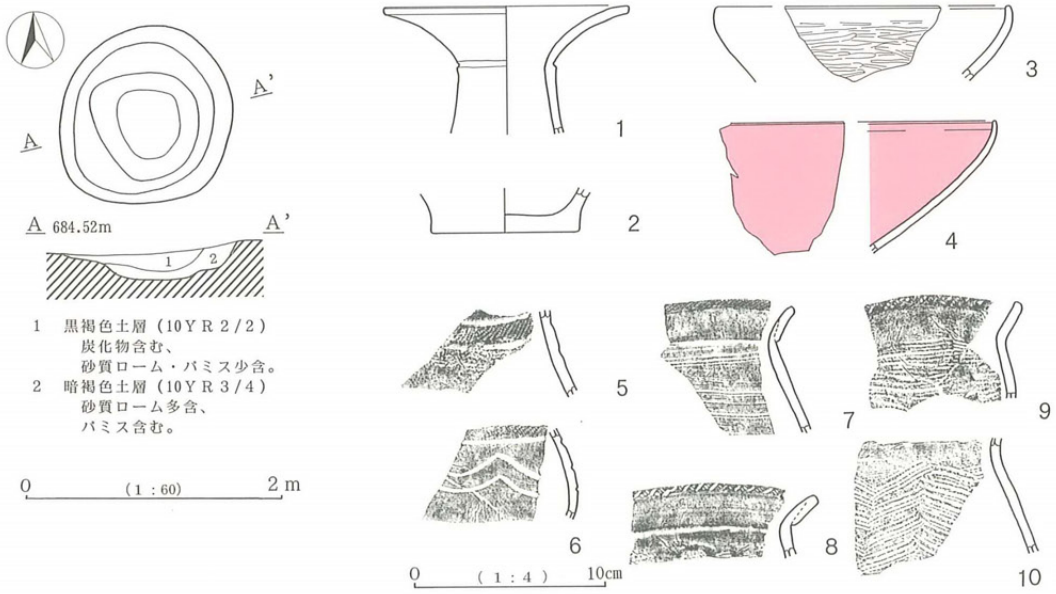
調査区南西部、Ｅ－え－10グリッドに位置し、第２号円形周溝墓に切られる。112×104cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは19cmを測る。長軸方位はＮ－45°－Ｗを示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は２層に分割された。

遺物は壺（１～３）・甕（４～６）を図示した。

壺はいずれも底部のみで全体の器形は不明である。甕は受口口縁で、口唇部に縄文が施される。４は口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描横線文、胴部に櫛描羽状文が施文される。

第15号土坑（第89図、図版二十五）

調査区西側、Ｅ－う－９グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。140×134cmの円形を呈し、確認面からの深さは26cmを測る。長軸方位はＮ－６°－Ｅを示す。底面は平坦で、中央



第89図　第15号土坑・出土遺物実測図

にさらに深い掘り込みを有する。覆土は２層に分割された。

遺物は壺（１・２・５・６）・甕（７～10）・鉢（３・４）を図示した。

１は口縁部が大きく開き、頸部に篦描横線文が１条施文される。甕は拓影図４点が図示できたのみである。口唇部に縄文が施される７～９、胴部に櫛描羽状文が施文される10がある。鉢とした３・４は口縁部が内湾するもので、４は赤色塗彩され高坏の坏部の可能性がある。

第28表　第15号土坑出土土器観察表

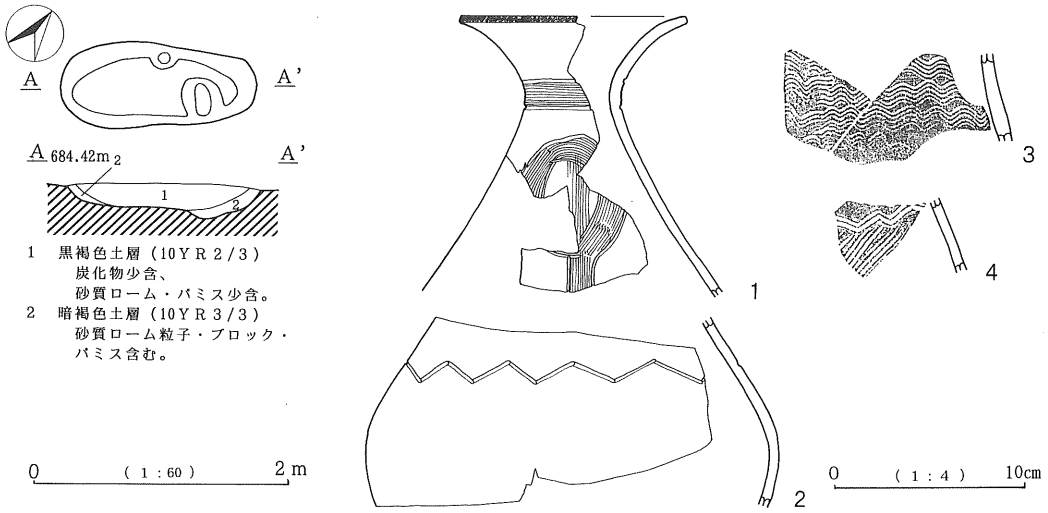
挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
89－１	壺	(13.0)	〈6.8〉	－	頸部　篦描横線文１	口縁部　横ヘラミガキ
89－２	壺	－	〈2.4〉	7.9	横ヘラミガキ	摩滅不明
89－３	鉢	(15.6)	〈4.0〉	－	横ヘラミガキ　赤色顔料付着	横ヘラミガキ
89－４	鉢	－	〈7.0〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

第18号土坑（第90図、図版二十五・四十二）

調査区西側、Ｅ－え－８グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。154×64cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは18cmを測る。長軸方位はＮ－52°－Ｅを示す。底面は平坦で、ピット状の掘り込みが２個確認された。覆土は２層に分割されたが、１層が主体を占める。

遺物は壺（１・２）・甕（３・４）を図示した。

壺１・２は同一個体と思われ、口唇部に縄文、頸部は櫛描横線文の上下を２本の篦描横線文で



第90図　第18号土坑・出土遺物実測図

第29表　第18号土坑出土土器観察表

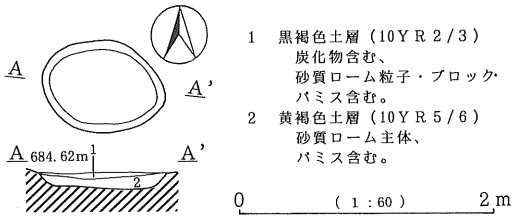
挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
90－1	壺	(12.0)	〈14.9〉	－	口唇部　縄文、頸部　櫛描横線文→篦描横線文2 胴上半　櫛描文→篦描文区画	口縁部　横ヘラミガキ 頸部～胴部　ナデ
90－2	壺	－	〈10.1〉	－	胴中位　篦描山形文1	ナデ

区画する。胴上位は櫛描文の周囲を篦描文で区画し、中位に篦描山形文が施文される。

甕には櫛描波状文の3、櫛描斜状文と山形文とを組み合わせる4がある。

第25号土坑（第91～96図、図版二十六・四十二～四十四）

調査区東側、D－お－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。100×74cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは12cmと浅い。長軸方位はN－75°－Wを示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分割された。1層は炭化物を含む黒褐色土層で遺構上面を覆う。2層は砂質ロームを主体とする黄褐色土層で覆土の大半を占める。



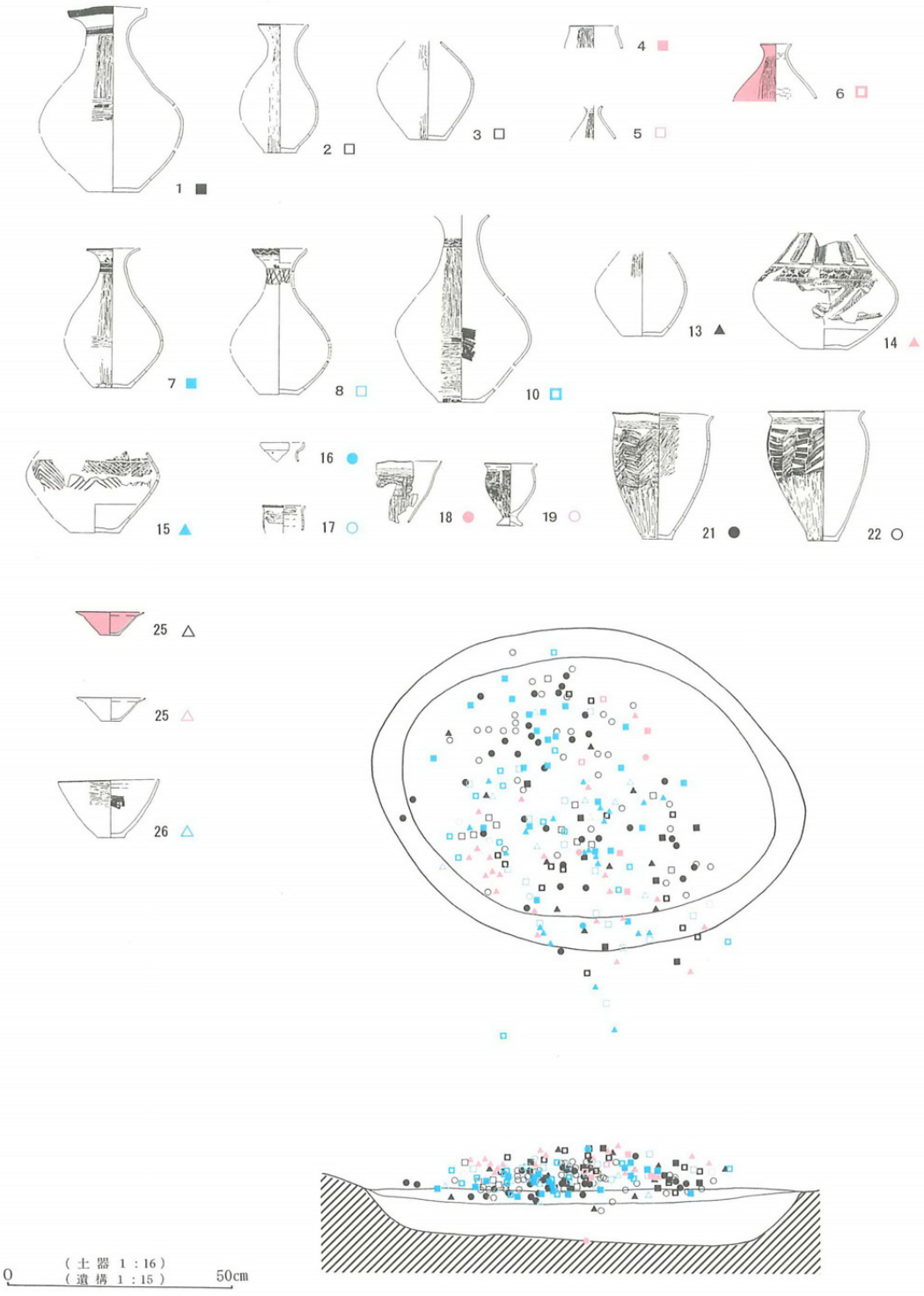
第91図　第25号土坑実測図

遺物は1層中から多量に出土しており、壺（1～15）・甕（16～22・27～29）・甑（23・24）・鉢（25・26）を図示した。

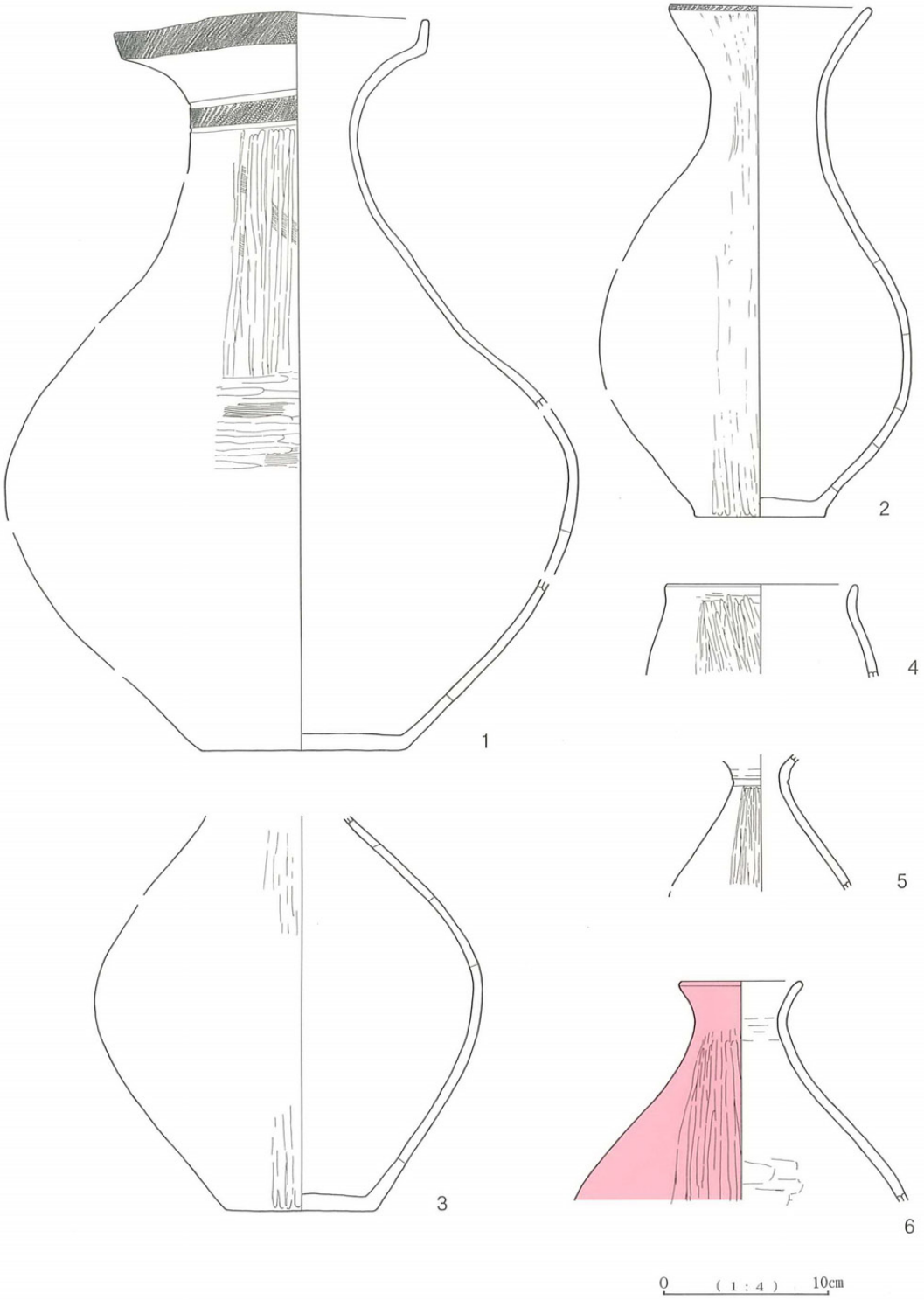
壺は14・15を除き、施文部分は口縁部と頸部に限られる。受口口縁の1・8の口縁部には縄文が施され、8には篦描山形文が加えられる。頸部の文様には篦描横線文のみの5、縄文地に篦描横線文の1、さらに篦描山形文が加えられる7・10、2条の篦描横線文間に篦描斜格子目文が施文される8がある。2は口唇部の縄文を除いて文様帯はみられない。14は胴上半に櫛描垂下文と刺突文、胴中位には縄文地に篦描横線文・山形文・重三角文が、15には縄文地に篦描横線文・重山形文が施文され、14には円形浮文が貼り付けされる。6は赤色塗彩されると思われるが判然としない。

甕には大小の器種があり、大型の21・22は口唇部に縄文、頸部に櫛描横線文、胴上半に櫛描羽状文が施文され、21は口唇部に刻目が加えられる。17は小型品で頸部の文様帯はみられない。この他、深鉢形で頸部に櫛描横線文、胴上半に櫛描波状文＋垂下文の18、受口口縁の16・27・28がある。19は胴部の櫛描波状文を5条の櫛描垂下文で区画する台付甕であり、29は頸部に櫛描波状文、胴部にコの字重ね文の台付甕であろう。甑には体部が直線的に開く23・24があり、鉢には赤色塗彩される25とヘラミガキが行われる26がある。

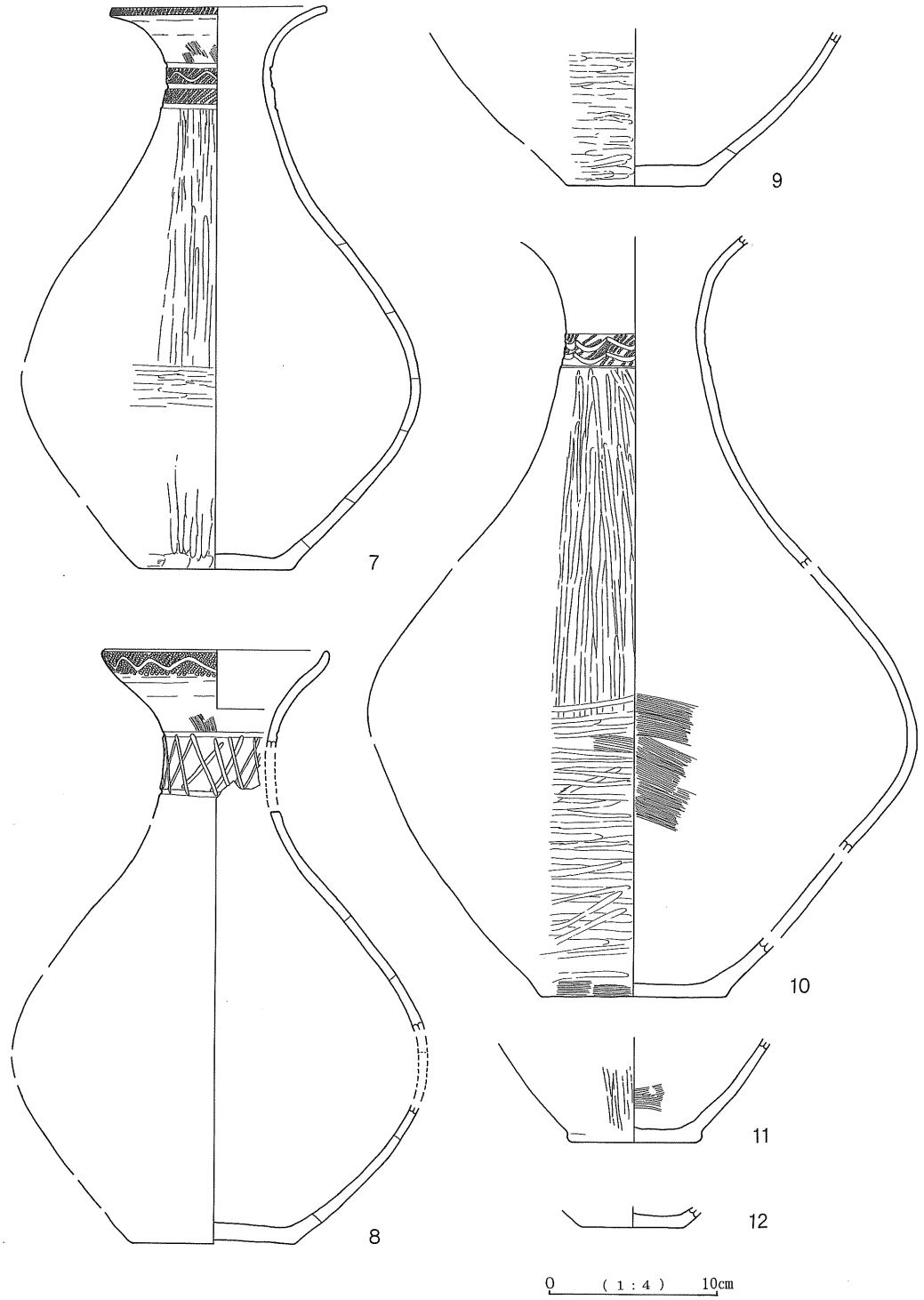
これらの遺物の分布状況は第92図に示したが、各個体毎のまとまりがみられないことから土器の破砕後に廃棄されたものと推定される。



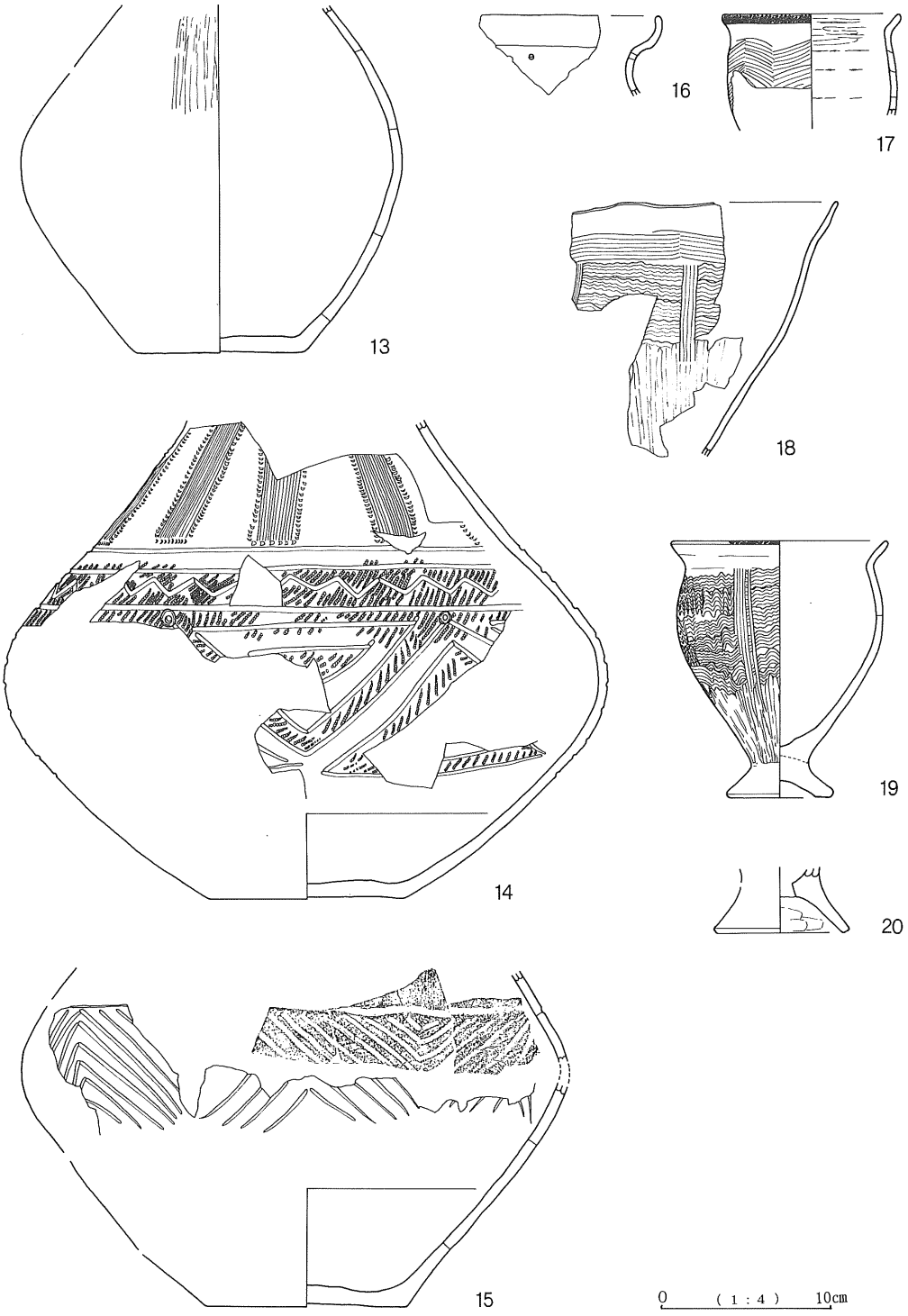
第 92 図　第 25 号土坑遺物分布図



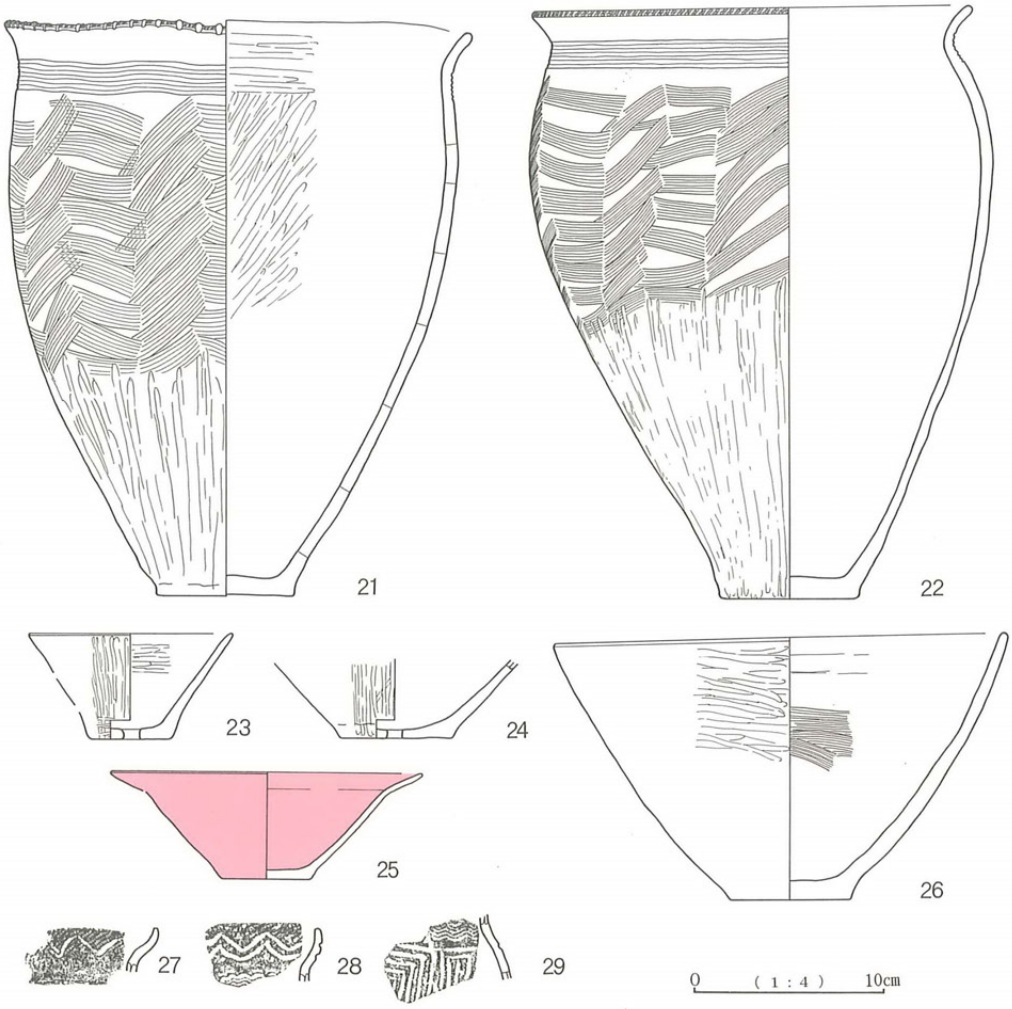
第93図　第25号土坑出土遺物実測図〈1〉



第94図　第25号土坑出土遺物実測図〈2〉



第95図　第25号土坑出土遺物実測図〈3〉



第96図　第25号土坑出土遺物実測図〈4〉

第30表　第25号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
93－1	壺	19.0	44.8	12.0	口縁部　縄文、頸部　縄文地文→篦描横線文2 胴上半　縦ヘラミガキ、胴下半　横ヘラミガキ	口縁部～頸部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ、ハケメ
93－2	壺	12.1	31.2	7.8	口唇部　縄文 口縁部～胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ、ハケメ
93－3	壺	－	〈24.0〉	9.0	ヘラミガキ 摩滅	摩滅・剥離不明
93－4	壺	11.6	〈5.6〉	－	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
93－5	壺	－	〈8.7〉	－	頸部　篦描横線文1 胴部　縦ヘラミガキ、摩滅	ナデ
93－6	壺	(7.2)	〈13.3〉	－	ヘラミガキ、淡い赤色塗彩、摩滅	ナデ、摩滅
94－7	壺	12.8	33.8	9.0	口唇部　縄文、頸部　縄文地文→篦描横線文3・篦描山形文1 胴上位・下位　縦ヘラミガキ→胴中位　横ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ、ハケメ
94－8	壺	(13.3)	〈35.5〉	9.8	口縁部　縄文地文→篦描山形文1 頸部　篦描横線文2→区画内篦描斜格子目文、摩滅	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ、摩滅
94－9	壺	－	〈9.3〉	8.4	横ヘラミガキ	ハケメ
94－10	壺	－	〈45.5〉	11.2	頸部　縄文地文→篦描横線文2・篦描山形文2 胴上半　縦ヘラミガキ→胴下半　横ヘラミガキ	ナデ、ハケメ 摩滅・剥離
94－11	壺	－	〈6.2〉	(7.6)	縦ヘラミガキ、摩滅	ハケメ 摩滅・剥離
94－12	壺	－	〈1.3〉	6.2	横ヘラミガキ	ナデ
95－13	壺	－	〈20.5〉	9.8	縦ヘラミガキ、摩滅	摩滅・剥離不明
95－14	壺	－	〈28.2〉	11.4	胴上位　櫛描垂下文→篦描刺突文区画 胴中位　縄文地文→篦描横線文3・篦描山形文1・ 篦描重三角文・円形浮文6(残存3)	ハケメ 摩滅・剥離
95－15	壺	－	〈19.9〉	(11.8)	胴中位　縄文地文→篦描横線文・篦描重山形文 摩滅	剥離不明
95－16	甕	－	〈4.7〉	－	頸部　穿孔2 横ヘラミガキ	摩滅不明
95－17	甕	10.5	〈6.8〉	－	口縁部　縄文　胴部　櫛描縦羽状文(上→下・右回り)	横ヘラミガキ
95－18	甕	－	〈15.0〉	－	頸部　櫛描横線文、胴上半　櫛描波状文4(上→下)→櫛描垂下文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
95－19	台付甕	(12.6)	15.1	(6.0)	口唇部　縄文、胴上半　櫛描波状文6～7(上→下)→櫛描垂下文5 胴下半　縦ヘラミガキ	ヘラミガキ
95－20	台付甕	－	〈3.8〉	7.6	摩滅不明	ナデ
96－21	甕	24.3	30.7	7.3	口唇部　縄文→刻目、頸部　櫛描横線文 胴上半　櫛描縦羽状文(上→下・右回り)、胴下半　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　縦ヘラミガキ
96－22	甕	23.2	31.6	7.5	口唇部　縄文、頸部　櫛描横線文 胴上半　櫛描縦羽状文(上→下・右回り)、胴下半　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　斜ヘラミガキ
96－23	甑	10.6	5.6	4.2	底部　穿孔1 縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
96－24	甑	－	〈4.2〉	(6.0)	底部　穿孔1 縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
96－25	鉢	(16.6)	5.7	4.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
96－26	鉢	23.9	14.2	6.5	横ヘラミガキ 摩滅	ハケメ→横ヘラミガキ 摩滅

第32号土坑（第97・98図、図版二十六・四十四）

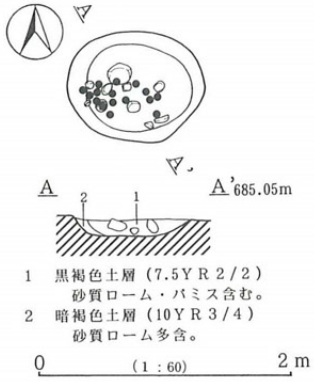
調査区南東部分、D－あ－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。108×86cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは16cmと浅い。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分割されたが、1層黒褐色土層が主体を占める。

遺物は壺（1～3）・甕（4・6～10）・鉢（5）を図示した。

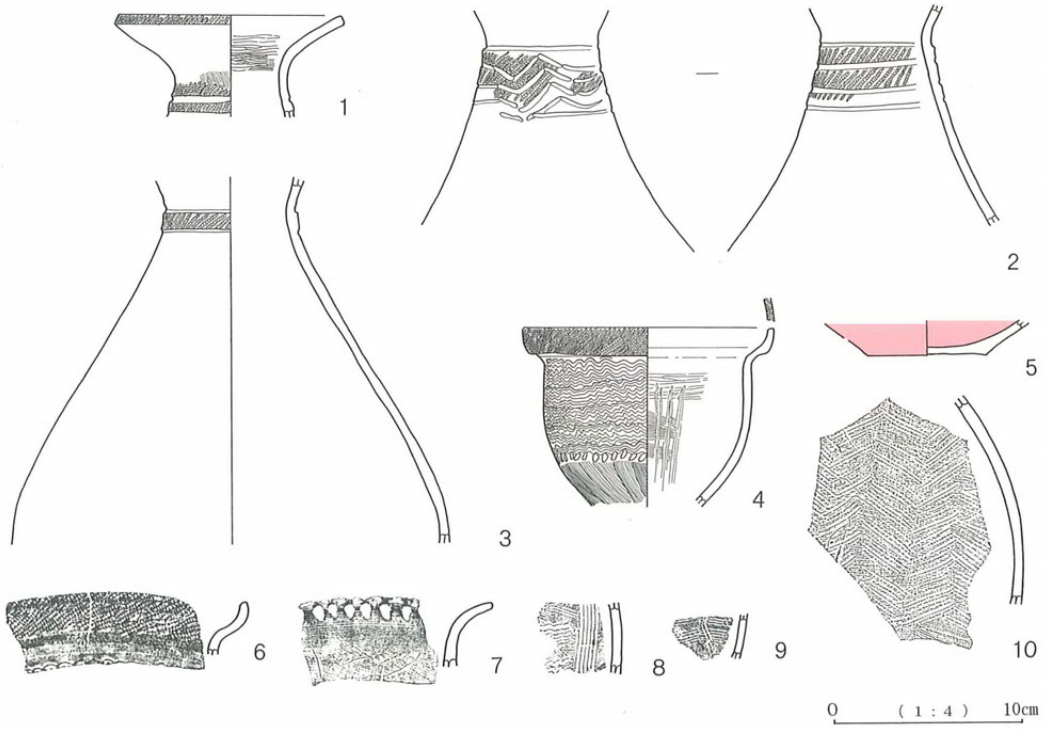
壺は口唇部に縄文が施され、頸部の文様帯は縄文を地文として箆描横線文が施文されるが、2は部分的に山形文となる。

甕には櫛描波状文と垂下文の組み合わせによる8・9、櫛描羽状文の10がある。4は受口口縁で口唇部・口縁部に縄文、胴部に櫛描波状文が施文され、文様帯の下位に刺突文が施される台付甕であろう。

鉢（5）は底部のみで、内外面に赤色塗彩される。



第97図　第32号土坑実測図



第98図　第32号土坑出土遺物実測図

第31表　第32号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
98－1	壺	11.8	〈5.4〉	－	口唇部　縄文、 頸部　縄文地文→篦描横線文	口縁部　横ヘラミガキ
98－2	壺	－	〈12.9〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文4（一部山形文） 胴部　ハケメ→縦ヘラミガキ	ナデ
98－3	壺	－	〈19.4〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文2 胴部　縦ヘラミガキ	ナデ
98－4	甕	(13.2)	〈9.5〉	－	口唇部･口縁部　縄文 胴上半　櫛描波状文5（上→下）→篦描突刺文､胴下半　ハケメ	横ヘラミガキ→縦ヘラミガキ
98－5	鉢	－	〈1.8〉	6.3	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

2）縄文時代の土坑

第3号土坑（第99図、図版二十六）

調査区西端部、Ｅ－き－７グリッドに位置する。第２号住居址の床下から検出され、上半部を切られる。残存する上端径200×62cm、下端径177×45cmの楕円形を呈し、深さは49cmを測る。底面は平坦で長軸に沿って径23cm、深さ22cm・11cmの小ピットが２個確認された。覆土は黒褐色土を基調とし、ローム粒が混入する。

第4号土坑（第99図、図版二十六）

調査区西側、Ｅ－え－10グリッドに位置し、第２号円形周溝墓に切られる。上端径286×128cm、下端径192×38cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは84cmを測る。長軸方位はＮ－８°－Ｗを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上半部で斜めに開く。底面は平坦で長軸に沿って径16～25cm、深さ36～45cmの小ピットが３個確認され、ピット内には杭痕が観察された。覆土は上層に１層黒色土、壁際から底面にかけてローム粒を含む２層暗褐色土が堆積する。

第5号土坑（第99図、図版二十六）

調査区西側、Ｅ－い－８グリッドに位置し、Pit49・138に切られる。上端径298×124cm、下端径210×60cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは62cmを測る。長軸方位はＮ－50°－Ｗを示す。底面は平坦で中央に径36cm、深さ28cmの小ピットが１個検出された。覆土は１層暗褐色土と壁際の２層黒褐色土に分割された。

第6号土坑（第100図、図版二十六）

調査区西側、Ｅ－い－10グリッドに位置し、第１号掘立柱建物址Ｐ１・Pit93に切られる。上端径272×162cm、下端径172×31cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは84cmを測り、壁は上半部で大きく開く。長軸方位はＮ－18°－Ｅを示す。底面は平坦で長軸に沿って径25cm、深さ45cm前後の小ピットが３個確認され、ピット内には杭痕が観察された。覆土は上層に１層黒色土、下層にローム粒・ロームブロックを含む２層黒褐色土が堆積する。

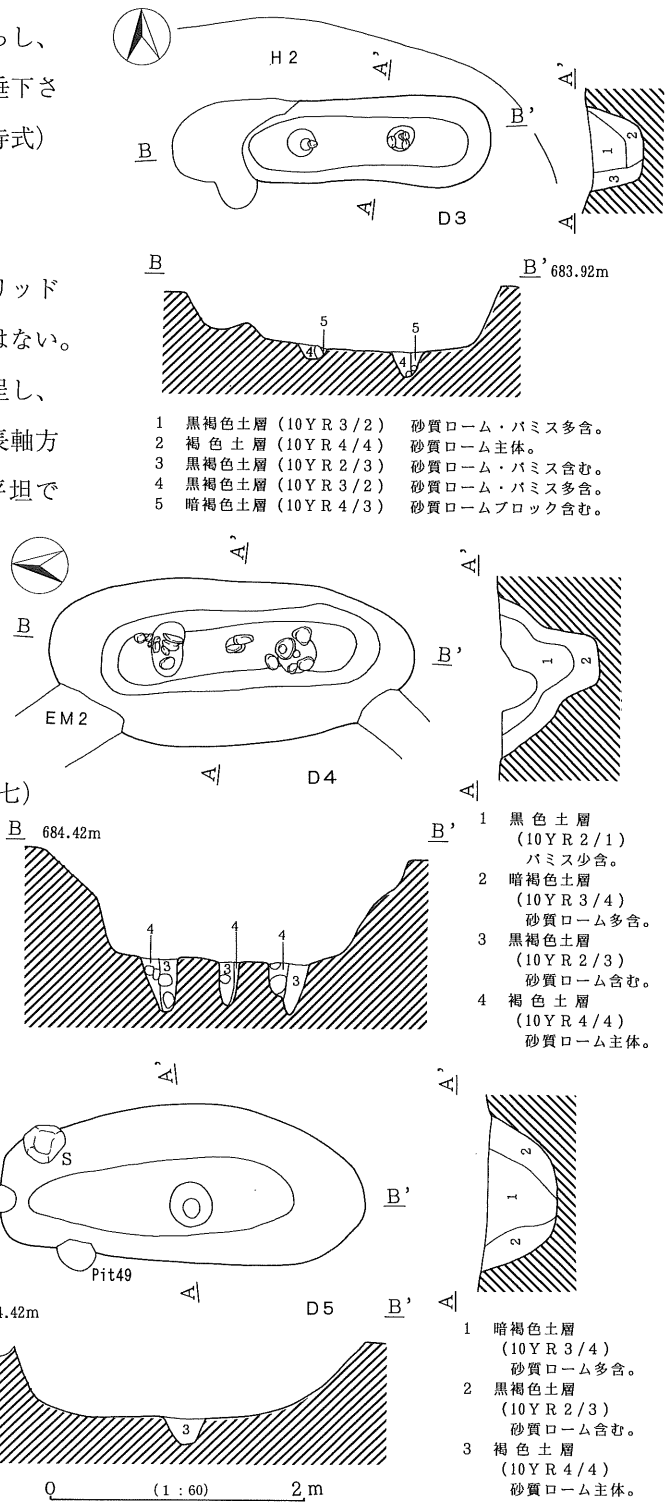
遺物は深鉢（100－１）が１点図示できた。頸部に横位の平行沈線を巡らし、２本一組の沈線でＪ字文を４単位垂下させる深鉢で、縄文時代後期（称名寺式）の所産である。

第８号土坑（第100図、図版）

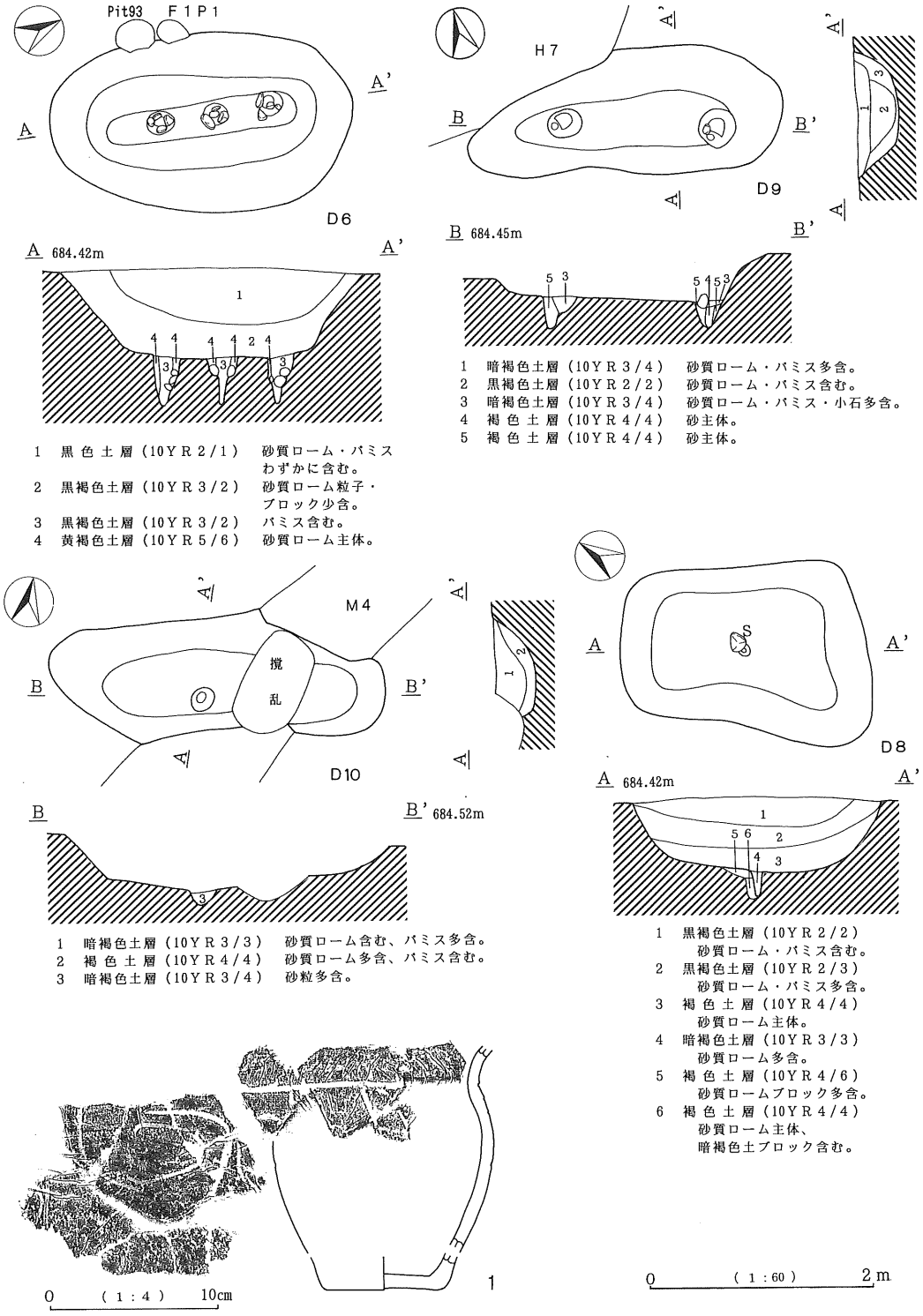
調査区中央付近、Ｃ－こ－10グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。224×142cmの不整な隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは66cmを測る。長軸方位はＮ－32°－Ｗを示す。底面は平坦で中央に径12cm、深さ24cmの小ピットが確認された。覆土は上層に黒褐色土、下層にロームを主体とする３層褐色土が堆積する。

第９号土坑（第100図、図版二十七）

調査区中央付近、Ｃ－け－９グリッドに位置し、第７号住居址に北西部分を切られる。188×110cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは45cmを測る。長軸方位はＮ－82°－Ｗを示す。底面は平坦で長軸に沿って径30cm、深さ21・25cmの小ピットが２個確認された。覆土は３層に分割され、壁際から底面にかけてローム粒を含む３層暗褐色土が堆積する。



第99図　第３・４・５号土坑実測図



第100図　第6・8・9・10号土坑・第6号土坑出土遺物実測図

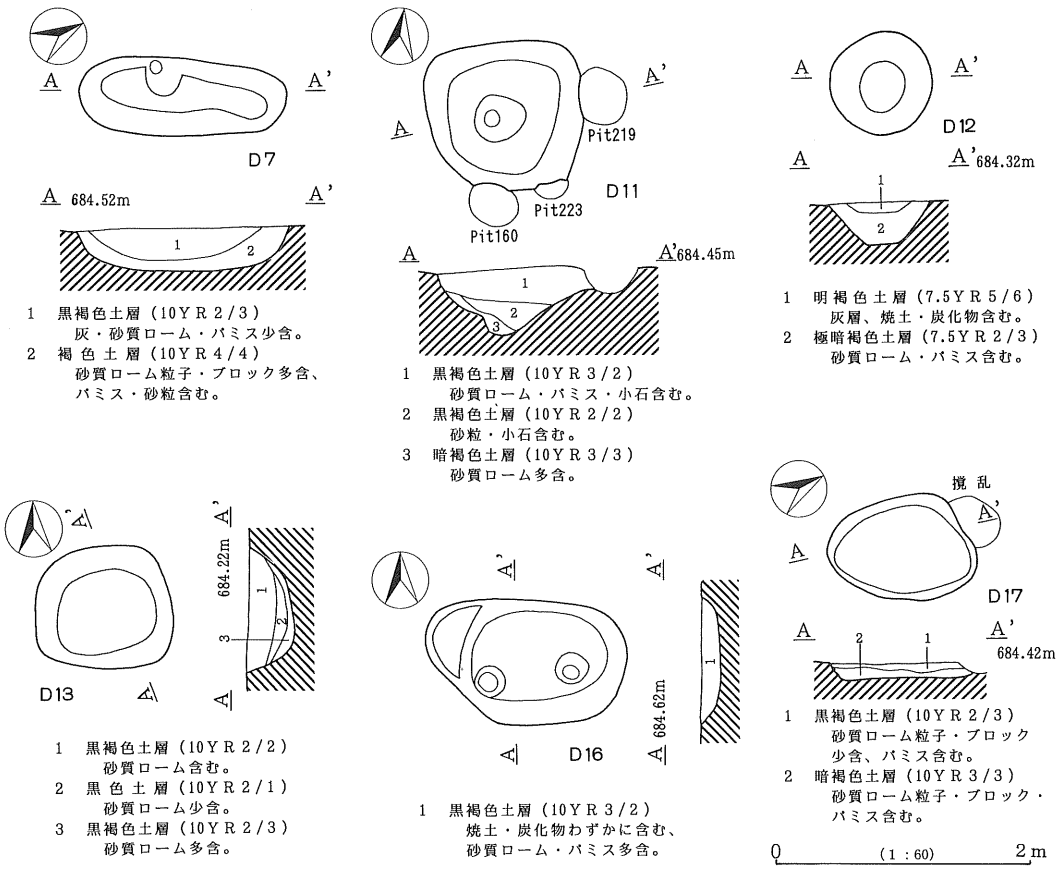
第10号土坑（第100図、図版二十七）

調査区中央付近、Ｄ－き－１グリッドに位置し、第４号溝状遺構に切られる。また、底面を撹乱によって破壊される。300×100cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは51cmを測る。長軸方位はＮ－80°－Ｅを示す。底面は平坦で径24cm、深さ13cmの小ピットが１個確認された。覆土は上層に１層暗褐色土、下層にローム粒を含む２層褐色土が堆積する。

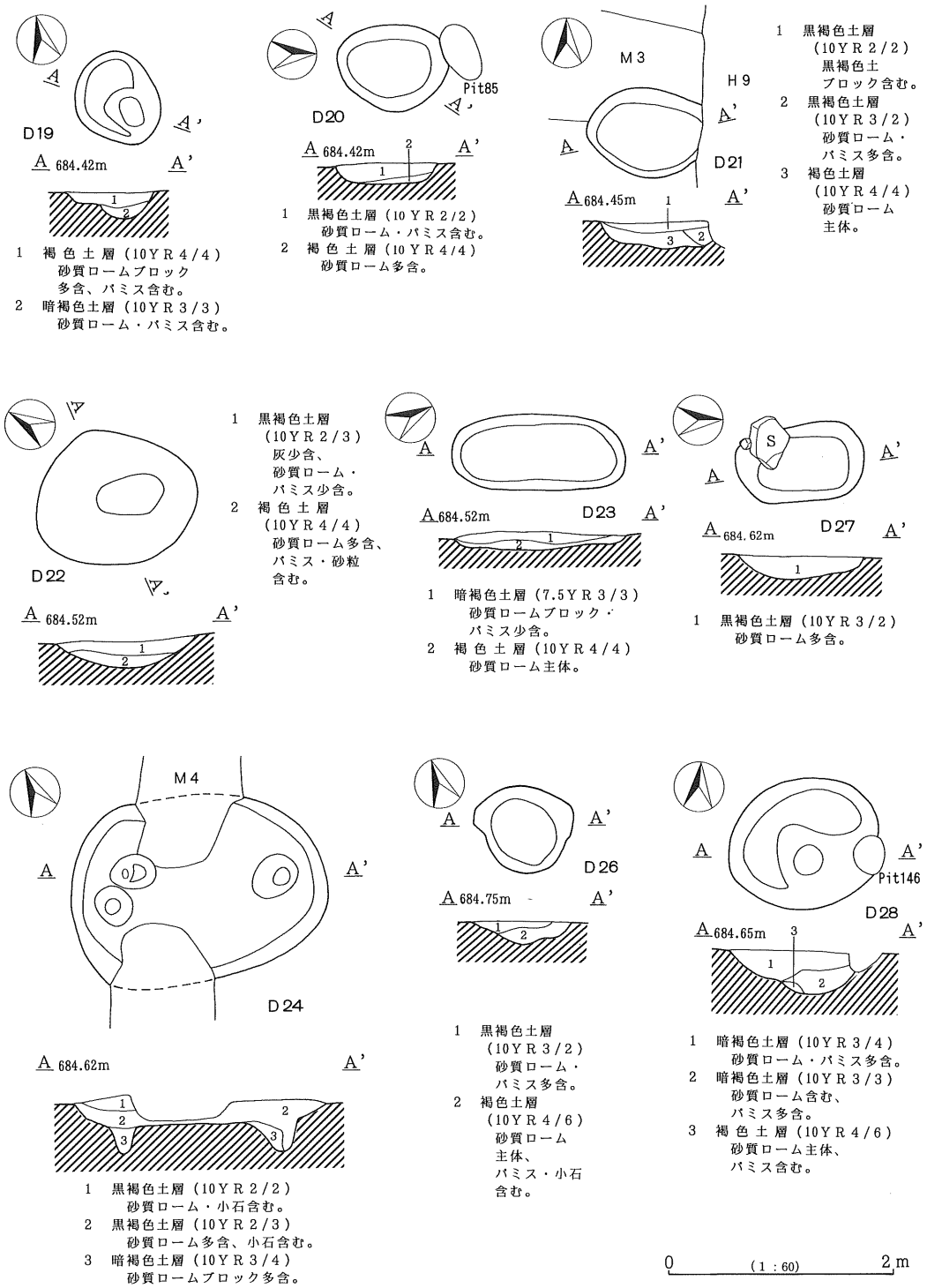
３）時期不明の土坑（第101～104図、図版二十七～三十・四十四）

時期不明の土坑は23基で、平面形態について分類すると楕円形のものが19基と最も多く、円形のものが３基、方形と思われるものは１基と少ない。断面形については底面が平坦で逆台形状となるものが主体的で、底面にピット状の掘り込みをもつものもみられる。

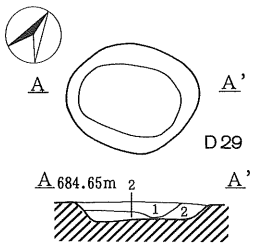
遺物は第７・23号土坑を除いて弥生土器が出土しているが、いずれも小片で全体の器形の知れるものは少ない。壺20点（拓影図16点）・甕22点（拓影図15点）・鉢２点を図示した。また第23号土坑からは人骨が出土している（付編１参照）。



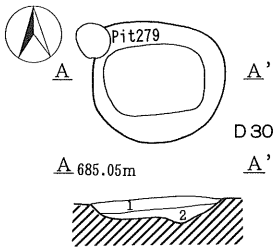
第101図　第７・11～13・16・17号土坑実測図



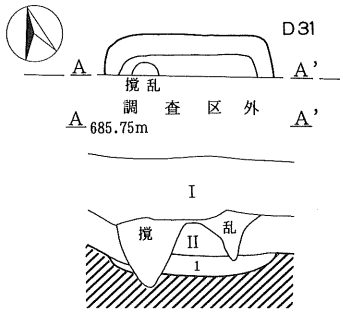
第102図　第19～24・26～28号土坑実測図



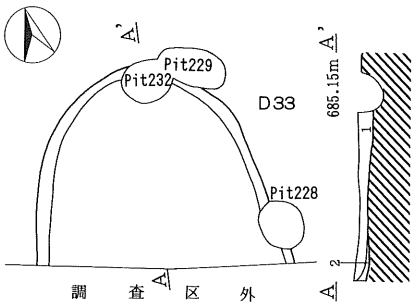
1　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
　炭化物含む、
　砂質ローム・パミス少含、
　砂粒含む。
2　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　砂粒多含、パミス含む。



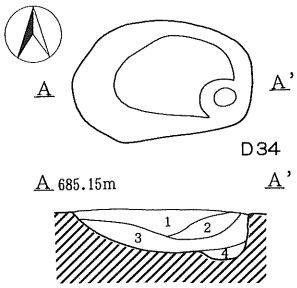
1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　砂質ローム少含、
　パミス含む。
2　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　砂質ローム・パミス含む。



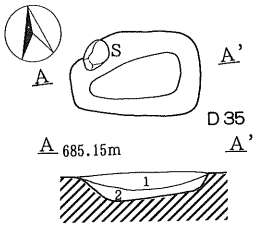
1　にぶい黄橙色土層（10ＹＲ６/４）
　砂質ローム主体。



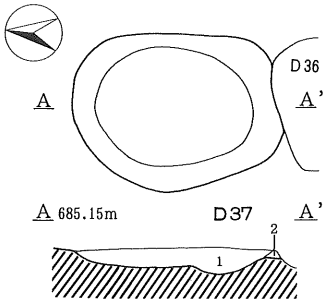
1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　炭化物わずかに含む、
　砂質ローム少含、パミス含む。
2　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
　パミス少含。



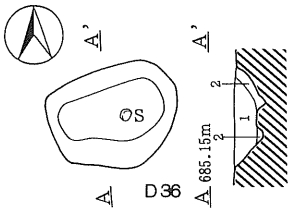
1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　砂質ローム・パミス少含。
2　黒褐色土層（10ＹＲ２/２）
　砂ブロック・パミス少含。
3　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　砂質ローム・砂粒多含。
4　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　砂粒多含。



1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　砂質ローム・パミス・
　砂粒少含。
2　褐色土層（10ＹＲ４/４）
　砂粒・砂ブロック多含、
　パミス含む。



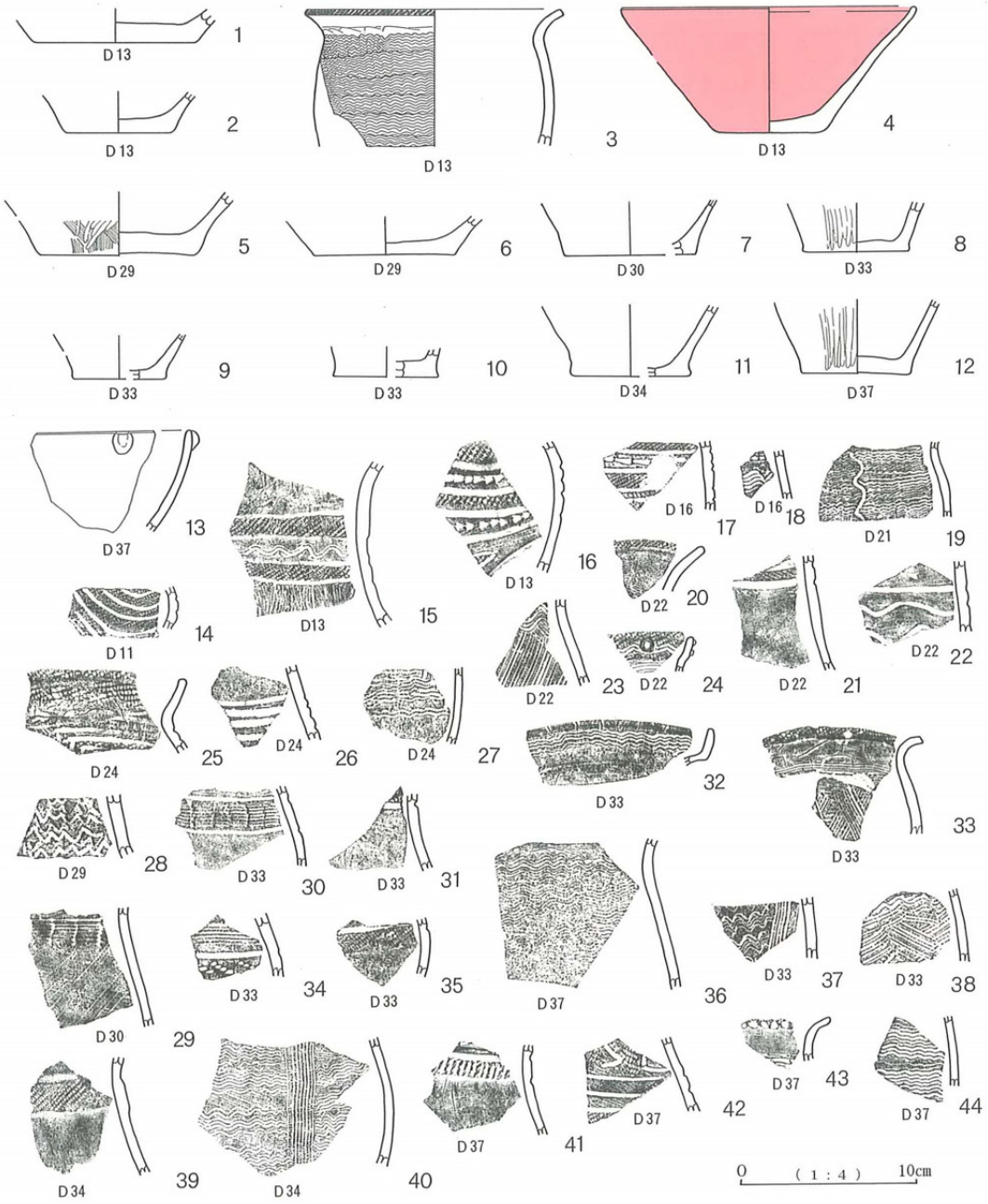
1　黒褐色土層（10ＹＲ２/３）
　炭化物含む、
　砂質ローム・パミス含む。
2　暗褐色土層（10ＹＲ３/３）
　砂質ローム多含。



1　黒褐色土層（10ＹＲ３/２）
　砂質ローム・パミス含む。
2　暗褐色土層（10ＹＲ３/４）
　砂質ロームブロック多含。

0　(1：60)　2m

第103図　第29～31・33～37号土坑実測図



第 104 図　土坑内出土遺物実測図

第32表　土坑内出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
104－1	壺	－	〈1.9〉	(9.2)	ナデ	ナデ
104－2	甕	－	〈2.3〉	(6.0)	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ
104－3	甕	(14.6)	〈7.8〉	－	口唇部　縄文 胴部　櫛描波状文（上→下）	横ヘラミガキ
104－4	鉢	(16.8)	7.2	6.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
104－5	壺	－	〈3.6〉	8.8	縦ヘラミガキ	ハケメ
104－6	壺	－	〈2.2〉	(8.2)	摩滅不明	摩滅不明
104－7	壺	－	〈3.1〉	(7.5)	摩滅不明	ハケメ、摩滅
104－8	甕	－	〈2.8〉	(6.2)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
104－9	甕	－	〈2.5〉	5.2	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
104－10	甕	－	〈1.7〉	(6.0)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
104－11	甕	－	〈4.1〉	(6.9)	縦ヘラミガキ	ヘラミガキ、摩滅
104－12	甕	－	〈4.2〉	6.4	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
104－13	鉢	－	〈5.8〉	－	口縁部　突起、摩滅	摩滅不明

第6節　溝状遺構・ピット群

1）第1号溝状遺構（第105・106図、図版三十・四十八）

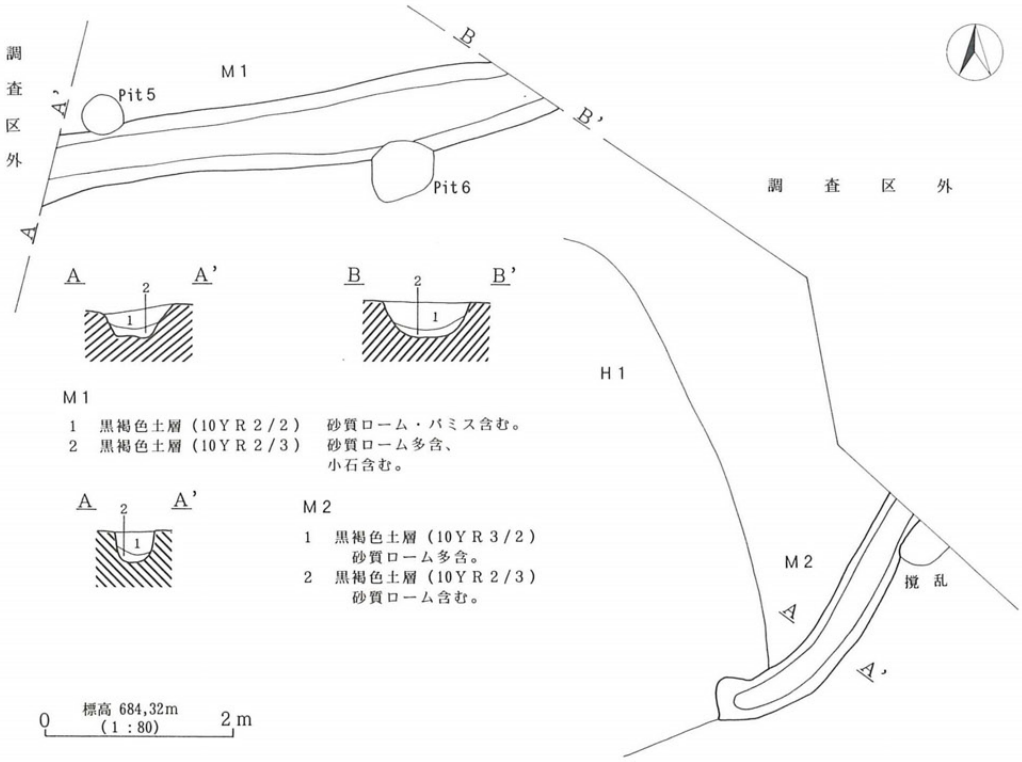
本址は調査区北西端部から検出された。調査区を東西に走る溝で、Pit 5・6に切られる。検出長5.5m、幅64～84cm、深さ約40cmを測る。覆土は1層黒褐色土が主体を占め、底面付近にローム粒・小石を含む2層黒褐色土が堆積する。

遺物は壺（1～4・12～18）・甕（5～9・19～22）・鉢（10・11）の他、石器1点（23）を図示した。土器はいずれも小片であり、全体の器形の知れるものはないが、弥生時代中期後半の土器である。石器には黒曜石製の石鏃（23）がある。

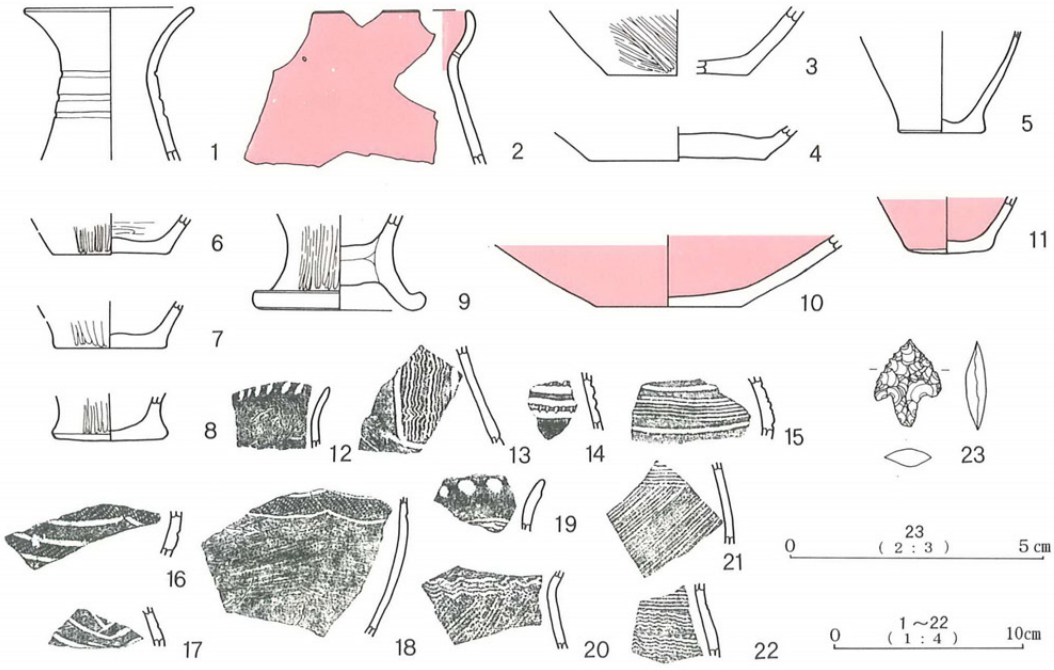
2）第2号溝状遺構（第105図）

本址は調査区北西端部から検出された。北側は調査区外であり、南側は第1号住居址と重複するが新旧関係は不明である。検出長3m、幅46cm、深さ33cmを測る。覆土は黒褐色土を基調としてローム粒を含む。

遺物は弥生土器の小片が極くわずかに出土したのみで、図示できたものはない。



第105図　第1・2号溝状遺構実測図



第106図　第1号溝状遺構出土遺物実測図

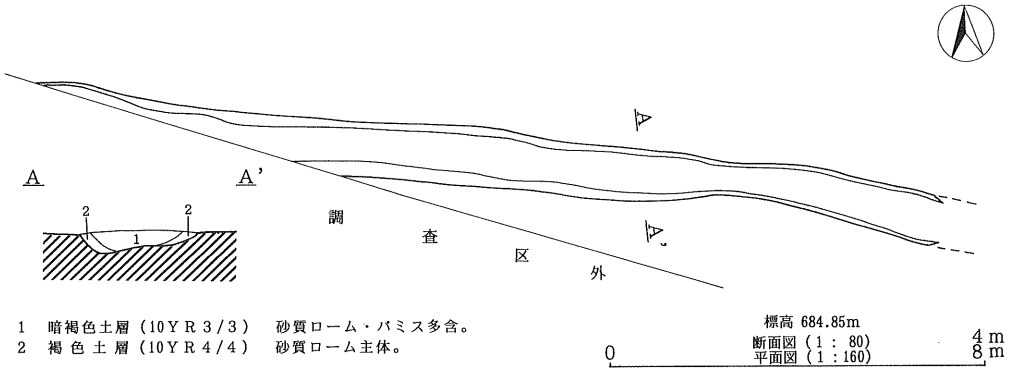
第33表　第1号溝状遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
106－1	壺	9.0	〈8.1〉	－	頸部　篦描横線文3	口縁部　横ヘラミガキ
106－2	壺	－	〈8.2〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩 頸部　穿孔1	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部　ナデ
106－3	壺	－	〈3.6〉	7.6	斜ヘラミガキ	ハケメ、剥離
106－4	壺	－	〈1.8〉	9.4	横ヘラミガキ	剥離不明
106－5	甕	－	〈5.4〉	4.6	縦ヘラミガキ、摩滅	横ヘラミガキ
106－6	甕	－	〈2.1〉	6.0	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
106－7	甕	－	〈2.5〉	5.8	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
106－8	甕	－	〈2.5〉	5.6	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
106－9	台付甕	－	〈5.1〉	(9.0)	縦ヘラミガキ	ナデ
106－10	鉢	－	〈3.8〉	7.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
106－11	鉢	－	〈3.0〉	4.6	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩

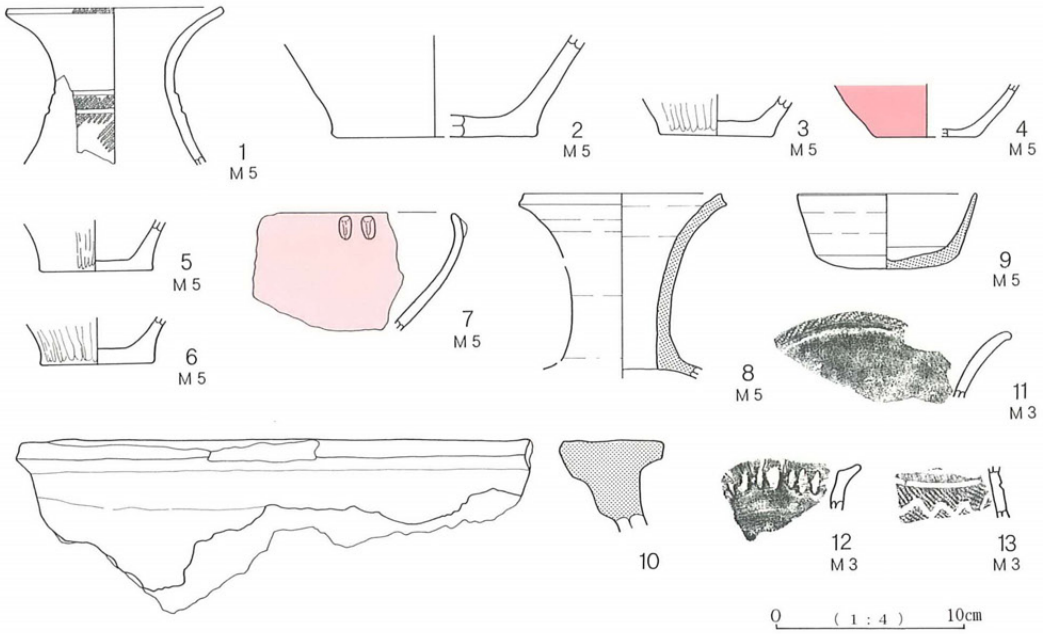
3）第3・5号溝状遺構（第107～109図、図版三十・三十一・四十四）

本址は調査区南端部から検出された。調査区を東西に走る溝で、第8・9・10・17号住居址、第3・4号円形周溝墓、第1号方形周溝墓を切り、第5号溝状遺構は第4号溝状遺構に切られる。

第10号住居址付近でいったん消滅するため西側を第3号溝状遺構、東側を第5号溝状遺構としたが同一の溝であると考えられる。検出長は第3号溝状遺構が19.5m、第5号溝状遺構が20m、幅1.1m、深さ約25cmを測る。



第107図　第3号溝状遺構実測図



第108図　第3・5号溝状遺構出土遺物実測図

第34表　第3・5号溝状遺構出土土器観察表

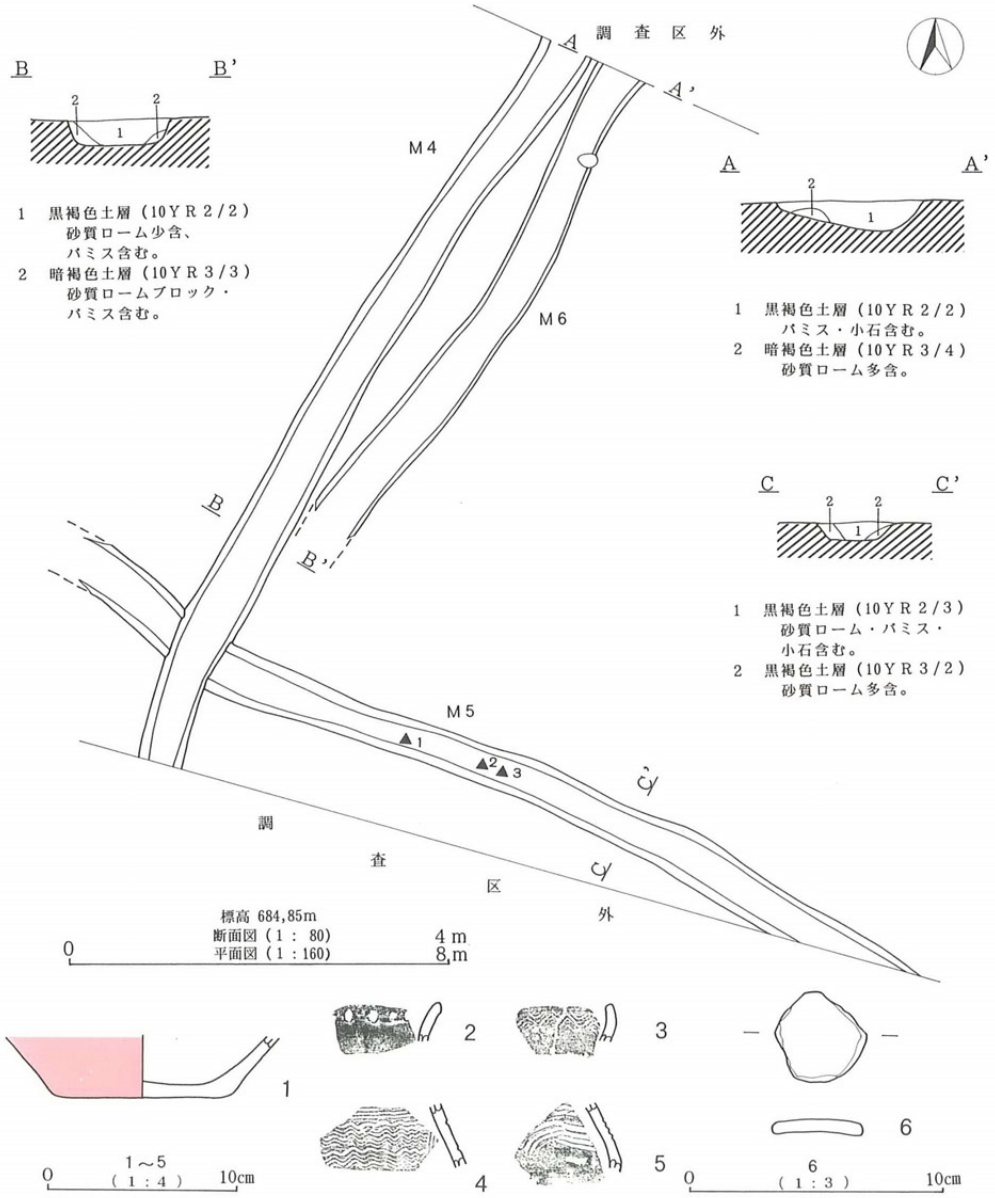
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
108－1	壺	(11.4)	〈8.4〉	－	口唇部　縄文 頸部　縄文地文→箆描横線文2	口縁部　横ヘラミガキ
108－2	壺	－	〈5.4〉	(11.0)	縦ヘラミガキ、摩滅	摩滅不明
108－3	壺	－	〈2.2〉	(6.0)	縦ヘラミガキ	ナデ
108－4	壺	－	〈2.8〉	(5.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	摩滅不明
108－5	甕	－	〈2.7〉	(6.0)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
108－6	甕	－	〈2.4〉	(6.0)	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
108－7	鉢	－	〈6.2〉	－	ヘラミガキ、赤色塗彩 口縁部突起	ヘラミガキ、赤色塗彩
108－8	須恵器 長頸壺	(10.4)	〈9.8〉	－	ロクロ成形	
108－9	須恵器 坏	(9.4)	4.0	7.6	ロクロ成形	
108－10	須恵器 甕	－	〈9.2〉	－		

弥生土器は壺（1～4・11～13）・甕（5・6）・鉢（7）を図示した。壺は口唇部に縄文、頸部は縄文地に箆描横線文が施文され、13には箆描山形文が加えられる。4は赤色塗彩される。鉢には赤色塗彩され、口縁部に突起が貼り付けされる7がある。

須恵器には長頸壺（8）・坏（9）の他に大型の甕と思われる（10）がある。この他、第5号溝状遺構からウマの臼歯・中足骨などが出土している（付編2参照）。

4）第4・6号溝状遺構（第109図、図版三十・四十七）

本址は調査区中央付近を南北に併走する溝で、第12・13号住居址、第4号円形周溝墓、第10・24号土坑、第5号溝状遺構と重複関係にあり本址が最も新しい。第4号溝状遺構は検出長17.6m、幅80㎝～1.2m、深さ30㎝で、第6号溝状遺構は北側から11.7mで消滅し、幅約1m、深さは北



第109図　第4・5・6号溝状遺構・第6号溝状遺構出土遺物実測図

第35表　第6号溝状遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
109－1	壺	－	〈3.2〉	9.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ

端部で30cmを測る。底面は概ね平坦である。覆土は1層黒褐色土を主体とし、壁際にローム粒を含む2層暗褐色土がみられる。

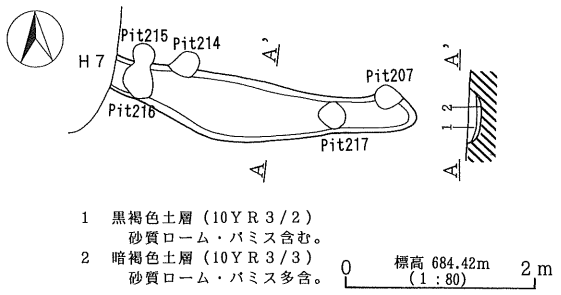
遺物は第6号溝状遺構から出土した壺（1）・甕（2～5）・土製品（6）を図示したが、全体の器形の知れるものはない。

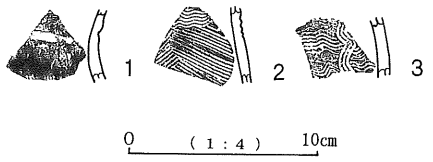
1は外面に赤色塗彩される壺である。甕には口唇部に縄文＋刻目の2、受口口縁で口縁部に櫛描波状文が施文される3の他、胴部に櫛描波状文の4、羽状文の5がある。6は甕の胴部片を利用した土製円板で穿孔は行われていない。この他、第6号溝状遺構からウマの臼歯が出土している（付編2参照）。

5）第7号溝状遺構（第110図、図版三十一）

本址は調査区中央北側から検出された。東西方向に走る溝で、Pit207・214・215・216・217に切られ、西側で第7号住居址と重複するが新旧関係は不明である。検出長3.2m、幅34～68cm、深さ16cmを測る。覆土は2層に分割され、上層に1層黒褐色土、下層にローム粒を多量に含む2層暗褐色土が堆積する。

遺物は拓影図3点が図示できたのみである。1は壺の頸部片で箆描横線文がみられる。2・3は甕の胴部片で、2は櫛描波状文と羽状文の組み合わせによるもので3は櫛描波状文に垂下文が加えられる。

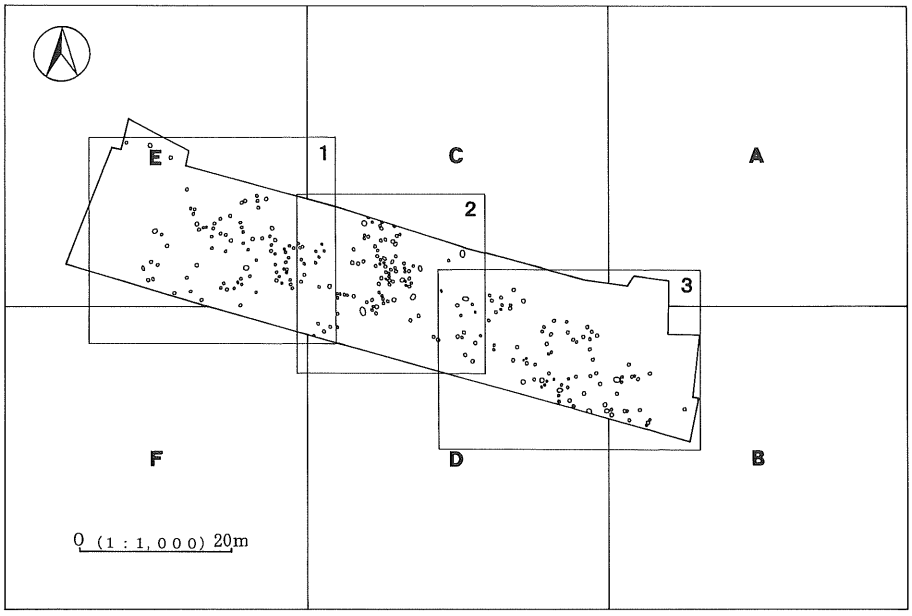




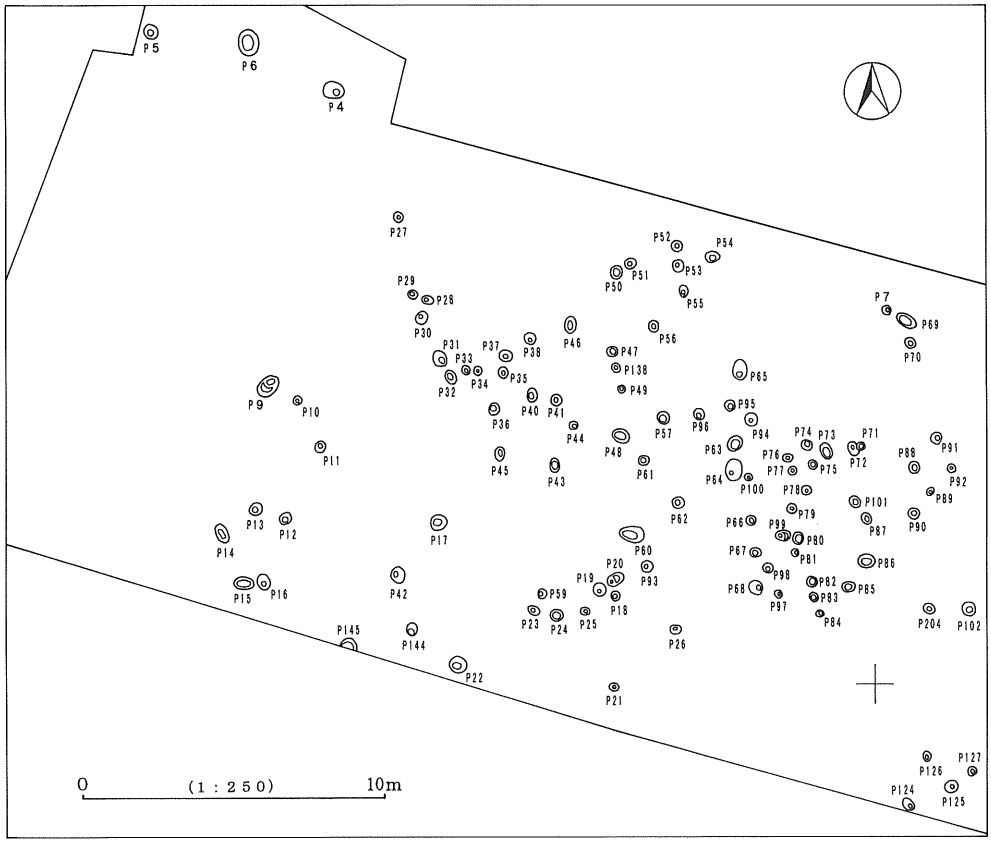
第110図　第7号溝状遺構・出土遺物実測図

6）ピット群（第111～115図、図版四十八）

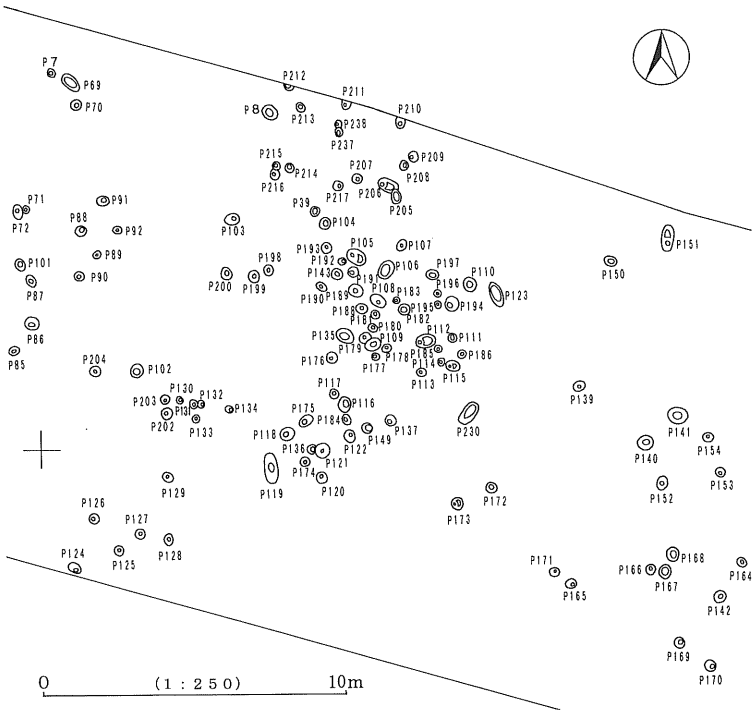
本遺跡からは総数で285基のピットが確認された。これらのピットは他遺構と重複関係にあるものも存在するがいずれもピットの方が新しく、調査区のほぼ全面から検出された。規模は径30～40cm、深さ20～30cm前後のものが主体的であり、覆土はローム粒を含む黒褐色土または暗褐色土を基調とする。各ピットの規模・出土遺物等についてはピット一覧表に記した。



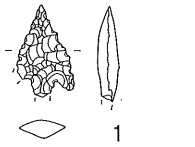
第111図　ピット群配置図



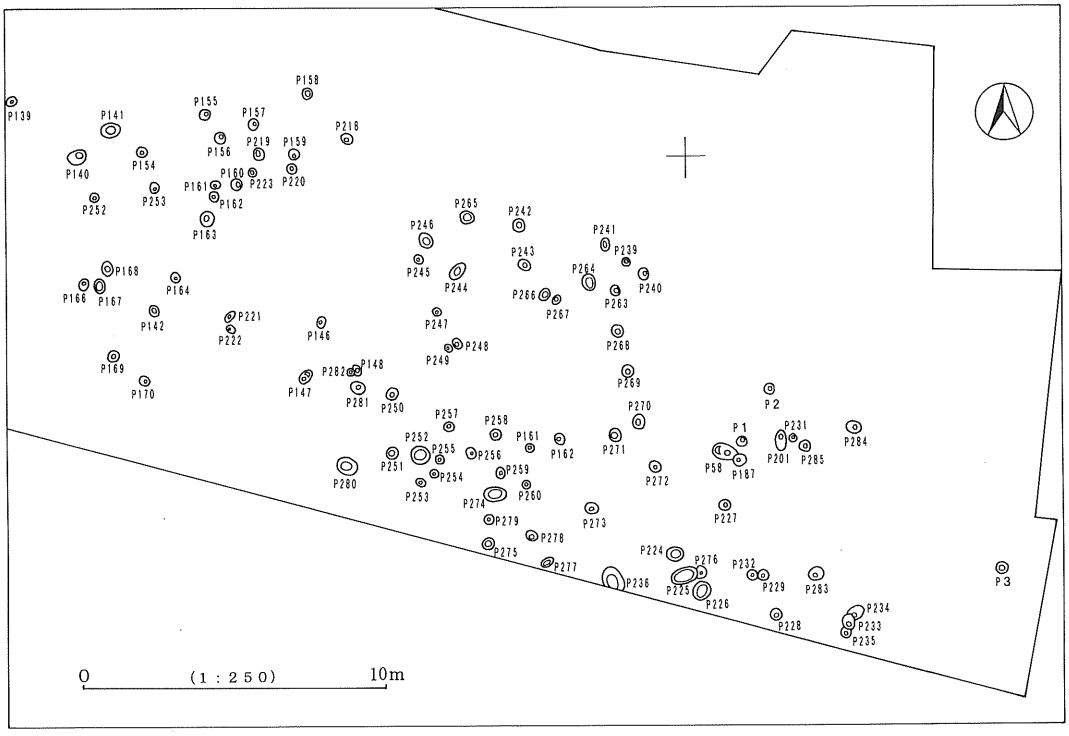
第112図　ピット群実測図〈1〉



第113図　ピット群実測図〈2〉



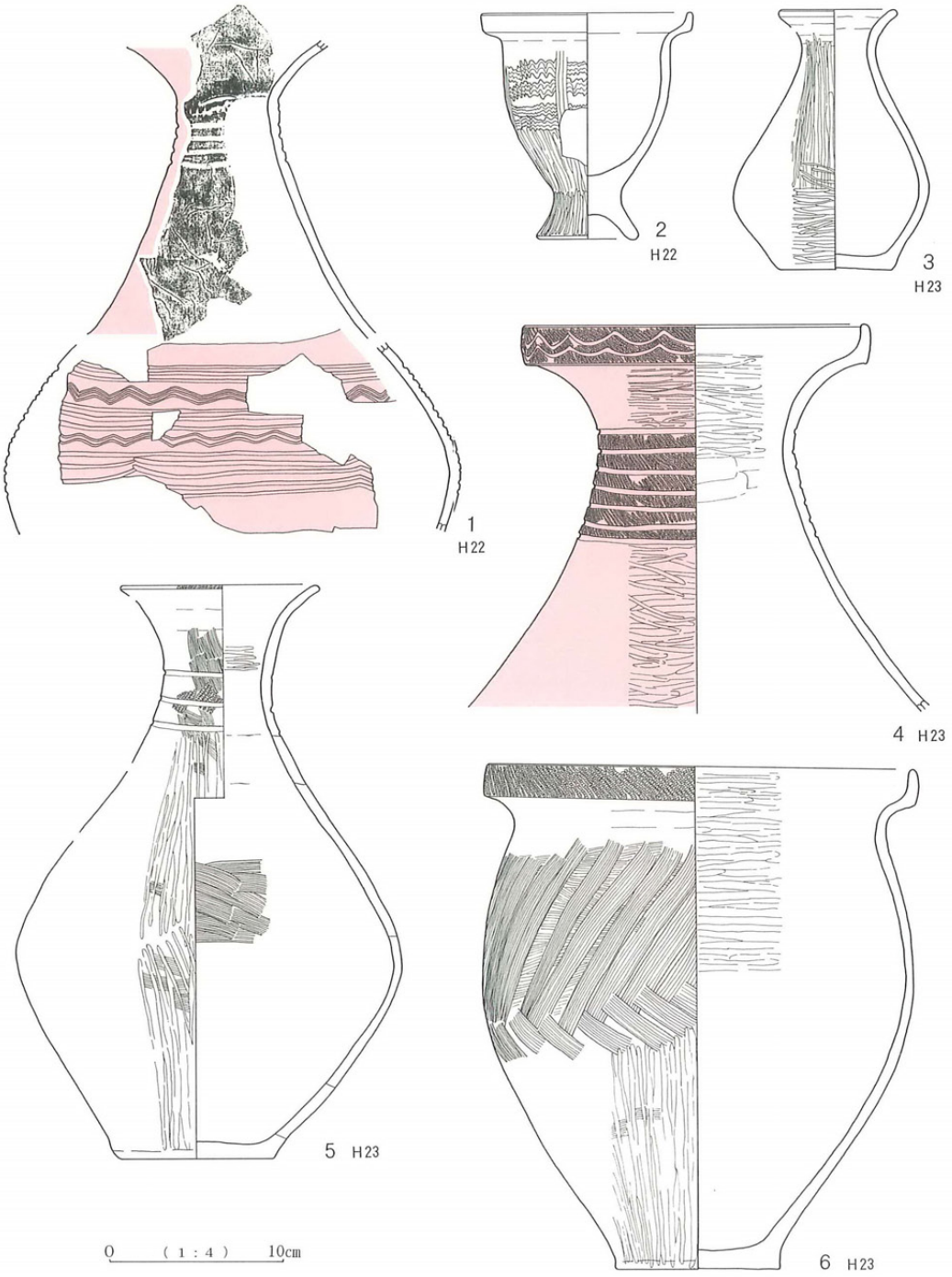
第114図　Pit11出土遺物実測図



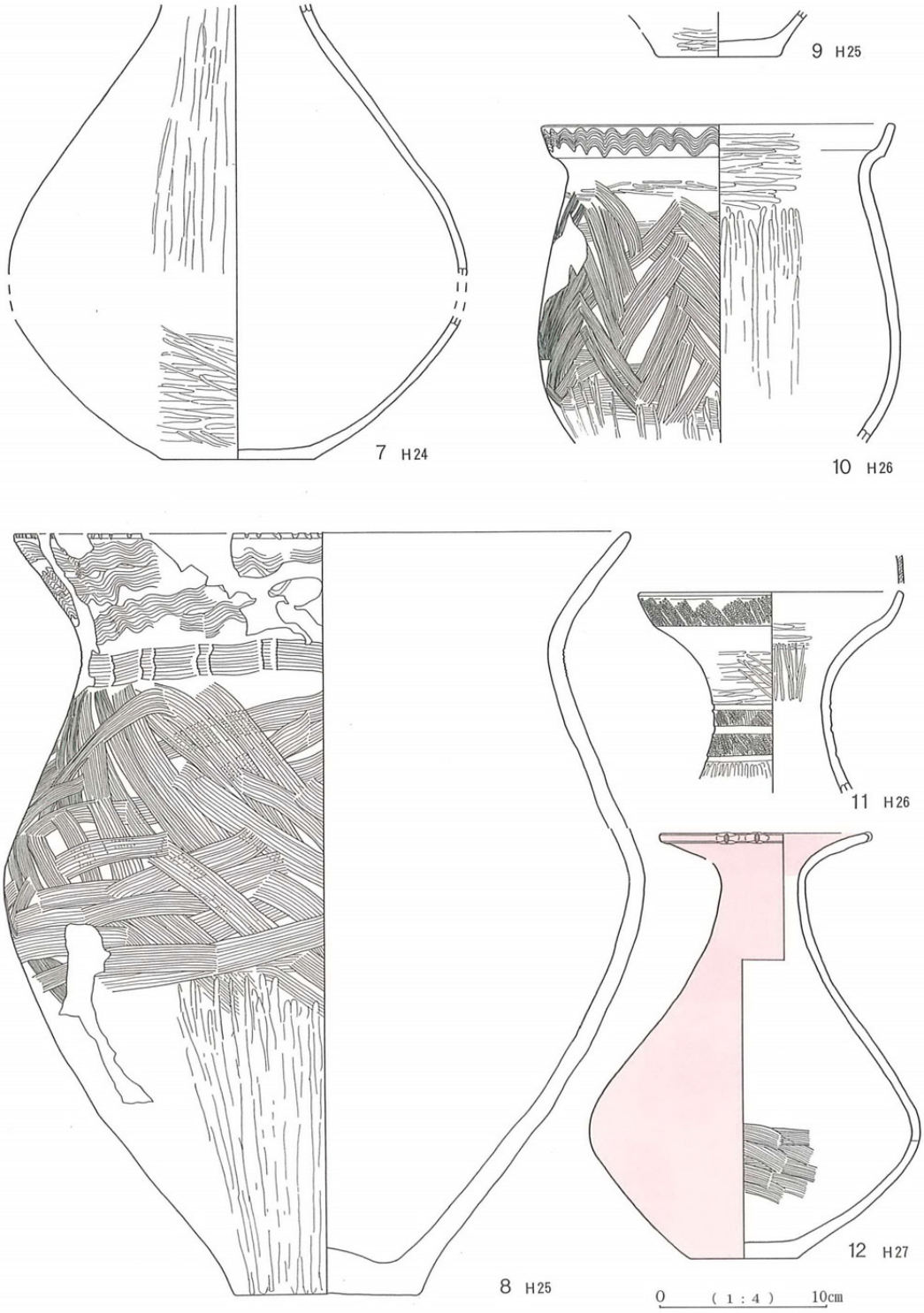
第115図　ピット群実測図〈3〉

第７節　試掘調査・グリッド出土遺物

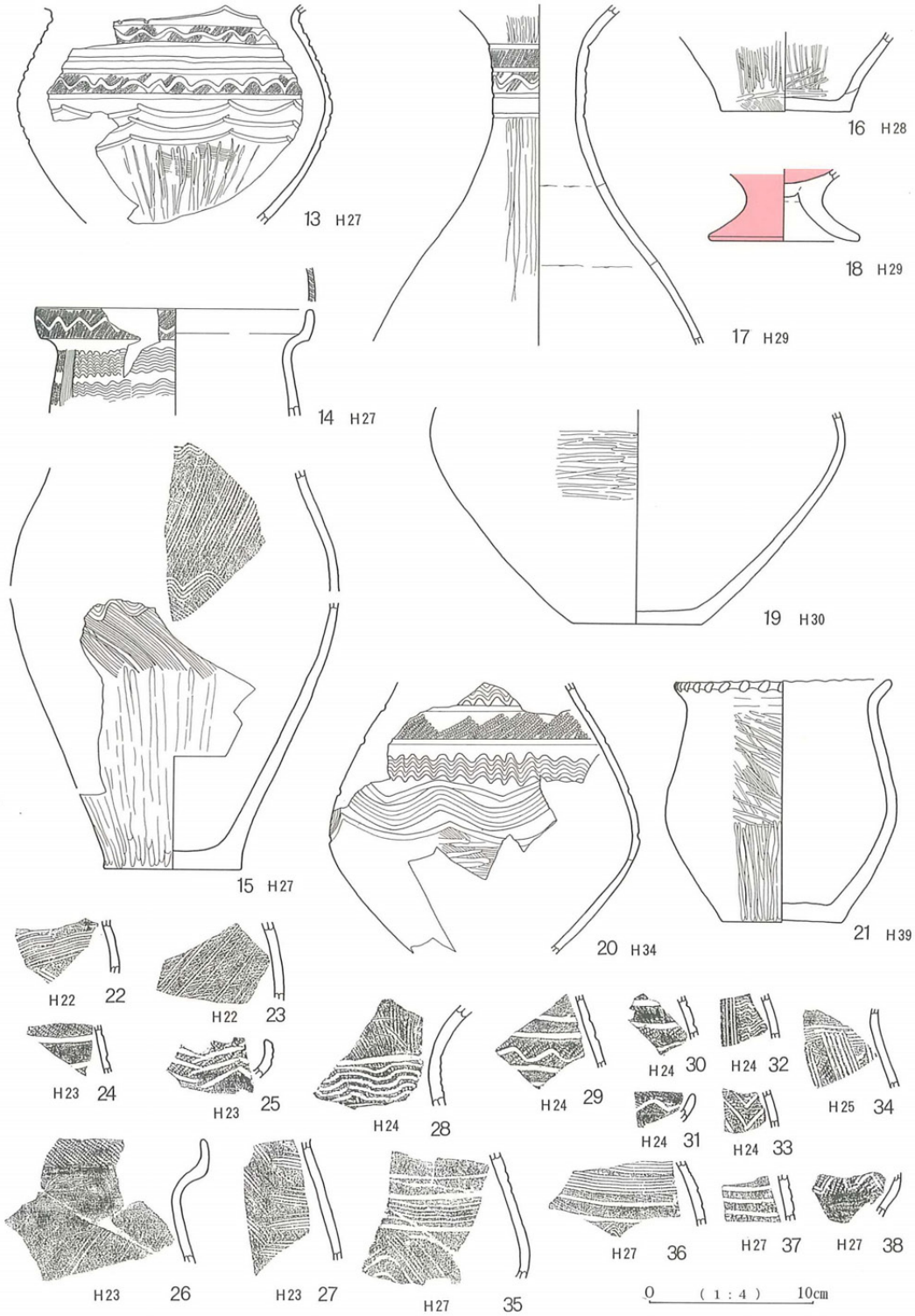
１）試掘調査（第116～119図、図版三十二・三十三・四十五・四十六）



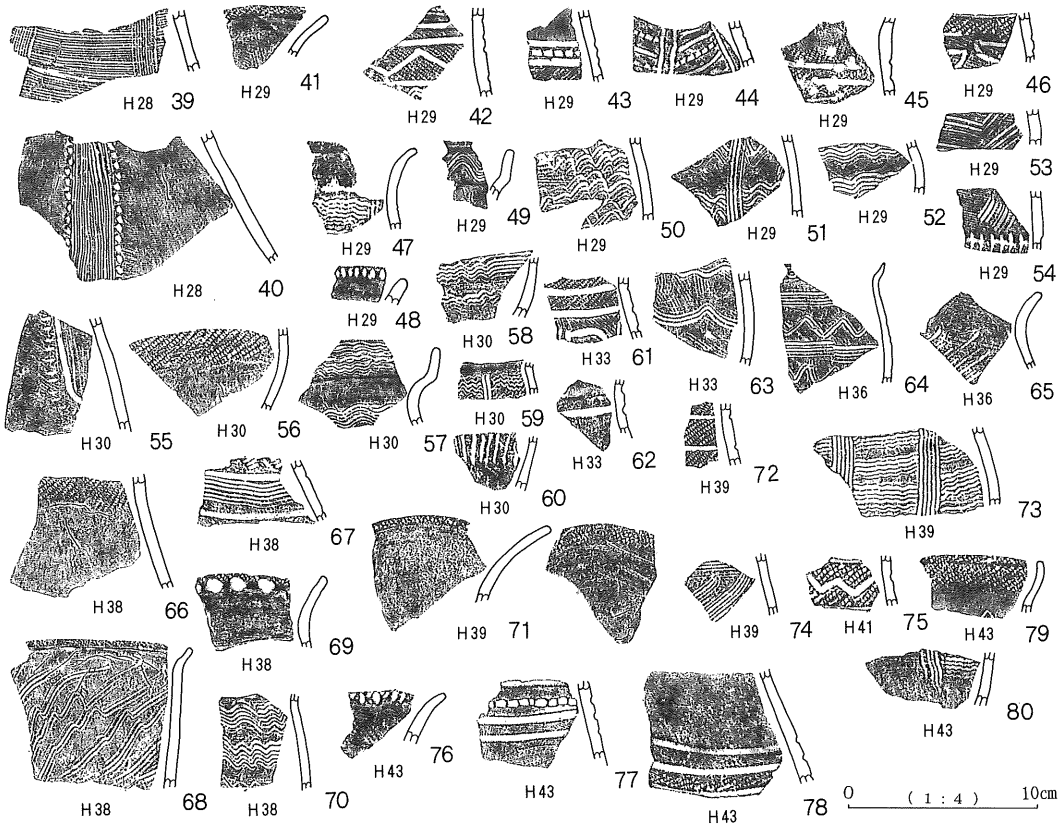
第116図　試掘調査出土遺物実測図〈1〉



第 117 図　試掘調査出土遺物実測図〈2〉



第118図　試掘調査出土遺物実測図〈3〉



第119図　試掘調査出土遺物実測図〈4〉

試掘調査は調査区北半部の駐車場用地約1,900㎡について、東西４本・南北３本のトレンチを掘り下げ遺構の分布状況の確認を行った。調査の結果、竪穴住居址22棟の他土坑・溝状遺構・ピット等が検出され、今回の調査区全体にわたって濃密に遺構が存在していることが確認された。

試掘調査によって検出された竪穴住居址から出土した遺物は第116図～第119図に図示した。

壺は口唇部に縄文、頸部は縄文＋篦描横線文を基調とし、篦描山形文・刺突文が加えられるものもある。胴部の文様には縄文、篦描横線文・山形文・波状文・連弧文・刺突文、櫛描波状文がみられるが、胴部に施文されるものは少なく、ハケメ調整の後、縦または横のヘラミガキが行われる。４は受口口縁の大型の壺で、口縁部と頸部に縄文＋篦描連弧文・横線文が施文される。また、12は外面・口縁部内面に赤色塗彩される。

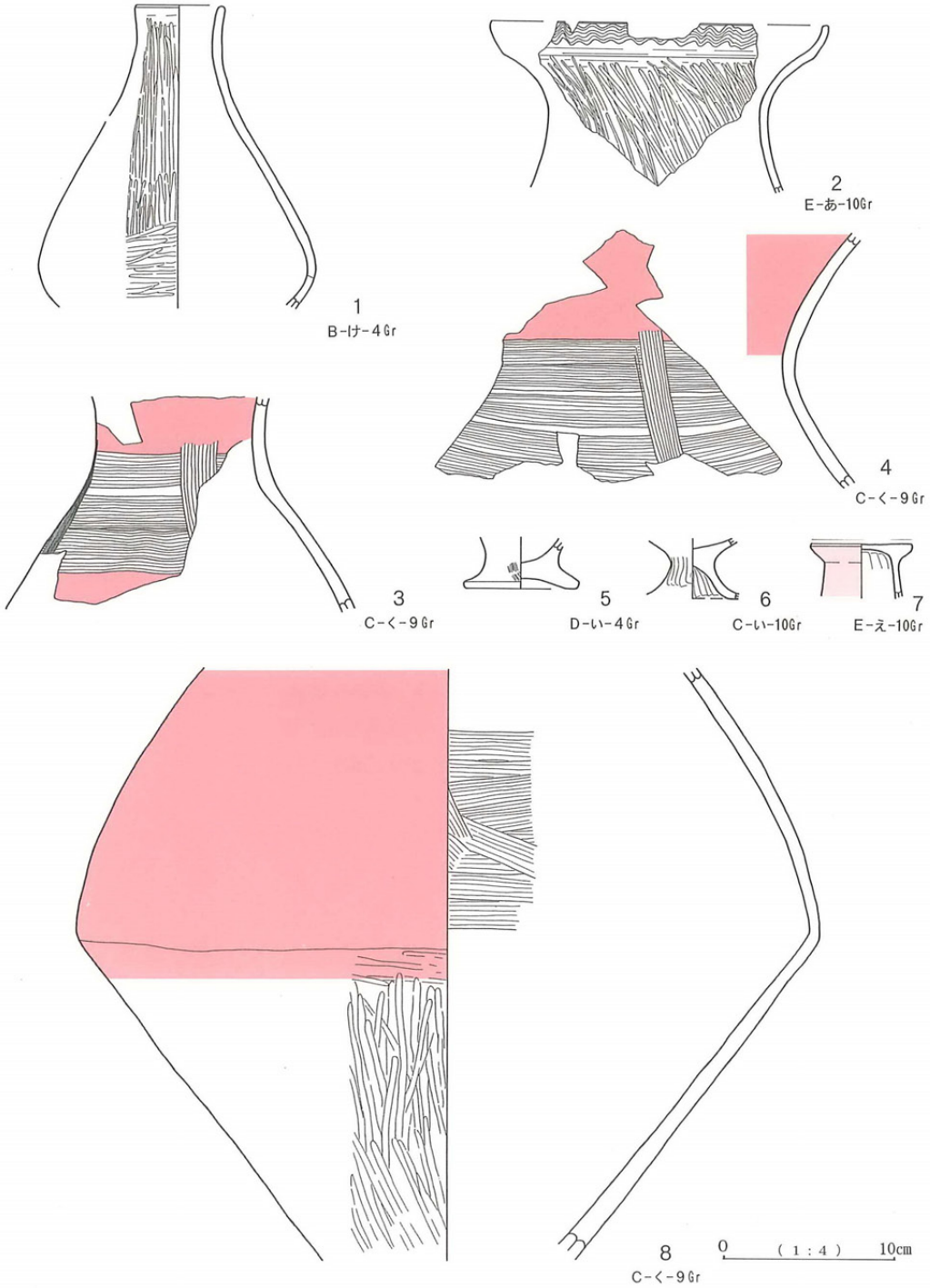
甕には口縁部が外反するものと受口状になるものとがあり、受口口縁の口縁部は縄文のみの６、櫛描波状文の10、縄文＋篦描山形文の14がある。胴部の文様には櫛描横羽状文（６）、縦羽状文（10）、櫛描羽状文＋波状文（15）、櫛描波状文＋垂下文（14）がある。８は大型の甕で、口唇部に刻目、頸部に簾状文が巡り、口縁部・胴上半部に櫛描文が施文される。

以上の遺物は弥生時代中期後半の様相を示すものが主体的であるが、117－8（第25号住居址）が出土し、住居址間で重複関係にあるものがみられることなどから、試掘調査によって検出された22棟の竪穴住居址は弥生時代中期後半を主体とするものの後期の住居址が存在することも予想される。

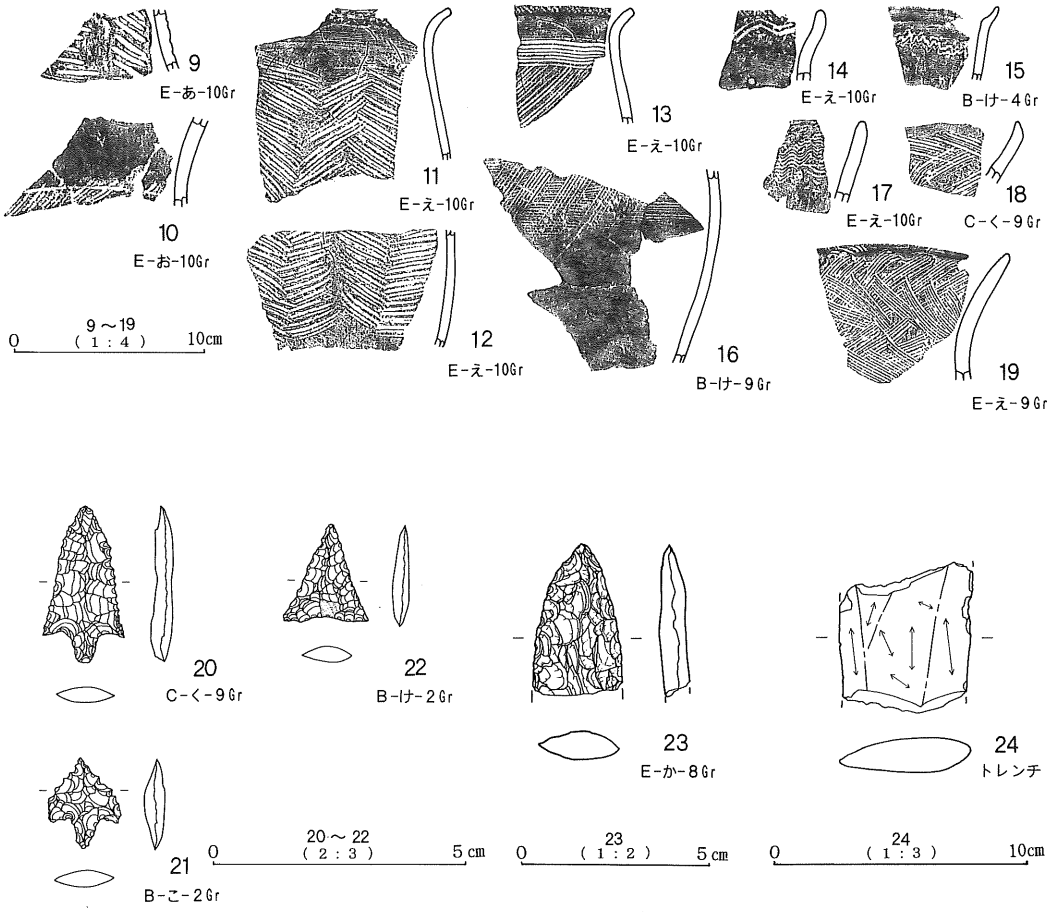
第36表　試掘調査住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
116－1	壺	－	〈28.4〉	－	頸部　篦描横線文・刺突文、胴中位　篦描横線文7・櫛描山形文・篦描連弧文4、淡い赤色塗彩、摩滅	ナデ
116－2	台付甕	(12.2)	13.1	5.8	胴上半　櫛描波状文4→櫛描垂下文 胴下半・台部　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
116－3	壺	(6.6)	15.1	6.6	胴上半　縦ヘラミガキ 胴下半　横ヘラミガキ	ナデ、赤色顔料付着
116－4	壺	(20.0)	〈22.5〉	－	口縁部　縄文地文→篦描連弧文2 頸部　縄文地文→篦描横線文7、淡い赤色塗彩、摩滅	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ナデ
116－5	壺	(11.2)	33.3	9.0	口唇部　縄文、頸部　縄文地文→篦描横線文3 胴部　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　ハケメ、摩滅・剥離
116－6	甕	24.7	29.4	9.6	口縁部　縄文、胴上半　櫛描横羽状文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
117－7	壺	－	〈27.6〉	9.0	胴上半　縦ヘラミガキ 胴下半　横ヘラミガキ	ハケメ、摩滅・剥離
117－8	甕	(36.8)	〈46.9〉	11.0	口唇部　刻目、口縁部　櫛描波状文、頸部　櫛描簾状文(2連止め) 胴上半　櫛描文、胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
117－9	甕	－	〈2.7〉	7.6	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ
117－10	甕	21.0	〈19.1〉	－	口縁部　櫛描波状文、胴上半　櫛描縦羽状文(上→下・右回り) 胴下半　縦ヘラミガキ	口縁部　横ヘラミガキ 胴部　縦ヘラミガキ
117－11	壺	15.5	〈12.0〉	－	口唇部・口縁部　縄文 頸部　縄文地文→篦描横線文3	口縁部　横ヘラミガキ 頸部　粗い縦ヘラミガキ
117－12	壺	(12.3)	25.6	6.4	口唇部　山形突起→突起先端刻目 ヘラミガキ、赤色塗彩、摩滅	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩、摩滅 胴部　ナデ、ハケメ
118－13	鉢	－	〈13.3〉	－	頸部　穿孔2、胴中位　縄文地文→篦描横線文4・篦描波状文2・篦描連弧文3、胴下位　縦ヘラミガキ	ハケメ、剥離
118－14	甕	(16.8)	〈6.4〉	－	口唇部　縄文、口縁部　縄文地文→篦描山形文1 胴部　櫛描波状文→櫛描垂下文	横ヘラミガキ
118－15	甕	－	〈24.2〉	8.2	胴上半　櫛描横羽状文→櫛描波状文 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
118－16	甕	－	〈4.8〉	8.0	縦ヘラミガキ	縦・横ヘラミガキ
118－17	壺	－	〈20.6〉	－	頸部　縄文地文→篦描横線文4・篦描山形文1 胴部　縦ヘラミガキ	剥離不明
118－18	高坏	－	〈4.4〉	9.2	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部　ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部　横ヘラミガキ
118－19	壺	－	〈13.0〉	7.8	横ヘラミガキ	ハケメ、摩滅
118－20	壺	－	〈16.5〉	－	胴上位　縄文地文→篦描横線文・櫛描波状文 胴中位　篦描連弧文2→区画内櫛描波状文、摩滅	ハケメ
118－21	鉢	13.1	14.7	7.4	口唇部　指頭圧痕、胴上半　斜ヘラミガキ 胴下半　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ

2）グリッド出土遺物（第120･121図、図版四十六・四十八）



第120図　グリッド出土遺物実測図〈1〉



第121図　グリッド出土遺物実測図〈2〉

第37表　グリッド出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整・文様	
		口径	器高	底径	外面	内面
120－1	壺	4.8	〈17.7〉	－	胴上半　縦ヘラミガキ 胴下半　横ヘラミガキ	口縁部　ヘラミガキ 胴部　ナデ
120－2	壺	(19.8)	〈9.9〉	－	口縁部　櫛描波状文 頸部　縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ
120－3	壺	－	〈12.6〉	－	口縁部・胴部　ヘラミガキ・赤色塗彩 頸部　櫛描T字文	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩 頸部　ヘラミガキ
120－4	壺	－	〈14.9〉	－	口縁部　ヘラミガキ・赤色塗彩 頸部　櫛描T字文	口縁部　ヘラミガキ、赤色塗彩
120－5	台付甕	－	〈3.0〉	6.5	摩滅不明	ヘラミガキ
120－6	高坏	－	〈3.5〉	－	ナデ	坏部　黒色処理
120－7	器台	(6.0)	〈3.2〉	－	ヘラミガキ、淡い赤色塗彩 器受部　粗いヘラミガキ	ナデ
120－8	壺	－	〈34.6〉	－	胴上半　ヘラミガキ、赤色塗彩 胴下半　縦ヘラミガキ	ハケメ

第38表　土坑一覧表

遺構名	検出位置	平面形態	規模（cm）			長軸方位	備考
			長軸長	短軸長	深さ		
D 1	D－お－2	楕円形	85	59	25	N－30°－E	弥生後期壺棺墓、管玉1・ガラス小玉11。
D 2	D－え－1	楕円形	125	96	21	N－19°－W	弥生後期壺棺墓。
D 3	E－き－7	楕円形	(200)	(62)	(49)	N－90°	縄文陥し穴、H2に切られる。
D 4	E－え－10	楕円形	286	128	84	N－8°－W	縄文陥し穴、EM2に切られる。
D 5	E－い－8	楕円形	298	124	62	N－50°－W	縄文陥し穴、Pit49・138に切られる。
D 6	E－い－10	楕円形	272	162	84	N－18°－E	縄文陥し穴、F1・Pit93に切られる。
D 7	C－こ－9	楕円形	164	60	40	N－28°－E	時期不明、遺物なし。
D 8	C－こ－10	隅丸長方形	224	142	66	N－32°－W	縄文陥し穴。
D 9	C－け－9	楕円形	188	110	45	N－82°－W	縄文陥し穴、H7に切られる。
D 10	D－き－1	楕円形	300	(100)	51	N－80°－E	縄文陥し穴、M4に切られる。
D 11	D－え－1	円形	118		34	－	時期不明、Pit160・219・223に切られる。
D 12	E－か－6	円形	82		40	－	時期不明、H1を切る。
D 13	E－か－6	楕円形	116	98	44	N－90°	時期不明、H1を切る。
D 14	E－え－10	円形	112	104	19	N－45°－W	弥生中期、EM2に切られる。
D 15	E－う－9	円形	140	134	26	N－6°－E	弥生中期。
D 16	E－あ－10	楕円形	152	98	17	N－80°－W	時期不明、H9を切る。
D 17	E－え－8	楕円形	116	82	16	N－24°－E	時期不明、弥生土器片。
D 18	E－え－8	楕円形	154	64	18	N－52°－E	弥生中期。
D 19	E－う－8	楕円形	90	62	12	N－31°－W	時期不明、弥生土器片。
D 20	E－あ－10	楕円形	100	78	21	N－50°－E	時期不明、Pit85に切られる。
D 21	F－い－1	楕円形	(102)	(81)	21	N－90°	時期不明、M3に切られる。
D 22	C－け－9	楕円形	144	120	28	N－38°－W	時期不明、H11を切る。
D 23	C－く－10	楕円形	156	68	12	N－27°－E	時期不明、遺物なし。
D 24	C－き－9	楕円形	228	168	30	N－65°－W	時期不明、M4に切られる。
D 25	D－お－1	楕円形	100	74	12	N－75°－W	弥生中期。
D 26	D－お－2	円形	82	76	21	N－68°－W	時期不明、弥生土器片。
D 27	C－え－10	楕円形	116	68	18	N－7°－W	時期不明、弥生土器片、H14を切る。
D 28	D－う－2	楕円形	140	118	43	N－68°－E	時期不明、OT1を切る、Pit146に切られる。
D 29	D－え－1	楕円形	102	84	11	N－69°－E	時期不明、弥生土器片。
D 30	D－い－4	楕円形	104	92	20	N－90°	時期不明、Pit279に切られる。
D 31	D－い－4	(方形)	135	－	24	－	時期不明、南側調査区外。
D 32	D－あ－4	楕円形	108	86	16	N－90°	弥生中期。
D 33	B－こ－4	(楕円形)	－	204	8	－	時期不明、Pit228・229・232に切られる。
D 34	B－こ－4	楕円形	142	86	30	N－90°	時期不明、弥生土器片。
D 35	B－け－4	楕円形	106	68	22	N－82°－W	時期不明、弥生土器片。
D 36	B－く－4	楕円形	106	81	23	N－68°－E	時期不明、H20・D37を切る。
D 37	B－く－4	楕円形	(164)	128	19	N－0°	時期不明、H20を切る。D36に切られる。

第39表　ピット一覧表

No.	検出位置	規模(cm)		覆　　土	重複関係 出土遺物
		径	深さ		
1	B－こ－3	36×32	23	暗褐色土（10ＹＲ3／4）　ローム粒子・ブロック、パミス含む。	
2	B－こ－2	30×26	16	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子少含、パミス含む。	
3	B－く－4	34	16	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子多含、パミス含む。	H20を切る
4	E－こ－6	62×38	23	黒褐色土（10ＹＲ2／2）　ローム粒子少含。	H1を切る、弥生土器片
5	E－か－5	46×42	45	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子少含。パミス含む。	M1を切る
6	E－か－5	80×64	40	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス・小石含む。	M1を切る
7	E－こ－7	38×26	24	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	H6を切る、弥生土器片
8	C－け－8	56×50	12	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子少含、パミス含む。 暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子多含、パミス含む。	H7を切る
9	E－か－8	86×54	22	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス含む。	
10	E－お－8	26×24	16	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
11	E－お－8	30	30	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	弥生土器片、石鏃
12	E－お－9	31×20		暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス多含。	
13	E－か－9	32×30		暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス多含。	
14	E－か－9	70×32	21	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子多含。	弥生土器片
15	E－か－9	66×36	19	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子多含。 暗褐色土（10ＹＲ3／4）　ローム粒子・ブロック多含。	
16	E－か－9	46×36	26	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子含む。	
17	E－え－9	60×52		暗褐色土（10ＹＲ3／4）　ローム粒子多含。	EM2を切る、弥生土器片
18	E－う－10	26	10	暗褐色土（10ＹＲ3／4）　ローム粒子・パミス多含。	
19	E－う－10	36×32	22	暗褐色土（10ＹＲ3／4）　ローム粒子・パミス多含。	
20	E－う－10	40×24	22	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス含む。	弥生土器片
21	E－う－10	32×22	13	暗褐色土（10ＹＲ3／4）　ローム粒子・パミス多含。	
22	E－え－10	44×32	33	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス含む。	M3を切る
23	E－う－10	32×26	28	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・ブロック含む。	
24	E－う－10	38×28	12	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子多含、パミス含む。	
25	E－う－10	32×24	15	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・ブロック含む。	
26	E－い－10	30×24	10	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス含む。	
27	E－え－7	22×20	18	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子少含、パミス含む。	
28	E－え－7	24×18	34	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
29	E－え－7	22	14	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
30	E－え－7	40×30	22	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
31	E－え－8	42×36	22	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　炭化物少含、ローム粒子多含。	
32	E－え－8	40×32	15	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子・パミス含む。	
33	E－え－8	32×24	13	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子・パミス含む。	
34	E－え－8	30×28	21	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子・パミス含む。	弥生土器片
35	E－え－8	32×28	21	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子・パミス含む。	
36	E－え－8	30×28	13	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・小石含む、パミス少含。	弥生土器片
37	E－え－8	36×24	21	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	弥生土器片
38	E－う－8	30×26	31	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
39	C－く－9	28×26	13	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス含む。	
40	E－う－8	38×28	27	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	弥生土器片
41	E－う－8	38×36	23	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
42	E－え－10	50×34	48	黒褐色土（10ＹＲ3／2）　ローム粒子多含、パミス含む。	EM2を切る
43	E－う－9	32×24	14	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・ブロック、パミス含む。	弥生土器片
44	E－う－8	39×22	12	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス少含。	
45	E－え－9	28×26	32	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・ブロック、パミス含む。	H8を切る
46	E－う－8	38×28	19	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子少含、5㎜以下小石含む。	
47	E－う－8	36×28	29	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　ローム粒子・パミス少含。	
48	E－う－8	50×42	17	黒褐色土（10ＹＲ2／3）　パミス・5㎜以下小石少含。	弥生土器片
49	E－う－8	26×24	19	暗褐色土（10ＹＲ3／3）　ローム粒子・パミス少含。	D5を切る

No.	検出位置	規模(cm)		覆　　土	重複関係 出土遺物
		径	深さ		
50	E－う－7	40×38	15	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
51	E－う－7	30	23	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
52	E－い－7	30×25	32	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
53	E－い－7	31×28	22	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック、パミス少含。	弥生土器片
54	E－い－7	32×28	33	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、5mm以下小石含む。	
55	E－い－7	36×33	17	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック、パミス含む。	
56	E－い－7	21×20	15	暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子・ブロック多含。	
57	E－い－7	40×38	29	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
58	B－こ－3	88×40	20	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック含む、パミス少含。	Pit87に切られる、弥生土器片
59	E－う－10	20	8	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子少含、パミス含む。	弥生土器片
60	E－う－9	62×44	20	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
61	E－い－9	34×30	20	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
62	E－い－9	44×38	16	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス・砂粒含む。	
63	E－い－9	52×38	14	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
64	E－い－9	72×56	22	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
65	E－い－8	60×44	28	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
66	E－あ－9	24×18	10	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
67	E－あ－9	32×28	18	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
68	E－あ－10	44	6	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子少含、パミス含む。	
69	C－こ－8	76×30	13	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
70	C－こ－8	36	25	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子少含、パミス含む。	
71	E－あ－9	36×34	10	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス少含。	Pit72を切る
72	E－あ－9	40×32	39	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、5mm大小石含む。	Pit71に切られる
73	E－あ－9	48×28	22	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子多含、パミス少含。	
74	E－あ－9	30×28	24	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック少含、パミス含む。	
75	E－あ－9	21×18	12	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック含む。	
76	E－あ－9	30×22	20	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック含む、パミス少含。	
77	E－あ－9	22	17	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
78	E－あ－9	23×20	19	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子含む、パミス少含。	
79	E－あ－9	30×26	31	黒褐色土（10YR2/3）パミス少含。	
80	E－あ－9	41×28	15	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子少含、パミス含む。	
81	E－あ－9	26×20	13	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス少含。	
82	E－あ－10	30×28	40	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
83	E－あ－10	28×24	27	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
84	E－あ－10	32×28	15	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス少含。	
85	E－あ－10	52×31	23	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	D20を切る
86	E－あ－10	44×32	21	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
87	E－あ－9	44×24	22	暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子多含、パミス含む。	
88	C－こ－9	18	13	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子含む、パミス少含。	
89	C－こ－9	24×22	27	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含。	
90	C－こ－9	34×32	16	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・砂粒含む。	
91	C－こ－8	24	17	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
92	C－こ－9	20	10	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
93	E－い－10	40×36	25	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、パミス含む。	D6を切る
94	E－い－8	37×34	17	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス含む。	
95	E－い－8	26×24	16	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、パミス含む。	
96	E－い－8	22×20	17	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子多含	
97	E－あ－10	32×24	35	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子多含、パミス含む。 褐色土（10YR4/4）ローム主体。	
98	E－あ－10	30×28	35	褐色土（10YR4/4）ローム主体。	
99	E－あ－9	30×18	21	暗褐色土（10YR3/3）褐色土ブロック（10YR4/4）含む。	

No.	検出位置	規模(cm)		覆　　土	重複関係 出土遺物
		径	深さ		
100	E－い－9	22×20	14	暗褐色土（10YR3/3）　パミス含む。	
101	E－あ－9	32×26	32	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
102	C－こ－10	46×44	20	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
103	C－け－9	34×22	16	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
104	C－く－9	32×30	15	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
105	C－く－9	72×48	25	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子含む。 暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
106	C－く－9	80×40	16	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	攪乱に切られる
107	C－く－9	44×30	20	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	攪乱に切られる
108	C－く－9	62×41	34	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス多含。	
109	C－く－9	64×41	33	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス多含。	Pit179を切る
110	C－き－9	46×40	18	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子・パミス多含。	
111	C－き－10	34×30	22	褐色土（10YR4/4）　ローム主体。	
112	C－き－10	70×28	23	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子含む。	
113	C－き－10	28×24	20	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
114	C－き－10	11×10	18	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
115	C－き－10	50×28	20	褐色土（10YR4/4）　ローム主体。	
116	C－く－10	44×32	22	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
117	C－く－10	28×26	22	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子多含。	
118	C－く－10	54×40	17	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス含む。	
119	D－け－1	94×34	30	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子多含。	H10を切る
120	D－く－1	40×34	22	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子多含。	
121	D－く－1	68×60	36	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス含む。	Pit136を切る
122	C－く－10	40×38	38	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
123	C－き－9	90×30	17	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	M4を切る
124	D－こ－1	44×30	22	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス少含。	
125	D－こ－1	50×40	24	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
126	D－こ－1	30×26	19	暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子・ブロック、パミス多含。	
127	D－こ－1	30	11	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子少含、パミス含む。	
128	D－こ－1	36×30	27	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス少含。	攪乱に切られる
129	D－こ－1	26	13	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
130	C－け－10	22	15	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
131	C－け－10	42×28	29	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	Pit132を切る
132	C－け－10	32×30	31	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	Pit131に切られる
133	C－け－10	18	14	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
134	C－け－10	24×22	19	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
135	C－く－10	54×40	21	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・ブロック少含、パミス含む。	攪乱に切られる
136	D－く－1	42×30	25	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子含む、ロームブロック少含。	Pit121に切られる
137	C－く－10	30×28	22	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
138	E－う－8	22×19	11	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子含む。	D5を切る
139	C－か－10	34×26	17	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス含む。	H13を切る
140	D－か－1	56×54	6	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・ブロック、パミス含む。	
141	C－お－10	62×50	24	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	
142	D－お－2	44×40	22	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子少含、パミス含む。	
143	C－く－9	50×36	16	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子少含。	
144	E－え－10	36×28	48	暗褐色土（10YR3/2）　ローム粒子・パミス含む。	
145	E－お－10	32×22	12	暗褐色土（10YR3/2）　炭化物・パミス含む。	
146	D－え－2	34×25	18	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス含む。	D28を切る
147	D－え－2	44×36	27	暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子含む。	OT1を切る
148	D－う－2	26×22	22	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子含む。	OT1を切る
149	C－く－10	38×34	28	黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス含む。	

No.	検出位置	規模(cm)		覆　　土	重複関係 出土遺物
		径	深さ		
150	C－か－9	42×24	22	暗褐色土（10YR3/2）ローム粒子少含、パミス含む。	
151	C－お－9	82×22	31	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック少含、パミス含む。	
152	D－お－1	32×30	8	暗褐色土（10YR3/2）ローム粒子・ブロック少含、パミス含む。	
153	D－お－1	40×38	18	暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子・ブロック少含、パミス含む。	
154	D－お－1	26×22	15	黒褐色土（10YR2/3）炭化物・ローム粒子少含。	
155	C－え－10	30×22	16	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック含む。	
156	C－え－10	32×30	19	暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子・ブロック多含。	
157	C－え－10	42×32	33	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・砂粒含む。	
158	C－え－10	42×36	35	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含、砂粒含む。	
159	C－え－10	36×34	30	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	Pit220を切る
160	D－え－1	36×32	23	黒褐色土（10YR3/2）炭化物・ローム粒子・パミス少含。	D11を切る
161	D－え－1	32×28	20	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・砂粒含む。	
162	D－え－1	38×34	27	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・砂粒含む。	
163	D－え－1	38	17	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、砂粒含む。	
164	D－お－1	34×22	19	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
165	D－か－2	46×42	21	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック含む。	
166	D－お－1	28	18	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、砂粒含む。	
167	D－お－1	52×38	18	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含、砂粒含む。	
168	D－お－1	47×38	19	黒褐色土（10YR2/3）炭化物・ローム粒子少含、砂粒含む。	
169	D－お－2	34×32	14	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス少含、砂粒含む。	
170	D－お－2	42×30	10	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス少含、砂粒含む。	
171	D－か－2	28×25	28	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子少含、砂粒含む。	
172	D－き－1	30	13	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
173	D－き－1	34×30	14	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	
174	D－く－1	40×38	23	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子含む。	
175	C－く－10	56×30	25	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
176	C－く－10	30×24	40	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
177	C－く－10	26	16	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子多含、パミス含む。	
178	C－く－10	18	15	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子含む。	
179	C－く－10	32×16	13	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・パミス多含。	Pit109に切られる
180	C－く－10	36×24	12	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子含む。	
181	C－く－9	20	17	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子含む。	
182	C－く－9	48×42	12	黒褐色土（10YR2/3）にぶい黄橙色（10YR6/4）ブロック含む。	
183	C－く－9	28×22	17	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子含む。	
184	D－く－10	40×30	15	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子含む。	
185	C－き－10	26×24	14	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含。	
186	C－き－10	28×22	23	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子少含。	
187	B－こ－3	52×40	19	暗褐色土（10YR3/4）ロームブロック多含、黒色土ブロック含む。	Pit58を切る
188	C－く－9	42×28	18	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子少含。	
189	C－く－9	52×44	37	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子含む。	
190	C－く－9	42×30	37	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
191	C－く－9	42×38	14	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
192	C－く－9	22	13	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	
193	C－く－9	34×30	16	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	
194	C－き－9	41×38	26	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・ブロック、パミス含む。	
195	C－き－9	26×24	23	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック多含。	
196	C－き－9	22	25	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック多含。	
197	C－き－9	40×26	14	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子多含。	
198	C－け－9	28×26	14	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
199	C－け－9	32×26	19	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
200	C－け－9	48×40	22	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子多含。	

No.	検出位置	規模(cm)		覆　　土	重複関係 出土遺物
		径	深さ		
201	B－こ－3	64×56	49	黒褐色土（10YR3／2）黒色土ブロック（10YR2／1）含む。	
202	C－こ－10	30×26	12	黒褐色土（10YR2／3）焼土粒子・炭化物含む。	
203	C－こ－10	20	10	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子含む。	
204	C－こ－10	22×20	15	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子含む。	
205	C－く－8	52×40	22	暗褐色土（10YR3／3）ローム粒子多含。	Pit206を切る
206	C－く－8	64×32	32	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子含む。	Pit205に切られる
207	C－く－8	28×26	19	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子少含。	M7を切る
208	C－く－8	28×26	22	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子少含。	
209	C－く－8	32×26	29	黒褐色土（10YR2／2）焼土粒子含む、ローム粒子少含。	
210	C－く－8	33×－	51	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	北側調査区外
211	C－く－8	30×－	18	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	北側調査区外
212	C－く－8	26×－	17	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	北側調査区外
213	C－く－8	38×28	19	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	
214	C－く－8	30×28	15	暗褐色土（10YR3／3）ローム粒子多含。	M7を切る
215	C－け－8	24×22	16	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	M7・Pit216を切る
216	C－け－8	36×30	20	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	M7を切る、Pit215に切られる
217	C－け－8	26	19	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	M7を切る
218	C－う－10	38×32	40	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子少含、パミス含む。	
219	C－う－10	44×36	17	暗褐色土（10YR3／3）ローム粒子・パミス・砂粒含む。	D11を切る
220	D－え－1	34×30	30	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・ブロック、パミス、砂粒含む。	Pit159に切られる
221	D－え－2	38×22	17	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス含む、砂粒少含。	
222	D－え－2	20×18	28	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子少含、パミス含む。	
223	D－え－1	22×20	14	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子少含、パミス含む。	D11を切る
224	D－あ－4	58×52	19	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス・小石含む。	
225	D－あ－4	102×52	33	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子含む、パミス多含。	Pit276を切る
226	D－あ－4	60×－	27	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子含む。	南側調査区外
227	B－こ－3	24	19	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子含む。	
228	B－こ－4	36×34	13	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子含む。	D33を切る
229	B－こ－4	44×34	11	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子多含。	D33・Pit232を切る
230	C－き－10	96×38	16	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子少含、パミス含む。	M4に切られる
231	B－こ－3	24×22	8	暗褐色土（10YR3／4）ローム粒子多含、パミス少含。	
232	B－こ－4	40×30	19	黒褐色土（10YR2／3）砂粒・パミス含む。	D33を切る、Pit229に切られる
233	B－け－4	60×50	23	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・パミス少含。	Pit234・235を切る
234	B－け－4	60×46	29	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・ブロック少含。 褐色土（10YR4／4）ローム主体。	Pit233に切られる
235	B－け－4	38×34	44	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・パミス少含。	Pit233に切られる
236	D－あ－4	－×56	－	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子少含。 暗褐色土（10YR3／3）ローム粒子・ブロック含む。	南側調査区外
237	C－く－8	32×28	24	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・パミス多含。	Pit238に切られる
238	C－く－8	32×28	30	黒褐色土（10YR2／2）ローム粒子・パミス含む。	Pit237を切る
239	D－あ－1	40×36		黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・パミス・砂粒含む。	H19・OT1を切る
240	D－あ－1	24×22	12	暗褐色土（10YR3／3）ローム粒子含む。	OT1を切る
241	D－あ－1	40×22	10	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス含む。	OT1を切る
242	D－あ－1	38×32	19	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス含む。	
243	D－い－1	36×28	17	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス含む。	
244	D－い－1	60×44	21	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・パミス・砂ブロック多含。	
245	D－う－1	26×24	21	褐色土（10YR4／4）ローム主体。	
246	D－う－1	34×24	9	暗褐色土（10YR3／3）ローム粒子多含。	
247	D－う－2	22×15	11	黒褐色土（10YR3／2）ローム粒子・パミス多含。	
248	D－い－2	34×32	18	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス含む。	H18を切る
249	D－い－2	22	24	黒褐色土（10YR2／3）ローム粒子・パミス含む。	H18を切る

No.	検出位置	規模(cm)		覆　　土	重複関係 出土遺物
		径	深さ		
250	D－う－2	40×36	28	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子・ブロック含む。	
251	D－う－3	28×26	30	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	
252	D－う－3	72×60	45	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子・パミス含む。	
253	D－う－3	34	25	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子・パミス含む。	
254	D－う－3	24×22	18	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子多含、パミス含む。	
255	D－う－3	30	38	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	
256	D－い－3	42×32	26	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス含む。	
257	D－い－3	34×32	24	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
258	D－い－3	26×24	16	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子・パミス含む。	H18を切る
259	D－い－3	34×26	28	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子・パミス含む。	
260	D－い－3	26	27	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
261	D－い－3	30×28	54	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
262	D－い－3	36×32	22	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック、パミス含む。	
263	D－あ－2	32×24	18	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子・パミス含む。	
264	D－あ－2	44×36	23	黒褐色土（10YR3/2）焼土粒子・炭化物含む。	
265	D－い－1	52×44	11	暗褐色土（10YR3/3）ローム粒子多含、パミス含む。	OT1を切る
266	D－い－2	40×28	25	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子少含、パミス含む。	H18を切る
267	D－あ－2	36×26	33	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	H18を切る
268	D－あ－2	40×36	13	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック、パミス含む。	
269	D－あ－2	42×34	30	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス多含。	H18を切る、弥生土器片
270	D－あ－3	48×38	30	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
271	D－あ－3	42×40	23	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
272	D－あ－3	34×28	47	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	OT1を切る
273	D－あ－3	44×36	18	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。	
274	D－い－3	86×52	22	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス含む。 褐色土（10YR4/4）ローム主体。	
275	D－い－4	42×40	24	黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子・パミス含む。	
276	B－こ－4	44	68	黒褐色土（10YR2/3）炭化物・ローム粒子・パミス少含。	D34・Pit225に切られる
277	D－い－4	42×28	15	暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子多含、パミス含む。	
278	D－い－4	36×26	18	にぶい黄褐色土（10YR4/3）ローム粒子多含、パミス含む。	
279	D－い－4	28×26	18	暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子多含、パミス含む。	
280	D－う－3	88×60	20	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス・砂粒含む。	H17・OT1を切る
281	D－う－2	36×32	25	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・ブロック、パミス含む。	OT1を切る
282	D－う－2	22×15	8	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・ブロック、パミス含む。	OT1を切る
283	B－こ－4	64×50	18	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・パミス少含。	
284	B－け－3	50×46	13	黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・パミス少含。	
285	B－こ－3	38×34	9	黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・ブロック、パミス少含。	

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　遺構

今回、五里田遺跡では竪穴住居址43棟（発掘調査21棟、試掘調査22棟）、周溝墓４基、周湟２基、掘立柱建物址２棟、土坑37基、溝状遺構７条、ピット等が調査された。これらの遺構を時代順に概観して調査のまとめとしたい。

縄文時代の遺構には「陥し穴」とされている土坑があり、第３～６・８～10号土坑の７基がこれに相当する。他の土坑と比べて規模が大きく、形態は隅丸長方形の第８号土坑を除いて楕円形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり上半部で大きく開く。底面には長軸に沿って１～３個の小ピットがある。今回の調査地は砂質で崩壊し易いためであろうかピット内に拳大の石を入れ補強としている。出土遺物には第６号土坑の深鉢があり、縄文時代後期（称名寺式）の所産である。

弥生時代中期後半になると調査区の全面に集落が展開する。明確な住居址間の重複関係はみられず、出土遺物に大きな時間差がみられないことから短期間に発展した集落であろう。調査面積1,400㎡という限られた範囲での調査のため全容を把握できた住居址は少ないが、検出された住居址の形態は隅丸長方形を基調とする。住居址規模については、推定可能な15棟について以下のように分類を行った。

15～18㎡－南北４～5.5m、東西４～５m	第４・10・11・14・18号住居址
21～25㎡－南北5.5～６m、東西4.5～５m	第１・５・９・13・19・20号住居址
30㎡前後－南北6.5～７m、東西5.5～６m	第２・６・７・12号住居址

本遺跡では床面積21～25㎡の住居址が最も多く６棟を数え主体的な規模であると考えられる。30㎡前後の大型の住居址と20㎡以下の小型の住居址も存在するが、北西ノ久保遺跡にみられるような40㎡を越える大型の住居址は検出されなかった。また、小型の住居址の中には南北長４m、東西長4.5mで東西方向の隅丸長方形を呈する住居址（第11号住居址）が１棟検出された。床面積14.7㎡と今回の調査では最も規模の小さい住居址である。主柱穴は４本で方形の配置を基本とする。東西各３本、６本の主柱穴をもつと考えられる住居址は第５号住居址１棟のみである。また床下から古い柱穴が検出され、柱の立て替えが行われたと考えられる住居址は６棟（第２・５・11・13・18・19号住居址）認められた。北側主柱穴間の北側に位置する「棟持柱」が検出された住居址は８棟（第１・２・９・10・14・17・19・20号住居址）であるが、北側が調査区外となる第５・６・７・12号住居址にも棟持柱が存在する可能性が高い。

第40表　五里田遺跡住居址一覧表

遺構名	検出位置	平面形	規模（cm・㎡）				長軸方位	炉	柱穴	備考
			南北長	東西長	壁高	面積				
H 1	E－お・か－5～7	隅丸長方形	568	470	6～20	22.4	N－22°－W	中央 地床炉＋炉縁石	主柱穴　4 棟持柱　1 他　3	
H 2	E－か・き－7～9	隅丸長方形	720	570	2～20	28.6	N－6°－W	中央 地床炉＋炉縁石	主柱穴　4 棟持柱　1 他　3	床下より旧柱穴3
H 3	E－き－7・8	－	－	－	6～10	－	－	－	－	
H 4	E－え～か－7・8	隅丸長方形	498	450	6～19	17.4	N－21°－W	中央 石囲炉	主柱穴　4 他　4	
H 5	E－う・え－6・7	隅丸長方形	－	486	0～10	－	－	中央 地床炉＋炉縁石	主柱穴　5 他　2	床下より旧柱穴4 床下より旧炉址1
H 6	C－こ－7 E－あ・い－7	隅丸長方形	－	542	11～25	－	－	－	主柱穴　2 他　3	
H 7	C－け・こ－7・8	隅丸長方形	－	585	1～16	－	－	中央 石囲炉？	主柱穴　3 他　7	
H 8	E－え・お－10	－	－	－	2～18	－	－	－	他　2	
H 9	C-こ-10　D-こ-1 E-あ-10　F-あ-1	隅丸長方形	－	520	0～21	－	－	中央 地床炉	主柱穴　4 棟持柱　1 他　7	
H10	D－く・け－1・2	隅丸長方形	－	418	1～23	－	－	中央 地床炉	主柱穴　4 棟持柱　1 他　3	
H11	C－く・け－9・10	隅丸長方形	392	450	1～19	14.7	N－80°－E	中央 地床炉	主柱穴　4 他　6	床下より旧柱穴4
H12	C－か・き－8・9	隅丸長方形	－	538	9～34	－	－	中央 地床炉	主柱穴　2 他　4	
H13	C－か・き－9・10 D－か・き－1	隅丸長方形	－	498	1～18	－	－	中央 地床炉＋炉縁石	主柱穴　4 他　3	床下より旧柱穴3
H14	C－え・お－9・10	隅丸長方形	528	498	4～25	－	－	中央 地床炉	主柱穴　4 棟持柱　1 他　1	
H15	D－き・く－3	－	－	－	13～21	－	－	－	－	
H16	D－き－2・3	－	－	－	6～19	－	－	－	主柱穴　1	
H17	D－う・え－3	－	－	－	1～19	－	－	－	主柱穴　2 棟持柱　1 他　2	
H18	D－あ～う－1～3	隅丸長方形	494	440	13～23	17.2	N－29°－W	中央 地床炉	主柱穴　4 他　3	床下より旧柱穴4
H 1 9	B－こ－1・2 D－あ－1・2	隅丸長方形	608	480	1～11	－	－	中央 地床炉	主柱穴　4 棟持柱　1 他　3	床下より旧柱穴2
H20	B－く・け－3・4	隅丸長方形	582	476	2～28	－	－	中央 地床炉＋炉縁石	主柱穴　4 棟持柱　1 他　1	
H21	C－い・う－9・10	－	－	－	5～15	－	－	－	主柱穴　1 他　3	

炉址は14棟の住居址から検出された。付設される位置は住居址の規模・形態に関わらず住居址中央である。形態は地床炉、地床炉＋炉縁石が12棟と主体的であるが、他に礫を円形に配置した「石囲炉」が２例（第４・７号住居址）みられる。

今回調査を行った住居址について概観したが、規模については15㎡前後の小型の住居址から30㎡前後の大型の住居址まで多様性がみられる点、柱穴については「棟持柱」が設けられる割合が高い点、炉址については礫を円形に配置した「石囲炉」が存在する点など、『北西ノ久保遺跡』で述べられている「北西ノ久保Ⅱ期」との共通性が伺え、次期の後期前半へ続く様相を示しているものと思われる。

中期後半に営まれた集落が消滅した以降は当遺跡に大規模な集落が形成されることはなく、円形周溝墓が出現する。検出された円形周溝墓は径6.5～7.5mの円形を呈し、北または西側を掘り残してブリッジとしている。第３・４号円形周溝墓については南側大半が調査区外のため不明瞭な部分も多いが周溝の一部を共有する可能性も考えられる。また第１号円形周溝墓は二重に溝を巡らせた周溝墓であり特異な例である。埋葬施設は第２・３号円形周溝墓から検出された。円形の区画内中央に位置し、第２号円形周溝墓の主体部からは「小口穴」とも考えられる掘り込みが検出されている。人骨は第２号円形周溝墓の銅釧内から砕片が出土しているのみであり、頭骨・歯など埋葬頭位を示すものは確認されないため頭位方向については不明である。住居址との重複関係、第２号円形周溝墓から出土した銅釧から弥生時代後期の遺構であろう。これ以外の弥生時代後期の墓には壺棺墓（第１・２号土坑）があり、第１号土坑からは副葬品として碧玉製の管玉１点、ガラス小玉11点が出土している。

佐久地方における弥生時代土器棺墓の調査例は北西ノ久保遺跡・周防畑Ｂ遺跡（３例）・竹田峯遺跡・蔦石遺跡・戸坂遺跡の５遺跡７例が報告されている。これらを時期別にみると北西ノ久保例のみが中期後半で、周防畑Ｂ・蔦石例が後期前半、竹田峯例・戸坂例が後期後半に位置づけられている。また、棺に用いられた土器の器種をみると北西ノ久保例・周防畑Ｂ例（２号円形周溝墓）・竹田峯例・蔦石例が壺であり、周防畑Ｂ例（26・27号土壙）・戸坂例が甕である。本遺跡第１・２号土坑の棺に用いられた壺は赤色塗彩される点、胴下位に若干の括れをもつ点など、周防畑Ｂ遺跡・蔦石遺跡例と同様な様相を示すことから後期前半に位置づけられよう。

古墳時代に至ると古墳の築造が行われるが、検出された遺構は周湟のみで墳丘・主体部は残っていない。周湟は調査区の東側から２基確認されたが、第２号周湟は大半が調査区外のため規模・形態については不明である。第１号周湟は南北14.4m、東西14mで南側に開口する。墳丘は周湟の形態から円墳であると考えられる。第１号周湟から土師器坏・高坏、須恵器平瓶・甕などが出土し、古墳時代中期後半と奈良時代から平安時代初頭の二時期の様相がみられることから、『北西ノ久保遺跡』(1987) で指摘されているように、２基の古墳は古墳時代中期後半に築造され、奈良時代～平安時代初頭まで何らかの祭祀が行われていた可能性が高いと考えられる。

以上、今回調査を実施した五里田遺跡から検出された遺構について簡単にまとめを行ったが、調査を実施した21棟の住居址は出土遺物に大きな時間差がみられず、明確な重複関係が認められないことなどからほぼ同一時期に形成された集落と考えられる。これらの弥生時代中期後半に短期間のうちに発展した集落が消滅した以降当地において大規模な集落が形成されることはなく、円形周溝墓・壺棺墓さらには古墳の築造などにみられるように弥生時代後期から古墳時代にわたって墓域として利用されるのである。

第２節　遺物

本遺跡の住居址からは弥生時代中期後半の土器が多量に出土している。したがって北西ノ久保遺跡出土資料を中心に比較検討を行ってみたい。北西ノ久保遺跡では中期後半の資料を「北西ノ久保Ⅰ期」・「北西ノ久保Ⅱ期」の二時期に細分し、北信の栗林Ⅱ式、南信の北原Ⅱ式に併行関係をもつとしている。

ここでは北西ノ久保遺跡の分類に従って本遺跡出土資料の位置づけを行ってみたい。

壺には口縁部が外反する「単純口縁・細頸壺」(壺Ａ）、受口状に立ち上がる「受口口縁・細頸壺」（壺Ｂ)、太い頸部から口縁部が受口状に立ち上がる「太頸壺」（壺Ｃ）がある。壺Ａ・Ｂともに頸部から胴部まで施文されるＡ・Ｂ１は少なく、胴部上位の文様を欠くＡ・Ｂ２、頸部のみに集中するＡ・Ｂ３が主体を占め、頸部には縄文＋箆描横線文・山形文、胴部には縄文＋箆描横線文・山形文・連弧文の縄文と箆描文の組み合わせによるものが多い。太頸壺Ｃには頸部に縄文と箆描文が施文されるＣ１と縄文が消失し櫛描の刺突文が加わるＣ２があり、単純口縁の壺にも太頸傾向がみられるものがある。この他赤色塗彩される壺Ｅがある。

甕には単純口縁を有する甕Ａ、受口状の口縁部を有する甕Ｂがあり、後者の増加傾向がみられる。また甕Ｂの受口部の外稜は不明瞭で丸味を帯びる。甕Ａ・Ｂともに頸部に櫛描横線文・波状文・簾状文が巡るものがあり、胴部の文様は櫛描縦羽状文（Ａ１・Ｂ１)、櫛描波状文または櫛描波状文＋垂下文（Ａ３・Ｂ２）が多い。台付甕には「コ」の字重ね文のＡと櫛描波状文＋垂下文のＢがある。

鉢・高坏は全体の器形の知れるものが少ないが、鉢については体部が椀状を呈し、赤色塗彩されるＡ２が主体的である。

以上、壺については胴部への施文が中位（胴最大径付近）に集中し、上位の文様は垂下文を主体としており胴部全体への横帯文がみられないことと太頸化傾向がみられる点、甕については受口口縁甕（甕Ｂ）の増加と受口部の外稜の消失化など北西ノ久保Ⅱ期に共通する要素が伺えることから本遺跡出土の中期後半の資料は北西ノ久保Ⅱ期に相当するものと考えられる。

次に第５号住居址から出土した内面黒色の土器についてであるが、高坏（24－８)・鉢（24－９～13）にみられ、比較的大型の12・13の内面から赤色塗彩の後に黒色処理が行われたことが伺える。これが偶然によるものか意図的に行われた黒色処理であるかは明確でないが、小型の９～11の内面をみる限り偶然による結果とは考えにくく、意図的に行われた黒色処理であるならば、黒色処理の初源を知るうえでの貴重な資料である。初見の資料であり今後の類例を待ちたい。

引用参考文献

佐久市教育委員会

1980 『北西久保』

1994 『西一本柳遺跡Ⅰ』

1995 『西一本柳遺跡Ⅱ　中西ノ久保遺跡Ⅰ』

1997 『円正坊遺跡Ⅱ』

1998 『佐久市埋蔵文化財　年報6（平成8年度）』

1998 『根々井芝宮遺跡』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

1986 『西裏・竹田峯』

1987 『北西の久保　－南部台地上の調査－』

1988 『薊沢・蔦石』

長野市教育委員会

1991 『中俣遺跡　押鐘遺跡　檀田遺跡』

1992 『篠ノ井遺跡群（4）　－聖川堤防地点－』

1993 『松原遺跡Ⅱ』

1995 『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』

中野市教育委員会

1997 『栗林遺跡発掘調査報告書』

飯田市教育委員会

1986 『恒川遺跡群』

長野県史刊行会

1982 『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』

1988 『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』

財団法人　長野県埋蔵文化財センター

1994 『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』
「－長野県中野市内－　栗林遺跡　七瀬遺跡」

1996 『長野県埋蔵文化財センター　紀要　5』

1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　5』
「－長野市内　その3－　松原遺跡　弥生・総論4　弥生中期・土器図版」

1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　5』
「－長野市内　その3－　松原遺跡　弥生・総論6　弥生後期・古墳前期」

長野県考古学会

1999 『99シンポジウム　長野県の弥生土器編年』

佐久考古学会

1990 『佐久考古6号　赤い土器を追う』

北武蔵古代文化研究所・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所

1984 『第5回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』

1986 『第7回三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』

1988 『第9回三県シンポジウム　東日本の弥生墓制』

林　幸彦・花岡　弘

1983 「弥生時代の炉－千曲川流域を中心として－」『信濃』35－4

小山　岳夫

1990 「地域編年の再検討－弥生土器　佐久地方の様相と変化－」
『信濃』42－10

付編１　佐久市五里田遺跡出土人骨について

聖マリアンナ医科大学　解剖学教室
平田　和明　　奥　千奈美

Ⅰ　はじめに

佐久市に所在する鳴沢遺跡群五里田遺跡から出土した２個体分の人骨について佐久市教育委員会から鑑定を依頼されたので、ここにその結果を報告する。

Ⅱ　人骨の出土状況

出土した人骨２体は部分的で断片的な残存状況であるため、詳細な年齢・性別の鑑定は不可能である。これらのうちの１個体は銅釧内から出土しており、骨全体が緑青色である。

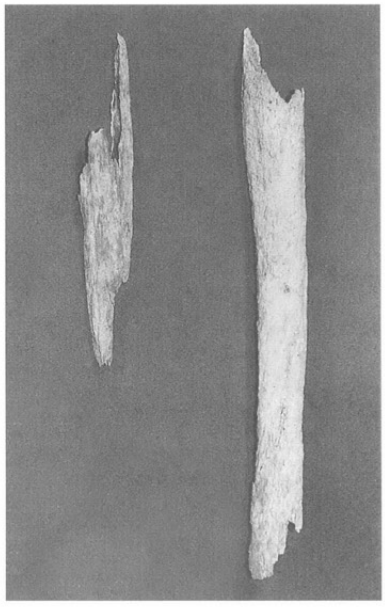
Ⅲ　人骨の所見

１）第２号円形周溝墓人骨（性別不明・年齢不明）（弥生時代後期）

この個体は極めて保存状態が悪く、残存骨は砕片化している。また、銅釧中から出土しており、土中の銅の蓄積により、骨全体が緑青色である。人骨片のうちの一つは骨皮質の質感、形状から長管骨片であると推定されるが、他の骨片は部位不明である。

２）第23号土坑人骨（性別不明・成人）(時期不明・写真１）

この個体は保存状態が悪く、骨表面に亀裂が多数入っているが、脆弱ではない。残存部位は　右大腿骨骨体部と右脛骨骨体部である。大きさから成人であると推定されるが、詳細な推定年齢は不明である。また、大腿骨・頸骨ともに全体的に華奢で小さい。



（写真１）第 23 号土坑人骨（約 1/3）

Ⅳ　まとめ

佐久市鳴沢遺跡群五里田遺跡から少なくとも２個体の人骨が出土した。その内訳は、性別年齢不明の弥生時代後期人骨１体と性別不明成人の時期不明人骨１体である。２体共に断片的に残存しているため、病的所見などについての詳細はわからない。

付編２　佐久市五里田遺跡出土獣骨について

日本ほ乳類学会
宮崎　重雄

五里田遺跡から出土の獣骨類はすべてウマ（Equus caballus）である。

第５号溝状遺構から左下顎骨片10数片、左下顎臼歯５本、寛骨片、脛骨片、中足骨片などが出土している。また、第６号溝状遺構からは上顎臼歯が３本、Ｄ－き－２グリッドからは下顎臼歯が10本出土している。

第５号溝状遺構では１の中足骨と２の左下顎臼歯は互いに1.7mほど離れ、２と３の脛骨片と寛骨片は互いに50cm離れていて、直線的に埋存している。１個体分しかないことや、互いに近距離にあることから、同一個体に属するものと思われる。２の下顎臼歯の歯冠高から推定される年齢は13～14才で老齢馬に近い壮令馬である。歯の大きさは日本在来馬相当である。

第６号溝状遺構の上顎臼歯はＤ－き－２グリッドとは別個体で、歯冠高から推定される年齢は９～10才である。雌雄は不明で、歯の大きさは在来馬ほどの馬格を思わせる。

Ｄ－き－２グリッドからは同一個体に属する左下顎臼歯、右下顎臼歯が出土している。歯冠高から推定される年齢は13～14才の壮令馬である。雌雄は不明で、歯の大きさは日本在来馬相当の馬格であることを思わせる。

参考・引用文献

林田重幸　(1978)　「日本在来馬の系統に関する研究」　日本中央競馬会

Levine　M（1982）　The use of crown height measurements and eruption- wear sequences to age horse teeth . In Wilson B ., Grigson C . and Payne S . eds . *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites .* Bar British Series 109,223－250.

西中川駿・松元光春（1991）　遺跡出土骨同定のための基礎的研究－特に在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較－「遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」
平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）
研究成果報告書．164－188.

野村晋一　(1986)　「概説馬学」　新日本教育図書株式会社、東京.

馬歯計測表

第５号溝状遺構　2

下顎臼歯

	歯種	第３前臼歯	第４前臼歯	第１後臼歯	第２後臼歯	第３後臼歯
歯冠近遠心径	歯根から3cm	26.9	26.0	22.3	23.2	32
歯冠頬舌径前葉	歯根から3cm	13.7	15.0	12.6	11.6	11.1
歯冠高	頬側	27.5	29.4	28.7	30.6	28
〃	舌側	25.0	30.0	30.7	30.3	24.1
下後錘谷長	咬合面	8.4	9.7	5.1	6	7.4
下内錘谷長	咬合面	10.4	9.7	6.3	6.2	8.1
doubleknot 長	咬合面	15.8	16.0	10.7	11.4	11.4
下内錘幅		5.6	6.1			

（単位mm）

第6号溝状遺構

上顎臼歯

	歯種	第３前臼歯	第４前臼歯	第１後臼歯
歯冠近遠心径	歯根から3cm	26.2	25.2	22.1
歯冠頬舌径	歯根から3cm	24.6	24.8	24.3
原錐幅	歯根から3cm	9.8	10.0	10.9
歯冠高	頬側	48.5	50.3	42.1
〃	舌側	49.4	52.1	41.2
中附錐幅	歯根から3cm	4.4	4.2	3.2

（単位mm）

Ｄ－き－2グリッド

下顎臼歯

	歯種	第２前臼歯	第３前臼歯	第４前臼歯	第１後臼歯	第２後臼歯	第３後臼歯
	左右		左	左	左	左	左
歯冠近遠心径	歯根から3cm	22.8+	26.9	26.0	22.3	23.2	32.0
歯冠頬舌径前葉	歯根から3cm	13.1	13.9	15.0	12.6	11.6	11.1
歯冠高	頬側	19.3	27.5	29.4	28.9	30.6	28.0
〃	舌側	17.2	25.0	30.0	30.7	30.3	24.1
下後錘谷長	咬合面		8.4	9.7	5.1	6.0	7.4
下内錘谷長	咬合面	14.0	10.4	9.7	6.3	6.2	8.1
doubleknot 長	歯根から3cm	13.5	16.2	16.0	10.7	11.4	11.4
下内錘幅		5.9	5.9?	?	?		

（単位mm）

付編３　鳴沢遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学的分析

㈶元興寺文化財研究所保存科学センター
塚本　敏夫　　菅井　裕子
東京国立文化財研究所　保存科学部
平尾　良光　　鈴木　浩子
九州テクノリサーチ
大澤　正己

１．はじめに

鳴沢遺跡群五里田遺跡から出土した鉄剣２振、鉄釧一式、銅釧一式計４点を財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターで保存処理業務委託としてお預かりした。鉄剣２振と鉄釧は弥生時代中期後半の住居跡から出土しており、弥生時代中期から後期にかけての東日本における鉄器文化の受容実態を明らかにする重要な資料である。また、弥生後期の円形周溝墓から出土した銅釧も弥生後期の青銅品の生産と流通の問題を考える上で重要な資料である。以上の観点から保存処理に先立ち、鉄素材の分析と青銅の成分分析及び鉛同位体比測定を行った。また、鉄剣には外装として布状有機質が確認されたので合わせて可能な分析を実施した。

分析遺物と分析項目を表１に示す。

なお、分析および本報告は元興寺文化財研究所の塚本敏夫が監修し、銅釧の材質分析と鉄剣の繊維分析を同研究所の菅井裕子が、また銅釧の鉛同位体比測定を東京国立文化財研究所の平尾良光、鈴木浩子が、鉄素材分析を九州テクノリサーチの大澤正己がそれぞれ行った。

表１　分析項目一覧

№.	遺物名	出土遺構名	ケイ光Ｘ線分析	鉄分析	鉛同位体比	繊維分析	備考
1	鉄剣	第１号住居跡				●	
2	鉄剣	第２号住居跡		●			
3	鉄釧	第５号住居跡		●			
4	銅釧	第２号円形周溝墓	●		●		

2．銅釧のケイ光Ｘ線分析

銅釧表面のケイ光Ｘ線分析（以下ＸＲＦ）を行い、その構成元素を調べた。

２－１　分析資料

資料は第２号円形周溝墓出土の銅釧５点である。

クリーニングにより余分な錆を落とした銅釧表面を非破壊で定性分析した。

２－２　分析方法

分析はエネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱製ＳＥＡ5230）により非破壊で定性分析した。

これは試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Ｘ線を検出することにより元素を同定するものである。

測定条件：モリブデン管球使用、大気条件下、管電圧50kV、管電圧1000mA

２－３　結果

得られたXRFスペクトルを図１に示す。いずれの銅釧からも、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）、銀（Ag）、及びアンチモン（Sb）を検出した。

微量元素としてヒ素（As）、銀（Ag）、及びアンチモン（Sb）が検出されたことが特徴である。

５点のスペクトルはほぼ同じ傾向を示しており、定量分析ではないため同定できないがほぼ同じ成分原料からなる可能性も指摘できる。

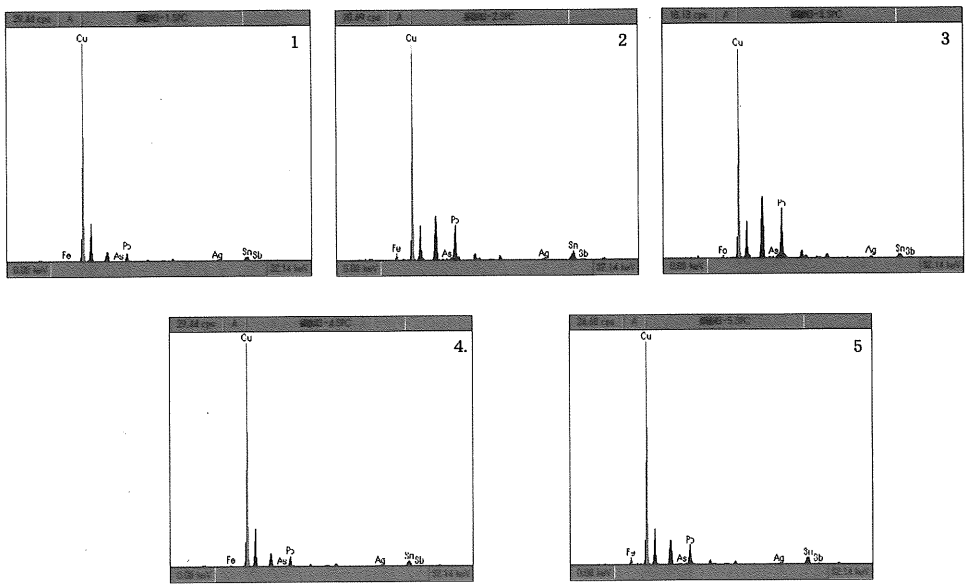


図１　銅釧表面のＸＲＦスペクトル

3．銅釧の鉛同位体比測定

3－1　分析資料

資料は第２号円形周溝墓出土の銅釧５点である。いずれも銅釧の内側面から表面の錆を採取した（写真１）。採取は㈶元興寺文化財研究所で行った。

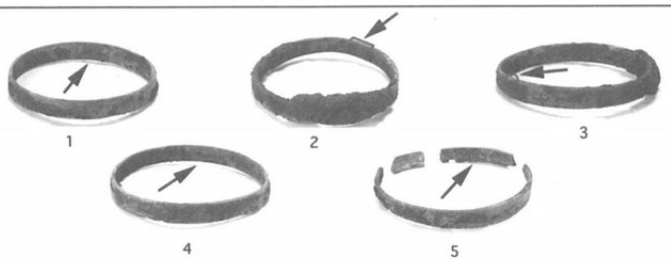


写真１　試料採取箇所

3－2　測定

(1)　鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[1]。今までの研究から、一般的に鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が異なればそれぞれの鉱山毎に特有の（固有の）値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことがわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に反映されるならば、文化財資料に含まれる鉛同位体比の違いは材料に含まれる鉛の産地の違いを示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01％程度、あるいは主成分の一つとして５％以上含まれていることが多い。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定機器（質量分析計）の感度が非常に良いため、１μgの鉛があれば十分である。また埋蔵環境からの汚染等がなければ、資料の金属部分でも錆部分でも同位体比は変わらないことが示されている。

(2)　鉛同位体比の測定

提供された試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を、白金電極を用いて２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2μgに相当する鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、ＶＧ社製の全自動表面電離型質量分析計Sector- Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS- SRM-981で規格化し、測定値とした。

3－3　結果と考察

(1)　鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表２で示した。得られた値を今までに測定された他の資料の値と比較するために図２にも示した。

表２　測定した資料の詳細と鉛同位体比

測定番号	遺跡名	名称	206 Pb /204 Pb	207 Pb /206 Pb	208 Pb /206 Pb
HS 406	五里田遺跡	銅釧 1	17.730	0.8762	2.1641
HS 407	五里田遺跡	銅釧 2	17.741	0.8761	2.1643
HS 408	五里田遺跡	銅釧 3	17.758	0.8766	2.1667
HS 409	五里田遺跡	銅釧 4	17.748	0.8764	2.1658
HS 410	五里田遺跡	銅釧 5	17.742	0.8765	2.1656
		誤差範囲	± 0.010	± 0.0003	± 0.0006

縦軸が208Pb /206Pbの値、横軸が207Pb /206Pbの値とした図をＡ式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした[2~6]。東アジア地域において、Ａは中国の前漢時代の銅鏡が主として分布する領域で、華北産の鉛である。Ｂは中国の後漢および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Ｃは現代の日本産の主要鉛鉱石が集中する領域である。Ｄは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布する幅のあるラインの中心領域として示されることが判っている。またａは弥生時代後期の銅鐸が集中する規格化された鉛の領域である。

縦軸を207Pb /204Pbの値、横軸が206Pb /204Pbの値とした図をＢ式図と呼ぶこととする。この図の中でＡ'、Ｂ'、Ｃ'、Ｄ'はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わしている。これらの図の中に本測定値を「●」で示した。

(2)　考察

今回測定した銅釧５点はＡ式図においてＡ領域の中のａ領域に位置した。この領域に位置しているということは、弥生時代後期に多く用いられた華北産の鉛を使用していることを示す。５点ともほぼ同じ値を示しているが、鉛同位体比からは鋳造が同一であるかどうかは判断できない。

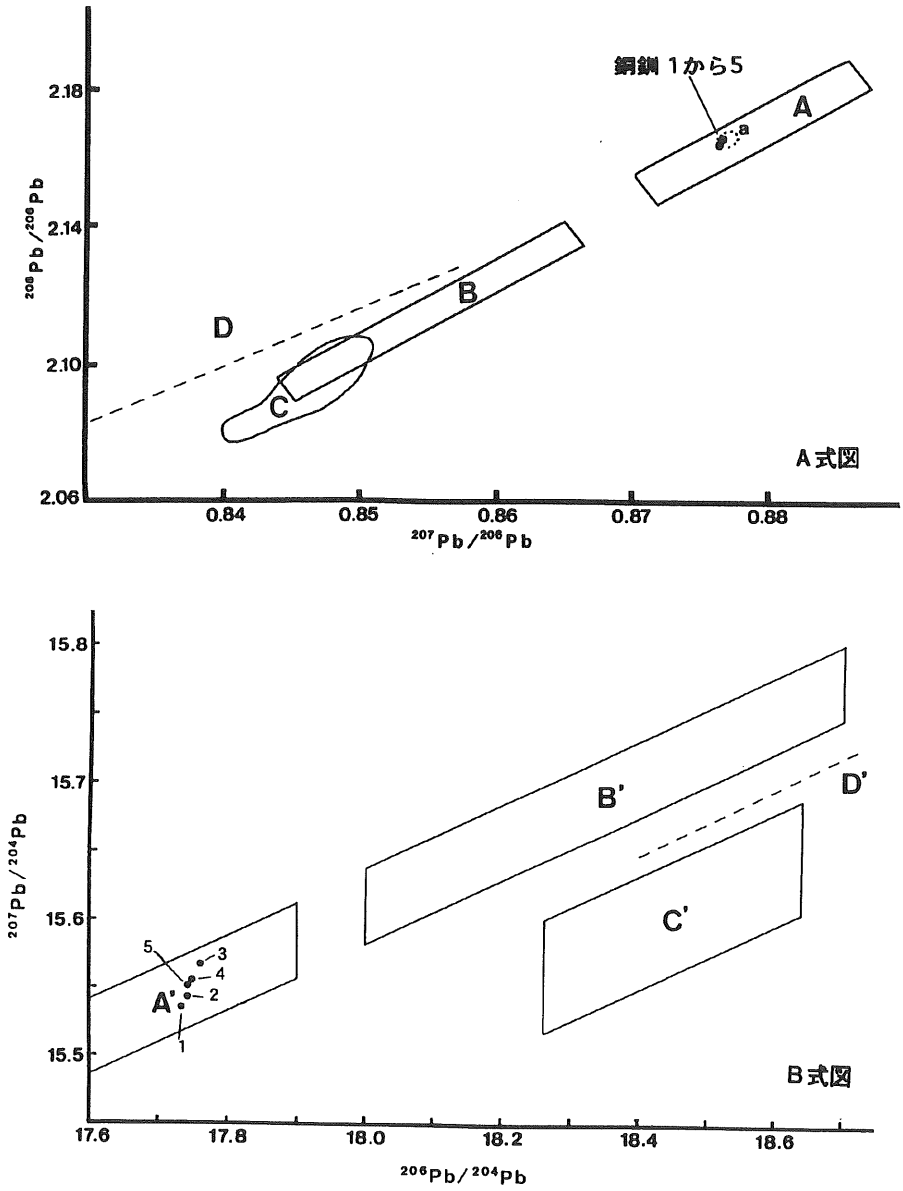


図２　銅釧の鉛同位体比

引用文献

１）平尾良光，馬淵久夫「表面電離型固体質量分析計VG- Sectorの規格化について」

『保存科学28』, 17-24（1989）

2）馬淵久夫，平尾良光「鉛同位体比による漢式鏡の研究」『MUSEUM №370』，4-10（1982ａ）
3）馬淵久夫，平尾良光「鉛同位体比から見た銅鐸の原料」『考古学雑誌68』，42-62（1982ｂ）
4）馬淵久夫，平尾良光「鉛同位体比による漢式鏡の研究（二）」
『MUSEUM №382』16-26（1983）
5）馬淵久夫，平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比―青銅器との関連を中心に―」
『考古学雑誌73』，199-210（1987）
6）馬淵久夫，平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌75』，385-404（1990）

4．鳴沢遺跡群五里田遺跡出土の鉄剣・鉄釧の金属学的調査

4－1　調査方法

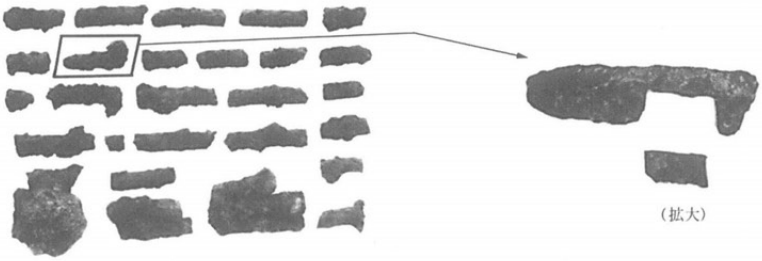
4－1－1　供試材

表3に鉄剣と鉄釧の履歴と調査項目を示す。写真2に供試材の採取箇所を示す。

表3　供試材の履歴と調査項目

符号	資料	出土位置	試料サイズ (mm)	調査項目			
				マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA調査
NRS－1	鉄剣	第2号住居跡	17.6×13.4×6	○	○	○	○
NRS－2	鉄釧	第5号住居跡	10×4.7×2.3	○	○	－	○

鉄剣（ＮＲＳ－１）



鉄釧（ＮＲＳ－２）

写真２　供試材の採取箇所

4－1－2　調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　マクロ組織

供試材・埋め込み試料の全体像を把握する目的から20倍の倍率でマクロ撮影を行っている。

(3)　顕微鏡組織観察

試料をベークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の＃150，＃240，＃320，＃600，＃1000と順を追って研磨し、最後に被研面をダイヤモンドの３μmと１μmで仕上げ、光学顕微鏡でミクロ組織の観察を行った。金属組織は、炭化物の観察に際しては、ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール溶液）で腐食（etching）し、フェライト結晶はナイタル（５％硝酸アルコール溶液）腐食を行った。

(4)　ビッカース断面硬度

試料の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は、鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は、顕微鏡試料を併用した。

(5)　CMA（Computer Aided X- ray Micro Analyzer）調査

EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名、Ｘ線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に、標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。また、分析を行えない微量試料や鉱物組成の微小域の組織同定が可能である。

4－2　調査結果

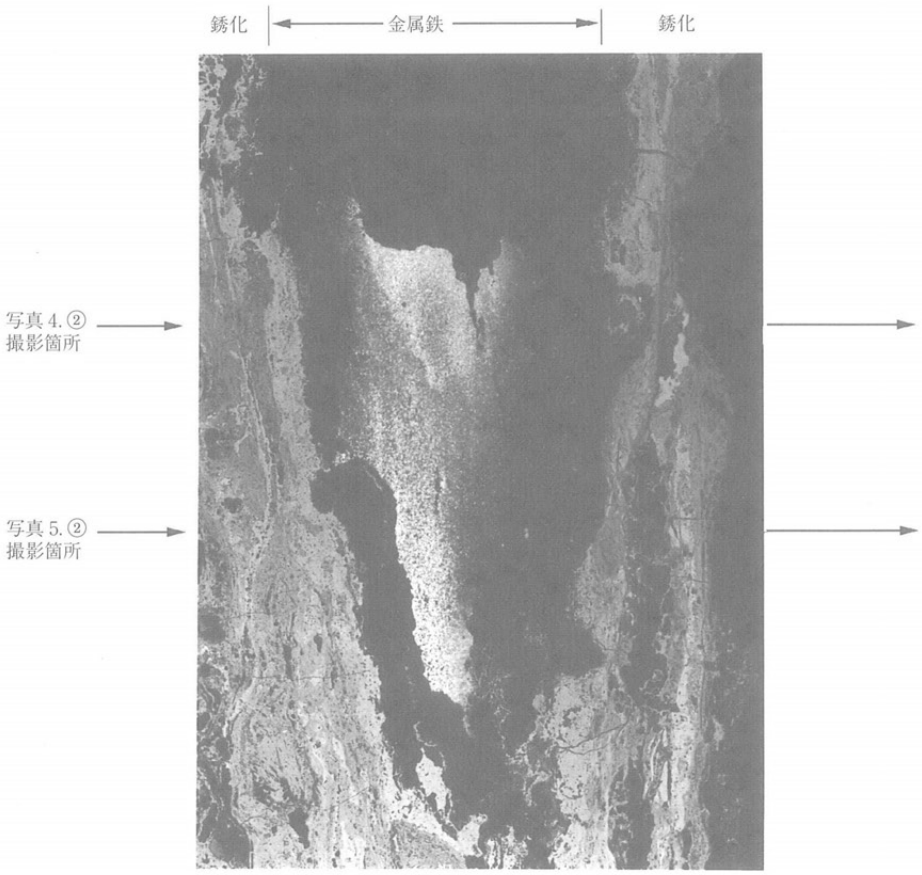
4－2－1　NRS-1：鉄剣

(1)　肉眼観察

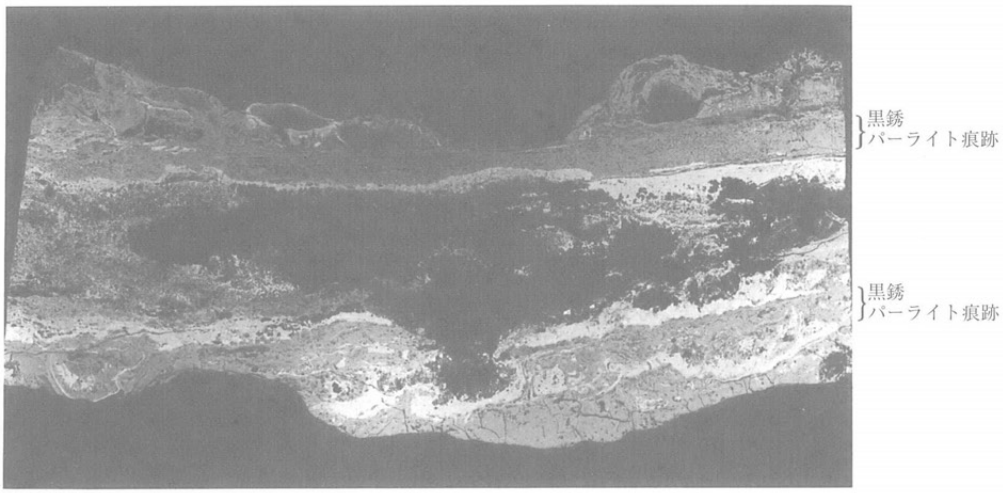
剣先端と茎を欠損した鉄剣である。現存長さ約14.3㎝、最大身幅約2.9㎝、関は斜めで、茎の長短は不明。全面赤褐色銹に覆われるが金属鉄を残す。

(2)　マクロ組織

写真３（上）に示す。皮金側の大部分は銹化して金属鉄は残存しないが、心金は遺存度良好で金属鉄が認められる。この金属鉄は、外側が黒くて高炭素含有、中央部は白くて低炭素含有、という２層に分かれ、高低炭素鋼の合わせ鍛えと推定される。なお、金属鉄には大きな鍛接線は見られず、丁寧な造りである。



NRS-1　×20



NRS-2　×20

写真3　マクロ組織（縮小率70%）

(3)　顕微鏡組織

写真４，５に示す。このうちの鉄中非金属介在物を①に示す。非金属介在物とは、鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガン、珪素及びリンなどの酸化物、硫化物、珪酸塩などがあり、鉄剣の介在物は珪酸塩である。すなわち、写真４－①、写真５－①の両者は、非晶質の暗黒色ガラス質スラグ組織で、鍛打作業により介在物は破砕・展伸された形跡を呈する。更に、鉄中の非金属介在物として、低温還元塊煉鉄特有の酸化第１鉄（FeO）や鉄・かんらん石（Fayalite：２FeO・SiO２）の大型の共晶夾雑物が認められないので、炒鋼と認定できる[1]。

写真４－②は、金属鉄の遺存度良好で、幅広部分の組織を示す。外側は高炭素のパーライトの多い共析鋼（0.8％C）クラス、中央部は弱く鍛接線を介して0.1～0.2％炭素を含有した軟鋼が存在する。

写真５－②は、切先側に寄った部分の組織を示す。左側の組織は、高炭側が銹化消滅した内側であり、低炭材のフェライト＋パーライト組織を有する。右側方向に順次フェライト組織が減少して、パーライト組織が増加する組織分布を示すのは、高炭材からの炭素拡散の影響であろう。

写真５－③～⑧は、②の左側から右側へかけての拡大組織である。パーライト組織中には塊状のマルテンサイト組織（Martensite）が見られ、鉄剣として加工後に比較的低温度の500～600℃から焼き入れされたことを示唆する。マルテンサイト組織部分は、何らかの理由でパーライト変態が遅れて、焼入れによるマルテンサイト変態が表われたのであろう。

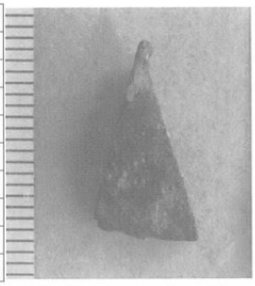
(4)　ビッカース断面硬度

写真４－③～⑧に金属鉄遺存度良好な最大幅箇所の硬度測定の圧痕を示す。フェライト＋パーライト組織の低炭素域は軟質の168Hvで、漸次炭素量の増加で171Hv、234Hv、257Hvと硬化したところが全面パーライト組織の共析鋼となる。また、焼入れ組織の細かい針状または麻の葉状のマルテンサイトは硬質で761Hvまで上昇する。なお、硬度値をマクロ的にとらえるために、写真６に値を打ち込んでいる。参照されたし。

(5)　CMA調査

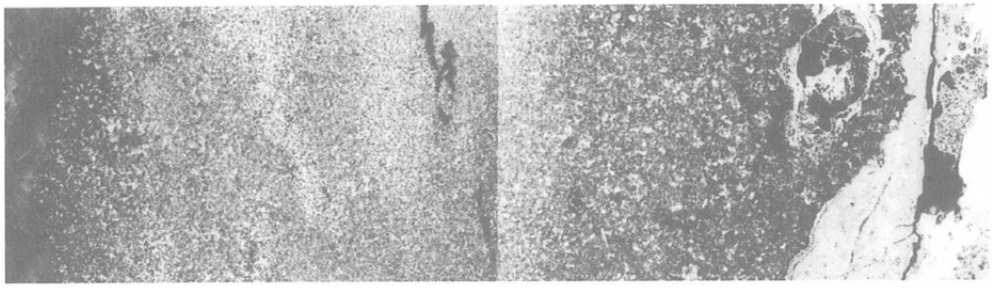
写真７のSE（２次電子像）に見られる暗黒色ガラス質スラグの高速定性分析結果を図３に示す。A-Rankで検出された元素は、鉄（Fe）と、ガラス質成分（Si＋Al＋Ca＋Mg＋K＋Na）およびリン（P）、チタン（Ti）などで、これらは酸化物として存在するので、酸素（O）が加わる。この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果が写真７である。分析元素の存在は、白色輝点の集中度によって読み分けるのであって、写真７－SEに２の番号をつけた介在物は、ガラス質成分（Si＋Al＋Ca＋Mg＋K＋Na）に白色輝点が集中するのは高

(2) NRS-1 ①
鉄剣
①×400 非金属介在物
②×50 ナイタル etch.
③～⑧×200 硬度圧痕 200 g
③:フェライト・パーライト168Hv
④:171Hv ⑤:234Hv
⑥:パーライト341Hv
⑦:257Hv
⑧:マルテンサイト:761Hv

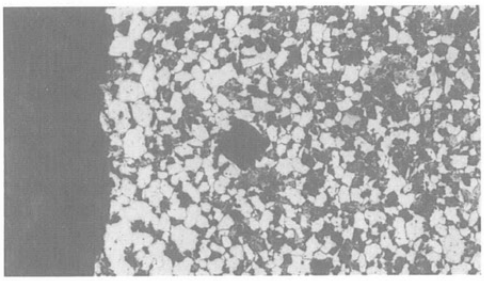


①

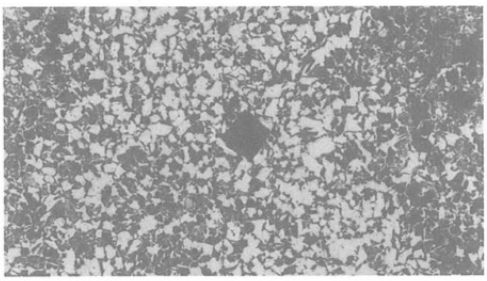
②



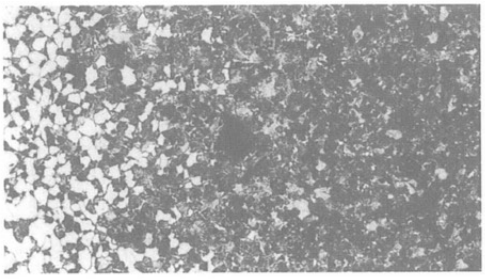
③



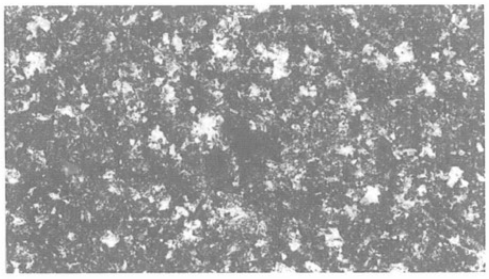
④



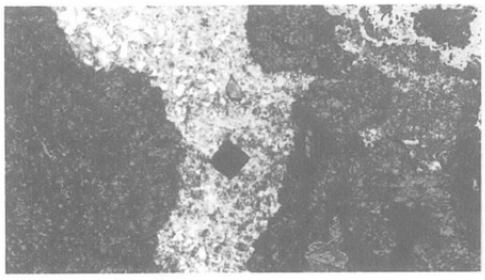
⑤



⑥



⑦



⑧

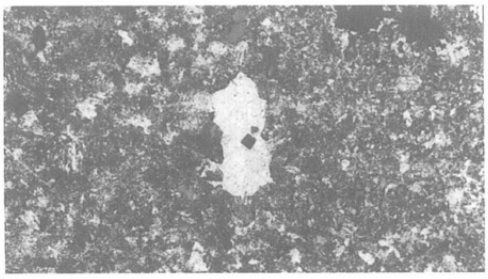
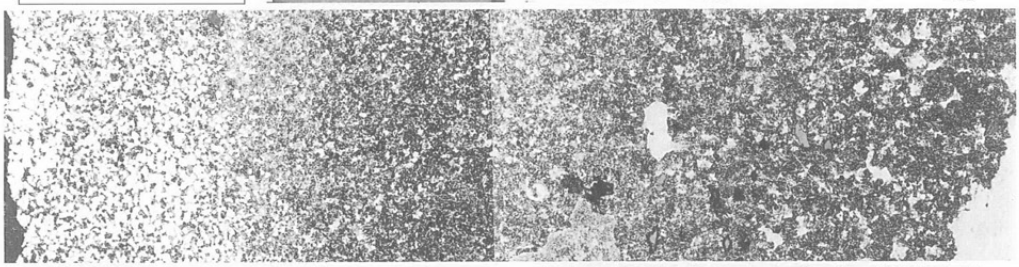


写真 4　鉄剣の顕微鏡組織（1）（縮小率 70%）

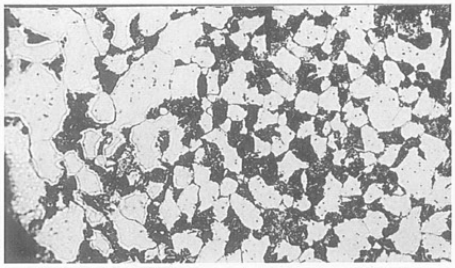
(2) NRS-1 ②
鉄剣
①×400 非金属介在物
②×50 ナイタル etch.
③～⑥×400、②の拡大
⑦×100、⑧×400刃先側
マルテンサイト(焼入組織)

①

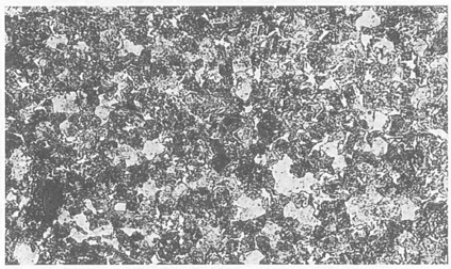
②



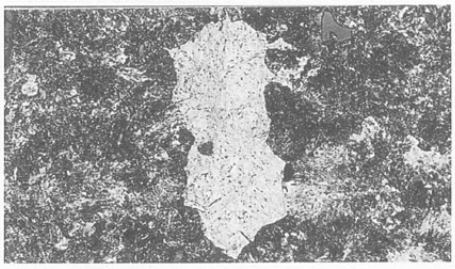
③



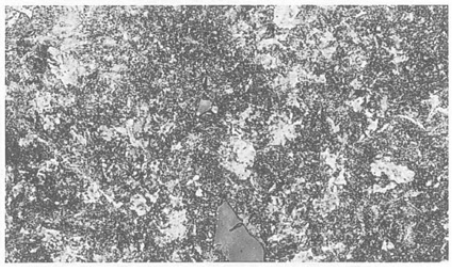
④



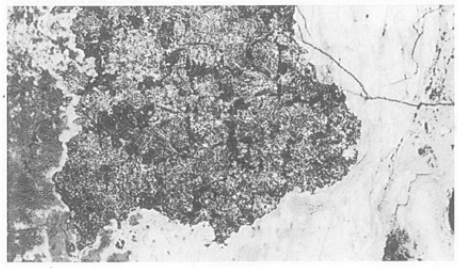
⑤



⑥



⑦



⑧

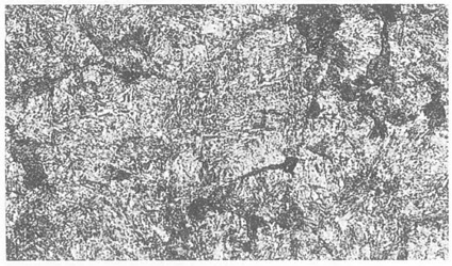


写真５　鉄剣の顕微鏡組織（2）（縮小率 70%）

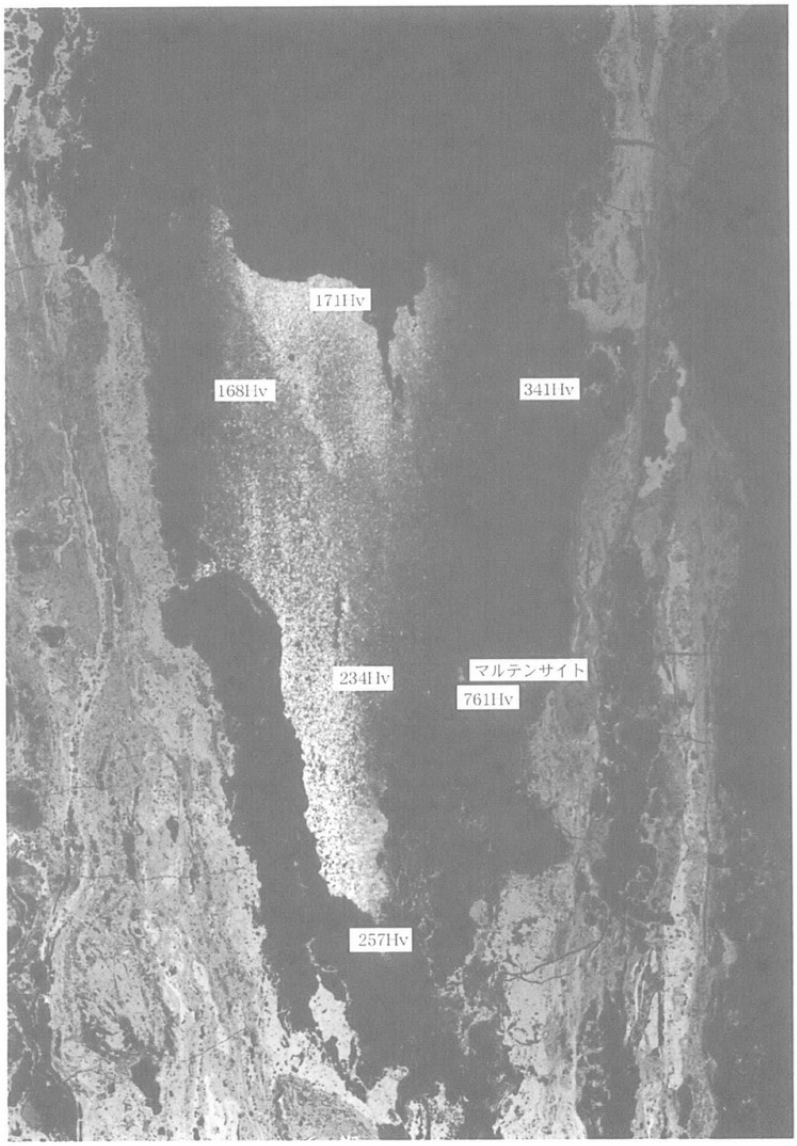
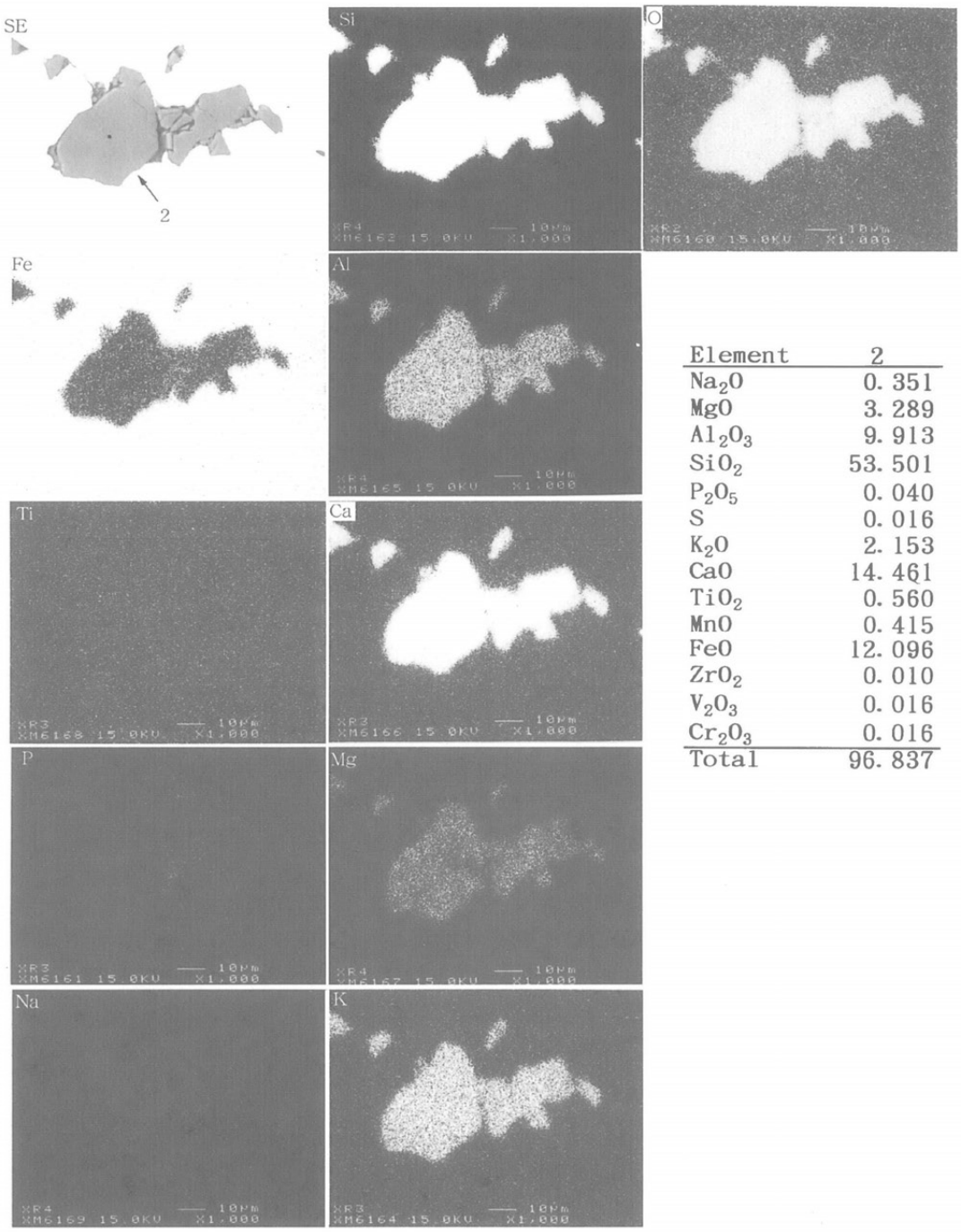
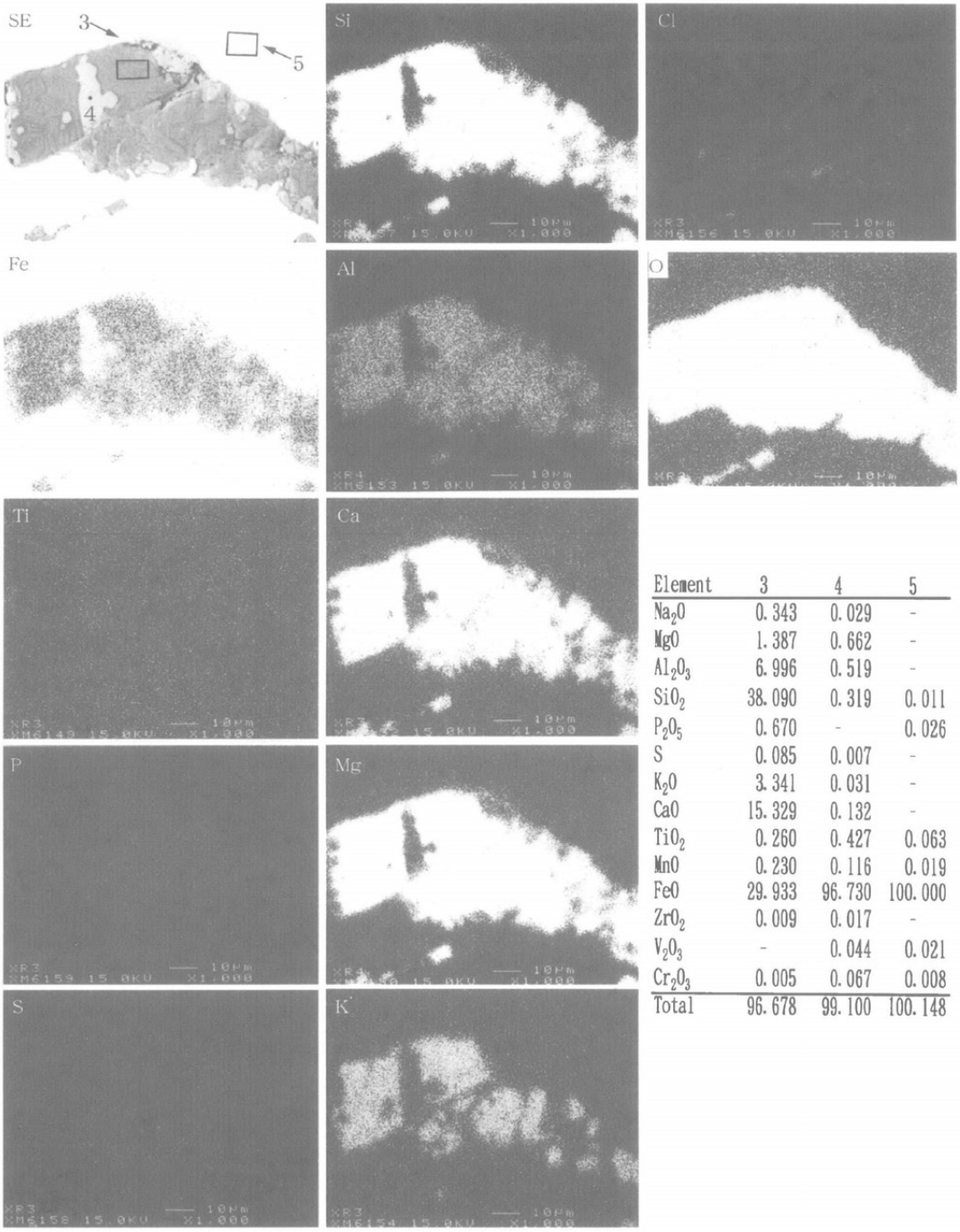


写真６　鉄剣（NRS－１）内面のビッカース断面硬度値の変動
［写真３　マクロ組織（×20）と対応］



Element	2
Na_2O	0.351
MgO	3.289
Al_2O_3	9.913
SiO_2	53.501
P_2O_5	0.040
S	0.016
K_2O	2.153
CaO	14.461
TiO_2	0.560
MnO	0.415
FeO	12.096
ZrO_2	0.010
V_2O_3	0.016
Cr_2O_3	0.016
Total	96.837

写真７　鉄剣（NRS－１－２）鉄中非金属介在物の特性Ｘ線像と定量分析値



Element	3	4	5
Na_2O	0.343	0.029	-
MgO	1.387	0.662	-
Al_2O_3	6.996	0.519	-
SiO_2	38.090	0.319	0.011
P_2O_5	0.670	-	0.026
S	0.085	0.007	-
K_2O	3.341	0.031	-
CaO	15.329	0.132	-
TiO_2	0.260	0.427	0.063
MnO	0.230	0.116	0.019
FeO	29.933	96.730	100.000
ZrO_2	0.009	0.017	-
V_2O_3	-	0.044	0.021
Cr_2O_3	0.005	0.067	0.008
Total	96.678	99.100	100.148

写真８　鉄剣（NRS－１－１）鉄中非金属介在物の特性Ｘ線像と定量分析値

図３　鉄剣（NRS－１－２）鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果（写真７に対応）

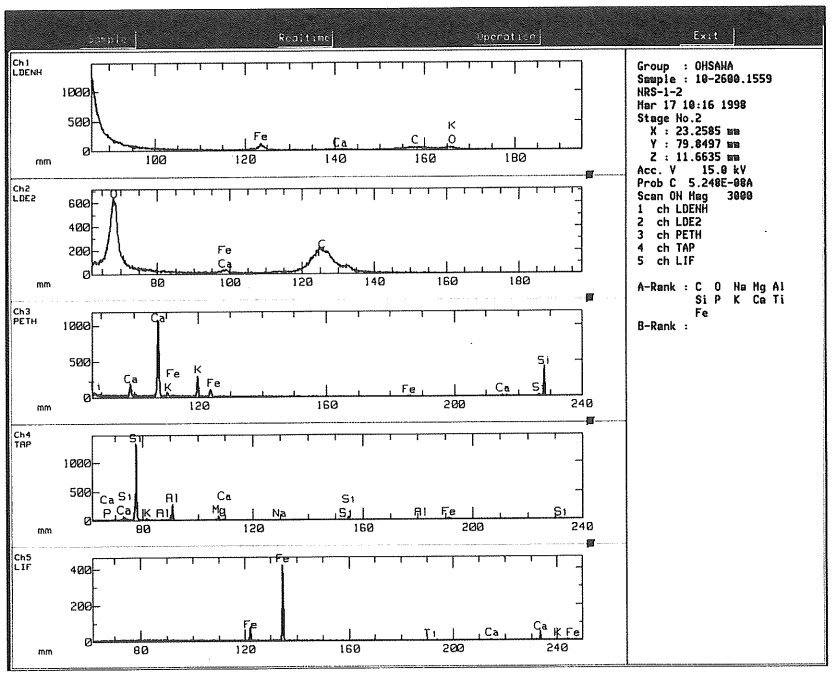
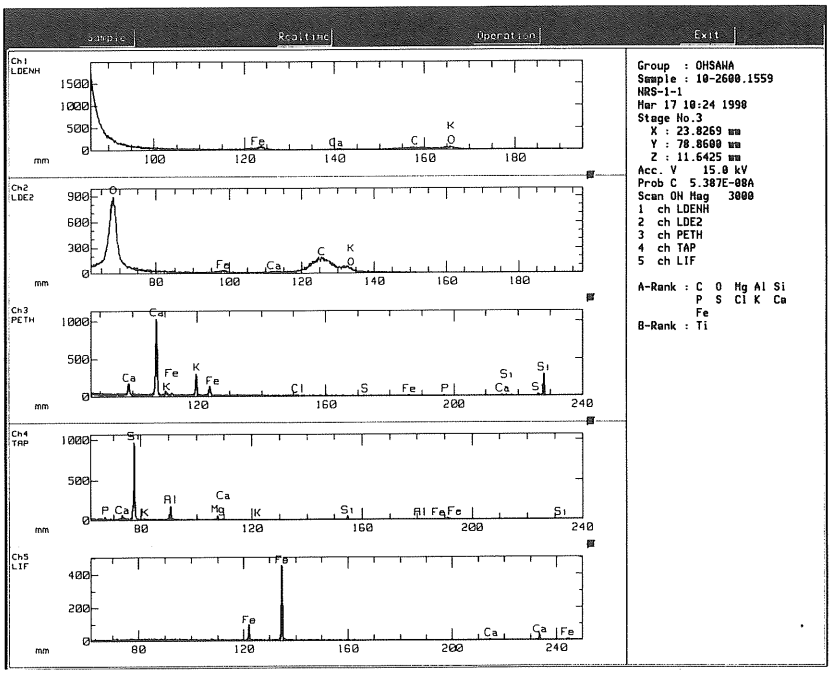


図４　鉄剣（NRS－１－１）鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果



定性分析に準ずる訳で、この介在物は、53.5%SiO２－9.9Al2O3－14.5%CaO－3.3%MgO－2.2%K2O組織の非晶質珪酸塩が同定される。僅かにチタン分を含有し（0.56%TiO２）、始発原料は磁鉄鉱あたりが候補に上がる。

以上のように、鉄剣中の非金属介在物は、珪酸塩が主体をなし、変形が大きく、分散し、顕微鏡組織でみたように組織は比較的均等である。更に低温還元の塊煉鉄特有のヴスタイト(Wustite：FeO）とファイアライト（2FeO・SiO2）の大型共晶夾雑物（介在物）を内蔵していない。この種の鉄素材は、銑鉄を炒いてできた熟鉄を原料に用い、浸炭鍛打生成された鋼を経て、必要な炭素量をコントロールし、しかる後に反復加熱鍛打し、鉄剣は造られている。また、高・低炭素含有量の異なる鋼素材が合わせ鍛えにより鍛接され、鋭利で耐久性を持つ貼鋼技術が採用されている[1)]。この貼鋼技術は、高・低炭素量の異なる素材を鍛接するもので、熟練した高度の技術と豊富な経験を要する。該品の製作にあたっては鍛接時の最適温度幅は、極く狭いところにあるにもかかわらず、接合鍛接線は目立たず、大きく亀裂が生ずることもなく仕上がっていた。ただし、剣先と茎部の欠損は何に原因するのだろうか。気がかりの点である。

図４と写真８に小さい１点のヴスタイトとガラス質成分を含む非金属介在物を分析しているが、こちらはデータの提示に留めておく。

４－２－２　NRS-２：鉄釧

(1)　肉眼観察

鉄釧は鉄製腕輪であり、細長い帯状鉄板を丸く曲げて両端を鍛接するか、両端を重ね合わせるか、両端が接せずに間隔をもたせるか、更には鉄板を螺旋状に巻き上げるかなどの型式がある[3)]。該品は螺旋状以外の製作で３個体のものが銹化破損していて、一括試料として採り上げられている。そのなかの破片の１片から試料は10×4.7㎜に切り出されている。全面赤褐色に銹化して金属鉄の残存もない状態だった。

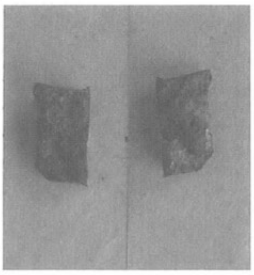
(2)　マクロ組織

写真３（下）に示す。断面は、銹膨れ部を除くと厚みが2.5㎜ 前後の鉄板である。内部は大部分が銹化により空洞化し、金属鉄の残留はまったくなかった。

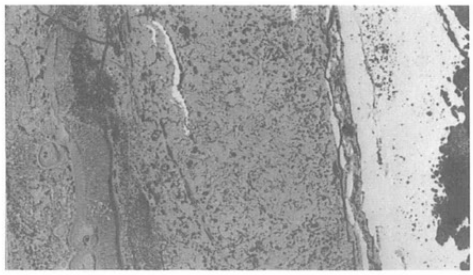
(3)　顕微鏡組織

写真９－①～⑦に示す。全体に銹化が激しく金属鉄はなく、銹化鉄のゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）となる。しかし、黒銹部分に辛うじてパーライトの痕跡が認められる。拡大組織の③⑥⑦に、フェライト地にかすかに網目模様とその交点に層状組織のパーライト痕跡が認められる。この組織写真の灰白色地がフェライトで、黒く細い線が走るのがフェライト粒界である。また、黒色または層状部分がパーライトである。パーライトはフェライトとセメンタイト

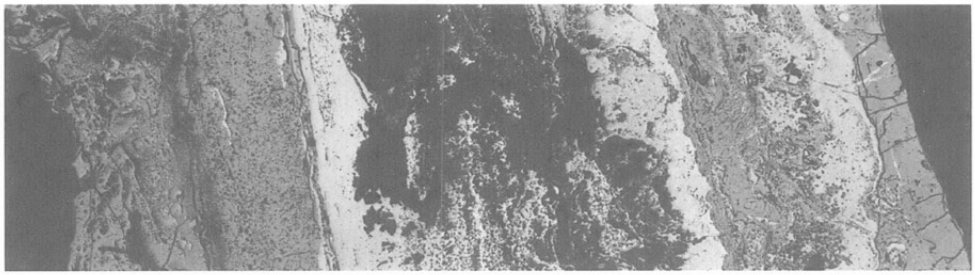
(3) NRS-2
鉄釧（銹化）
①×100ゲーサイト②の拡大
②×50　銹化鉄
パーライト痕跡
③④×400　②の拡大
⑤×100
⑥⑦×400　⑤の拡大
パーライト痕跡



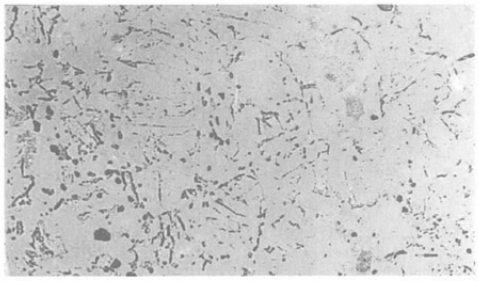
①



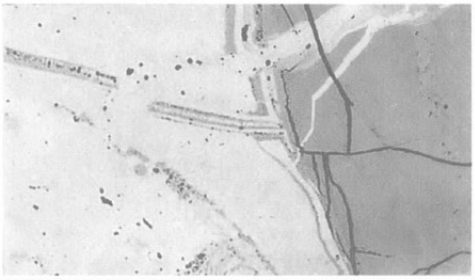
②



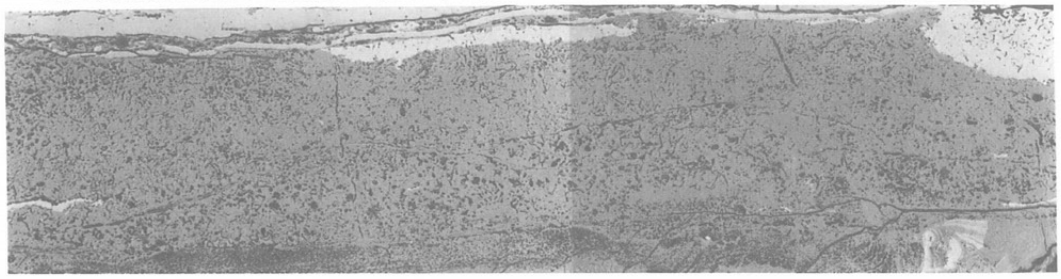
③



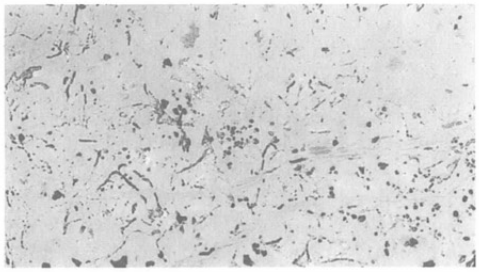
④



⑤



⑥



⑦

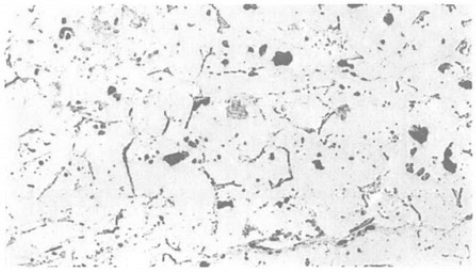


写真９　鉄釧の顕微鏡組織（縮小率 70%）

（Cementite：Fe３C、鉄と炭素の化合物、6.69%C）が交互に重なり合って構成された層状組織である。このパーライトの占める面積は炭素含有量の増加に伴って増し、焼きならし状態では0.4%前後で約半分、0.77%で全部パーライト（共析鋼と呼ぶ）となる。パーライトが多くなると、硬さ、引張強さは増加し、逆に伸び、衝撃値などは減少する。

この鉄釧は炭素含有量をパーライト量から推定すると、0.15%以下の極軟鋼であり、字の如く軟らかい鉄である。腕輪として加工もしやすく、かつ、実用に際しても取り扱いに適した素材が採用されていた。

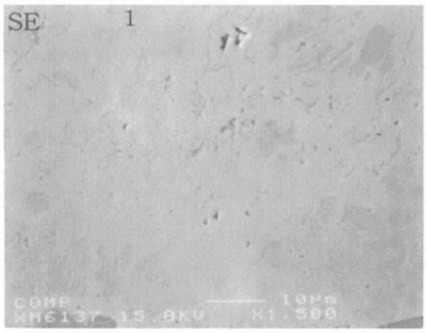
(4) CMA調査

鉄中の非金属介在物を探るのは、鉄製造履歴を検討する上で重要な項目であるが、残念ながら銹化鉄になると、介在物は剥落したり痕跡が判りづらく、今回も詳細に調査したが不発に終わった。そのため、断面鉄面で比較的きれいな面を選んで高速定性分析と定量分析を行った。図６は高速定性分析である。A-Rank検出元素は、基地の鉄（Fe）と銹化起因の酸素（O）、および土砂由来の硅素（Si）、リン（P）である。特殊な微量元素の含有はなかった。なお、銹化していない鉄面の調査として、前述した鉄剣の基地鉄の分析結果を図５に参考として示している。A-Rank検出元素は、鉄（Fe）のみであった。炭素（C）は乱反射を防ぐカーボン蒸着の影響であって、これは除外される。

また、鉄基地のCMA定量分析値を写真10から抜き出して表４とした。鉄釧からは特別高い成分の検出はなかった。鉄剣基地の金属鉄と比較して、二酸化チタン（TiO２）とバナジウム（V）が低値であり、素地鉄の原料差が指摘できる程度である。

表４　CMAによる基地鉄の定量分析結果

符号	資料	分析対象	Fe 0	P 205	S	Ti 02	V 203	Si 02	Al 203	Mg 0	備　　考
NRS-2	鉄釧	銹化鉄	88.19	0.065	0.043	0.027	0.007	0.105	0.004	0.001	写真10、SEの１
NRS-1	鉄剣	金属鉄	100	0.026	－	0.063	0.021	0.011	－	－	写真８、SEの５



Element	1
Na_2O	－
MgO	0. 001
Al_2O_3	0. 004
SiO_2	0. 105
P_2O_5	0. 625
S	0. 043
K_2O	－
CaO	－
TiO_2	0. 027
MnO	－
FeO	88. 190
ZrO_2	－
V_2O_3	0. 007
Cr_2O_3	－
Total	89. 002

写真10　鉄釧（NRS-2）鉄断面の２次電子像と定量分析結果

図５　鉄剣（NRS－１－１）基地鉄のコンピュータープログラムによる
高速定性分析結果（写真９のＳＥ内５の個所）

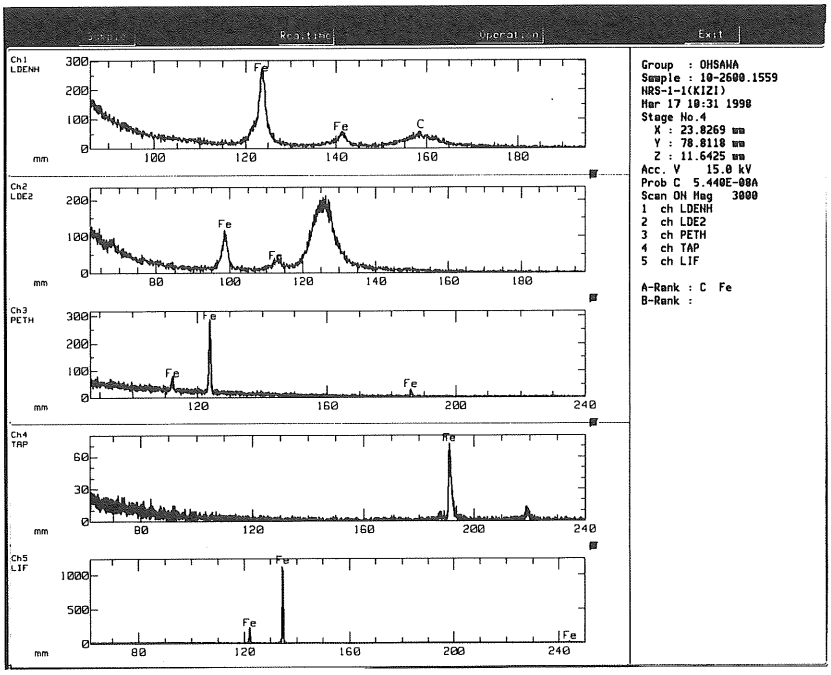
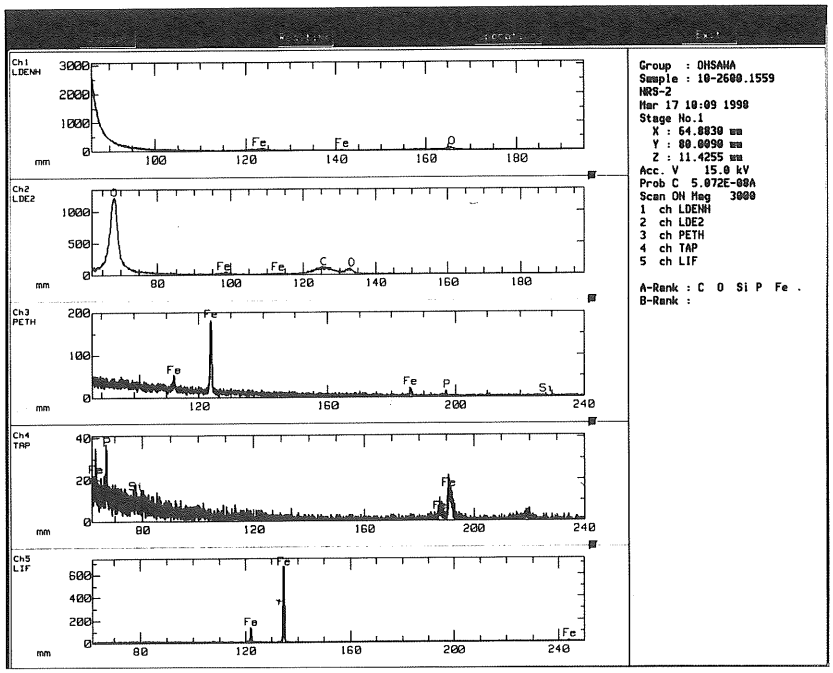


図６　鉄釧（NRS－２）鉄断面のコンピュータープログラムによる
高速定性分析結果（写真 10 と対応）



4—3　まとめ

弥生時代の鉄製品の調査は、破壊調査となると試料採取に制約があり、銹化問題もからんで進んでおらず、不明瞭な点が多い。今回は僥倖にも鉄剣の金属部分の調査が叶ったので、鉄素材の製造履歴を解明する手掛かりが得られた。すなわち、鉄剣は、中国漢代（BC１世紀代）に技術開発された炒鋼が用いられ、高・低炭素含有量の異なる素材の貼り付け技術（合わせ鍛え）にもとづく製品の可能性が考えられた。炒鋼は、銑鉄を使って錬鉄（熟鉄）あるいは鋼を生産する新しい技術で、間接製鋼法である。列島内での調査事例は少なくて、筆者は過去に鳥取県東郷町所在の宮内第１遺跡出土の鉄剣で、71.5cm、身長64cm、剣身幅５cmを報告した。該品は四隅突出型墳丘墓第１主体部出土の弥生時代の鉄剣である。この宮内第１遺跡の鉄剣と近似した材質組織を五里田遺跡出土鉄剣は持っていた。

又、弥生時代の鉄製品の多くは中国の製鉄技術の展開につれて、BC５世紀代開発の可鍛鋳鉄製品、続いてBC３世紀代の開発となる鋳鉄脱炭鋼、今回のBC１世紀代開発の炒鋼製品が産出されている。この技術開発史は過去に３点ほどまとめているので、それらを参照して頂ければ幸いである[3~5]。一方、鉄釧は列島内の中部地方から関東地方にかけて出土例が多い遺物である。これも調査例は少なく、その材質は不明であったが、今回の調査から極軟鋼（C：0.15％以下）の充当が指摘できたことは収穫であった。銹化のため、該品からは素材の製造履歴までは言及できなかったが、この解明は今後に残された課題となる。

引用文献

１）韓　汝玢　「中国における早期鉄器の冶金学的特徴」『東アジアの古代鉄文化　～その起源と伝播～』（1993年たたら研究会国際シンポジウム予稿集）たたら研究会1993

２）大澤正己　「宮内第１・第５遺跡出土鉄剣、鉄刀の金属学的調査」『宮内第１遺跡、宮内第４遺跡、宮内第５遺跡、宮内２・63～65号墳』(鳥取県教育文化財団調査報告書48）鳥取県教育文化財団　1996

３）大澤正己「弥生時代の鉄器の動向　～金属学的見地からのアプローチ」『第４回鉄器文化研究集会発表要旨集　東日本における鉄器文化の需要と展開』鉄器文化研究会　1997.12.20

４）大澤正己「弥生時代の中国産鉄製品」～可鍛鋳鉄、鋳鉄脱炭鋼、炒鋼、塊煉鉄～『'98国際金属歴史会議しまねBUMAA Ⅳ 鉄シンポジウム資料』国際金属歴史会議しまね実行委員会　日本金属学会　1998.5.27

５）大澤正己「西日本における初期鉄器制作鉄生産に関する金相学的研究」『西日本から見た製鉄の歴史』社会鉄鋼工学部会1998年度秋季シンポジウム論文集　日本鉄鋼協会　1998.9.29

5．布状資料の分析

第１号住居跡出土の鉄剣に巻き付けられていた布の調査を行った。

実体顕微鏡により、布の部位を観察した。織りは平織りと見られ、織密度は［30～32］×［15～16］（/㎠）であった（写真11）。

尚、この布は、形状を保ったまま鉄錆の成分と置き換わっているような状態であり、タンパク質（絹の場合）やセルロース（植物性の繊維の場合）といった成分は残存していないとみられる。

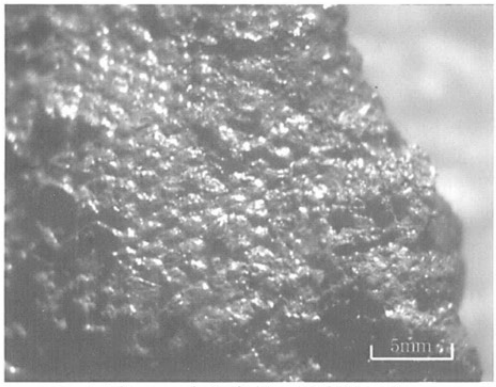


写真 11　布状資料の顕微鏡写真

また、錆化した繊維断面形状を観察して繊維種を同定することも可能であるが、サンプル採取が必要な破壊分析になるため、今回は行わなかった。

6．まとめ

鳴沢遺跡群五里田遺跡出土金属製品の分析結果を遺物ごとにまとめる。

【鉄剣】

第１号住居跡出土鉄剣

切先部のみ出土しており、残存している長さは切先より約18.2㎝、刃幅は約2.8㎝を計る。

Ｘ線観察でも関部や、剣身下端の目釘穴の痕跡も確認できなく長さも推定できない。鉄剣は抜身の上から布状の繊維で螺旋状に巻き付けている。繊維の材質については同定のための分析は行わなかったが織りは平織りで、織密度は［30～32］×［15～16］（/㎠）と比較的細かく、顕微鏡観察から絹であった可能性が高い。仮に絹と仮定した場合、その織密度の視点からみると弥生時代の荒い織密度から古墳時代になって細かい織密度へと変化することが指摘されている。

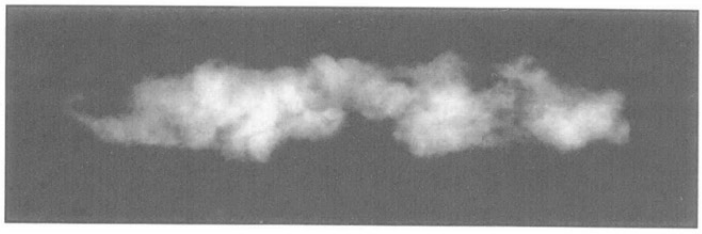
弥生時代最大長を誇る鉄剣を出土したことで有名な鳥取県宮内第１遺跡（弥生時代後期中葉）、第５遺跡（古墳時代後期）での分析結果でも弥生時代の刀剣類の外装に使用された絹の織り密度は22×16と荒い物から古墳時代になって30×20と細かいものへ変化していくことが読みとれ、仮に絹と仮定した場合織密度からは弥生終末から古墳時代前期の遺物に近い値であり、中期後葉の年代観が正しいとすればその入手経路や制作地の問題等非常に興味深い資料である。尚、この鉄剣については繊維情報を残す意味で鉄素材の金属学的分析は行わなかった。

第２号住居跡出土鉄剣

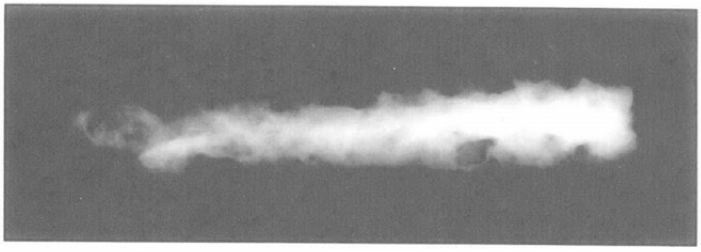
鉄剣は切先部と茎部を欠損しており、残存している長さは約14.3㎝、刃幅約2.9㎝を計る。

Ｘ線ラジオグラフィによる観察結果から剣身下端に左右二カ所の目釘穴が観察され、目釘穴径

No.1



No.2



No.3

No.4

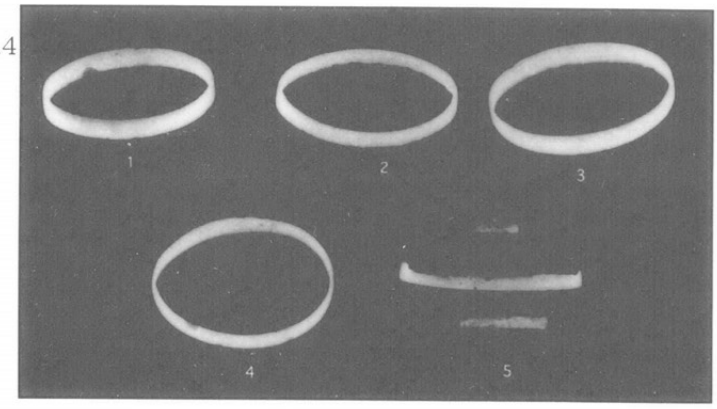


写真 12　分析対象遺物のX線ラジオグラフィ

約３㎜で２点間距離は約16.5㎜で、穴は水平ではなく約３㎜の段差を計るのが特徴である。目釘穴を斜めに２カ所あける例が弥生時代後期以降の中部から関東地方に多くみられ、ほぼその系統の鉄剣であろう。第１号住居跡出土鉄剣のような繊維状の外装は搬入時には確認できなかった。鉄の金属学的分析の結果、鉄剣は中国漢代に技術開発された高温還元・炒鋼法で製造された低炭素含有量の鋼を芯金部に高炭素含有量の鋼を皮金部に用いて合わせ鍛えして、焼き入れを施した実用に耐えられる物であった可能性が指摘できた。同様の金属組織は鳥取県宮内第１遺跡（弥生時代後期中葉)、出土鉄剣の分析結果でもみられた。先にも述べたようにここでは外装に布巻きを使用しており、第１号住居跡出土鉄剣でも布巻き外装であったことからその関連性が指摘できる。近年、特に日本海沿岸地域の弥生遺跡から大量の鉄器を出土する事例が増加しており、大陸から日本海ルートを経て東日本へ入る鉄器の流通経路が明らかになりつつあり、そのことを裏付ける重要な資料となりうると思われる。

【鉄釧】

第５号住居跡出土の鉄釧は形態的には輪のもので合わせをラップさせるタイプである。４個体は確実にあり、破片に断面形状の異なる部品があることから推定で５個体あったと推定される。断面形状は半円形（真ん中に稜線がある）で臼井・町田のＢタイプに属する。このタイプは円形周溝墓から出土するという特異性が指摘されている。当遺跡では住居跡から出土しているとのことでそれが事実で在ればその性格や系譜を考える上で今後重要な資料となるであろう。

金属学的調査からは錆化のため鉄素材の製造履歴には迫れなかったが超軟鋼（C：0.15％以下）を使用していることが解った。

鉄釧は中部から関東の弥生後期に勢行する墓の副葬品であり、その限定された分布圏から在地での生産も想定できる遺物である。鉄器のみならず鍛冶技術の普及過程においても日本海側の玉造に伴う工具制作手段として鍛冶技術が受容され、各地に展開していったことが明らかになりつつある。今回の分析で明らかになったように加工しやすい超軟鋼材を用いて消費地のニーズにあった鉄器生産が行われた可能性もあり、今後の分析結果や類例の増加が期待される。

【銅釧】

第２号円形周溝墓出土の５個の銅釧は形態的には円形で断面形状は長方形の板状のタイプである。ケイ光Ｘ線分析の結果と鉛同位体比測定結果からほぼ同一の材料からなることがわかった。特に鉛同位体比の測定値から弥生時代後期の銅鐸が集中する規格化された鉛領域であった。５個の銅釧はすべて同じ湯で制作されたものとは言及できないが銅釧１と２、銅釧３，４，５の２グループに区切った場合、誤差範囲内に入ることから同一の湯を使って鋳造した可能性がある。銅釧は弥生時代に各地に普遍的に出土する遺物であり、今後データの蓄積を行うことによって弥生時代の生産形態や流通機構の解明に迫ることができると思われる。

引用文献

1）布目順郎　『絹と布の考古学』雄山閣考古学選書28, 雄山閣出版1988年

2）㈶元興寺文化財研究所　「特論２　宮内遺跡出土刀剣類の分類」『宮内第１遺跡、宮内第４遺跡、宮内第５遺跡、宮内２・63～65号墳』
鳥取県教育文化財団調査報告書48
財団法人　鳥取県教育文化財団　1996年

3）大澤正己　「宮内第１・第５遺跡出土鉄剣、鉄刀の金属学的調査」
『宮内第１遺跡、宮内第４遺跡、宮内第５遺跡、宮内２・63～65号墳』　鳥取県教育文化財団調査報告書48
財団法人　鳥取県教育文化財団　1996年

4）臼井直之・町田克則　「中部高地における鉄器の出現と展開」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第４回　鉄器文化研究会集会発表要旨集
鉄器文化研究集会　1997年

図版一

1　鳴沢遺跡群五里田遺跡付近航空写真

図版二

1　鳴沢遺跡群五里田遺跡付近航空写真（東方より）

2　鳴沢遺跡群五里田遺跡付近航空写真（西方より）